



鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(159)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(159)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(IX)

わたり ばた 渡 番 遺 跡 2

(南さつま市金峰町)

弥生・古墳時代以降編

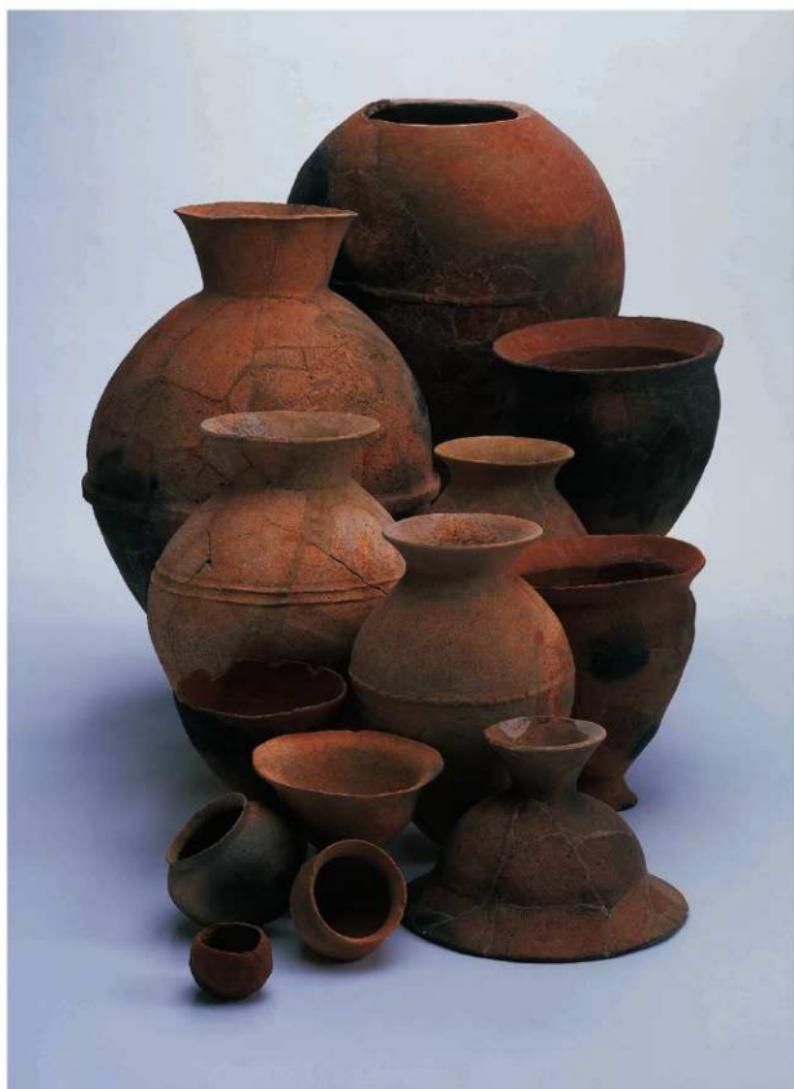
渡 番 遺 跡 2

二〇一一年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2011年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



弥生・古墳時代出土遺物



古代・近世出土遺物

序 文

この報告書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴って、平成8年度、12年度、15年度、16年度に実施した南さつま市金峰町に所在する渡畠遺跡の発掘調査の記録です。

渡畠遺跡は、縄文時代から近世までの長期にわたる遺構・遺物が発見された複合遺跡です。これまで、平成21年度に縄文時代及びA地点の調査成果報告書として「渡畠遺跡1」を刊行しております。本報告書は2冊目で、B地点における弥生時代から近世までの調査記録となります。

今回報告する調査の成果として、古墳時代の土器が多量に発見されました。古代では、「門」と書かれたヘラ書き土器や、県内でも珍しい「厨」と書かれた墨書き土器などが発見されました。中世では、同安窯系青磁碗や皿、青白磁、湖州鏡、輸入陶磁器や国内産陶磁器などが多量に発見されました。

いずれも、当時の生活様式を知る上での貴重な資料となりました。

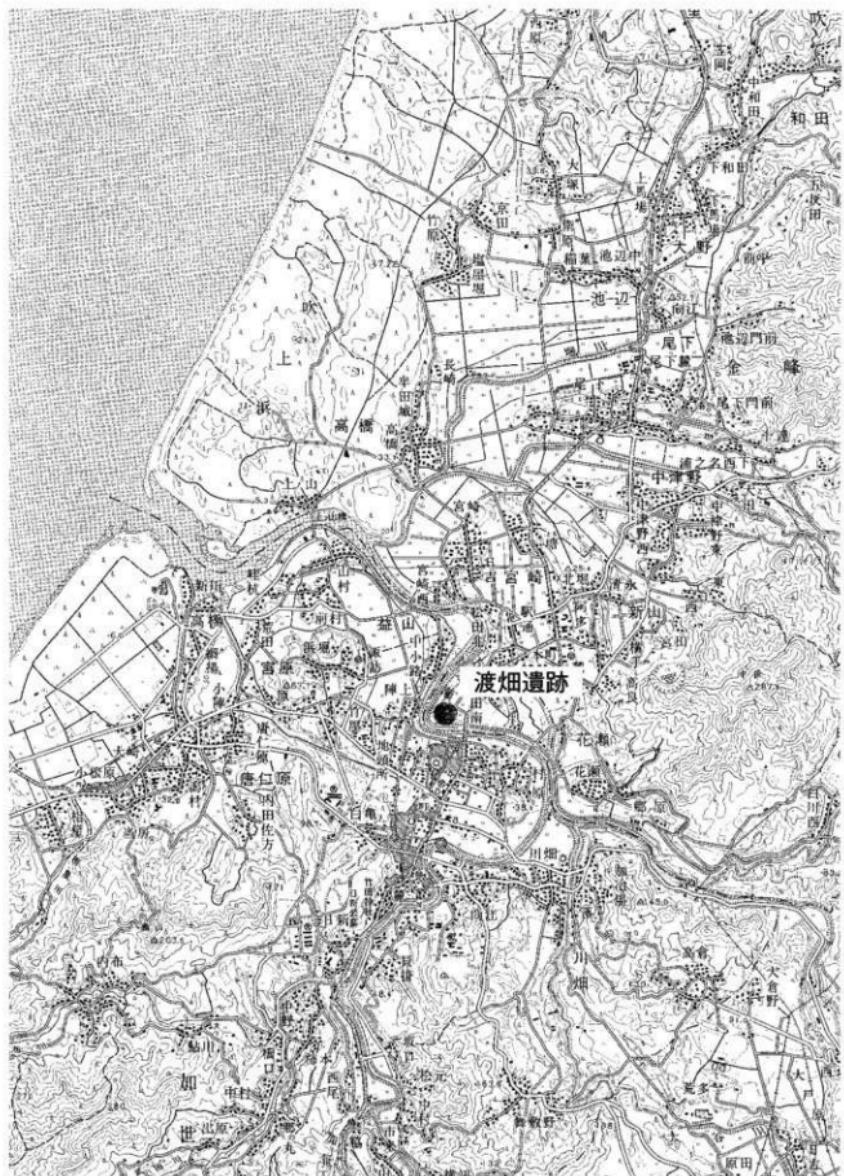
本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた南薩地域振興局建設部（旧伊集院土木事務所）、南さつま市教育委員会、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 山下吉美

報 告 書 抄 錄



渡畠遺跡位置図 (1 : 50,000)

例　　言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う渡畑遺跡の発掘調査報告書である。本書では、B地点の弥生時代から近世までの調査報告を行う。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成12年8月21日～平成13年3月27日、平成16年3月2日～平成16年3月16日、平成16年5月20日～平成17年3月29日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成20～22年度に実施した。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真的撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 9 遺構実測は主に調査担当者が行い、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。トレースは、整理作業員の協力を得て小林晋也が行った。
- 10 土器、陶磁器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て小林・日高勝博が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社アイシン精機、株式会社バスコに委託し、監修は溝口学・上床真・小林が行った。
- 12 遺物の写真撮影は、吉岡康弘・辻明啓が行った。
- 13 本書の図集は、小林・日高・上床が担当し、執筆の分担は次の通りである。

第1～3章	小林
第4・5章	小林・日高
第6章	小林
第7章	小林・上床
第8章 第1～3節	小林
第4・5節	上床
第6節	小林

- 14 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物の遺物註記の略号は「WB」である。

凡　　例

- 1 本書で用いる遺構の表現については、次のとおりである。

 硬化面  焼土・炭化物集中

- 2 本書で用いる土器の表現については、次のとおりである。

 スス  黒色土器 黒色範囲 コゲ
 須恵器断面  赤色土器 丹塗り範囲

本文目次

卷頭 国版	第5章 古代の調査.....91
序文	第1節 調査の概要.....91
報告書抄録	第2節 遺構.....94
例言	第3節 遺物.....101
凡例	第6章 中・近世の調査.....123
目次	第1節 調査の概要.....123
	第2節 遺構.....126
	第3節 遺物.....171
第1章 発掘調査の経過.....1	第7章 科学分析.....206
第1節 調査に至るまでの経緯.....1	第1節 概要.....206
第2節 事前調査.....1	第2節 放射性炭素年代測定.....206
第3節 本調査.....3	第3節 炭化種実同定.....208
第4節 整理・報告書作成.....5	第4節 出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の 金属学的調査.....210
第5節 中小河川改修事業関連の遺跡と概要.....6	第8章 総括.....223
第2章 遺跡の位置と環境.....11	第1節 弥生・古墳時代の概要.....223
第1節 地理的環境.....11	第2節 古代の概要.....223
第2節 歴史的環境.....12	第3節 中・近世の概要.....225
第3章 層序.....16	第4節 井戸状遺構の考察.....229
第4章 弥生・古墳時代の調査.....17	第5節 出土人骨の考察.....233
第1節 調査の概要.....17	第6節 今後の取扱いについて.....234
第2節 遺構.....21	
第3節 遺物.....33	
	国版.....235

挿図目次

第1図 確認トレンチ配置図.....2	第19図 4～7号土坑及び出土遺物実測図.....30
第2図 遺跡グリッド配置図.....3	第20図 1・2号ビット及び出土遺物実測図.....31
第3図 中小河川事業関連遺跡位置図.....9	第21図 3～12号ビット及び出土遺物実測図.....32
第4図 周辺遺跡位置図.....13	第22図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(1).....34
第5図 土層断面実測図.....16	第23図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(2).....35
第6図 弥生・古墳時代検出遺構配置図(1).....17	第24図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(3).....36
第7図 弥生・古墳時代検出遺構配置図(2).....18	第25図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(4).....37
第8図 弥生・古墳時代検出遺構配置図(3).....19	第26図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(5).....38
第9図 弥生・古墳時代検出遺構配置図(4).....20	第27図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(6).....39
第10図 1号竪穴住居跡実測図.....21	第28図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(7).....40
第11図 2号竪穴住居跡及び出土遺物実測図.....22	第29図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(8).....41
第12図 3号竪穴住居跡及び出土遺物実測図.....23	第30図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(9).....42
第13図 4号竪穴住居跡実測図.....24	第31図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(10).....43
第14図 5・6号竪穴住居跡実測図.....25	第32図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(11).....44
第15図 7号竪穴住居跡及び出土遺物実測図.....26	第33図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(12).....45
第16図 1～3号大型土坑及び出土遺物実測図.....27	第34図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(13).....46
第17図 1・2号土坑実測図.....28	第35図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(14).....47
第18図 3号土坑及び出土遺物実測図.....29	第36図 弥生・古墳時代出土遺物実測図(15).....48

第37図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(16).....	49
第38図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(17).....	51
第39図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(18).....	52
第40図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(19).....	53
第41図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(20).....	54
第42図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(21).....	55
第43図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(22).....	56
第44図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(23).....	57
第45図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(24).....	58
第46図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(25).....	60
第47図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(26).....	61
第48図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(27).....	62
第49図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(28).....	63
第50図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(29).....	64
第51図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(30).....	65
第52図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(31).....	66
第53図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(32).....	67
第54図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(33).....	68
第55図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(34).....	69
第56図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(35).....	70
第57図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(36).....	71
第58図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(37).....	72
第59図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(38).....	73
第60図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(39).....	74
第61図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(40).....	75
第62図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(41).....	76
第63図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(42).....	77
第64図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(43).....	78
第65図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(44).....	79
第66図	弥生・古墳時代出土遺物実測図(45).....	80
第67図	古代検出遺構配置図(1).....	91
第68図	古代検出遺構配置図(2).....	92
第69図	古代検出遺構配置図(3).....	93
第70図	8号竪穴住居跡実測図.....	94
第71図	9・10号竪穴住居跡実測図.....	95
第72図	1・2号溝状遺構及び出土遺物実測図.....	96
第73図	4号大型土坑及び出土遺物実測図.....	97
第74図	8～14号土坑及び出土遺物実測図.....	98
第75図	15～23号土坑及び出土遺物実測図.....	99
第76図	13～23号ピット及び出土遺物実測図.....	100
第77図	古代出土遺物実測図(1).....	102
第78図	古代出土遺物実測図(2).....	103
第79図	古代出土遺物実測図(3).....	104
第80図	古代出土遺物実測図(4).....	105
第81図	古代出土遺物実測図(5).....	106
第82図	古代出土遺物実測図(6).....	107
第83図	古代出土遺物実測図(7).....	108
第84図	古代出土遺物実測図(8).....	109
第85図	古代出土遺物実測図(9).....	111
第86図	古代出土遺物実測図(10).....	112
第87図	古代出土遺物実測図(11).....	113
第88図	古代出土遺物実測図(12).....	114
第89図	古代出土遺物実測図(13).....	115
第90図	古代出土遺物実測図(14).....	116
第91図	古代出土遺物実測図(15).....	117
中・近世検出遺構配置図(1)	123
中・近世検出遺構配置図(2)	124
中・近世検出遺構配置図(3)	125
掘立柱建物跡実測図	126
掘立柱建物跡内出土遺物実測図	127
3～8号溝状遺構実測図	128
3～8号溝状遺構内出土遺物実測図(1)	130
3～8号溝状遺構内出土遺物実測図(2)	131
3～8号溝状遺構内出土遺物実測図(3)	132
3～8号溝状遺構内出土遺物実測図(4)	133
3～8号溝状遺構内出土遺物実測図(5)	134
9・10号溝状遺構及び出土遺物実測図	135
11～14号溝状遺構実測図	137
11号溝状遺構内出土遺物実測図	138
11～14号溝状遺構内出土遺物実測図	139
15号溝状遺構実測図	140
15号溝状遺構内出土遺物実測図(1)	141
15号溝状遺構内出土遺物実測図(2)	142
16・17号溝状遺構実測図	143
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(1)	145
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(2)	146
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(3)	147
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(4)	148
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(5)	149
16・17号溝状遺構内出土遺物実測図(6)	150
18号溝状遺構及び出土遺物実測図	152
井戸状遺構実測図	153
1～3号炉状遺構実測図	154
1・2号土壙墓実測図	155
3～6号土壙墓及び出土遺物実測図	156
5号大型土坑及び出土遺物実測図	157
6号大型土坑実測図	158
6号大型土坑出土遺物実測図(1)	159
6号大型土坑出土遺物実測図(2)	160
6号大型土坑出土遺物実測図(3)	161
6号大型土坑出土遺物実測図(4)	162
6号大型土坑出土遺物実測図(5)	163
円形粘土塊状遺構・24～26号土坑及び出土遺物実測図	164
27～29号土坑及び出土遺物実測図	165
30・31号土坑及び出土遺物実測図	166

第132図	32~35号土坑及び出土遺物実測図	167
第133図	24~33号ピット及び出土遺物実測図	169
第134図	34~40号ピット及び出土遺物実測図	170
第135図	41~42号ピット及び出土遺物実測図	171
第136図	中・近世出土遺物実測図(1)	172
第137図	中・近世出土遺物実測図(2)	173
第138図	中・近世出土遺物実測図(3)	174
第139図	中・近世出土遺物実測図(4)	175
第140図	中・近世出土遺物実測図(5)	176
第141図	中・近世出土遺物実測図(6)	177
第142図	中・近世出土遺物実測図(7)	178
第143図	中・近世出土遺物実測図(8)	179
第144図	近世出土古錢(1)	180
第145図	近世出土古錢(2)	181
第146図	曆年較正年代グラフ	207
第147図	鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬 津の化学組成	216
第148図	中九州地域の製鉄遺跡(堅形炉)出土 砂鉄・製錬津の化学組成	216
第149図	墨書・ヘラ書き土器実測図	225
第150図	出土遺物の割合	228
第151図	布目瓦出土数	228
第152図	県内発見の井戸跡①(素掘り)	230
第153図	県内発見の井戸跡②(石組み)	231
第154図	渡畑遺跡調査予定区	234

表 目 次

表1 確認トレーニング一覧表	2
表2 中小河川改修事業関連遺跡一覧表	8
表3 中小河川改修事業にわたる遺跡の調査経緯	10
表4 周辺遺跡一覧表	14
表5 B地点の層位	16
表6 弥生・古墳時代出土遺物観察表(1)	81
表7 弥生・古墳時代出土遺物観察表(2)	82
表8 弥生・古墳時代出土遺物観察表(3)	83
表9 弥生・古墳時代出土遺物観察表(4)	84
表10 弥生・古墳時代出土遺物観察表(5)	85
表11 弥生・古墳時代出土遺物観察表(6)	86
表12 弥生・古墳時代出土遺物観察表(7)	87
表13 弥生・古墳時代出土遺物観察表(8)	88
表14 弥生・古墳時代出土遺物観察表(9)	89
表15 弥生・古墳時代出土遺物観察表(10)	90
表16 古代出土遺物観察表(1)	118
表17 古代出土遺物観察表(2)	119
表18 古代出土遺物観察表(3)	120
表19 古代出土遺物観察表(4)	121
表20 古代出土遺物観察表(5)	122
表21 中・近世出土遺物観察表(1)	182
表22 中・近世出土遺物観察表(2)	183
表23 中・近世出土遺物観察表(3)	184
表24 中・近世出土遺物観察表(4)	185
表25 中・近世出土遺物観察表(5)	186
表26 中・近世出土遺物観察表(6)	187
表27 中・近世出土遺物観察表(7)	188
表28 中・近世出土遺物観察表(8)	189
表29 中・近世出土遺物観察表(9)	190
表30 中・近世出土遺物観察表(10)	191
表31 中・近世出土遺物観察表(11)	192
表32 中・近世出土遺物観察表(12)	193
表33 中・近世出土遺物観察表(13)	194
表34 中・近世出土遺物観察表(14)	195
表35 中・近世出土遺物観察表(15)	196
表36 中・近世出土遺物観察表(16)	197
表37 中・近世出土遺物観察表(17)	198
表38 中・近世出土遺物観察表(18)	199
表39 中・近世出土遺物観察表(19)	200
表40 中・近世出土遺物観察表(20)	201
表41 中・近世出土遺物観察表(21)	202
表42 中・近世出土遺物観察表(22)	203
表43 中・近世出土遺物観察表(23)	204
表44 中・近世出土遺物観察表(24)	205
表45 放射性炭素年代測定結果	207
表46 渡畑遺跡の種別同定結果	209
表47 供試材の履歴と調査項目	215
表48 供試材の化学組成	215
表49 出土遺物の調査結果のまとめ	215
表50 刻書き土器・ヘラ書き土器・墨書き土器一覧	224
表51 鹿児島県内で発掘された井戸 (一部に参考含む)	232

写 真 目 次

写真1	上空から見た渡畑遺跡周辺の様子	11
写真2	中・近世表層出土遺物(1)	179
写真3	中・近世表層出土遺物(2)	180
写真4	渡畑遺跡の種室遺体	209
写真5	炉壁の顕微鏡組織	
	EPMA調査結果(1)	217
写真6	炉壁の顕微鏡組織	
	EPMA調査結果(2)	218
写真7	楢形鍛冶津・炉壁の顕微鏡組織	219
写真8	鍛冶津・黒鉛化木炭の顕微鏡組織	220
写真9	製鍊津(流動津)・楢形鍛冶津の 顕微鏡組織	221
写真10	楢形鍛冶津・炉壁の顕微鏡組織	222
写真11	ポルトガル王家の紋章が入った青花	228
写真12	4号土塚墓出土人骨(脳頭蓋)	233

図 版 目 次

図版1	古墳時代遺構検出状況(1)	235
図版2	古墳時代遺構検出状況(2)	236
図版3	古墳時代遺構検出状況(3)	237
図版4	古墳時代遺構検出状況(4) および遺物出土状況	238
図版5	古代遺構検出状況(1)	239
図版6	古代遺構検出状況(2) および遺物出土状況	240
図版7	中・近世遺構検出状況(1)	241
図版8	中・近世遺構検出状況(2)	242
図版9	中・近世遺構検出状況(3)	243
図版10	中・近世遺構検出状況(4)	244
図版11	弥生・古墳時代出土遺物(1)	245
図版12	弥生・古墳時代出土遺物(2)	246
図版13	弥生・古墳時代出土遺物(3)	247
図版14	弥生・古墳時代出土遺物(4)	248
図版15	弥生・古墳時代出土遺物(5)	249
図版16	弥生・古墳時代出土遺物(6)	250
図版17	弥生・古墳時代出土遺物(7)	251
図版18	弥生・古墳時代出土遺物(8)	252
図版19	弥生・古墳時代出土遺物(9)	253
図版20	弥生・古墳時代出土遺物(10)	254
図版21	弥生・古墳時代出土遺物(11)	255
図版22	弥生・古墳時代出土遺物(12)	256
図版23	弥生・古墳時代出土遺物(13)	257
図版24	弥生・古墳時代出土遺物(14)	258
図版25	古代出土遺物(1)	259
図版26	古代出土遺物(2)	260
図版27	古代出土遺物(3)	261
図版28	古代出土遺物(4)・近世出土遺物	262
図版29	中・近世出土遺物(1)	263
図版30	中・近世出土遺物(2)	264
図版31	中・近世出土遺物(3)	265
図版32	中・近世出土遺物(4)	266
図版33	中・近世出土遺物(5)	267
図版34	中・近世出土遺物(6)	268

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るために、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。この協議に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地域内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けた県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持株松遺跡、渡畠遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するためには該地域において確認調査を実施することとなつた。

確認調査は、平成8年9月25日から11月25日の期間に実施した。その結果、予定地において約43,400m²の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受け、本調査は県立埋文センターが担当することとなり、平成12年度に持株松遺跡隣接部分（A地点）と河川側（B地点）、平成15年度に樋門隣接部分（B地点）、平成16年度に樋門部分から下流部分（B地点）の調査を実施した。

なお、渡畠遺跡はA地点とB地点との間にあたる未調査部分が約29,000m²あり、今後河川改修事業を行う際に発掘調査が必要である。

報告書作成作業は、県立埋文センターが担当することとなり、平成20年度から報告書作成作業に着手し、平成22年度まで実施した。平成22年3月に「渡畠遺跡 A 地点及び B 地点縄文時代編」、平成23年3月に「渡畠遺跡 B 地点弥生・古墳時代～中・近世編」を刊行した。

第2節 事前調査

1 分布調査

県土木部は、中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地域内における埋蔵文化財の有無について、県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に事業区域内の分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持株松遺跡、渡畠遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が明らか

となった。

2 確認調査

（1）調査概要

平成8年6月10日に伊集院土木事務所・加世田土木事務所・金峰町教育委員会・加世田市教育委員会・県立埋文センターで今後の調査の進め方について協議した結果、平成8年度中に持株松遺跡の本調査及び渡畠遺跡の確認調査を実施することとなった。

そこで、平成8年9月25日から11月25日に、渡畠遺跡の確認調査を実施した。

（2）調査体制

事業主体	鹿児島県土木部 (伊集院土木事務所)
調査主体	金峰町教育委員会
調査統括	教 育 長 松田 道治
調査担当	主 事 宮下 貴浩 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 倉元 良文
事務担当	金峰町教育委員会社会教育課 課 長 鮎島 篤正 係 長 清水 信一 主 事 補 泊 友子

（3）調査経過

渡畠遺跡の確認調査は、9月25日から開始した。

トレンチは基本的に公共座標に沿い、地形的状況や調査区内の削平状況を考慮に入れながら31本設定し、その設定順に1トレンチから31トレンチまでの番号を付けた（表1、第1図）。掘り下げは基本的に人力で行い、必要に応じて重機を使用した。

調査はトレンチごとの土層を確認しながら進めたが、トレンチごとの土層堆積状況や土層の色調に違いがあり、基本的な土層を把握できなかった。そのため、各トレンチの遺物取り上げについては、各トレンチごとの層序で取り上げた。また、遺物出土状況を平板実測した遺物番号については、遺跡内全てを通し番号とした。土層断面図については、2・3・6・13トレンチのみ実測し、他のトレンチは模式図を作成した。

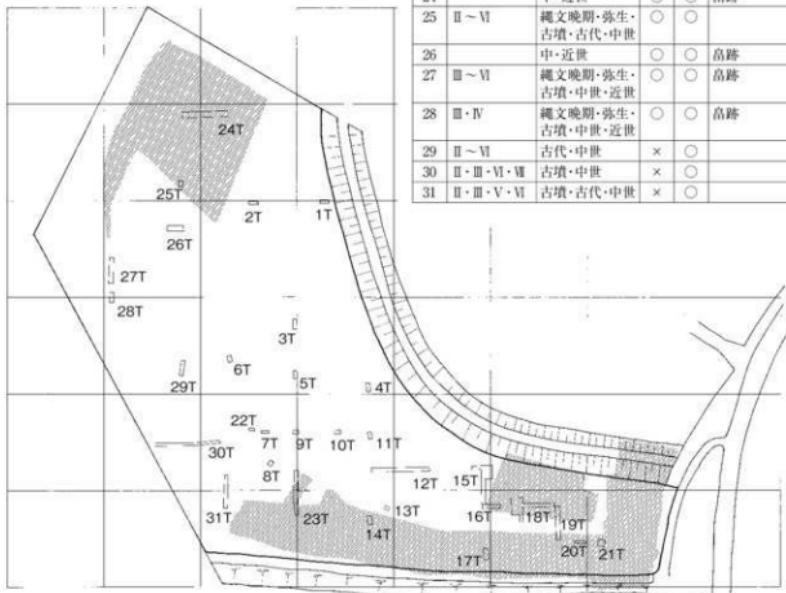
確認調査の結果、1～3トレンチ付近は中世から弥生時代までの包含層が残存した。その下層は、砂層もしくは粘質土となり縄文時代の包含層は確認できなかつた。10・11トレンチ付近は、表層を除去すると縄文時代晩期の包含層となり、それ以前の包含層は確認できなかつた。15・16・18トレンチ付近は、縄文時代晩期の包含層

は削平されていたが、潤滑褐色土の落ち込みがみられた。河川による自然流入とも考えられたが、同落ち込み内から鉄滓を伴う石列を検出したことから遺構と考えられる。19トレンチも表層下は縄文時代後期の包含層となる。さらに掘り下げて調査した結果、縄文時代後期の包含層が3枚あることを確認した。21トレンチ付近では、表層からではあるが五輪塔の一部が出土した。14トレンチは21トレンチと同じようにほとんど削平を受けておらず、縄文時代後期の包含層が確認できないことから、縄文時代後期の遺跡範囲は18トレンチ付近より東側が中心と思われる。

西側については、調査期間の後半に調査を実施した。24トレンチは重機を使い表土を除去した後、上面の精査により畠跡が確認された。畠跡は26・27・28トレンチでも確認され、25トレンチについては畠面が小河川が洪水により削り出された状況が観察された。この結果、畠跡は多少の削平は受けているが、旧南薩鉄道敷地付近から西側に広がるものと思われる。24・26トレンチについては畠跡を実測したのみで下層の掘り下げは行わなかった。

表1 確認トレンチ一覧表

番号	層	時代	遺構	遺物	備考
1	II・III・VI・VII	弥生・中世	○	○	
2		古墳	○	○	柱穴
3	III～V・VI・VII	古墳	×	○	
4	II・III	縄文晩期	×	○	
5	III	縄文晩期	×	○	
6	III・IV	古墳	○	○	住居跡・柱穴
7			×	×	
8	II・III	古墳	○	○	柱穴・溝
9	IV	縄文後期	×	○	
10	III	縄文晩期	×	○	
11	II・III	縄文晩期	×	○	
12	II	縄文晩期	×	○	
13			×	○	
14	II～V	縄文晩期・古墳	○	○	溝・柱穴
15		近世	○	×	製鉄関連遺構に伴う柱穴
16		近世	○	×	製鉄関連遺構に伴う柱穴
17			×	×	
18		近世	○	○	鉄滓を含む石列
19	II・V	縄文晩期・後期	○	○	
20	III	弥生・古墳	○	○	
21			○	○	五輪塔
22	II	縄文晩期・古墳・古代	×	○	
23			×	○	
24		中・近世	○	○	畠跡
25	II～VI	縄文晩期・弥生・古墳・古代・中世	○	○	
26		中・近世	○	○	畠跡
27	III～VI	縄文晩期・弥生・古墳・中世・近世	○	○	畠跡
28	III・IV	縄文晩期・弥生・古墳・中世・近世	○	○	畠跡
29	II～VI	古代・中世	×	○	
30	II・III・VI・VII	古墳・中世	×	○	
31	II・III・V・VI	古墳・古代・中世	×	○	



第1図 確認トレンチ配置図

27・28トレンチは、堤防及び河川敷を一部ショートカットし、断面が観察できるように設定し調査した。それによると、繩文時代晚期の包含層が確認できるため、弥生時代の包含層までの確認で終了した。23・30・31トレンチについては重機を使い、主に包含層の有無とその範囲について調査した。

第3節 本調査

(1) 調査概要

平成8年9月～11月にかけて行った県立埋文センターの確認調査を受けて、平成12年度に河川側と持株松遺跡隣接部分、平成15年度に樋門隣接部分、平成16年度に樋門部分から下流部分の本調査を行った。

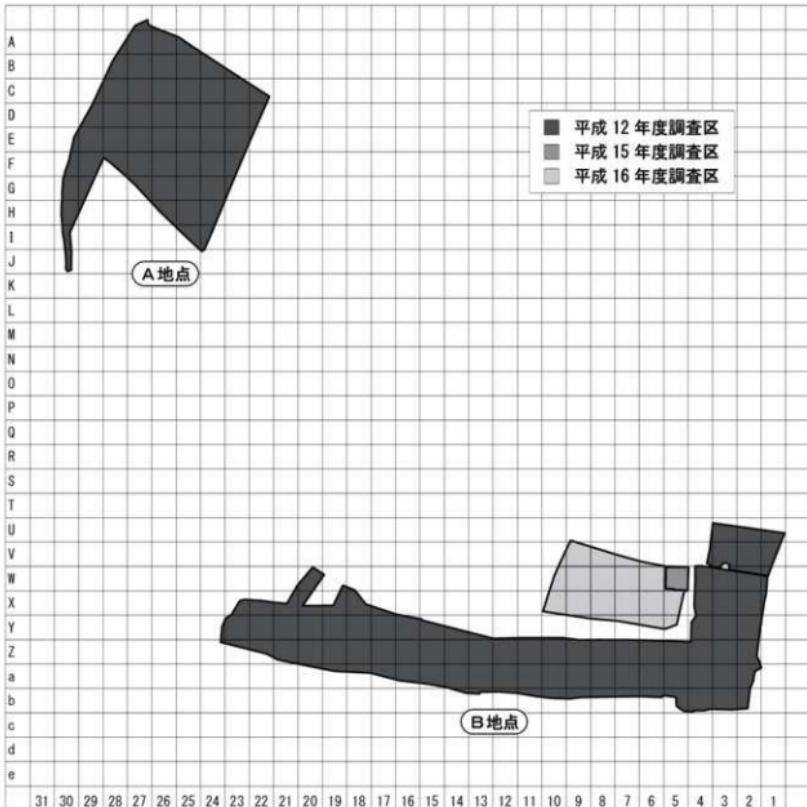
調査は、対象区域全体に公共座標に沿って10mのグ

リッドを設定して実施した。本遺跡の北側からA・B・C・Z・a・b、東側から1・2・3・29・30とし、B-6区などと呼称することとした。(第2図)

発掘調査は重機によってⅠ層(表土)を除去した後、遺物包含層を人力で掘り下げた。場所により、Ⅱ層以下に無遺物層が認められる場合も同様に重機で除去した。最後に、下層確認のためのトレンチを設定して、掘り下げていった。

これらの調査の結果、Ⅱ層から知層まで、繩文時代中期から近世までの遺物と遺構が発見された。

尚、調査区北西側にあたるA～J-22～30区の範囲を「A地点」とし、さらに調査区南東側にあたるA～b-1～24区の範囲を「B地点」と呼称することにした。



第2図 遺跡グリッド配置図

(2) 調査体制

ア 平成12年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 井上 明文

調査企画

次長兼総務課長 黒木 友幸

調査課長 新東 晃一

主任文化財主事

兼第一調査係長 青崎 和憲

主任文化財主事 中村 耕治

調査担当 文化財研究員 栗林 文夫

文化財研究員 福水 修一

文化財研究員 上床 真

文化財調査員 橋口 豆

事務担当 総務係長 有村 貢

主事 潤池 佳子

調査指導 鹿児島大学歴史学部

助手 竹中 正己

イ 平成15年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 木原 俊孝

次長兼総務課長 田中 文雄

調査課長 新東 晃一

主任文化財主事

兼第一調査係長 池畠 耕一

主任文化財主事 中村 耕治

調査担当 文化財主事 湯之前 尚

文化財主事 日高 正人

文化財主事 富山 孝一

事務担当 総務係長 平野 浩二

調査指導 広島大学文学部

教授 河瀬 正利

西南学院大学文学部

教授 高倉 洋彰

ウ 平成16年度

事業主体 鹿児島県土木部河川課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査・企画 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 木原 俊孝

次長兼総務課長 賀雅 彰

調査課長 新東 晃一

主任文化財主事

兼第二調査係長 長野 真一

主任文化財主事 技木 茂樹

文化財主事 富山 孝一

文化財主事 石原田 高広

文化財研究員 黒川 忠広

文化財研究員 上床 真

総務係長 平野 浩二

(3) 調査経過

調査の経緯については、調査日誌をもとに主な出来事を月単位で表した。

【平成12年度：実働119日】

(平成12年8月21日～平成13年3月27日)

8 月	・重機による表土剥ぎ取り。
	・プレハブ設置場所の造成。 (芝原遺跡の調査と併行して作業を行う。作業員は10月から波瀬遺跡へ移動。)
9月	・重機による表土剥ぎ取り。
	・プレハブ設置。 ・芝原遺跡より移動。 ・グリッド杭打ち。 ・X～Z-1・2区表層掘り下げ。
10 月	・表層掘り下げ(W～b-1～5区)。 ・溝状遺構検出(X～Z-2・3区, a・b-3・4区, Z-4区)。 ・土壤墓検出。
	・人骨出土(X・Z-2・3区)。 ・土壤墓検出(W-2・3区, Y-2区)。 ・中世同窓青磁碗出土(Y-2区溝状遺構内)。 ・IV b層埋土ピット検出(Y-Z-2・3区)。 ・竪穴建物跡検出(Z-2・3区, V-a層上面)。 ・中世掘立柱建物跡検出(X・Y-1～3区, 3間×3間)。 ・重久淳一氏(隼人町教育委員会)来跡(24日)。
11 月	・表土剥ぎ(Z・a-4・8区)。 ・表層掘り下げ(Z・a-5・6区, a-4区, X～Z-14～18区)。 ・VI層上面検出(W～Z-1～3区)。 ・V b層埋土ピット検出(X-2区)。
	・ビット内より土器器皿出土(Z-2区)。 ・土壤墓内人骨取り上げ(W-2区)。 ・柳原敏昭氏(東北大助教授)来跡(11日)。 ・本田道輝氏(鹿児島大学助教授)来跡(19日)。 ・伊集院土木との現地協議(19日)。 ・藤田明良氏(天理大学教授)他6名来跡(22日)。
12 月	・VI～VII層掘り下げ(W～a-1～4区, W～Z-4区)。

1 月	<ul style="list-style-type: none"> ・表層掘り下げ (Y ~ a - 18・19区)。 ・古道検出 (W ~ Z - 2・3区)。 ・竪穴建物跡検出 (W - 4区)。 ・カマド状遺構検出 (X - 1区)。 ・成川式土器出土 (W - 1・2区)。 	6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・土坑検出 (No1951・1952)。 ・竪穴住居跡ピット検出 (2・3号)。 ・森脇広氏 (鹿児島大学教授)・和田みよ子氏 (新規技術コンサルタント) 来跡。
2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・XI層上面検出 (W ~ Y - 1 ~ 4区, a - 3 ~ 13区)。 ・X・XI層掘り下げ (Z - 5 ~ 13区)。 ・畠歴検出 (A ~ I - 21 ~ 29区)。 ・III層掘り下げ (A ~ C - 26 ~ 29区)。 ・川側落ち込みライン確認 (A ~ D - 28・29区, F ~ K - 30 ~ 39区, Y・Z - 16 ~ 29区)。 ・石製品出土 (W - 3区)。 ・竪穴建物跡検出 (W - 3・4区)。 ・中世畠歴検出 (A地点)。 ・中世畠歴より白磁・青磁出土 (A地点)。 ・畠歴空中写真撮影 (A ~ I - 21 ~ 29区)。 ・完形土器出土 (XI層より, Z - 3区)。 ・集石検出 (Z - 9区, No1363・1364)。 ・永山修一氏 (ラ・サール学園) 来跡。 ・墨書き土器の遺物指導 	7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・X層掘り下げ (W - 6区)。 ・ピット検出 (W - 6区)。 ・板倉有大氏 (九州大学大学院) 来跡。 ・近世溝掘り下げ (W - 6・7区)。
2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・IX・X・XI層掘り下げ (V ~ Y - 5 ~ 11区)。 ・ピット検出 (V・W - 7・8区)。 ・鉄生産関連遺構検出 (X・Y - 8・9区)。 ・石鍋出土。桑水流俊一氏 (鹿児島県読売記者クラブ) 来跡。 ・大澤研一氏 (大阪歴史博物館) 来跡。 ・橋口亘氏 (坊津町教育委員会) 来跡。 	2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・石層掘り下げ (W ~ Y - 5・6区)。 ・縄文時代晚期土坑検出 (X - 5区)。 ・カマド状遺構検出 (No1991・2061・2155大溝内)。 ・集石検出 (No2202・2203, X・Y - 5・6区)。 ・ピット検出 (X・Y - 5・6区)。 ・指宿式土器出土 (W ~ Y - 5・6区)。
3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・II層掘り下げ (U ~ W - 1 ~ 3区)。 ・III層掘り下げ (A ~ D - 25・26区)。 ・IV層掘り下げ (A ~ E - 26 ~ 29区)。 ・円形粘土塊検出 (W - 1区)。 ・溝状遺構検出 (No1213 ~ 1216, U ~ W - 1 ~ 3区)。 ・大溝内から青銅製鏡出土 (U ~ W - 1 ~ 3区)。 ・ピット検出 (U・V - 1・2区)。 ・陶磁器片が混入する中世焼土検出 (A ~ E - 28・29区)。 ・竪穴建物跡検出 (U - 3区)。 	3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・橋本達也氏 (鹿児島大学総合研究博物館助教授) 来跡 (2日)。 ・石組井戸跡検出 (No2164, W - 7区)。 ・西村誠氏・大濱泰代氏 (鹿児島国際大学生) 来跡 (14日)。 ・伊集院土木部との現地協議 (17日)。 ・岩永勇亮氏・榎原えりこ氏・眞邊彩氏 (鹿児島大学生) 来跡 (24日・29日)。 ・調査終了。

【平成15年度：実働13日】

(平成16年3月2日～平成16年3月16日)

- | | |
|--------|---|
| 3
月 | <ul style="list-style-type: none"> ・表土剥ぎ (V・W - 5区)。 ・ピット検出 (V・W - 5区)。 ・X・XI層掘り下げ (V・W - 5区)。 |
|--------|---|

【平成16年度：実働63日】

(平成16年5月20日～平成17年3月29日)

* 平成16年8月～17年1月までは調査中断。

- | | |
|--------|--|
| 5
月 | <ul style="list-style-type: none"> ・表土剥ぎ・掘り下げ (W ~ Y - 5 ~ 7区)。 ・ピット検出 (Y - 6区)。 ・竪穴住居跡検出 (No1931, Y - 6区)。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・芝原遺跡にて、足形土製品の足部が検出。波烟遺跡の足首部土製品との接合に成功。 ・竪穴住居跡検出 (2・3号)。 |

第4節 整理・報告書作成

(1) 作成概要

渡烟遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、平成8年度から平成16年度にかけての発掘調査中に、遺物の水洗・註記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成20年度から実施した。本報告書については、平成21年度から22年度にかけて行った。作業は、県立埋文センターで、他の万之瀬川流域遺跡群と同時進行の形を行った。

(2) 作成体制

- ア 平成20年度
- | | |
|---------|----------------|
| 事 業 主 体 | 鹿児島県土木部河川課 |
| 作 成 主 体 | 鹿児島県教育委員会 |
| 調 査・企 計 | 鹿児島県教育庁文化財課 |
| 作 成 統 括 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 所 長 | 宮原 景信 |
| 次長兼総務課長 | 平山 章 |
- 作 成 企 計

作成担当	次長	池畠 耕一	11~3月	A地点出土遺物の実測・拓本 検出遺構の整理 縄文時代出土遺物実測 B地点出土遺物註記
	調査第一課長	青崎 和憲		
	主任文化財主事			
	調査第一課第二調査係	井ノ上秀文		
	文化財主事	溝口 学		
	文化財主事	佐藤 義明	4~5月	縄文時代出土遺物実測・拓本
	文化財主事	木之下悦郎		B地点出土遺物分類、接合(~9月)
	文化財主事	黒川 忠広	6~9月	渡畠遺跡1原稿執筆(~12月) 縄文時代出土遺物拓本・トレース
	文化財研究員	上床 真	10~11月	A地点検出遺構整理、トレース 縄文時代出土遺物レイアウト
	総務係長	紙屋 伸一		A地点出土遺物トレース、レイアウト B地点検出遺構整理
事務担当				B地点遺構内出土遺物実測 渡畠遺跡1掲載遺物写真撮影
イ 平成21年度			12~3月	渡畠遺跡1原稿校正、掲載遺物収納 B地点遺構内出土遺物実測
事業主体	鹿児島県土木部河川課			
作成主体	鹿児島県教育委員会			
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課			
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター			
作成企画	所長 山下 吉美			
	次長兼総務課長 齊藤 守重			
	次長 青崎 和憲			
	調査第一課長 中村 耕治			
	主任文化財主事			
	調査第一課第二調査係	官田 栄二	4~5月	B地点遺構内出土遺物拓本・トレース
作成担当	文化財主事 溝口 学			B地点遺構トレース
	文化財主事 小林 晋也			B地点包含層遺物の分類・実測
	文化財主事 日高 勝博			渡畠遺跡2原稿執筆(~12月)
	文化財研究員 上床 真		6~10月	B地点包含層遺物実測・拓本・トレース
事務担当	総務係長 紙屋 伸一		11~12月	遺物のレイアウト、写真撮影
企画担当	文化財主事 佐藤 義明		1~3月	原稿校正、遺物の収納
ウ 平成22年度				
事業主体	鹿児島県土木部河川課			
作成主体	鹿児島県教育委員会			
調査・企画	鹿児島県教育庁文化財課			
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター			
作成企画	所長 山下 吉美			
	次長兼総務課長 田中 明成			
	次長 中村 耕治			
	調査第一課長 長野 滉一			
	調査第一課第二調査係長 八木澤一郎			
作成担当	文化財主事 池畠 耕一			
	文化財主事 溝口 学			
	文化財主事 小林 晋也			
	文化財主事 平尾 大介			
事務担当	総務係長 大岡 祥子			
企画担当	文化財主事 関 明恵			
(3) 作成経過				
	【平成20年度】			
	4~10月 出土遺物水洗い、分類、註記、接合			

第5節 中小河川改修事業関連の遺跡と概要

1 関連遺跡の概要

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴い、調査を実施することになった遺跡は、渡畠遺跡を含めて6遺跡である。ここでは、報告書の刊行年度順に概要を示すこととする。尚、各遺跡の検出遺構及び出土遺物等の詳細については表2に示し、各遺跡の場所については第3図に示した通りである。

(1) 南田代遺跡

鹿児島県南九州市川辺町田部田に所在し、万之瀬川流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡とは東南約4.400m離れた場所に位置する。

南田代遺跡では、縄文時代～中世の遺構や遺物が発見された。中でも、縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や剥片集積遺構は、当時の生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また、前期出土土器（轟式土器・曾煙式土器・深浦式土器）及び石器（石鏃等）も多量に見つかった。

(2) 古市遺跡

南九州市川辺町水田に所在し、万之瀬川左岸の自然堤防上に立地する。南田代遺跡の東側に隣接しており、本遺跡とは約4.700m離れた場所に位置する。

古市遺跡では、弥生時代～中世の遺構や遺物が発見さ

れた。特に、弥生時代中期の出土土器（山ノ口式土器・黒髪式土器）は、古市遺跡から1kmほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物（須玖式土器）との関連性を考える上で興味深い遺跡となった。

(3) 持鉢松遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡A地点の北側に隣接しており、本遺跡との関連性も高い。

持鉢松遺跡では、縄文時代晩期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期に出土した土器（南福寺式土器・出水式土器）、晩期の出土土器（入佐式土器・黒川式土器）については、波煙遺跡から出土したものと類似点が多い。弥生時代は、終末期の在地系土器が豊富に出土し、中世前半期においては、掘立柱建物跡や溝状遺構・土塙墓等が確認された。また、それに伴い、県内では例を見ないほどの多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国産陶磁器等が出土している。

(4) 上水流遺跡

南さつま市金峰町花瀬に所在し、万之瀬川中流の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地する。本遺跡とは、南東約1.500m離れた場所に位置する。

上水流遺跡では、縄文時代前期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代前期では、曾晲式土器がほぼ単純な状態で出土し、石器組成などの時期判断を絞り込むことのできる数少ない遺跡である。

縄文時代中期～後期にかけては、阿高式系土器と指宿式土器が出土し、縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する千河原段階の土器がまとめて出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど、これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。堅穴住居こそ発見されなかつたが、各時期ともに集石や土坑、ピットや焼土跡などが多数検出され、一定期間人々が生活していた様子も窺える。また報告書では、後期の編物圧痕のある底部片や、晩期の組織痕についてモーリング陽像を探り比較を行い紹介している。

弥生時代では、磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し、周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では、11軒の堅穴住居跡が発見された。これに伴って、古式須恵器の器台・把手・付鉢などや、県内では類例の少ない鉄製の捕縄が発見された。

中・近世では、大溝（大型溝状遺構）から出土した16・17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は、中国・朝鮮・東南アジア産のものと国内産のものに大別される。国内産の中には、初期の薩摩焼窯である堂平窯で生産されたとみられるものが多くあり、この時期の流通を考える上で重要である。また、鉄製品も多数出土しており、鍋の破片や鍔、火打金

が出土している。

(5) 芝原遺跡

鹿児島県南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する。本遺跡B地点の東側に隣接し、本書でも特筆したが縄文時代後期の足形土製品の足部（芝原遺跡）と足首部（波煙遺跡）が合致したこともあり、関連性の高さが窺える。

芝原遺跡では、縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。縄文時代中期では、春日式土器を伴う堅穴状遺構が2基と土坑1基が検出されている。縄文時代中期の堅穴状遺構は検出例が少なく注目される。また、堅穴状遺構からは、漁獵具であると考えられている巻齒縁石器（組合せ鉗の尖端部）が3点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが、縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。尚、本遺跡でも、この組み合わせ鉗の可能性が高い石器が6点出土しており、関連性について検証中である。

縄文時代後期では、堅穴状遺構3基をはじめ、集石や土坑、ピットなどが多数検出され、一定期間人々が生活していた様子が窺える。

弥生時代以降については、多量な遺構・遺物が発見された。次年度以降に整理作業を行い、報告書刊行の予定である。

刊行報告書一覧

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「南田代遺跡」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (88)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「古市遺跡」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (89)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「上水流遺跡1」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (113)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007「持鉢松遺跡」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (120)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008「上水流遺跡2」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (121)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009「上水流遺跡3」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (136)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「芝原遺跡1」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (150)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「上水流遺跡4」

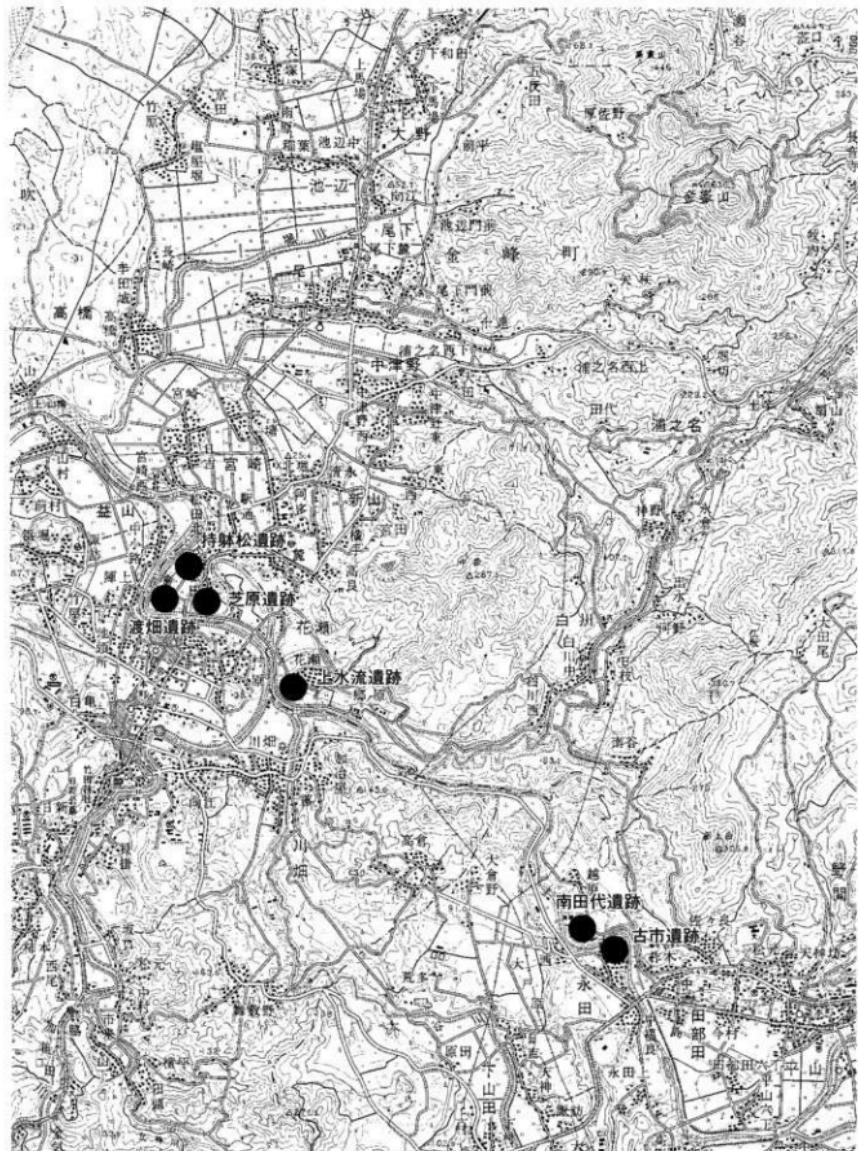
鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (151)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011「芝原遺跡2」

鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (158)

表2 中小河川改修事業関連遺跡一覧表

番号	道跡名	道跡番号	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
1 南田代溝跡	27-62	01.5.7～ 01.8.29 02.10.4～ 03.3.20 03.5.6～ 03.5.27	13,700m ²		縄文時代早期		塞ノ神式土器
					縄文時代前期	集石、磨石集積、石斧埋納、削片集積、黒陶石埋納	轟式土器、曾根式土器、深浦式土器、石鏡
					縄文時代中期	集石	阿高式土器、春日式土器、船元式土器
					縄文時代後期		御領式土器
					縄文時代後期		黒川式土器
					弥生時代		高橋式土器、松木園式土器
					古墳時代		成川式土器
					古代		土師器、須恵器
					中世		土師器、青磁
2 古市溝跡	27-89	01.9.3～ 02.3.25 02.5.07～ 02.10.3 03.10.20～ 03.11.12	17,180m ²		弥生時代	竪穴住居	高橋式土器、寒翠式土器、山ノ口式土器、松木園式土器、中津野式土器、石鏡、石舟、石笠丁
					古墳時代	竪穴住居、溝状遺構	成川式土器、砾石、石製品
					中世	掘立柱建物	土師器、須恵器、白磁、青磁
3 持株松溝跡	35-130	97.9.1～ 98.2.27 98.10.12～ 99.3.25 99.4.20～ 99.10.14	7,038m ²		縄文時代後期		南福寺式土器、出水式土器
					縄文時代後期		入佐式土器、黒川式土器、石鏡、磨製石斧、打製石斧、スクレイバー、磨石、叩石
					弥生・古墳時代	竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、ピット、土器底まり	刮目帯突文土器、入佐式土器、寒翠式土器、山ノ口式土器、須玖式土器、松木園式土器、中津野式土器、砾石、ガラス製品、鉄製品
					古代	溝状遺構、土坑、掘立柱建物跡、欽闘状遺構、ピット	土師器、須恵器、磨製土器、瓦質土器、赤色土器、黒色土器、移動式カマド、鉄製品、絞糸車、轍の羽口、铁滓
					中世	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝状遺構、土器底まり	土師器、須恵器（東播磨系・權丈丈系）、瓦質土器、瓦器、黑色土器、常滑焼、瀬戸焼、備前焼、カミイヤキ、青磁、白磁、青白磁、青花、輸入陶器、土器製品、滑石製石鍋、滑石製品、磁石、鐵、刀子、鉄製品、轍の羽口、铁滓
					近世		箭代川挽（羅麻挽）、肥前系陶磁器
4 上水道溝跡	35-98	00.4.24～ 01.3.29 03.3.9～ 04.3.19 04.5.7～ 05.2.4 05.5.9～ 06.9.28	15,500m ²		縄文時代前期	集石、土坑、燒土、ピット、櫛集積	曾根式土器、方形土器、億成粘土塊、石鏡、石舟、櫛形石器、スクレイバー、石錐、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿、石製品
					縄文時代中期～後期	集石、土坑、燒土、ピット	阿高式土器、南福寺式土器、指宿式土器、磨洞縄文土器、松山式土器、土製品、石鏡、石舟、磨石、石皿
					縄文時代後期	集石、土坑、燒土、ピット	入佐式土器、黒川式土器、千河南窯廠、三文彫文の土器、孔列土器、刮目帯突文土器、南島系系形土器、石鏡、石舟、磨石、石皿、石製品
					弥生時代		高橋式土器、入来寺式土器、寒翠I式土器、磨製石鏡、磨擦穿孔具、磨片刃石斧
					古墳時代	竪穴住居跡、土坑、埋納ピット、櫛集積、燒土	中津野式土器、辻堂原式土器、皆賀式土器、古式須恵器、ミニチュア土器、土製品、勾玉、菅玉、鉄針横鎌
					古代		土師器、須恵器、鍍金陶器
					中・近世	掘立柱建物跡、大型土坑、大型溝状遺構、溝状遺構、帶状硬化面、土坑窓、炉状遺構、土坑、欽闘状遺構、輪狀遺構、冶炉窓、土器埋納遺構、堆積遺構	土師器、須恵器、カミイヤキ、瓦質土器、染付、青花、薩摩焼（室平家・箭代川系・龍門系共合む）、輸入陶磁器（東南アジア系共合G）、土鏡、磁石、石鏡、鉄器、銅滓、ガラス玉、輕石製品、石瓶、鐵賓、人骨、炭化植物、ヤマトシジミ
5 琴糸溝跡	35-81	99.10.15～ 00.3.22 00.4.24～ 01.1.25 01.5.7～ 02.3.19 02.5.7～ 03.3.20 04.5.6～ 05.3.22 05.5.14～ 05.7.16	49,600m ²		縄文時代中期	竪穴状遺構、土坑	春日式土器、石鏡、磨齒实頭器、石器、スクレイバー、撲切石器、石皿、磨石
					縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構、埋納土器、土坑、磁石、石皿集積、落ち込み	阿高式土器、南福寺式土器、曾根式土器、岩崎式系土器、指宿式土器、市来式系土器、土製品、石鏡、石舟、スクレイバー、櫛形石器、石錐、磨製石斧、打製石斧、雄雌器、撲切石器



第3図 中小河川事業関連遺跡位置図（1：40,000）

2 事業関連遺跡の調査経緯

中小河川改修事業（万之瀬川）は、平成5年度の県教委による分布調査に始まり、これまで南田代遺跡、古市

遺跡、持林松遺跡、上水流遺跡、芝原遺跡、渡畠遺跡について調査を進めてきた。一連の調査経緯については、表3に示した通りである。

表3 中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯

事業年度	遺跡名	事業内容	担当	備考
平成5年度	全遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成6年度	持林松遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	県教委支援
平成7年度	上水流遺跡	確認調査	南さつま市（旧金峰町）教育委員会	
平成8年度	渡畠遺跡・持林松遺跡	確認調査（一部本調査）	南さつま市（旧加世田市）教育委員会	県教委支援
平成9年度	持林松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	松ヶ鼻遺跡	確認調査	鹿児島県教育委員会	
平成10年度	芝原遺跡・持林松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度	芝原遺跡・持林松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度	上水流遺跡・芝原遺跡・渡畠遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度	芝原遺跡・渡畠遺跡・上水流遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度	芝原遺跡・渡畠遺跡・上水流遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
	南田代遺跡・古市遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
平成17年度	上水流遺跡	本調査・整理作業	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成18年度	上水流遺跡	整理作業・報告書I刊行	鹿児島県教育委員会	
	持林松遺跡・芝原遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成19年度	上水流遺跡	整理作業・報告書II刊行	鹿児島県教育委員会	
	持林松遺跡	報告書刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畠遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成20年度	上水流遺跡	整理作業・報告書III刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畠遺跡	整理作業	鹿児島県教育委員会	
平成21年度	上水流遺跡	報告書IV刊行	鹿児島県教育委員会	
	芝原遺跡・渡畠遺跡	整理作業・報告書I刊行	鹿児島県教育委員会	
平成22年度	芝原遺跡	整理作業・報告書II刊行	鹿児島県教育委員会	
	渡畠遺跡	報告書II刊行	鹿児島県教育委員会	
予 定	芝原遺跡	整理作業・報告書III刊行	鹿児島県教育委員会	
予 定	芝原遺跡	報告書IV刊行	鹿児島県教育委員会	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

渡畠遺跡は、鹿児島県の南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸の自然堤防上に立地する（写真1）。

万之瀬川は鹿児島市の南部美淡岳南麓に源を発し、南九州都市川辺町から南さつま市の加世田平野を横断している。さらに吹上浜に至り、東シナ海に注ぐ長さ約20km、流域面積381km²の薩摩半島南部を代表する河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており、中下流域には沖積平野が広がっている。また万之瀬川の蛇行によって浸食された台地が見られる。こうした砂丘地と台地には、縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

河口より約6kmさかのぼった渡畠遺跡周辺の標高は、約5m前後である。このあたりの表層は、未固結堆植物である粘土や砂礫のある河川敷で、後背地には灰色低地土壤が広がり、一部には黒泥炭土壤も見られる。氾濫堆植物は主に砂・シルトからなり、場所によっては、その下位に砂礫からなる万之瀬川の旧河床堆植物が伏在する。

本遺跡で出土した縄文後期初頭以降の文化遺物は、自然堤防を形成した氾濫堆植物に覆われた土壤層中に見いだされる。そのことから、万之瀬川の自然堤防は、約4,000年前頃から形成されたことが分かる。

その後、万之瀬川の河道はあまり変化せず、厚さ4mほどの堆植物を氾濫によって累積してきた。氾濫堆植物の層区分とその推移から、遺跡周辺では縄文中期から中

世までの顯著な氾濫は4、5回ほど認められる。この一帯は万之瀬川が大きく蛇行しており、かつ、加世田川や長谷川などの支流の合流地点も近くにあり、周辺の沖積平野は、過去梅雨や台風の時期になると水害に遭っている。

昭和10（1935）年の国土地理院発行の地図では、村原付近において河川改修が行われ、低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。これは、昭和初期の恐慌時に、失業対策事業として実施された河川改修事業による影響である。

下流に目を向けると、現在の河口は、享和年間（1801～1804）の洪水により流れが変わってきたもので、新川と呼称されている。それ以前の万之瀬川河口はさらに南側に蛇行しており、現在の河口より約3km南にあったことがわかっている。周辺に目を向けると、東部には比較的大なだらかな標高約200m前後の山々が南北を縱断している。このなかで約7km北東方向にある金峰山は、旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636mの薩摩半島中央部における最高峰で、古来から信仰の対象となっている。また、海上航行の際には、同山より南西方向に約22km先にある野間岳と共にランドマーク的役割を果たしていた。特に、野間岳に関しては、「三國名勝圖會」の中に「毎歲漢土の商舶、長崎に来る時は、洋中にて必ず此嶽を認て、針路を取り、皇國の地に到り、其始て認め見し時は、酒を酌て賀をなすといふ云々」の記述が見える。



写真1 上空から見た渡畠遺跡周辺の様子

第2節 歴史的環境

南さつま市では、旧石器時代から歴史時代での遺跡が数多く発見されている（第4図、表4）。

この中には、史学上極めて重要な遺跡も含まれております。当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを見られて示唆している。

旧石器時代では、小中原遺跡、祝原遺跡からナイフ形石器が、山野原遺跡、平田尻遺跡から縄石器や縄群が発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、椿ノ原遺跡がある。ここでは、煙道付き炉穴や集石等の構造と、隆蒂文土器・磨製石斧・丸ノミ状の磨製石斧等の遺物が出土し、国指定の史跡となっている。また、志風頭遺跡では、煙道付き炉穴から大型の隆蒂文土器が出土している。

縄文時代早期の遺跡としては、前述の椿ノ原遺跡が著名である。昭和52（1977）年の発掘調査で出土した遺物は、前平式土器と吉田式土器の型式設定について問題を投げかけた。小中原遺跡では、前平式土器の円筒形・角筒形がまとめて出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、阿多貝塚や上焼田遺跡が著名である。阿多貝塚から出土した資料は、阿多V類土器（現在では西唐津式とされる）と称され、上焼田遺跡からは块状耳飾が出土している。

縄文時代中期の遺跡としては、上水流遺跡で大型の集石と春日式土器が豊富に出土しており、河川沿い低地との関係において注目される。また、芝原遺跡の堅穴住居跡と石堂遺跡の阿高式土器・並木式土器の出土等も挙げられる。さらに、鋸齒石器や石器などの特徴的な石器も出土している。

縄文時代後期の遺跡としては、先述の芝原遺跡がある。ここでは、大量の指宿式土器や南福寺式土器が出土している。また、足形を呈する土製品は本県でも例が無く、加えて隣の本遺跡出土の土製品と接合したことによって注目される。

縄文時代後期の遺跡としては、上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡がある。ここでは土偶・軽石製岩偶・石棒など祭祀をうかがわせる資料が出土しているが、近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づけられることもくなっている。また、千河原遺跡や上水流遺跡では、豊富な量の浅鉢と深鉢が出土している。下原遺跡では、縄文時代後期終末～弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って、朝鮮半島系無文土器・稻痕のある土器・石包丁などが出土している。

弥生時代から古墳時代にかけては、多くの遺跡で遺物の散布がみられる。高橋貝塚は、弥生時代前期を主体とする貝塚で万之瀬川の支流堀川の右岸、標高11mの洪積砂丘上にある。昭和37・38（1962・1963）年に、河口真徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果、

縄文時代晚期の夜白式土器と弥生時代前期の高橋I式土器が共伴したことや、南海産の貝を素材とした製作中の貝輪や貝そのものが出土したこと、学史に残る遺跡である。下小路遺跡は、弥生時代後期の須玖式の壺棺が検出された埋葬遺跡で、棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。また、松木園遺跡では、弥生時代後期の環濠である可能性のある大溝が松木園式土器を伴って検出されている。中津野式土器の標識遺跡である中津野遺跡からは、床面が3段構造になる堅穴住居跡が発見され、最下段である3段目からは完形土器が40個出土している。中津野式土器は弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として位置付けられている。

古墳時代の遺跡としては、小湊にある奥山古墳（六堂会箱式石棺墓）が特筆される。この遺跡は昭和16（1931）年に発見され、石棺内部には赤色顔料が塗られており、ガラス玉や長さ180cmの鉄剣、刀子が副葬されていた。平成17（2005）年3月には、鹿児島大学総合研究博物館助教授の橋本達也氏が再調査を行っている。その結果、周溝の一部と考えられる遺構が発見され、また同年8月の調査で4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡では、堅穴住居跡19軒が検出されている。遺構内遺物から、辻堂原式土器から篠貫式土器にかけての時期の集落であるとされる。

古代にも多くの遺跡が発見されている。特に集落が発見される場合が多く、広域的なあり方について検討する場合に重要な資料となっている。荒平窯をはじめとする中岳山麓窯跡群は旧金峰町にあり、9世紀から10世紀にかけて稼動していたとみられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが、表面採集された遺物によって荒尾窯（熊本県荒尾市）の製品との類似性が高いと言われており、人的・物的な交流があったと考えられている。小中原遺跡からは、多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字が刻まれた土器などが発見されていることから、阿多郡衙の跡ではないかと考えられている。また、山野原遺跡でも多くの掘立柱建物跡と土器・須恵器などが発見されている。祭祀に関わるとみられる遺構や、土器・須恵器焼成遺構の可能性が考えられるものなども発見されており、在地の実力者にかかる施設であった可能性が考えられている。

中世には、阿多郡は、ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって、唯一大宰府領であった。このなかで大宰府の権威をかりて領主權を確立し、やがて薩摩武士団の棟梁的地位を固めるまでに至ったとみられる阿多郡司平忠景は、12世紀前半の史料に初見される。

忠景の在位期間は中央政権の交代の影響で比較的短期間ではあったが、周辺地域にも多少の影響を与えたことも考えられる。

阿多郡はその後13世紀前半には北方と南方に分割され



第4図 周辺遺跡位置図

表4 周辺道路一覧表

番号	道 路 名	所 在 地	時 代						備 考
			旧石器	縄 文	弥 生	古 墓	古 代	中 世	
1	牟田道路	南さつま市 金峰町高橋字真門妙入				●		●	
2	尾下道路	南さつま市 金峰町尾下		●					
3	龜ヶ城跡	南さつま市 金峰町尾下 翠					●		
4	田布施道路	南さつま市 金峰町野首他5	●		●		●		
5	篠付道路	南さつま市 金峰町尾下篠付	●	●		●			金峰町発掘
6	高橋貝塚	南さつま市 金峰町高橋		●					金峰町発掘
7	草原町道路	南さつま市 金峰町宮崎			●				
8	上椎田道路	南さつま市 金峰町宮崎椎田	●	●			●		金峰町発掘
9	堺川貝塚	南さつま市 金峰町宮崎	●						
10	阿多貝塚	南さつま市 金峰町宮崎上焼田	●	●	●				金峰町発掘
11	立原道路	南さつま市 金峰町宮崎			●				
12	中津野道路	南さつま市 金峰町中津野1 1 1 9		●					発掘
13	中津野城跡	南さつま市 金峰町新山					●		
14	万之瀬川床道跡	南さつま市 金峰町山万之瀬川		●	●				
15	上川原道路	南さつま市 金峰町宮崎上川原		●	●				
16	上花川道路	南さつま市 金峰町							
17	野村原道路	南さつま市 金峰町中津野			●				
18	白糸川道路	南さつま市 金峰町宮崎	●	●	●	●	●	●	発掘
19	小中原道路	南さつま市 金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●	原・金峰町発掘
20	立野道路	南さつま市 金峰町新山			●				
21	三反田	南さつま市 金峰町新山			●				
22	市薙道路	南さつま市 金峰町宮崎	●					●	発掘
23	中小路道路	南さつま市 加世田益山		●	●				市発掘
24	陣跡道路	南さつま市 加世田益山陣					●		
25	内ノ田道路	南さつま市 加世田益山内ノ田	●		●		●	●	
26	松田南道路	南さつま市 金峰町花灘	●		●		●		
27	持射松道路	南さつま市 金峰町松田南	●	●	●	●	●	●	原発掘
28	波畠道路	南さつま市 金峰町松田南	●	●	●	●	●	●	本報告書
29	芝原道路	南さつま市 金峰町松田南	●	●	●	●	●	●	原・金峰町発掘
30	下東延道路	南さつま市 加世田宮原下東延	●	●					
31	大迫田道路	南さつま市 金峰町花灘					●		
32	今城道路	南さつま市 金峰町花灘今城原	●	●	●		●		
33	中岳山蒙古富群	南さつま市 金峰町花灘							鹿児島大学調査
34	楢ノ原道路	南さつま市 加世田原字楢ノ原	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
35	上木波口道路	南さつま市 金峰町花灘							金峰町発掘
36	花灘道路	南さつま市 金峰町花灘			●			●	
37	上木波C道路	南さつま市 金峰町花灘		●	●			●	金峰町発掘
38	上木波東道路	南さつま市 金峰町花灘上木波森山	●	●	●	●	●	●	原・金峰町発掘
39	針原道路	南さつま市 金峰町花灘				●			
40	弥十山通路	南さつま市 金峰町花灘							金峰町発掘
41	宇治野原道路	南さつま市 金峰町白川西	●	●					金峰町発掘
42	杉本寺道路	南さつま市 加世田川船二本寺		●		●	●	●	南さつま市発掘
43	上加世田道路	南さつま市 加世田川船二加世田	●	●	●	●	●	●	加世田市発掘
44	永田道路	南さつま市 加世田川船永田				●			
45	加治屋道路	南さつま市 加世田川船岩山・加治屋	●	●	●	●			発掘
46	鶴受道路	南さつま市 金峰町花灘	●		●				金峰町発掘
47	二郷道路	南さつま市 加世田川船二郷			●				加世田市発掘
48	屋地道路	南さつま市 加世田屋地			●				
49	遇見ヶ岡道路	南さつま市 加世田川船長泊	●	●					
50	上長泊道路	南さつま市 川口岡下山田免多泊、他	●	●	●				

る。旧金峰町が位置する阿多郡は阿多氏が、後には戸島氏が支配を行い、旧加世田市が属する加世田別府は二階堂氏が、後には島津氏が支配するようになる。

中世前半の遺跡としては、平成8（1996）年から11（1999）年まで旧金峰町が発掘調査を行った小園遺跡が挙げられる。ここでは、掘立柱建物跡・円形竪穴遺構・区画溝等が発見され、遺物として11世紀後半から13世紀代の貿易陶磁と、須恵器・常滑焼・和泉型瓦器・類須恵器（カムイヤキ）・滑石製品等が出土している。このことから、金峰山信仰の拠点寺院として、12世紀前半の文献で初見される觀音寺との強い関連性が指摘されている。觀音寺は保延4（1138）年に、前述の阿多郡司平忠景より阿多牟田上浦の寄進を受けるなど、薩摩半島西南部における仏教及び山岳信仰の中心拠点であったと考えられている。

城館跡の発掘調査としては、上ノ城跡、別府城跡、半札ヶ城跡、貝殻崎城跡などが知られる。発掘調査は行われていないが、南さつま市加世田益山の寺園氏宅には、二重の濠があったと伝えられ、現在もその痕跡が残る（上東2004）。中世に由来するかは明らかでないが、居館であった可能性も考えられる。

白糸原遺跡では、中世末から近世にかけての土壙墓が24基検出されている。この中には、南島産の夜光貝が入っているものもある。加えて、竪穴建物跡や双魚文青磁なども見つかっている。また、本遺跡の属する万之瀬川流域の遺跡群も、近年特に注目されている。万之瀬川下流には川底遺跡と中流には古市遺跡・南田代遺跡（南九州市）などがあり、中世を中心とした繩文時代から近世・近代にわたる複合遺跡として今後の調査の成果が期待される。

近世においては、前述の上水流遺跡の大溝から、16～17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が、福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また、万之瀬川河口付近を含む吹上浜沿岸では、東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999など）。

外城制度（天明4〔1784〕年、郷に改められた）に間連するものとして、地頭仮屋（旧加世田市は龍、旧金峰町は阿多と田布施の2か所）、庄内役所・浦役所・別当役所・会所・宿場・御蔵・常平倉・津口御番所・遠見御番所・射場・御牧などがあった。また、野町と呼ばれる商人の居住区も存在した。旧加世田市では川畑に現在所在する聖徳寺付近に、また旧金峰町内では阿多郷野町と田布施郷池野町の二つがあった。渡畑・持林松・芝原の各遺跡を含む宮崎の「御新田」とされる一帯は、享保13（1728）年、万之瀬川の中流域にあたる川辺町越ヶ原より用水路を引き新田開発が行われたものである。

交通網に目を向けると、本遺跡と下流側に隣接する持林松遺跡には、近世の街道「伊作筋」が通っており、現在は国道220号線となって万之瀬橋が架けられている。ここはかつて村原渡口と呼ばれる渡し場であり、昭和56（1981）年以前は船で渡っていた。また、大正3（1914）年には、南薩鉄道（鹿児島県唯一の私鉄）の伊集院～加世田間が開通している。これは、渡畑遺跡・持林松遺跡の中もかつて通っていたものであるが、昭和58（1983）年の6・21加世田水害を機に、昭和59年廃止された。数年前までは、遺跡周辺でも線路跡である土堤があちらこちらに残っていたが、近年になってその姿を消しつつある。近・現代においては、太平洋戦争（第二次世界大戦）時、旧加世田市の唐仁原・高橋に、陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれて、戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

- 鹿児島県教委 1975 「南薩地域 土地分類基本調査」
上東 克彦 2004 「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－ケンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究24号』日本貿易陶磁研究会
橋口 亘 1999 「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究会19号』日本貿易陶磁研究会
加世田市教委 1985 「上加世田遺跡Ⅰ」「加世田市埋蔵文化教育委員会化財発掘調査報告書」(3)
1987 「上加世田遺跡Ⅱ」「加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書」(4)
1995 「干河原遺跡」「加世田市埋蔵文化材発掘調査報告書」(12)
1999 「志鳳頭遺跡・奥名頭遺跡」「加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書」(16)
金峰町教委 1998 「上水流遺跡－第1次調査－」「金峰教育委員会町埋蔵文化財発掘調査報告書」(9)
1998 「持林松遺跡 第1次調査」「金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書」(10)
2000 「小蘭遺跡」「金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書」(11)
鹿児島県教委 1991 「小中原遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財教育委員会発掘調査報告書」(57)
河口 貞徳 1988 「日本の古代遺跡38鹿児島」保育社
加世田市教委 1986 「加世田市史」(上下) 史編纂委員会
金峰町教委 1987・1989 「金峰町郷土史」(上下) 郷土史編纂委員会
原口 虎雄 1982 「三國名勝圖會」第二卷 図書出版
青潮

第3章 層序

渡畠遺跡は、万之瀬川下流沿岸の自然堤防及び河川敷に立地しており、地層は基本的に河川堆積の砂質土および粘質土である。

本遺跡は、調査区北側の持株松遺跡に隣接するA地点と、調査区南側の芝原遺跡に隣接するB地点とに分かれ、それぞれで層位が異なる。

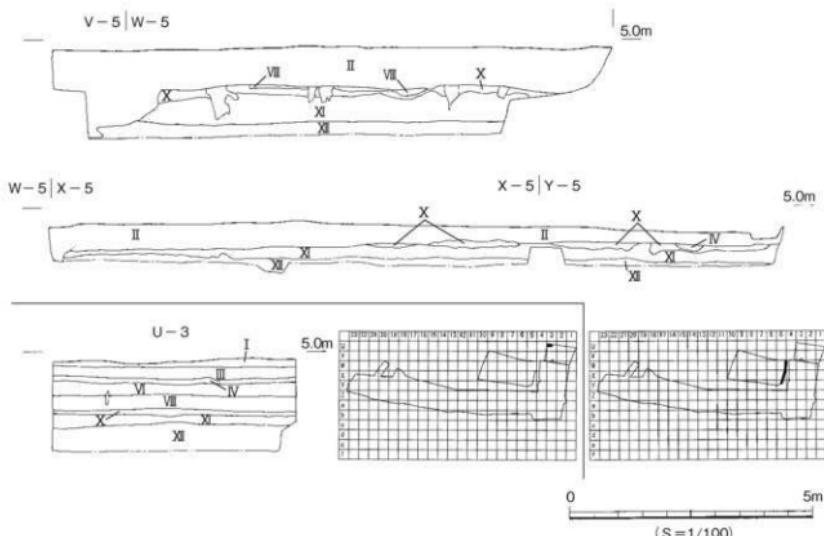
B地点における調査区北西側のV～Y-5～10区では、Ⅲ～V層が削平されている（第5図）。そのため、古代から中世までの造構・遺物はほとんど見られなかつた。さらに、W-Y-6～8区においてはVI～XII層が搅乱によって明確な分層ができなかつたため、弥生・古墳時代の造構検出が困難であった。

多量の造構が検出されたV～a-1～4区についても、水田耕作や過去数回に及ぶ河川の氾濫に伴う洪水堆積層などを含んでおり、層位が安定していない。

比較的の層位が安定しているU-W-1～3区の層位を基準に、各時代の遺物包含層を確定することとした。なお、A地点の土層断面および、B地点の東側土層断面については、平成21年度刊行「渡畠遺跡1」に掲載してある。

表5 B地点の層位

I 层	灰褐色土	現耕作土
II 层	茶褐色砂質土	近世遺物包含層
III 层	黑色砂質土	中世前期遺物包含層
IV a層	黃褐色砂層	
IV b層	茶褐色砂質土	中世前期遺物包含層
V a層	黃褐色砂層	
V b層	明茶褐色粘質土	古代遺物包含層
VI 层	黑褐色砂質土	古代遺物包含層 古墳時代遺物包含層
VII 层	暗黃褐色砂層	古墳時代遺物包含層
VIII 层	明茶褐色砂質土	弥生・古墳時代遺物包含層
IX 层	黃褐色砂層	
X 层	明黑褐色砂質土	弥生・古墳時代遺物包含層 縄文時代晚期遺物包含層
XI 层	黃橙色砂質土	縄文時代後期遺物包含層
XII 层	白色砂層	縄文時代中期遺物包含層



第5図 土層断面実測図

第4章 弥生・古墳時代の調査

第1節 調査の概要

B地点の調査は重機を使用して表土を除去した後、人力でⅡ層以下の掘り下げを行った。

弥生・古墳時代の調査対象となる層位は、VI～Ⅸ層であるが、層位が安定していないため、表土直下層から検出された遺物も多く、それらは一括して取り上げることにした。また、縄文時代の遺物包含層であるX層からも、弥生・古墳時代の遺物が検出された。これらは、河川の氾濫による流れ込みと判断し、該期の遺物として取り上げることにした。

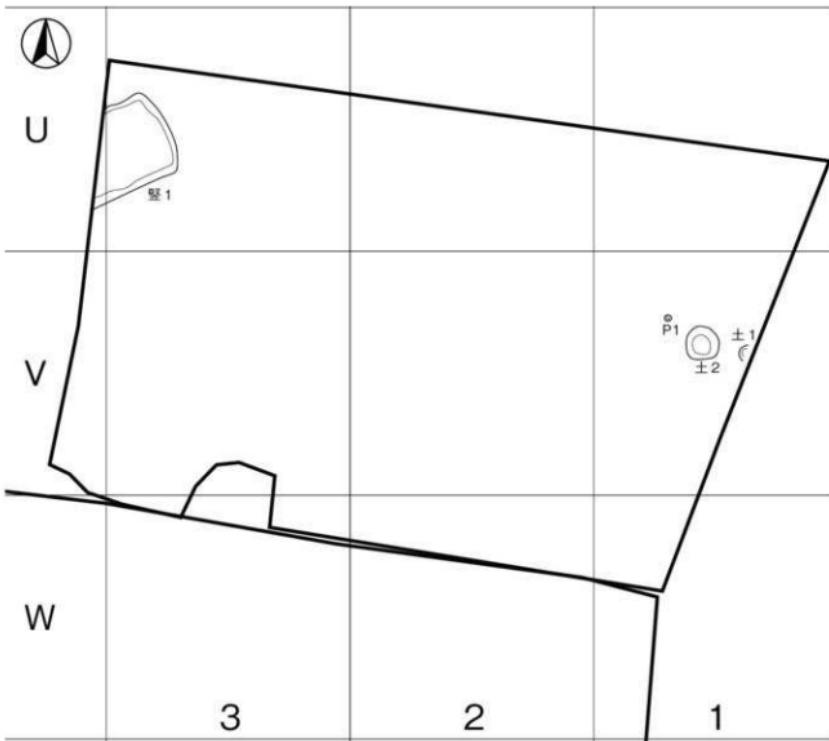
遺構検出は、VI～Ⅸ層で行った。ただ、層位が不安定な場所では、IX・X層から検出された遺構も多い。その結果、該期の遺構として竪穴住居跡7軒、大型土坑3基、土坑7基、ピット12基を検出した。(第6～9図)

遺物は小破片がほとんどであり、その総数は2万点を

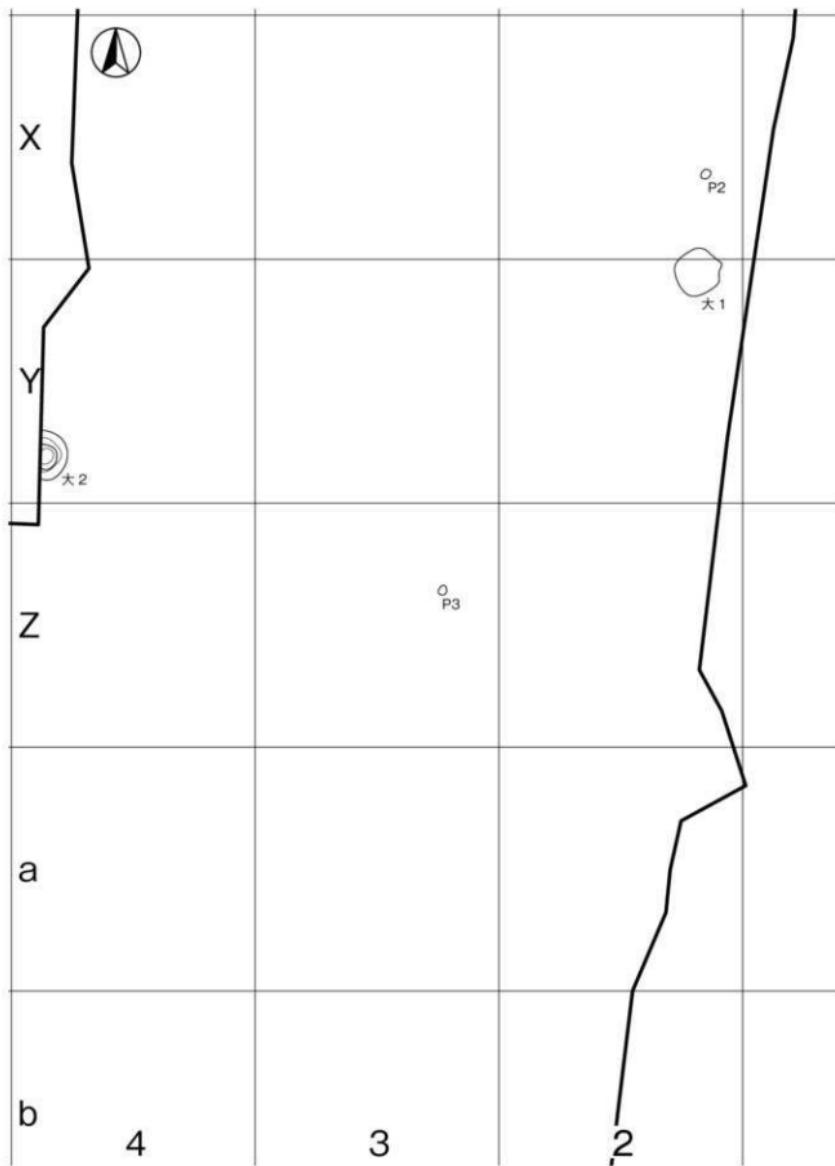
超える。遺構内出土遺物は、全て番号を付けて取り上げ、それ以外は一括して取り上げた。ただし、該期の遺構に伴う同時期の遺物と認定されるものは少なく、その中で時期形式が合致するものを掲載することにした。

土器は、壺形土器、壺形土器を中心とした土器片がほとんどである。石器は、鍛石器として磨製石鏃、石包丁、石核が1点ずつ出土し、剥片石器として磨製石斧が1点、敲石が1点、凹石が2点、砥石が1点出土した。軽石製品は數十点出土したが、形がはっきりしたもの11点を掲載することにした。土師器は土師壺が1点、須恵器は杯身が2点出土した。

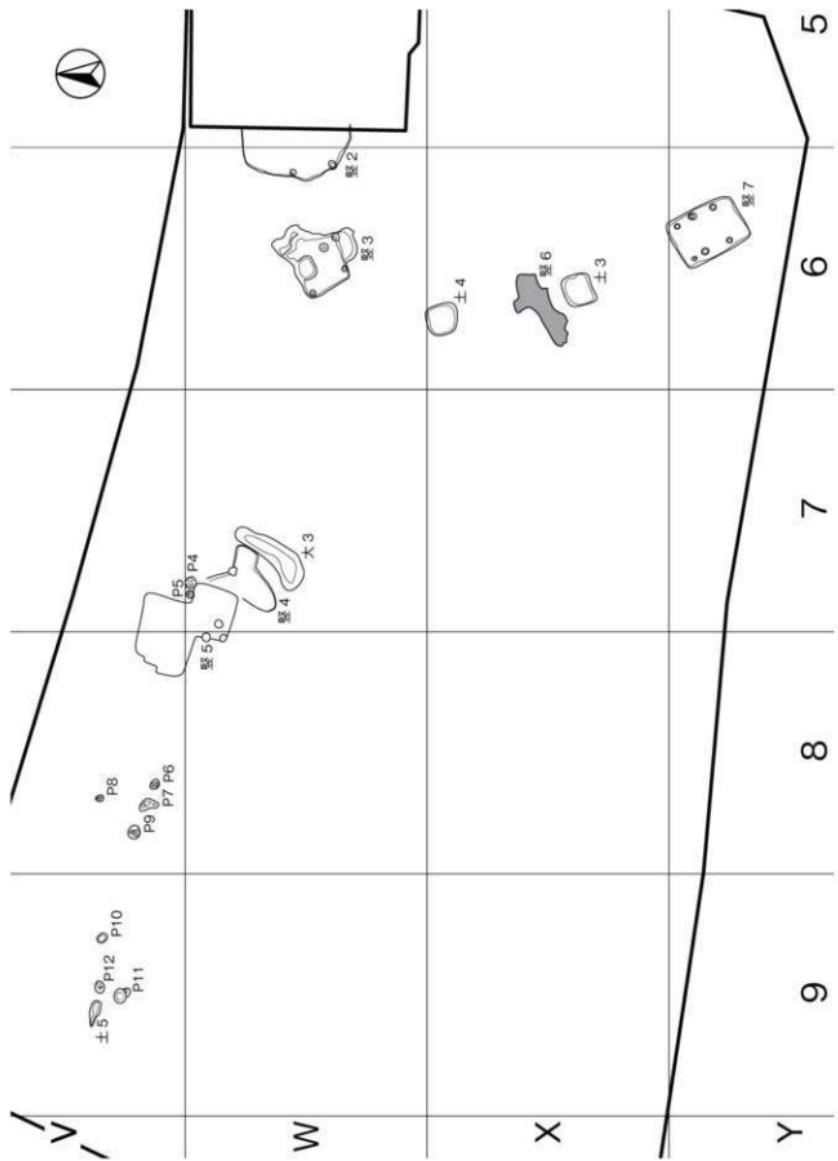
遺物の分類については、土器、土製品、土師器、須恵器、石器とした。さらに土器は、壺形土器、瓶形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、堆形土器、蓋類と分類した。



第6図 弥生・古墳時代検出遺構配置図(1)

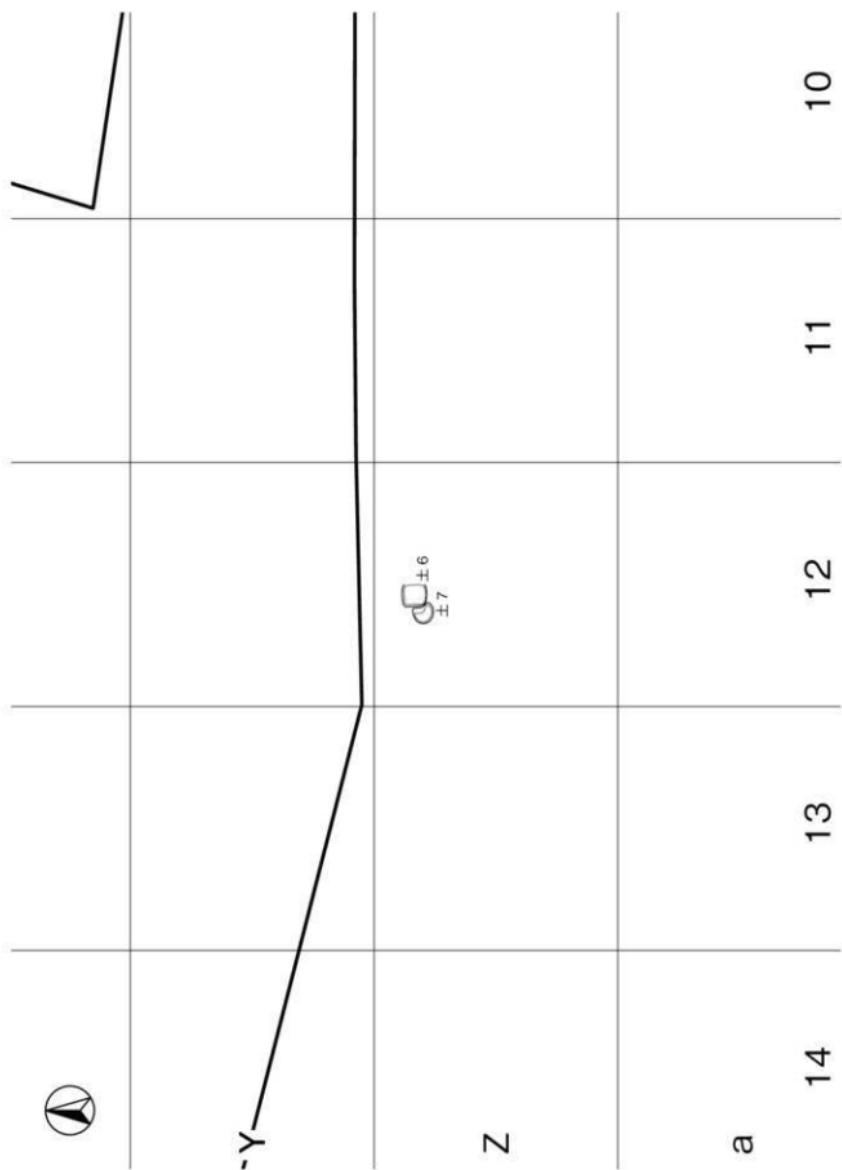


第7図 弥生・古墳時代検出構造配置図(2)



第8図 勝生・古墳時代検出遺構配置図 (3)

第9図 弥生・古墳時代後出遺構配置図 (4)



第2節 遺構

該期の遺構はU～Z-1～12区の広い範囲で検出した。

層序で示したとおり、W～Y-6・7区はVI～VII層の遺構検出が困難なため、X層上面を検出面とした。

1 穫穴住居跡

(1) 1号竪穴住居跡 (第10図)

U-3・4区のVII層上面で、東側約3/4を検出した。

調査は、中央に埋土観察ベルトを設定して中央部分から床面を確認していく。

最終的なプランである残存部の長径は約4.2m、短径は約3.5mと住居跡としてはやや大きめである。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約25cmで、硬化面の厚さは約14cmである。硬化面は中央部が最も厚く硬化している。埋土はVI層の黒褐色砂質土であり、床面の中央部に多量の炭化物集中域を有する。また、その南方には約1m程度の土坑があり、炭化物集中域と

の関連性については、今後検討していく必要がある。

多数検出された柱穴と思われるビットは、確定が困難なため全て掲載することにした。

遺構に伴う該期の遺物は確認できなかった。

(2) 2号竪穴住居跡 (第11図)

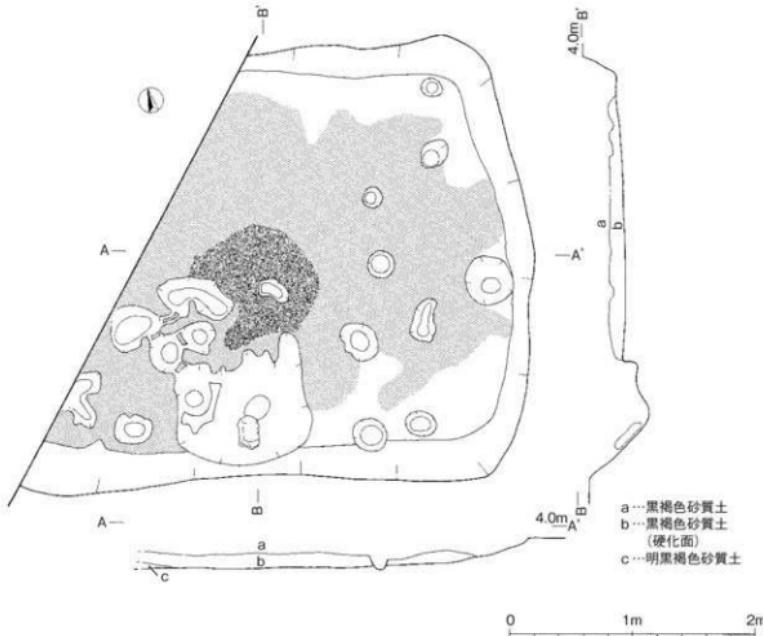
W-5・6区のX層上面で、西側半分を検出した。形状は、円形に近くなると思われる。

最終的なプランである残存部の長径は約4.5m、短径は不明で住居跡としてはやや大きめである。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約15cmである。

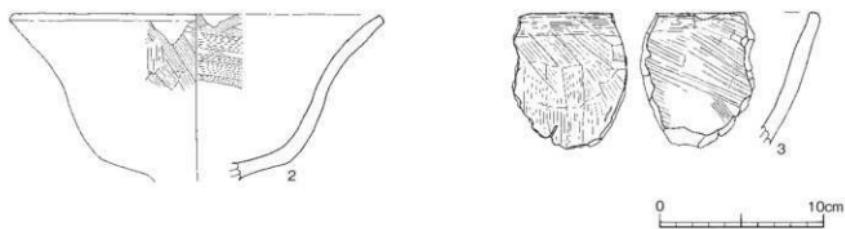
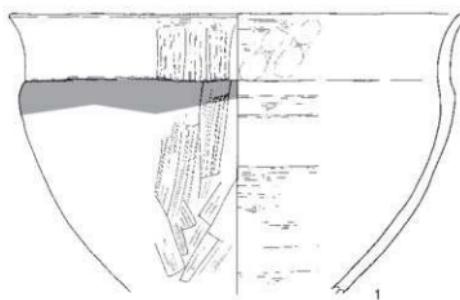
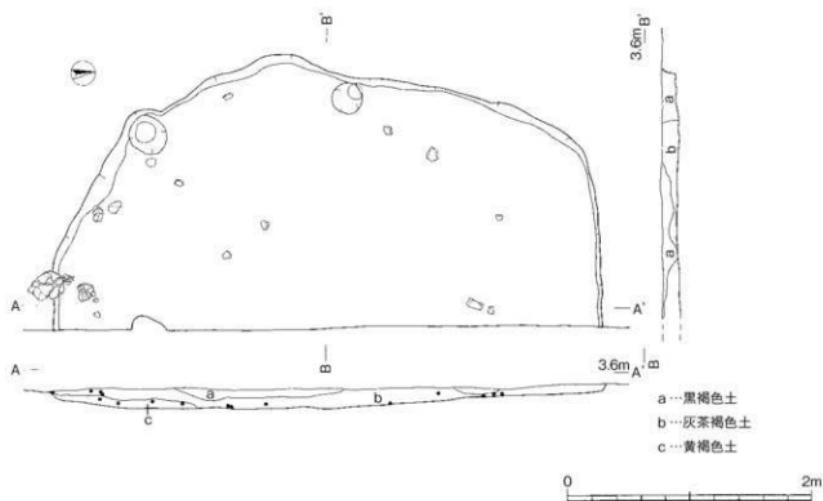
遺物は変形土器、鉢形土器の小破片が21点出土し、その中で3点を掲載した。

2号竪穴住居跡内出土遺物 (第11図1～3)

1は変形土器の口縁部から胴部で、口縁部が緩やかなS字を呈し、胴部上位にススが付着している。2は鉢形土器の口縁部から底部であり、胴部から底部にかけて屈曲している。3は変形土器の口縁部である。



第10図 1号竪穴住居跡実測図



第11図 2号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

(3) 3号竪穴住居跡（第12図）

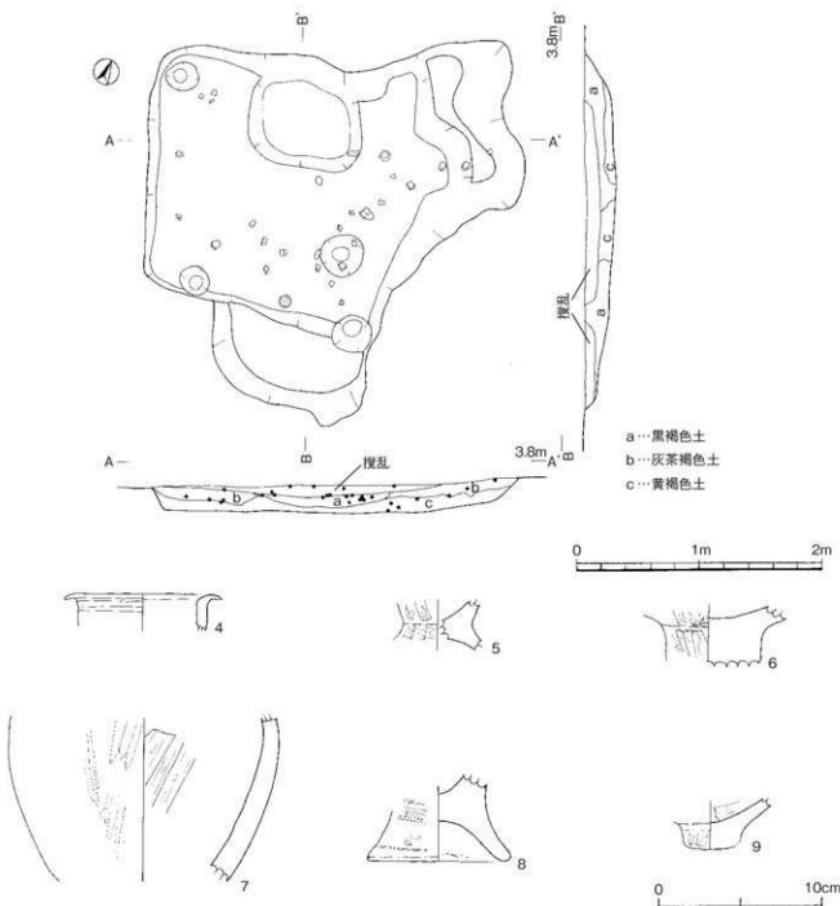
W - 6区のX層上面で検出した。

最終的なプランは約3m×28mの長方形を呈し、床面までの最深部は約24cmである。また、南側に大きめの張り出しへをもつ。

遺物は壺形土器、壺形土器の小破片が31点出土し、その中で6点を掲載した。

3号竪穴住居跡内出土遺物（第12図4～9）

4は、壺形土器の口縁部で、口縁端部が逆L字状になるもので断面が丸みを帯びるものである。径は約10cmで小型である。5・6は壺形土器の脚部で、7は胴部である。8・9は底部で、8は壺形土器の高台、9は平底である。



第12図 3号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

(4) 4号竪穴住居跡（第13図）

W-7区のX層上面で、東側1/4を検出した。5号竪穴住居跡に切られるように検出されたため、比較的古いものと判断できるが、明確な時期差は不明である。

形状は、東部に張り出しをもつ方形である。規模については、残存部が少ないため不明である。硬化面までの深さは20cmで、張り出し部はさらに5cmほど下がる。

埋土は、Vb層の明茶褐色粘質土とVI層の黒褐色砂質土である。張り出し部の中央には土坑が検出され、埋土の最下部にはVb層が硬化した土が見られる。

また、削平された部分に4・5号ピットが検出されたが、その関連性については後述する。

遺物は27点出土し、古墳時代のものと思われるが、いずれも小片であったため掲載しなかった。

(5) 5号竪穴住居跡（第14図）

V・W-7・8区のX層上面で、4号竪穴住居跡を切って検出している。

最終的なプランで確認すると、2軒の住居跡が重なったように見える。埋土状況によってそれらの関係を判断

すると、北部の埋土はVb層の明茶褐色粘質土とVI層の黒褐色砂質土が混在しているが、南部の埋土はVb層の明茶褐色粘質土である。時期差について明確な判断は困難であるが、用途は異なると考えられる。

ピットは北西部において7基検出した。これらは内側に規則的な配列をもつため、柱穴跡であると考えられる。また、中央には円形の土坑が2基、東部には焼土跡を伴う長方形の土坑が見られる。南部では焼土跡が1基検出されたが、ピット等は見られなかった。

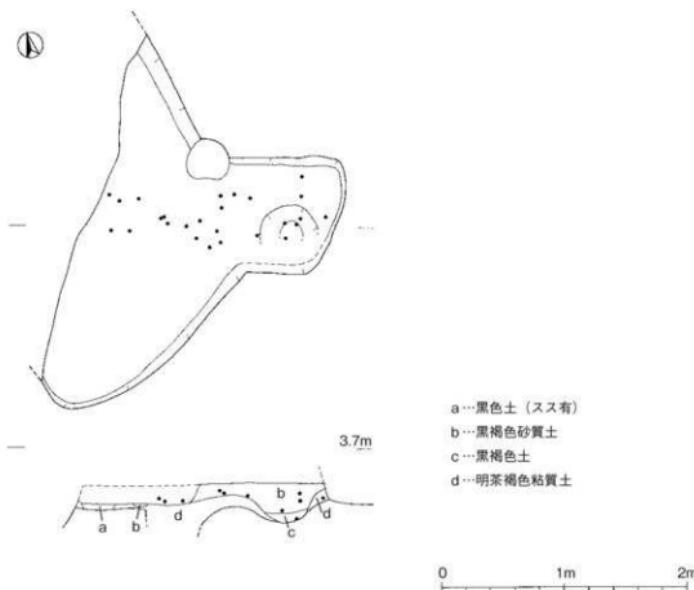
北方部の長径は約3.2m、短径は約2.3mを測り、硬化面までの深さは最深で約23cmである。南部の長径は約2.1m、短径は約1.9mであり、硬化面は検出されなかつた。それぞれ住居跡としてはやや小さめである。

また、遺構に伴う同時期の遺物は確認できなかつた。

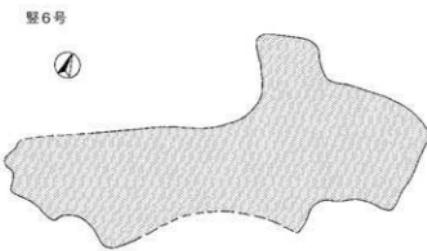
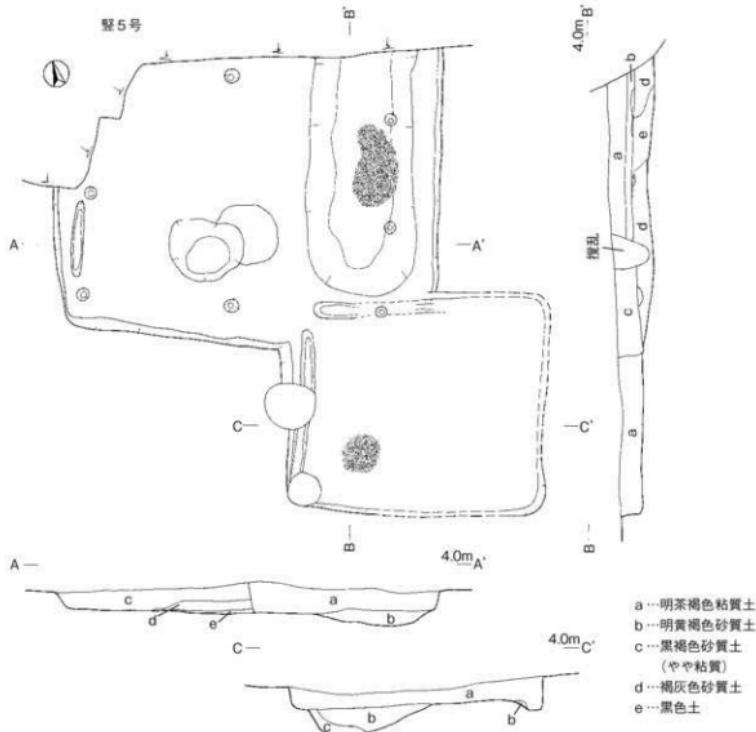
(6) 6号竪穴住居跡（第14図）

X-6区のX層上面で検出したが、上部は削平されており硬化面のみであったため、形状等は不明である。

また、遺構の周辺やそれに伴う遺物も出土しなかつた。



第13図 4号竪穴住居跡実測図



0 1m 2m

第14図 5・6号堅穴住居跡実測図

(7) 7号竪穴住居跡（第15図）

X・Y-6区のX層上面で検出した。

最終的なプランは、長径約3m、短径約2.2mの隅丸長方形を呈する。深さは、検出面から最深部で約20cm程度である。

埋土は、Vb層の明茶褐色粘質土と、VI層の黒褐色砂質土とそれらの混在土の3つに分層できる。炭化物等の

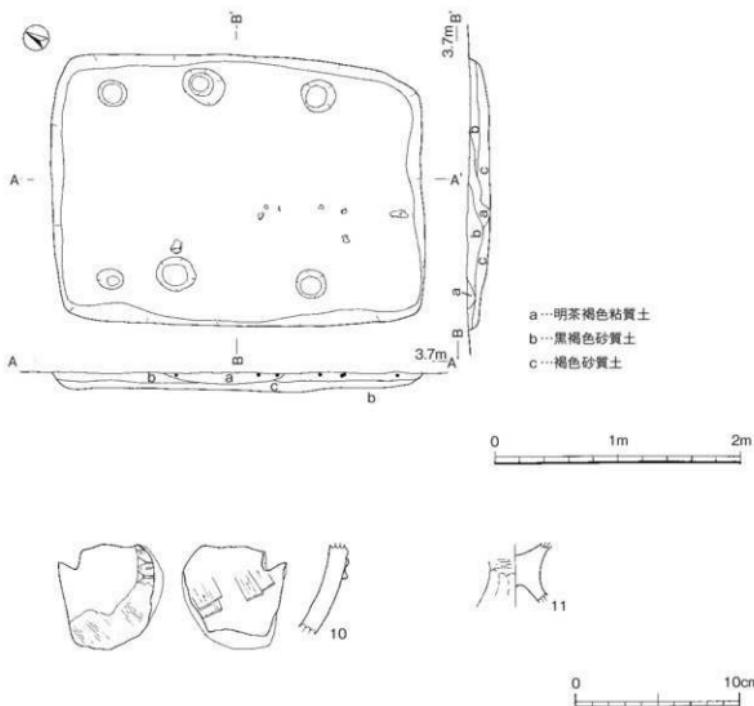
混入は見られない。

ピットは、6基検出した。内側に規則的に配列されており、径が約30cmである4基は主柱穴跡と考えられる。

遺物は土器片が7点と礫片が1点出土し、壺形土器の小片を2点のみ掲載した。

7号竪穴住居跡内出土遺物（第15図10・11）

10は壺形土器の胴部片で突帯を有し、11は脚部である。



第15図 7号竪穴住居跡及び出土遺物実測図

2 大型土坑

(1) 1号大型土坑 (第16図)

X・Y-2区のⅤ層上面から検出した。

径が約1.9mの隅丸方形で、遺構内に土坑が2基みられる。埋土は、4つに分層できる。硬化面は見られなかった。

遺物は、古墳時代の変形土器、壺形土器の小片が出土した。その中で形状が明確なものを3点掲載した。

1号大型土坑内出土遺物 (第16図12~14)

12は壺形土器の底部付近で、径は不明であるがかなり大型のものと思われる。13・14は胴部片で、刻みを施した突帯を有する。

(2) 2号大型土坑 (第16図)

Y-4区のⅤ層上面から検出した。

径が約2mの円形を呈すると思われ、2段堀りになってしまっており、最深部は約1.5mもある。東側半分を残存部とする。

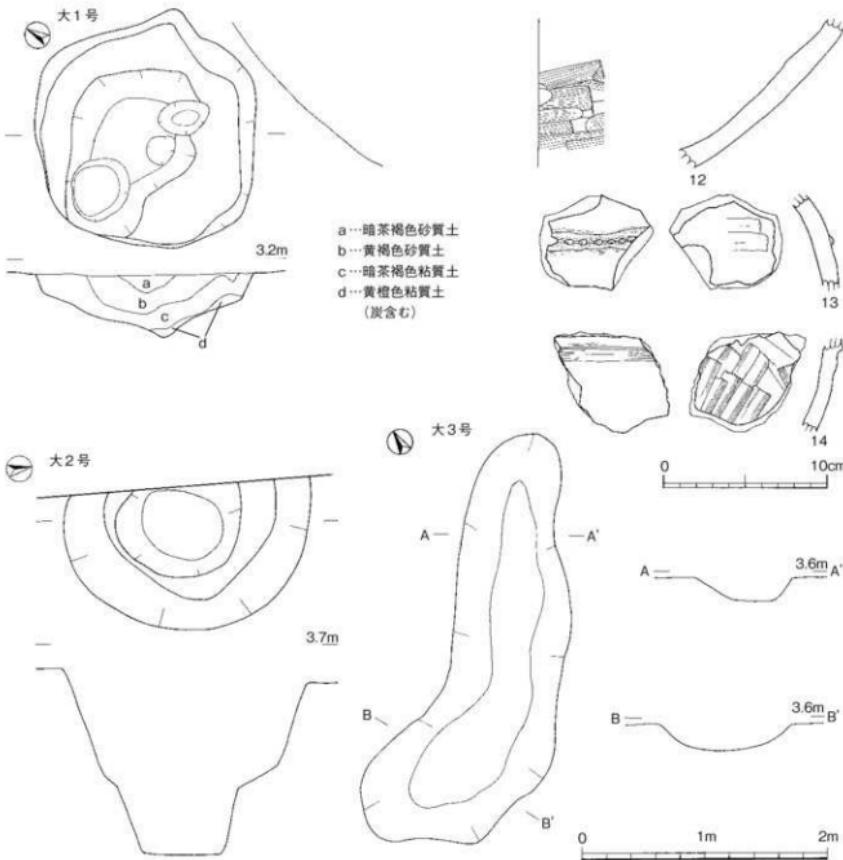
遺構に伴う遺物は遺構周辺を含めて出土せず、また、掘り込みが深く硬化面も見られないことから、その用途については不明である。

(3) 3号大型土坑 (第16図)

W-7区のX層上面から検出した。

長径約3.4m、短径約1.1mの長梢円形で、検出面からの深さは約20cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第16図 1～3号大型土坑及び出土遺物実測図

3 土坑

該期の土坑は、7基検出した。

(1) 1・2号土坑（第17図）

1・2号土坑はV-I区のⅤ層上面から検出され、遺構に伴う遺物は出土しなかった。

1号土坑は東側は調査区外のため、西側半分のみ調査した。残存部の径は約90cmで、深さは約12cmと浅い。

2号土坑は径が約1.4mの円形で、検出面からの深さは約30cmである。

(2) 3・4号土坑（第18・19図）

3・4号土坑はX-6区のX層上面で検出した。

3号は長径約1.3m、短径約1.2mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約15cmである。3号土坑からは、古墳時代の壺形土器片が7点出土し、その内2点を掲載した。

4号土坑は径が約1.2mの隅丸方形を呈し、掘り込みの深さが約5cmと浅い。遺構に伴う遺物は、壺形土器の小片が3点出土し、1点のみ掲載した。

3・4号土坑内出土遺物

3号土坑内出土遺物（第18図15・16）

15は壺形土器の胴部片で刻目突帯を有す。16は、同じく刻目突帯を有す壺形土器の胴部から底部で、底面は平底である。

4号土坑内出土遺物（第19図17）

17は壺形土器の胴部片である。

(3) 5号土坑（第19図）

5号土坑はV-9区のⅤ層上面から検出した。

長径約1.1m、短径約43cmの楕円形を呈し、検出面からの最深部は約25cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

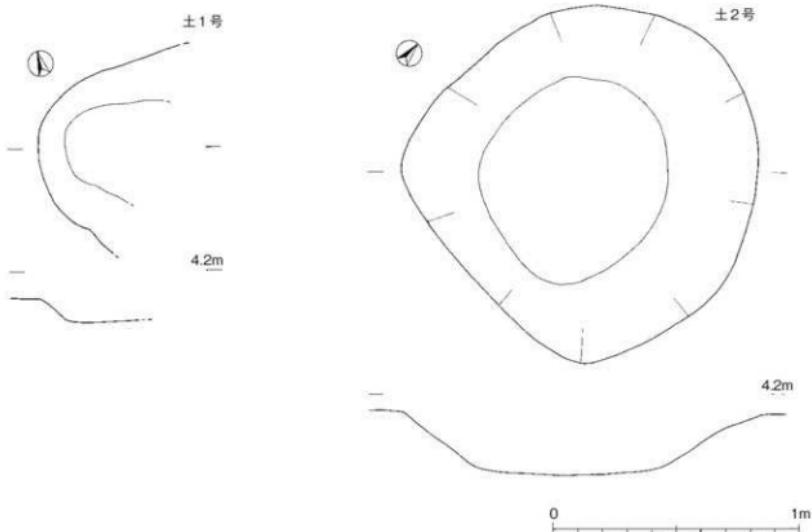
(4) 6・7号土坑（第19図）

6・7号土坑はZ-12区のⅦ層上面から検出した。

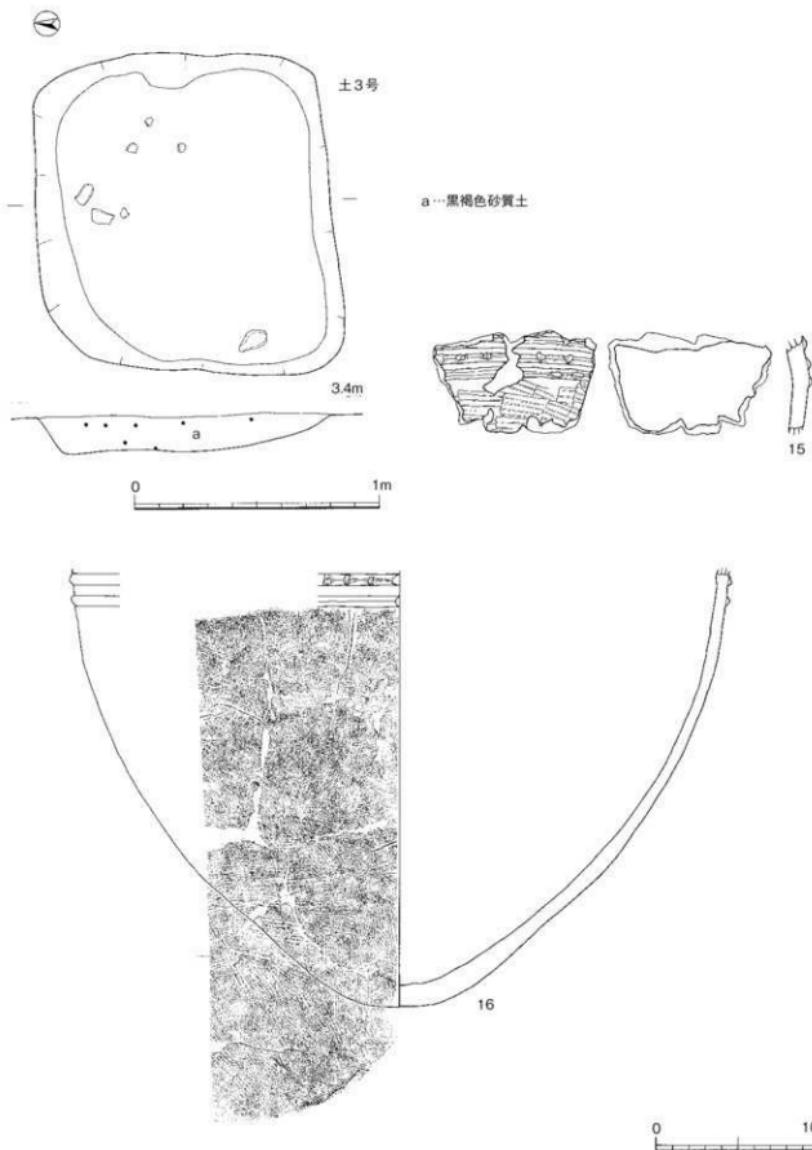
6号土坑は、径が約1mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約15cmである。

7号土坑は長径85cm、短径約65cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約45cmである。

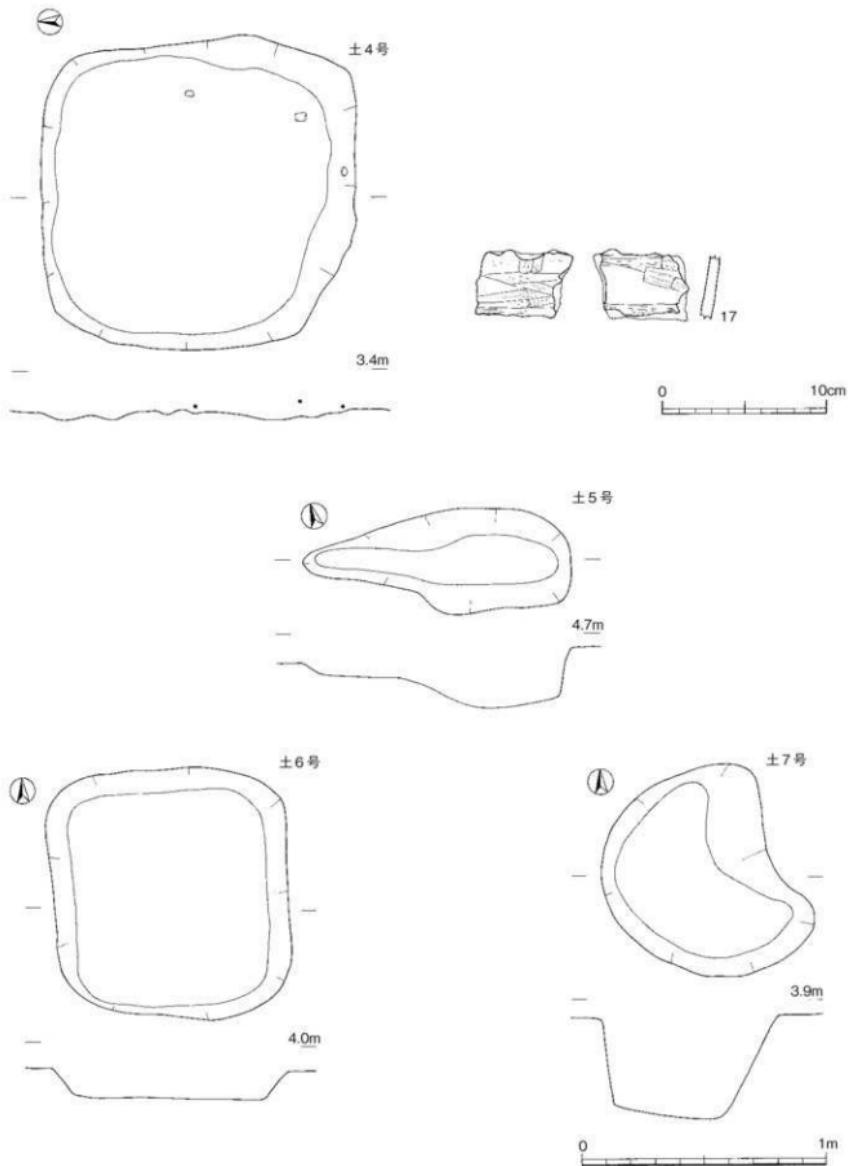
いずれも、遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第17図 1・2号土坑実測図



第18図 3号土坑及び出土遺物実測図



第19図 4～7号土坑及び出土遺物実測図

4 ピット

該期のピットは、12基検出した。

(1) 1号ピット（第20図）

1号ピットはV-1区のⅤ層上面で、1・2号土坑と並列して検出された。径が約25cmの円形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。

遺構に伴う遺物は、古墳時代の壺形土器片が1点出土した。

1号ピット内出土遺物（第20図18）

18は、壺形土器の口縁部から頸部である。径は約21cmで、口縁部は大きく外向している。

(2) 2号ピット（第20図）

2号ピットはX-2区のⅤ層で検出された。径が約37cmの円形を呈し、検出面からの深さは約63cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(3) 3号ピット（第21図）

3号ピットはZ-3区のⅤ層で検出された。長径約40cm、短径約30cmの不整規円形を呈し、検出面からの深さは約23cmである。

埋土の上部では、古墳時代の鉢形土器の完形品が横向きに置かれた状態で出土した。

3号ピット内出土遺物（第21図19）

19は径が約17cmで、器高が約11cmの古墳時代の鉢形土器である。内外面にハケメを施し、仕上がりはやや粗い。他には遺物は出土しなかった。埋土の床着ではないことと置かれた状態が直立ではないことから、意圖的に埋納したかどうかは不明である。

(4) 4・5号ピット（第21図）

4・5号ピットは、W-7区のX層上面における4号竪穴住跡の削平部分と思われる場所で検出した。

4号ピットは径が約45cmの円形で、検出面からの深さは53cmである。

5号ピットは径が約32cmの円形で、検出面からの深さは約40cmである。

ほぼ同じ形状であることと、遺構に伴う遺物は出土しなかったことから、4号竪穴住跡の柱穴跡の可能性も多い。また、大きさでは4号が5号よりもやや大きめであることから、4号が主柱穴であると考えられる。

(5) 6~12号ピット（第21図）

6~12号ピットは、V-8・9区に集中し、Ⅴ層上面で検出された。

いずれも遺構に伴う遺物は出土しなかった。

6号ピットは長径約50cm、短径約30cm、検出面からの深さは約30cmの楕円形を呈する。

7号ピットは長径約82cm、短径約40cm、検出面からの深さは約54cmの楕円形を呈する。北部の掘り込みが深く、南部へ向かって上がってきている。

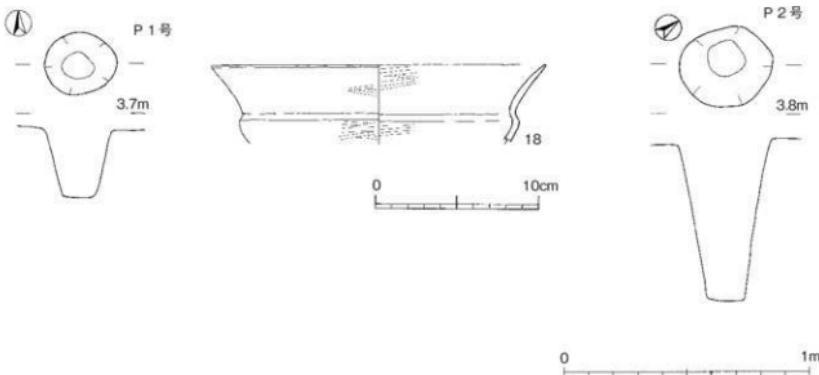
8号ピットは長径約33cm、短径約27cm、検出面からの深さは約22cmの小型楕円形を呈する。掘り込みが2か所ある。

9号ピットは径約55cmのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。

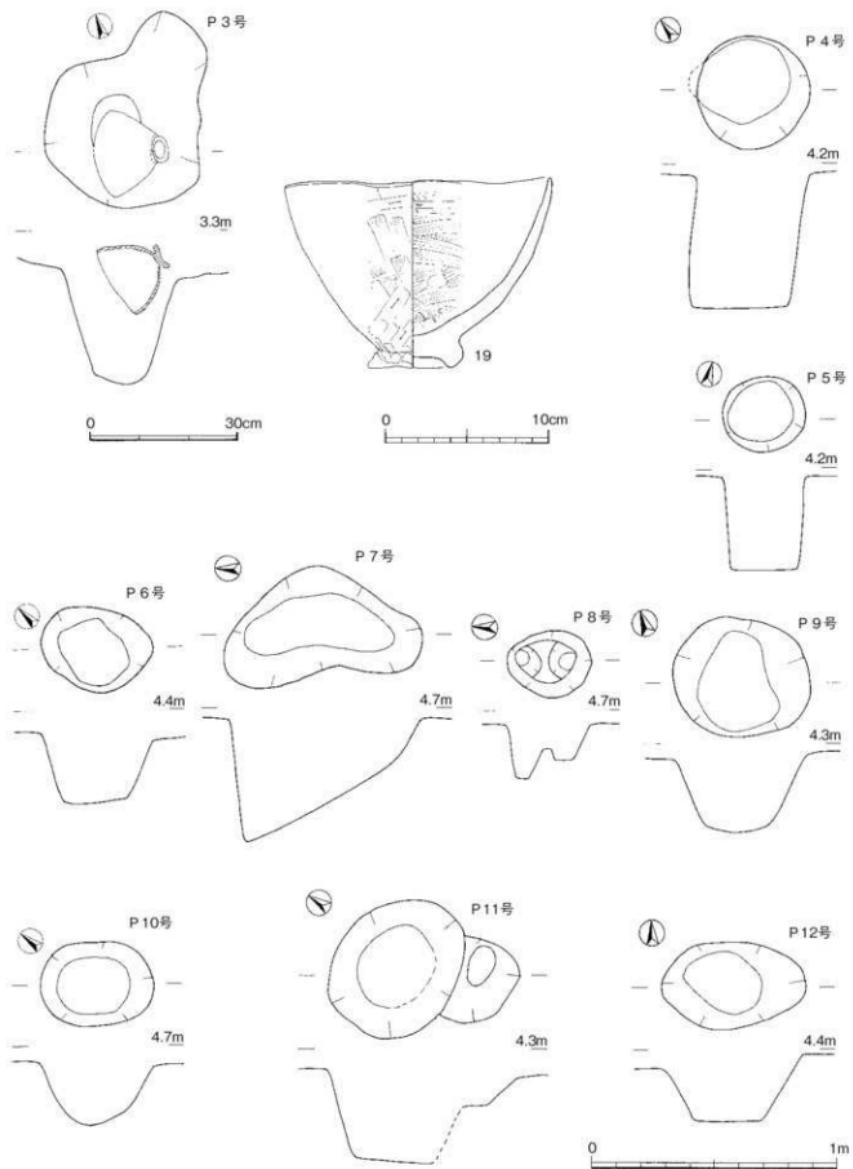
10号ピットは長径約46cm、短径約35cm、検出面からの深さは約25cmの楕円形を呈する。

11号ピットは2つの楕円形を呈するピットが重なっており、北側のピットが南側のピットを切っている。北側のピットの長径は約60cm、短径約50cm、検出面からの深さは約45cmである。南側のピットは深さ約12cmである。

12号ピットは長径約60cm、短径約35cm、検出面からの深さは約28cmの楕円形を呈する。



第20図 1・2号ピット及び出土遺物実測図



第21図 3~12号ピット及び出土遺物実測図

第3節 遺物

包含層からは、弥生時代前期から古墳時代後期の遺物が出土している。

V層を中心として、大量の遺物が出土した。そのほとんどが小破片であり、これらに問合しては区一括で取り上げを行った。完形に近いものや比較的大きい破片については、番号を付けて取り上げを実施した。

1 土器

(1) 麒形土器

麧形土器は、口縁部、胴部、底部合わせて371点を図化した。形式上I～IX類に分類した。I～V類は小片が多く、口縁部断面の形状で判断し分類した。また形式不明な胴部、底部をそれぞれX、XI類とした。

ア I類 (第22図20・21)

口縁部断面が逆L字状で、刻目突帯が貼り付けられたものである。

20は口縁端部に連続刺突文を施し、断面は四角を呈する。21も口縁端部に連続刺突文を施す。断面は三角で、輪積みの跡が明確に残る。

イ II類 (第22図22～39)

口縁部断面が逆L字、もしくはくの字状で、口縁端部に浅い沈線を施したものもある。

22～25は口縁端部に浅い沈線を施し、口縁部が内弯している。22は器壁が薄く、口唇部に浅くて細い沈線を縱位に施す。23～25は口縁端部の断面が四角を呈し器壁は厚い。

26～28は口唇部が平らで、口縁部が直立している。

29～31は口縁部がくの字を呈しており、口唇部に浅い沈線を施している。31は口径約22cmを測り、外面に丁寧なナデ調整を施す。

32～39は口縁部断面が三角を呈している。32～36は、口縁端部に浅い沈線を施す。33は口唇部に浅くて細い沈線を施す。35は口径約24cmで、口唇部にやや深い沈線を施す。37～39は口唇部が尖っている。

ウ III類 (第22図40～42)

口唇部に玉縁を有する。

40は口縁部が直立しており、口径16.8cmを測る。41・42は口縁部がやや外反しており、玉縁下位に丁寧なナデ調整を施す。

エ IV類 (第23図43～61)

口縁部断面が逆L字状、またはくの字を呈しており、口縁部内側への張り出しが強い。口縁端部の断面は四角で浅い沈線を施すものと、沈線を施さない丸いものがある。

43～47は口唇部がやや丸みを帯び、内側の張り出しが四角形を呈する。口縁部は内弯している。46の口径は約31.5cmを測り、口唇部下位に管状工具による連点刺突を施す。

48～53は口唇部が平らで、内側の張り出しが三角形を呈する。48の口径は約29cmで、外面の口縁部に丁寧なナデ調整を施している。50の口径は約24cmで、外面にナデ調整を施す。52は外面に丁寧なナデ調整を施している。

54～59は口唇部がやや凹んでおり、内側の張り出しが三角形を呈する。60・61は、口縁部がやや外向している。60は、口径が約28cmを測り、内側の張り出しが尖っている。

オ V類 (第24図62～86)

口縁部内側への張り出しが弱く、口縁端部の断面は、丸いものと三角のものがある。

62～66は、口縁部断面が逆L字状を呈する。62・63は口唇部がやや丸く膨らみ、64は平らである。65・66は、口唇部がやや凹んでいる。65は口径約27cmを測り、外面に丁寧なナデ調整を施す。66は口径約28cmを測り、口縁端部が三角を呈している。

67～82は口縁部断面がくの字を呈し、67～79は口唇部がやや凹んでいる。68は口径約27cmを測り、外面にケズリ後ナデ調整を施している。69は外面にナデ調整を施す。70は口径約28cmを測り、外面にケズリ後ナデ調整を施す。72は口径約31cmを測る。74は口径約30cmを測り、外面に丁寧なナデ調整を施している。76は外面ともに丁寧なナデ調整を施している。78は口径約20cmを測る。81は口径約31cmを測り、外面に丁寧なナデ調整を施す。

83～86は口縁下部が欠損している。

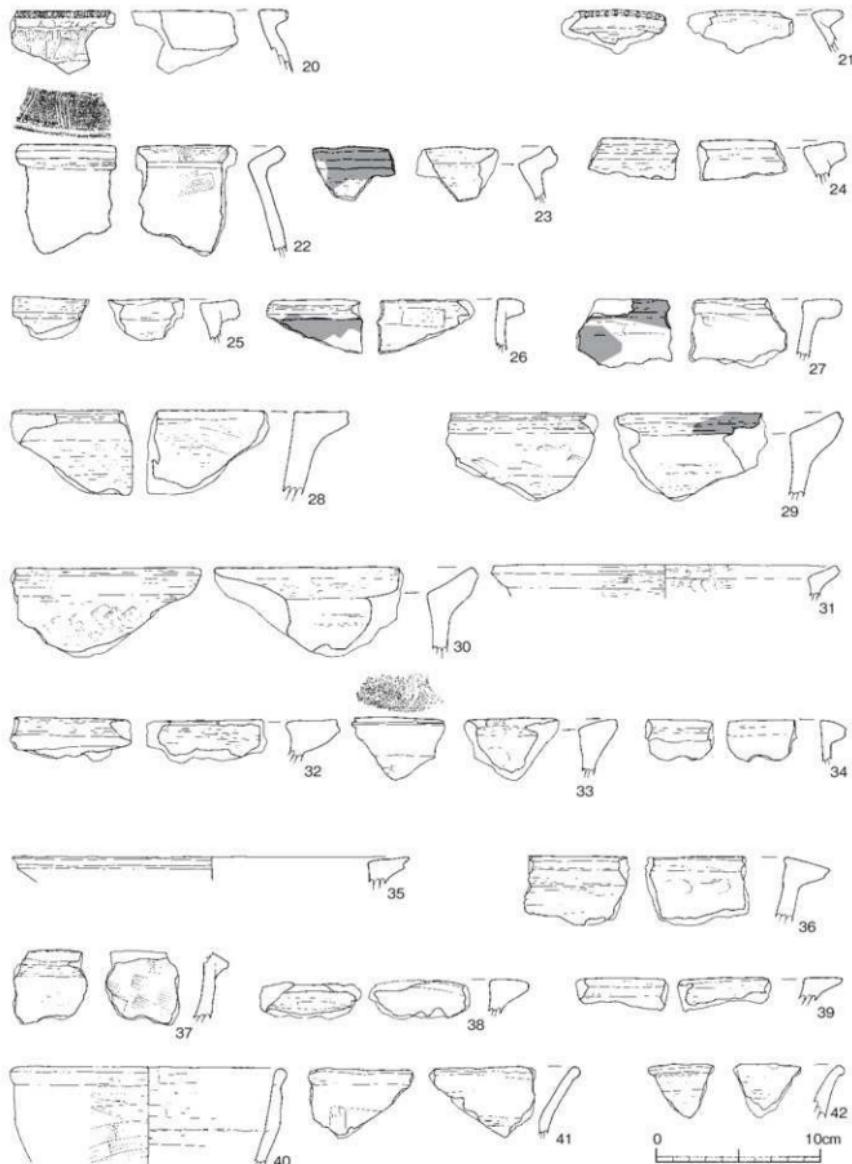
カ VI類 (第25・26図87～106)

口縁部が大きく外反し、胴部との屈曲部内外面に明瞭な稜が残る。

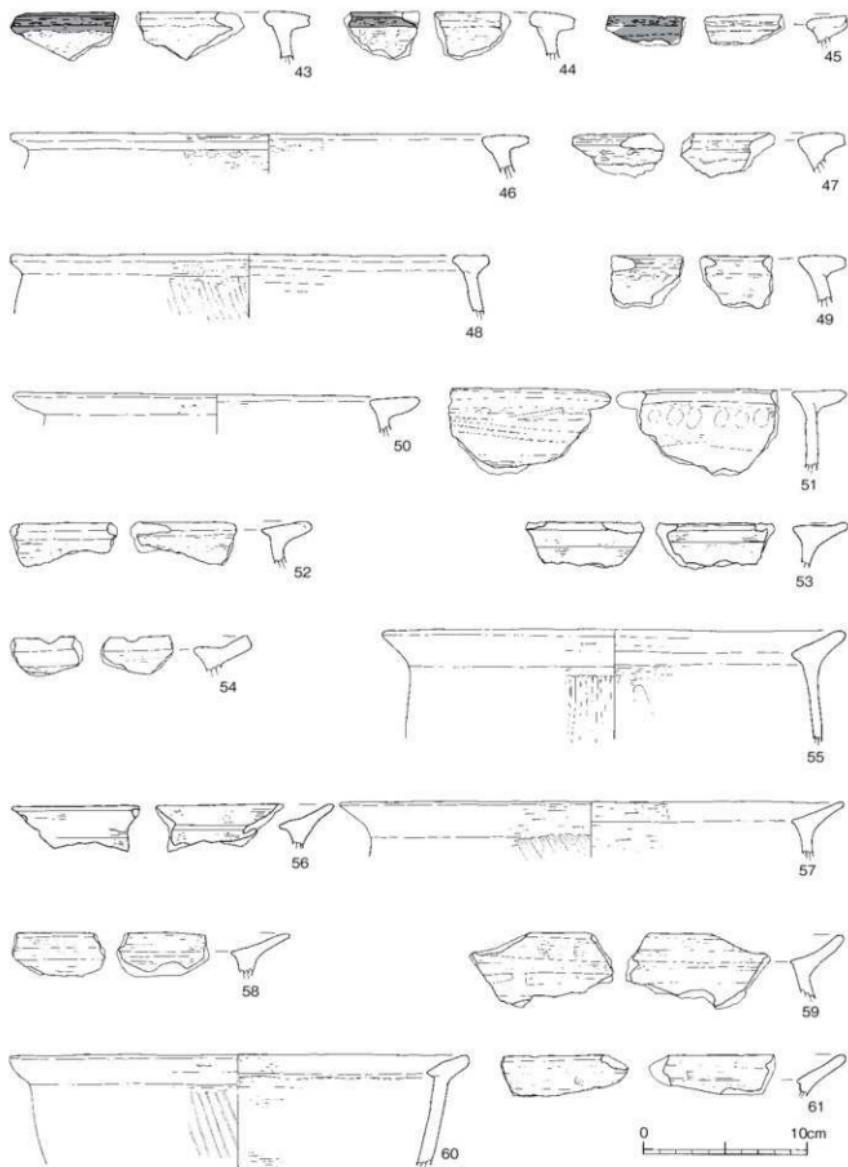
87～95は、肩部から胴部にかけて膨らんでいる。87は口縁端部の断面が四角形を呈する。口径約29cmで器面全体の内外面にハケメ調整を施す。88～95は口縁端部の断面が丸く、口縁部と胴部の屈曲が強い。90は口径約25cmで、器面全体にハケメ調整を施している。91～95は口縁部と肩部の屈曲がやや弱い。91は口径約21cmで、器面全体にハケメ調整を施している。92は口径約23cmで口縁部の形成が粗い。

96～103は、肩部から胴部にかけてやや膨らんでいる。96・97は口縁端部の断面が四角形を呈し、口縁部と胴部の屈曲が強く、肩部の器壁が厚い。98～103は、口縁端部の断面が丸く、肩部の器壁は薄い。100は口径約22cmを測り、外面にハケメ調整を施す。103は口径約13cmの小型の甕で、粗いケズリ調整を施す。

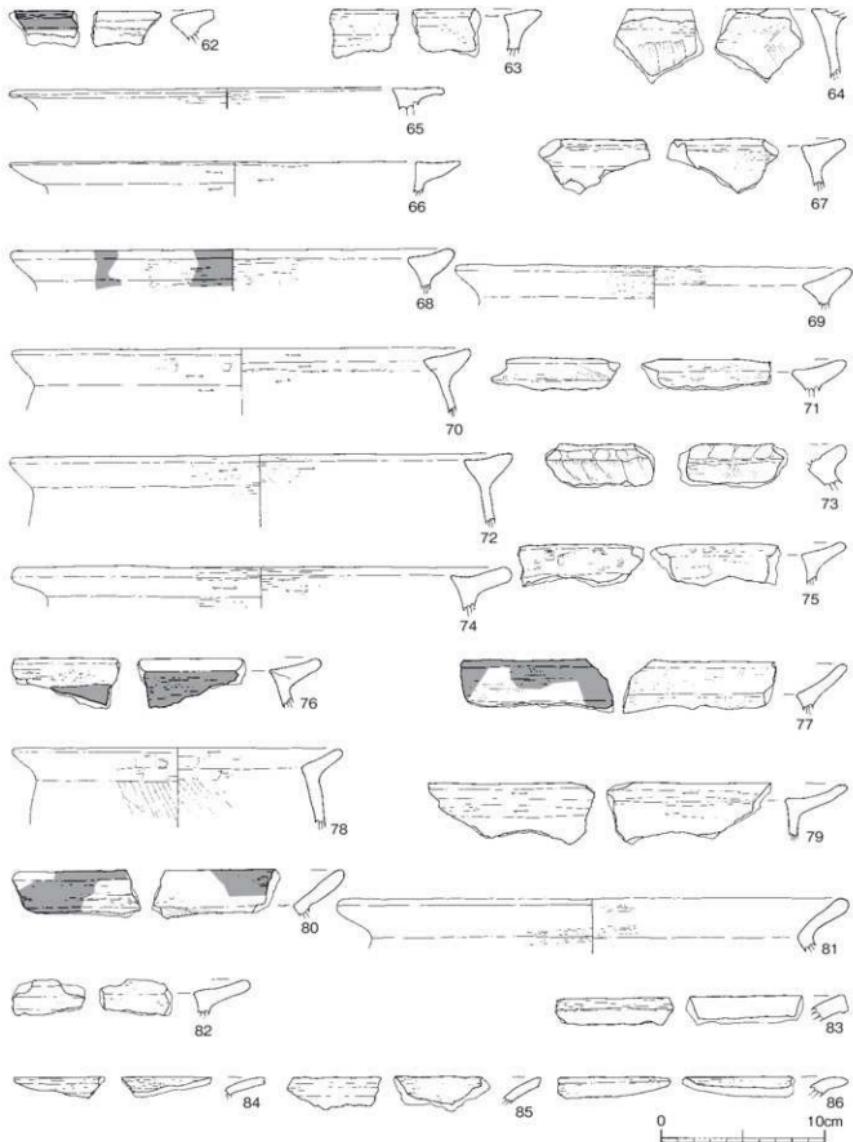
104～106は、口縁端部の断面が四角を呈するが、肩部から胴部にかけての形状が不明である。104は口径約30cmで、外面に丁寧なハケメ調整を施す。



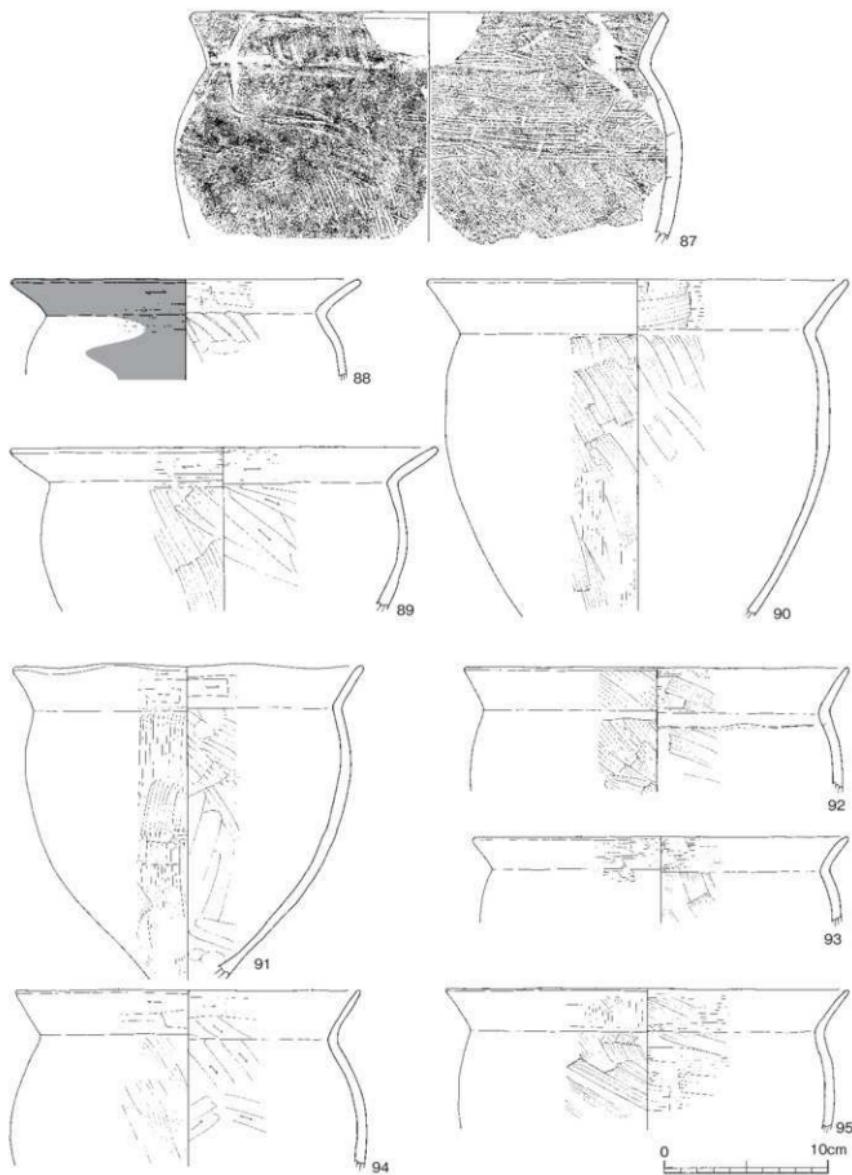
第22図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（1）



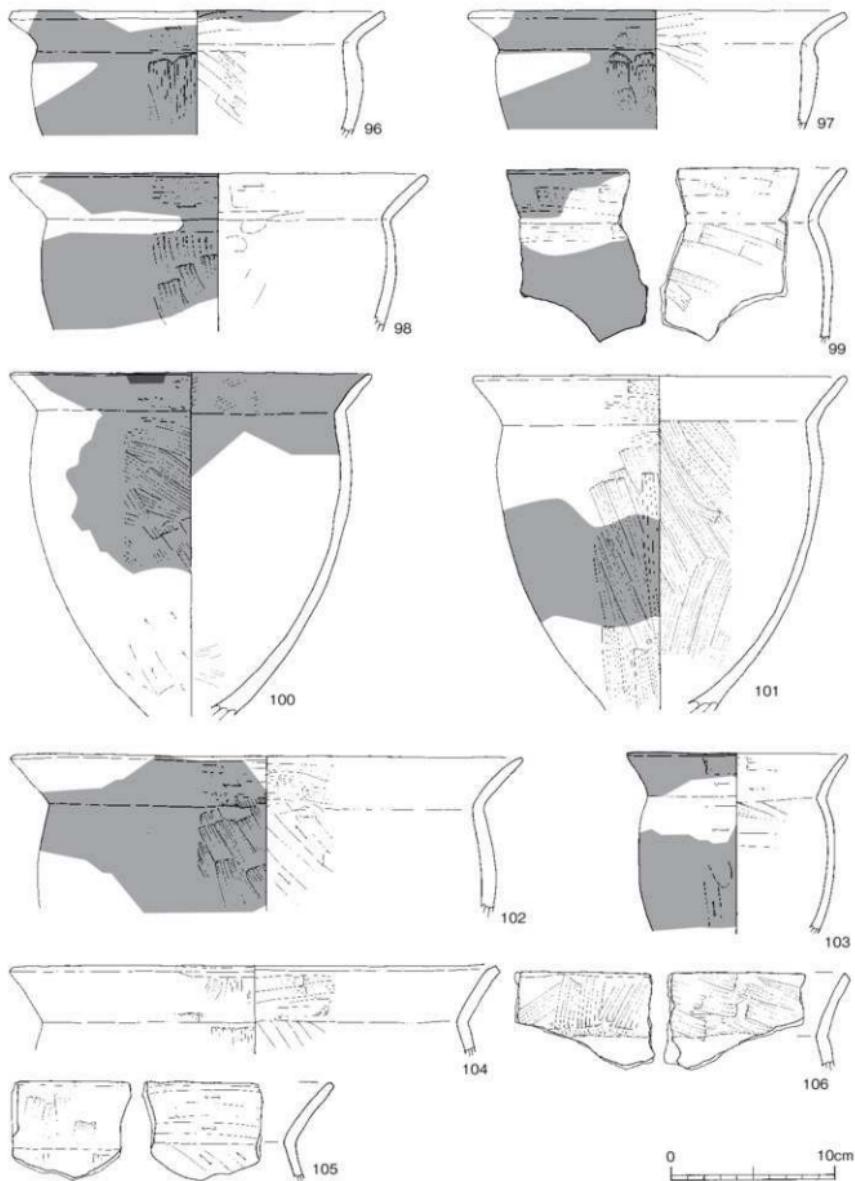
第23図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（2）



第24図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（3）



第25図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（4）



第26図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（5）

キ VE類 (第27~32図107~173)

口縁部が外反し、胴部との屈曲部外面にやや強い稜が見られる。

107~123は、肩部から胴部にかけてやや膨らみをもつものである。

107は口縁端部の断面が四角形を呈し、浅いス線を施す。口径約28cmを測り、口縁部外面にナデ調整、胴部にはケズリ調整を施す。

108~114は口縁端部の断面が四角を呈する。108は口径約29cmで、内外面にハケメ調整を施す。109は口径約16cmで、器高は約18cmと、やや小さめの壺形土器である。外面にケズリ調整を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。110は口径約28cmで、外面は工具によりナデ調整を施している。112は口径約26cmで、外面にハケメ調整を施す。

115~123は、口縁端部の断面が丸い。117は口径約35cmを測り、外面にハケメ調整で仕上げている。118は口径約14cmで、外面に工具によるナデ調整を施す。119は口径約32cmを測り、内外面にハケメ調整を施す。123は口径約23cm、器高約26cmで器面全体にハケメ調整を施す。

124~143は、肩部から胴部にかけての膨らみが弱いものである。

124~130は、口縁端部の断面が四角を呈する。125は口径約27.5cm、器高約30cmで外面にケズリ調整、内面にハケメ調整を施す。127は、口縁部外面を横位にケズリ後ナデ調整を施し、胴部外面はハケメ調整を施す。129は口径約22cmを測り、器面全体にハケメ調整を施す。130は口径約21cm、器高約25cmを測り、胴部外面上位にナデ調整、下位に上方向へケズリ調整を施す。

131~143は、口縁端部の断面が丸いものと尖っているものである。131は口縁部外面を横位に丁寧なナデ調整

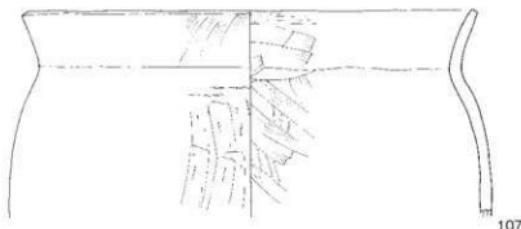
を施し、口縁部下位に上方向へハケメ調整を施す。

132は口径約27cmを測り、屈曲部へ向けて口縁部外面は下方向へ、胴部外面は上方向へハケメ調整を施している。133は口径約20cm、器高約21cmを測り、口縁部外面を横位にナデ調整、胴部をハケメ調整で仕上げている。134は口径約30cmで外面にハケメ調整を施す。135は口径約29cmで外面にハケメ調整を施す。136は、口径が約22cm、137は口径約26cmを測り、口縁部外面を横位にナデ調整、口縁部下位に上方向へハケメ調整を施す。138は口径約22cmを測り、胴部外面に上方向へハケメ調整を施す。内面はケズリ後ナデ調整を施す。139は口径約26cmを測り、外面に上方向へハケメ調整、内面を横位にハケメ調整を施す。140は口径約20cmを測り、口縁部内外面を横位にナデ調整を施し、胴部は丁寧なハケメ調整を施している。141は口径約16cmを測り、外面にハケメ調整を施し、内面にナデ調整を施す。142は口縁部内外面を斜位にハケメ調整を施す。143は内外面に丁寧なナデ調整を施している。

144~156は、胴部との屈曲部が残る口縁部である。

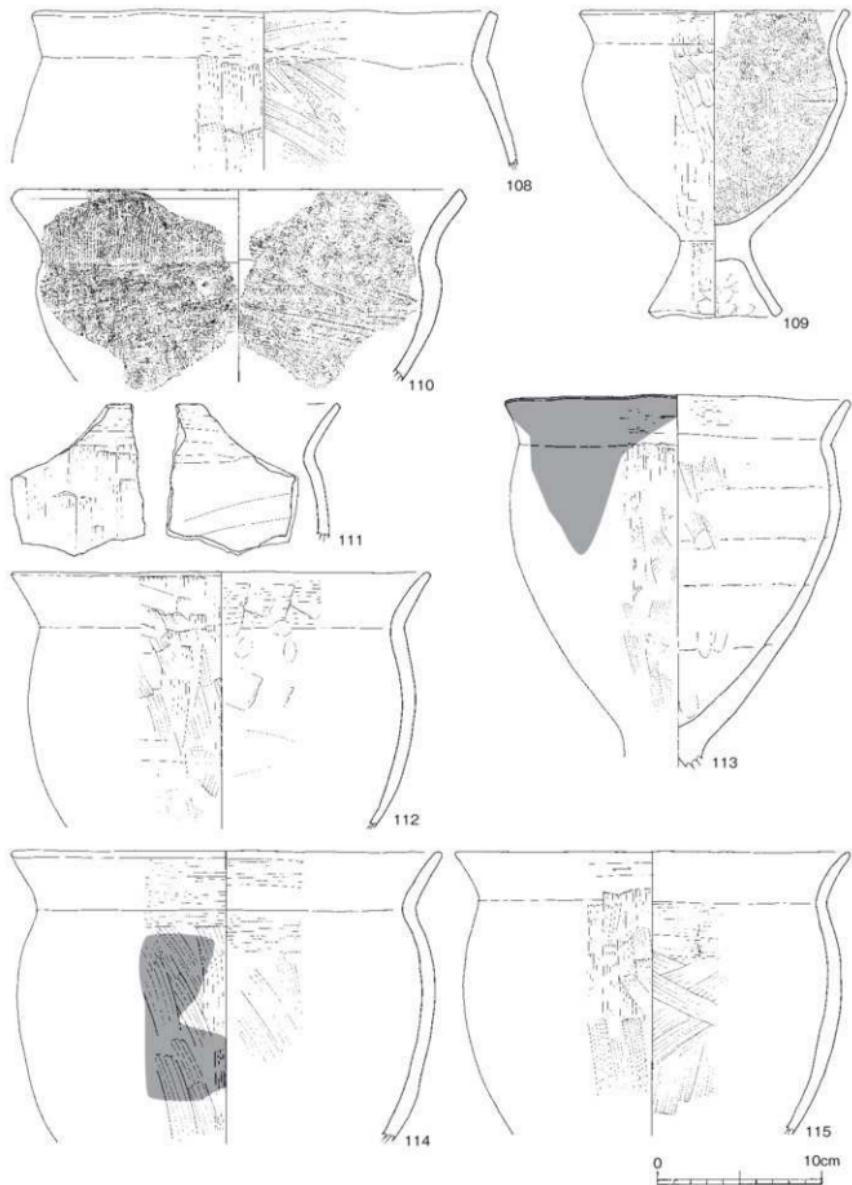
144~152は口縁端部の断面が四角を呈している。144~146は口縁端部に浅いス線を施している。150は屈曲部へ向けて口縁部が下方向へ、胴部が上方向へハケメ調整を施している。153~156は、口縁端部の断面が丸い。153は口径約23cmで、口縁部内外面を横位に、屈曲部下位は上方向へケズリ調整を施している。154は口縁部内面にハケメ調整を施している。

157~173は、口縁部のみである。157~160は口縁端部に浅いス線を施している。162・163は、内外面に工具による丁寧なナデ調整を施している。165は外面を縱位に、内面を横位にハケメ調整を施している。169~171は、内面を横位に丁寧なナデ調整を施す。172は口径約26cmを測り、内外面に丁寧なハケメ調整を施している。

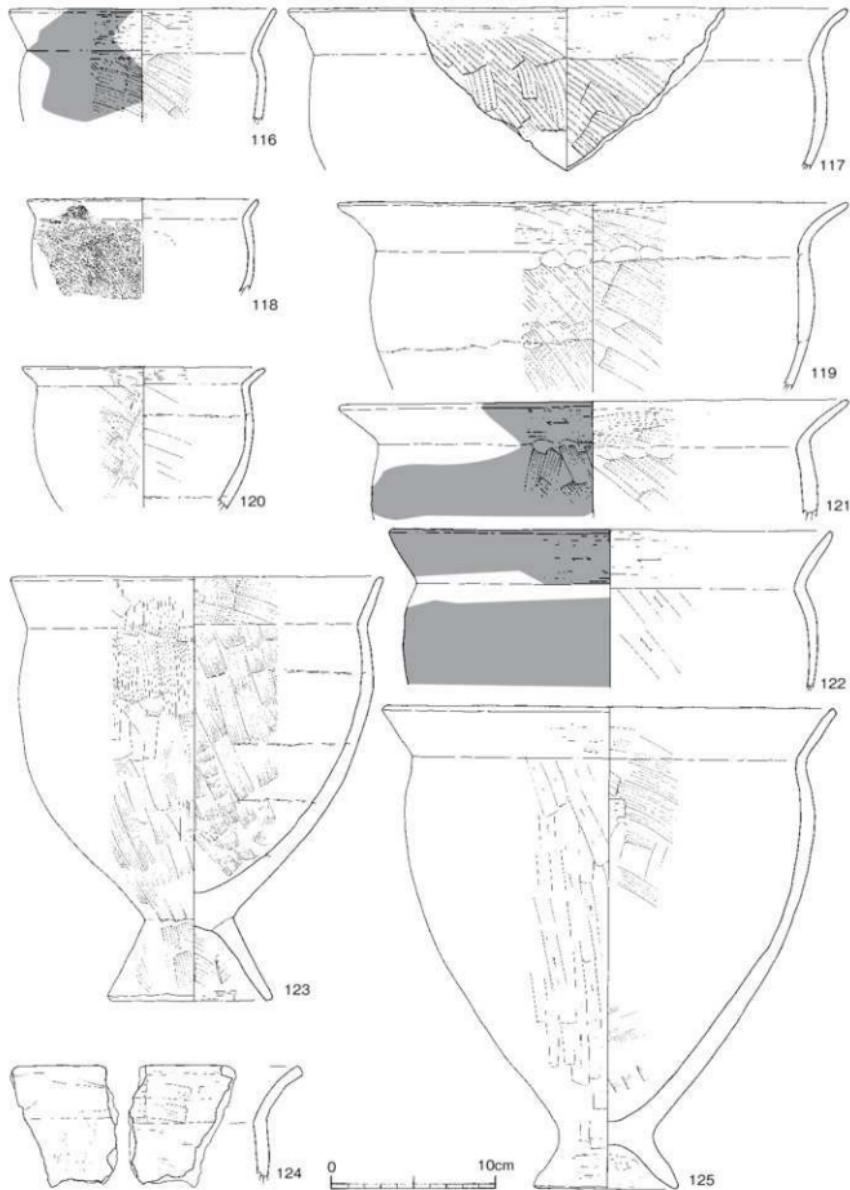


0 10cm

第27図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (6)



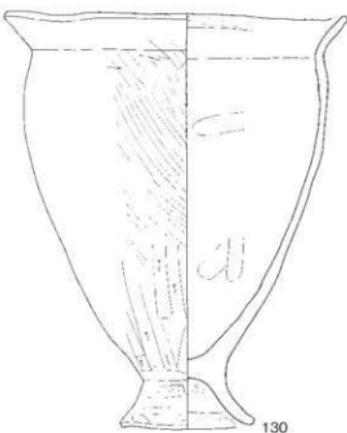
第28図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（7）



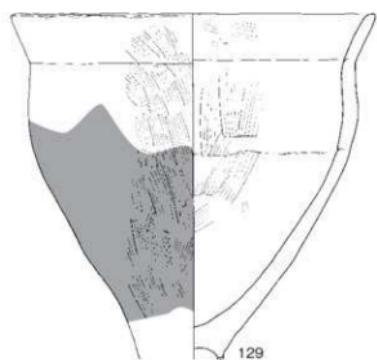
第29図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（8）



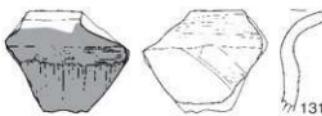
127



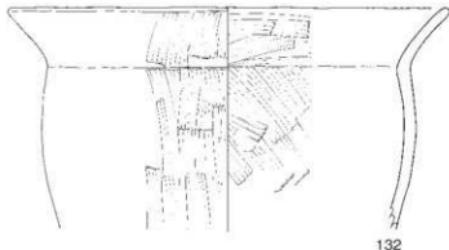
130



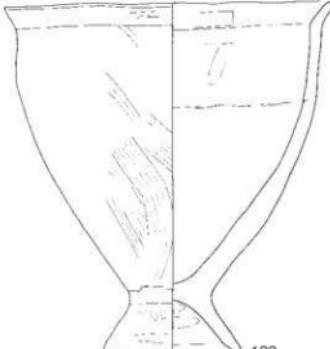
129



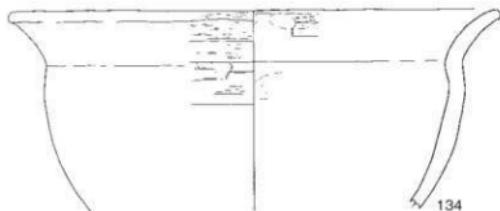
131



132



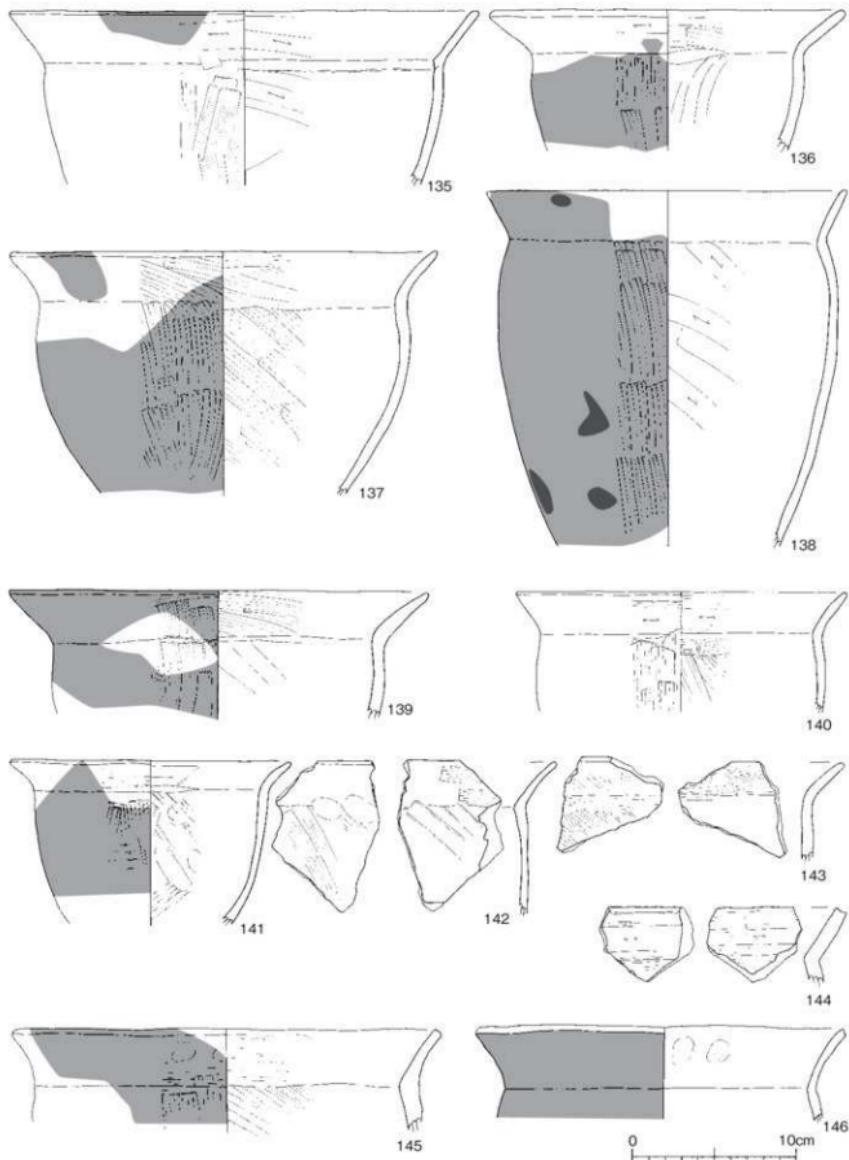
133



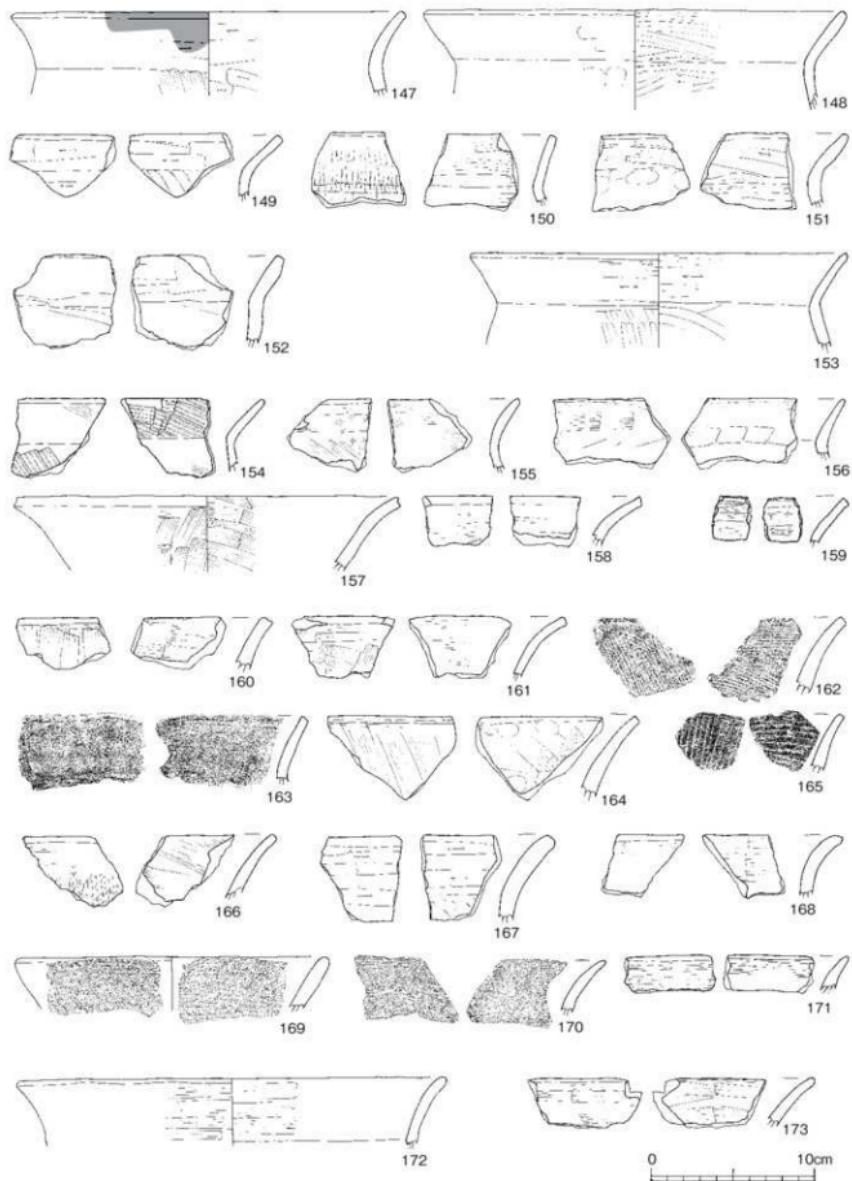
134



第30図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（9）



第31図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (10)



第32図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（11）

ク VIII類 (第33~37図174~253)

口縁部が僅かに外向。もしくは直立するもので、外面屈曲部に弱い後が見られる。

174~178は、口径が約9~10cmの小型の甕である。174は口縁部が短く外反し、胴部内外面に丁寧なハケメ調整を施す。177は口径約10cm、器高が約13.5cmで、口縁部が長く直立する。

179~190は口縁部から胴部にかけての屈曲が弱く、断面が緩いS字を呈する。179・180は口縁端部の断面が四角を呈する。180は口径約3.2cmで、上方向へ丁寧なハケメ調整を施す。181は口径約1.7cmを測り、胴部外面に上方向へハケメ調整を施す。182は口径約2.5cmを測り、器面全体にハケメ調整を施す。183は、口径約1.8cmを測る。186と同様に、指頭圧によって屈曲部を形成している。184は口径約2.6cmを測り、器面全体にハケメ調整を施す。185は口径約2.1cmを測り、外面をケズリによる粗い調整で仕上げている。187は口径約3.1cmを測り、口縁部外面をミガキ調整で仕上げ、胴部外面はハケメ調整を施す。190は口径約1.4cmで、内外面にハケメ調整を施す。

191~202は、口縁部から胴部にかけての屈曲がほとんどないものである。

191~196は口縁端部の断面が四角を呈する。191は口径約2.8cmを測り、内外面にハケメ調整を施す。192は口径約2.0cm、195は口径約2.8cmを測り、ともに外面はハケメ調整を施す。194は、口径約1.4cm、器高約1.8cmのやや小型で、屈曲部上位を下方向へ、下位を上方向へ

ハケメ調整を施す。196は口径約2.0cmを測り、口縁部と胴部の屈曲を指頭圧によって形成している。

197~201は、口縁端部の断面が丸い。197は口径約2.5cmを測り、屈曲部上位に上方向へ丁寧なナデ調整を施している。198は粗いケズリによって調整を施している。199は口径約2.7cmを測り、屈曲部上位はケズリ後にナデ調整を施し、下位は上方向へハケメ調整を施している。201は口径約1.2cm、器高約1.3cmを測るやや小型の土器で、器面全体を粗いケズリ調整によって仕上げている。

202は、外面に丁寧なハケメ調整を施し、内面にミガキ調整を施している。

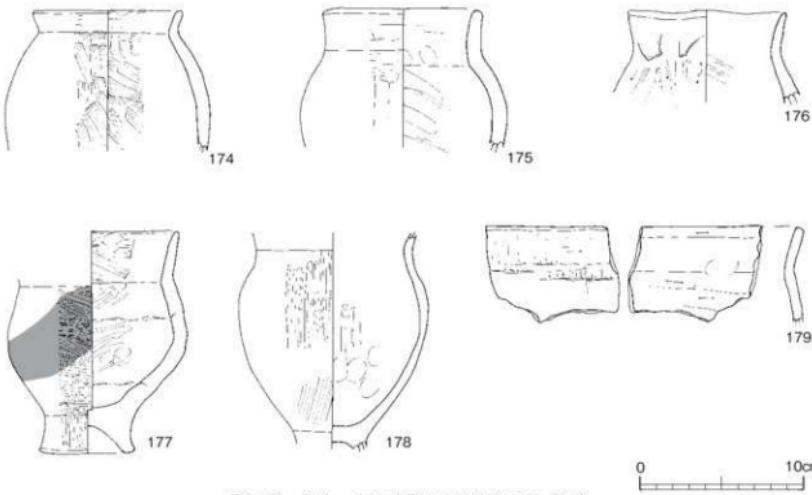
203~219は、胴部との屈曲が残る口縁部である。203~211は、口縁端部の断面が四角を呈している。

205は、内外面に工具による丁寧なナデ調整を施している。

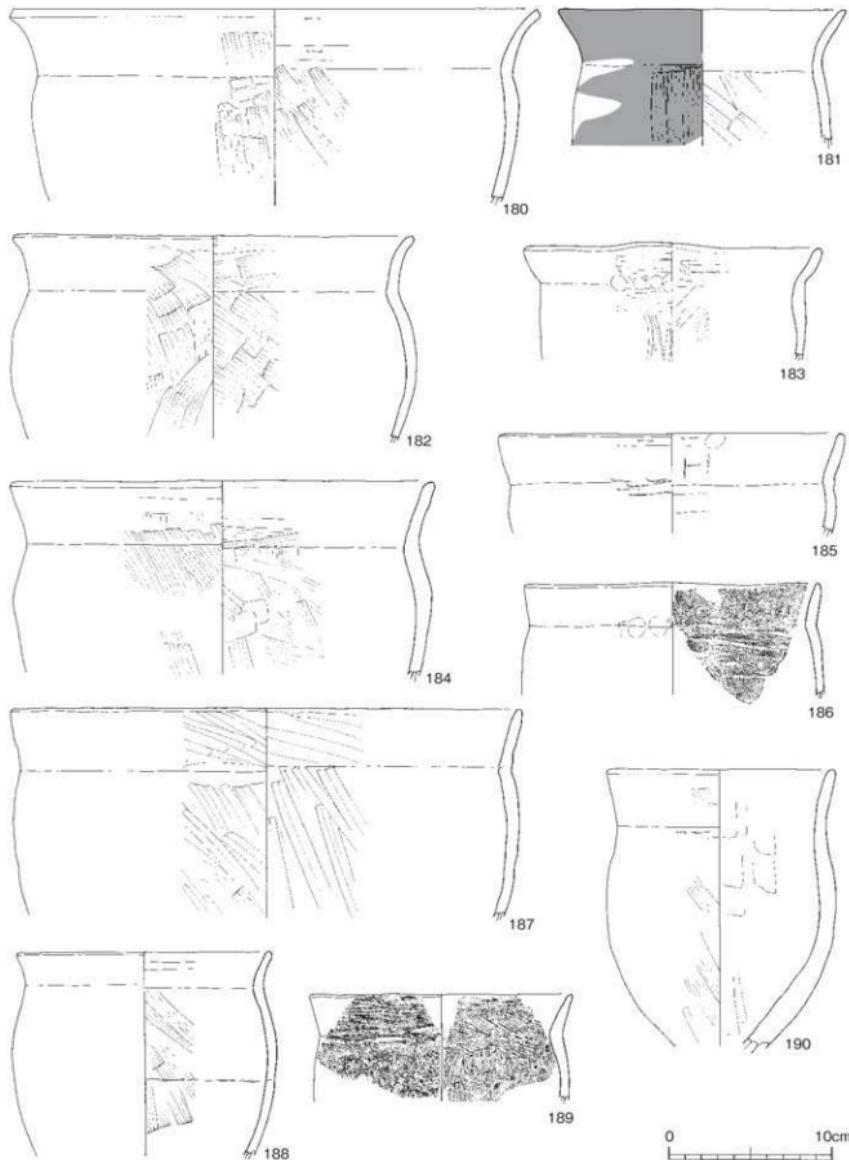
212~219は、口縁端部の断面が丸いものである。212は外面にミガキ調整を施している。213は、外面に丁寧なハケメ調整を施している。219は、屈曲部上位を横位に、下位を上方向へハケメ調整を施している。

220~253は口縁部のみである。口縁端部の断面が四角を呈し、浅い沈線を施しているものもある。

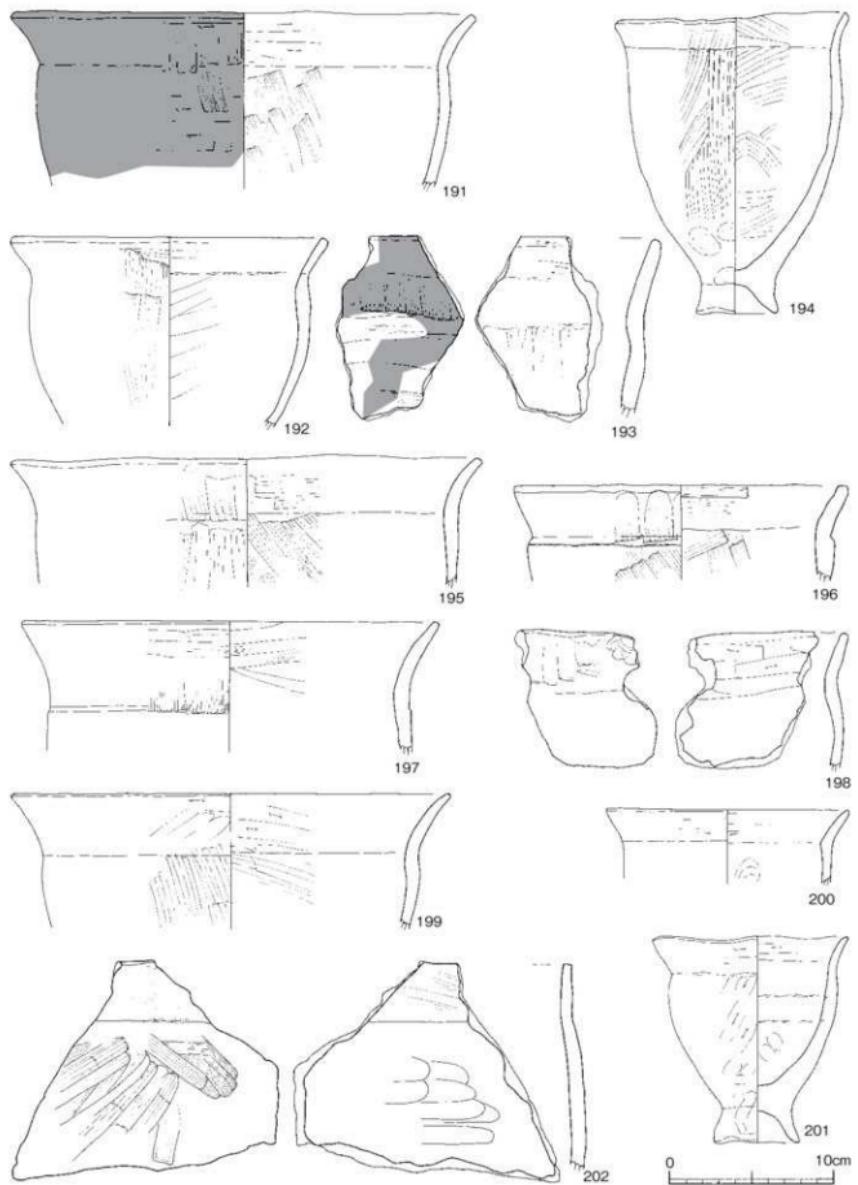
223は、口唇部を横位にミガキ調整を施している。227は、外面の屈曲部上位に下方向へハケメ調整を施し、内面にケズリ調整を施している。230~234は、内外面を工具による丁寧なナデ調整を施している。252は、外面に丁寧なハケメ調整を施し、内面を横位にナデ調整を施している。253は、内外面に粗いケズリ調整を施す。



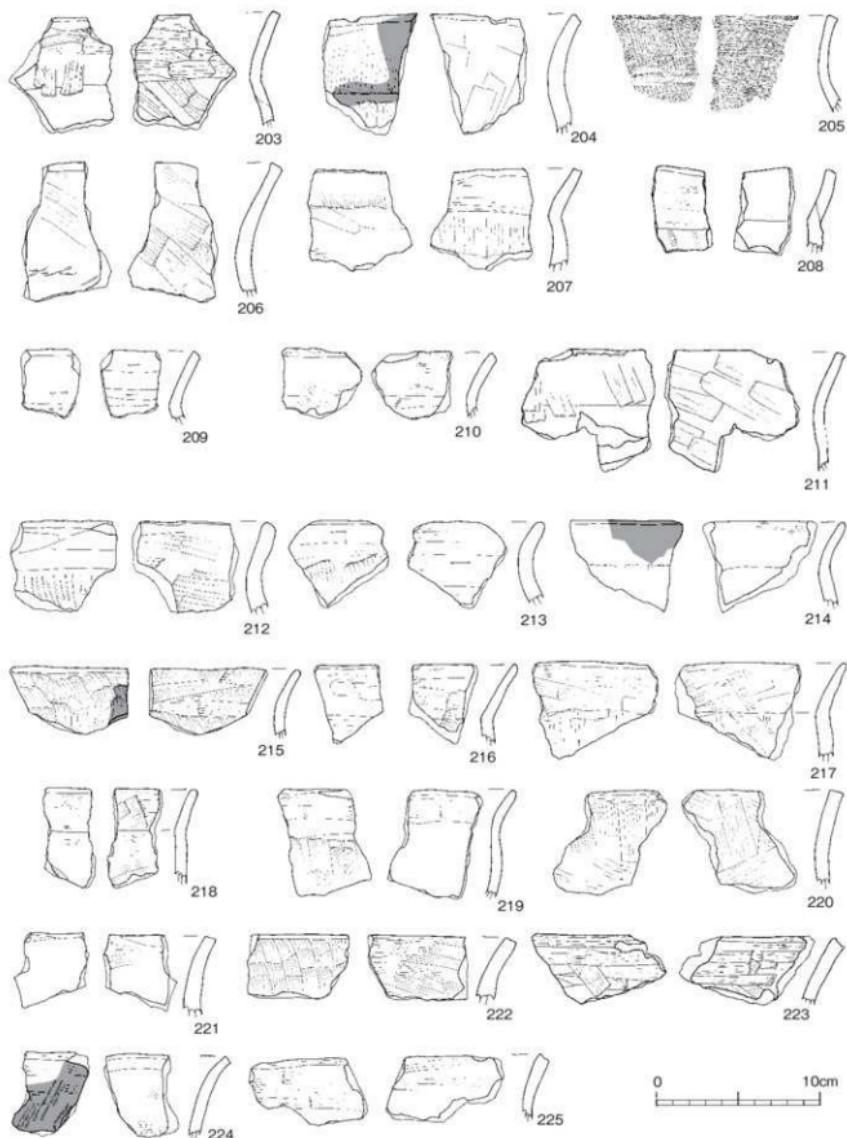
第33図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (12)



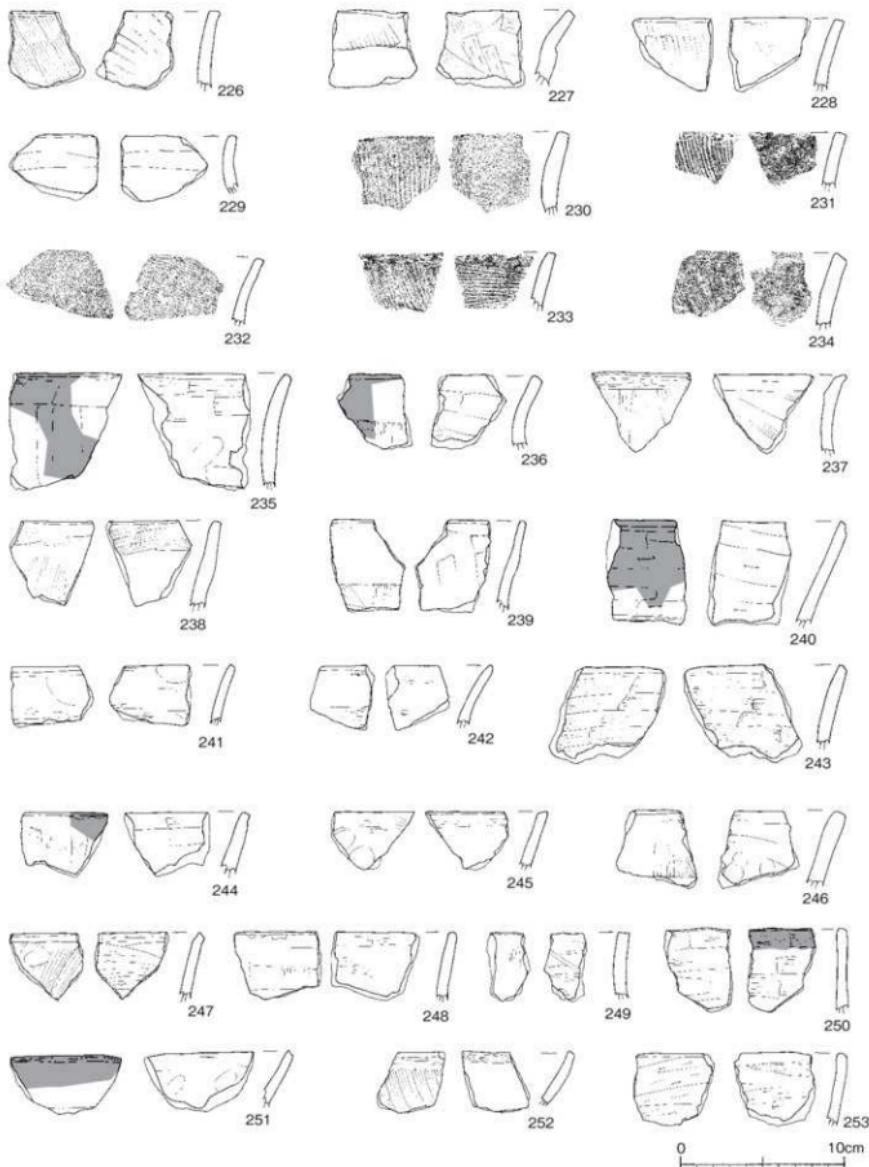
第34図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (13)



第35図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (14)



第36図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（15）



第37図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (16)

ケ X類 (第38・39図254~276)

口縁部下位に1条の突帯を有する。口縁部は外反、もしくは直立している。

254~264は突帯に刻み目を施さないもので、254~261は突帯の断面が三角を呈する。

254は口径約26cmを測り、突帯の上下に横位へケズリ調整を施している。255は、突帯上位にハケメ後ナデ調整を施している。256は口径約33cmを測る。外面は突帯の上位に横位へケズリ調整を施し、内面はハケメ調整を施している。257は、突帯上位に横位へハケメ調整を施している。258は口径約24cmを測り、外面にナデ調整を施し、内面はケズリ後にナデ調整を施している。259は口縁部のみである。口径約26cmを測り、突帯上位に丁寧なハケメ調整を施す。260は口径約25cmを測る。突帯上位に横位へハケメ調整を施し、突帯下位を斜位にハケメ調整を施す。261は、胴部全体にハケメ調整を施している。

262~264は、突帯の断面が台形状を呈する。横ナデ調整で、焼成が堅致である。突帯部が約2cmと長く突き出ていて、大差の突帯部であると考えられる。

265~276は突帯に刻み目、もしくは連続刺突文を施すものである。突帯の断面は三角を呈す。

265・266は、突帯を貼り付けた後に刻み目を斜位に施しており、突帯部からはみ出している。265は、口径約28cmで外面を横位にハケメ調整を施す。266は突帯上位に下方向へハケメ調整を施し、突帯下位を横位にナデ調整を施す。

267~271は、刻み目を斜めもしくは縱方向へ施し、突帯部からはみ出していない。267は、突帯部下位を横位にナデ調整を施している。268は、突帯部上位を縱位にハケメ調整を施し、内面は指頭によるナデ調整を施している。269は、突帯上位に下方向へハケメ調整を施している。刻み目の間隔は、約9mmと狭い。270・271は、突帯上位を横位にナデ調整を施している。

272~276は、突帯に連続的な刺突を施している。

272~274は、刺突痕が見られる。272は口径約30cmを測り、突帯上位に下方向へハケメ調整後、横ナデ調整を施している。273は、内外面にハケメ調整を施している。274は口径約25cmを測り、突帯上位にハケメ調整を施した後で、口縁部上端の内外面を横位にハケメ調整を施している。275・276は刺突内に、布目等の圧痕を見られない。275は、突帯上位を横位にハケメ調整を行い、内面には指頭圧痕が残る。276は口径約32cmを測り、突帯上位に横ナデ調整を施している。内面には、突帯を貼り付けたときの指頭圧痕が残る。

コ X類 (第40・41図277~295)

形式不明な胴部を一括したものである。

277~281は、肩部から胴部にかけて膨らんでいる。

277は、外面に丁寧なハケメ調整を施している。

278・279は外面を工具により、丁寧なナデ調整を施している。280は内外面ともに、ケズリとナデによる調整を施している。281は、外面にケズリ調整を施し、内面は丁寧なハケメ調整を施している。

282~289は、胴部の一片である。

282は、内外面ともにハケメ調整を施している。283は、工具によるナデ調整を施している。284は、全体にケズリ調整を施している。286~288は、外面に丁寧なハケメ調整を施している。289は、内面にハケメ調整を施している。

290~295は、胴部から下位の部分であり、底部にかけて内湾している。291は、内外面を丁寧なナデ調整で仕上げている。293は、内外面にハケメ調整を施している。295は外面を工具によるナデ調整を施している。

サ X類 (第41~44図296~390)

底部を一括したものである。脚台をもつものがほとんどあるが、平底も若干出土している。

296~371は、中空の脚台である。底径は約8~11cmを測り、脚部が直線的、もしくはやや外反気味に開くものである。

296~312は、脚端部断面が四角を呈すものであり、いずれも高脚である。300は、外面にハケメ調整を施し、内面を横位にナデ調整を施す。302は、内外面に粗いケズリ調整を施している。306・312は、内外面にケズリ調整を施し、断面に輪積の跡が見られる。

313~363は、脚端部断面が丸いもの、もしくはやや尖ったものである。322は、ケズリ調整と指頭圧による調整を施している。342は、脚部の内外面に指頭圧による調整を施し、胴部はハケメ調整を施している。361は、脚部と胴部との剥離面が露呈している。

365~371は、天井がなく脚端部断面は四角を呈する。370は脚端部に輪積の痕跡が残る。

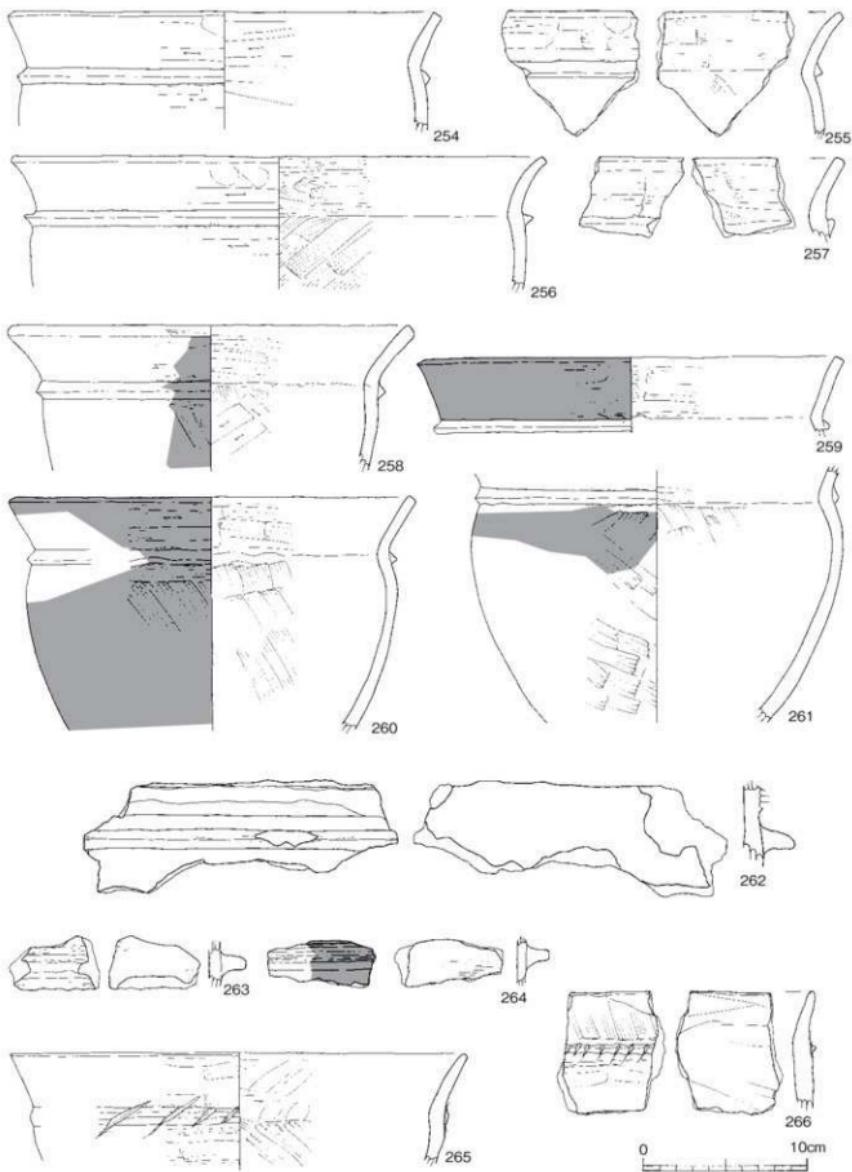
372~388は中空の脚台であるが、下部が欠損したものである。374は、内外面にハケメ調整を施している。378は、外面にナデ調整を施し、内面にハケメ調整を施している。

389・390は、脚台をもたない平底である。389は、外面にケズリ調整を施し、内面に丁寧なナデ調整を施し、直線的に立ち上がる。

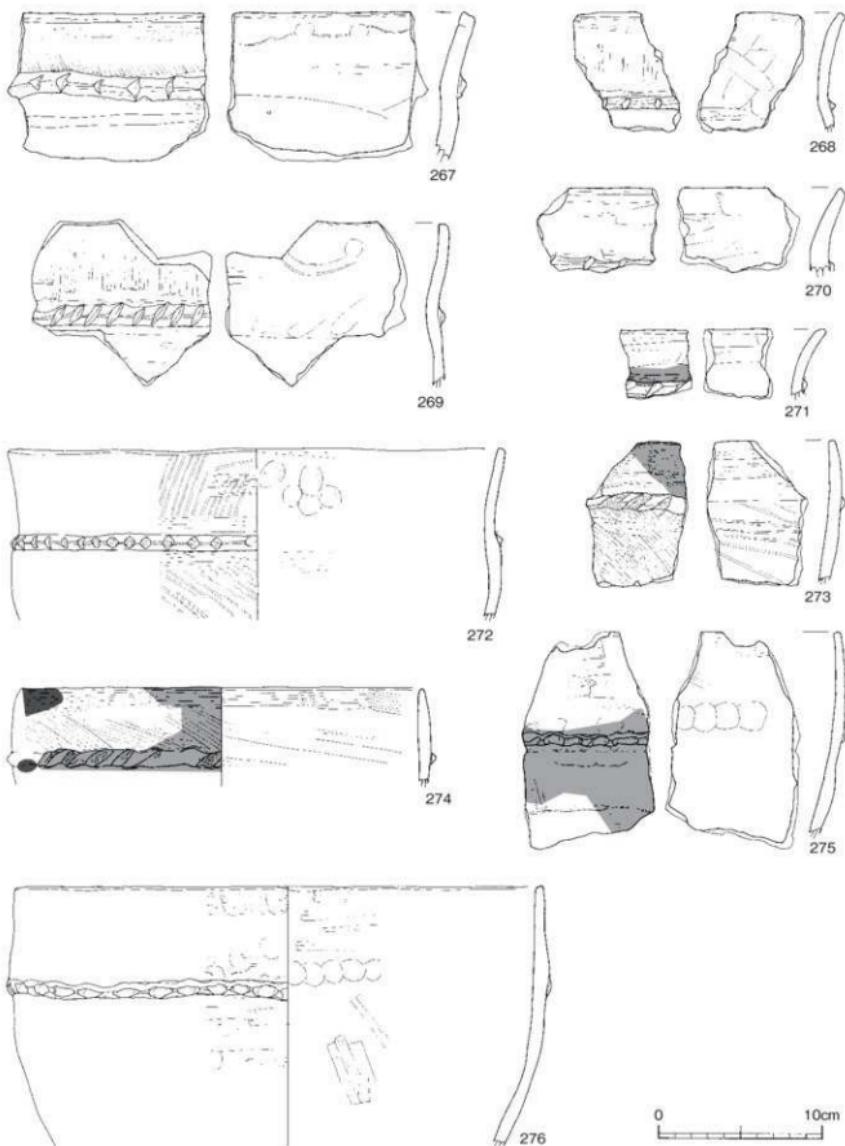
(2) 甑形土器 (第44図391)

甑形土器は1点のみの出土で、391は深鉢形を呈し、底部に蒸氣孔を施す。胴部下位付近に、ススがリング状に付着している。蒸氣孔を形成するために指頭圧による調整を施し、胴部はハケメ調整で仕上げている。蒸氣孔の外径は約5.5cm、内径は約4cmである。

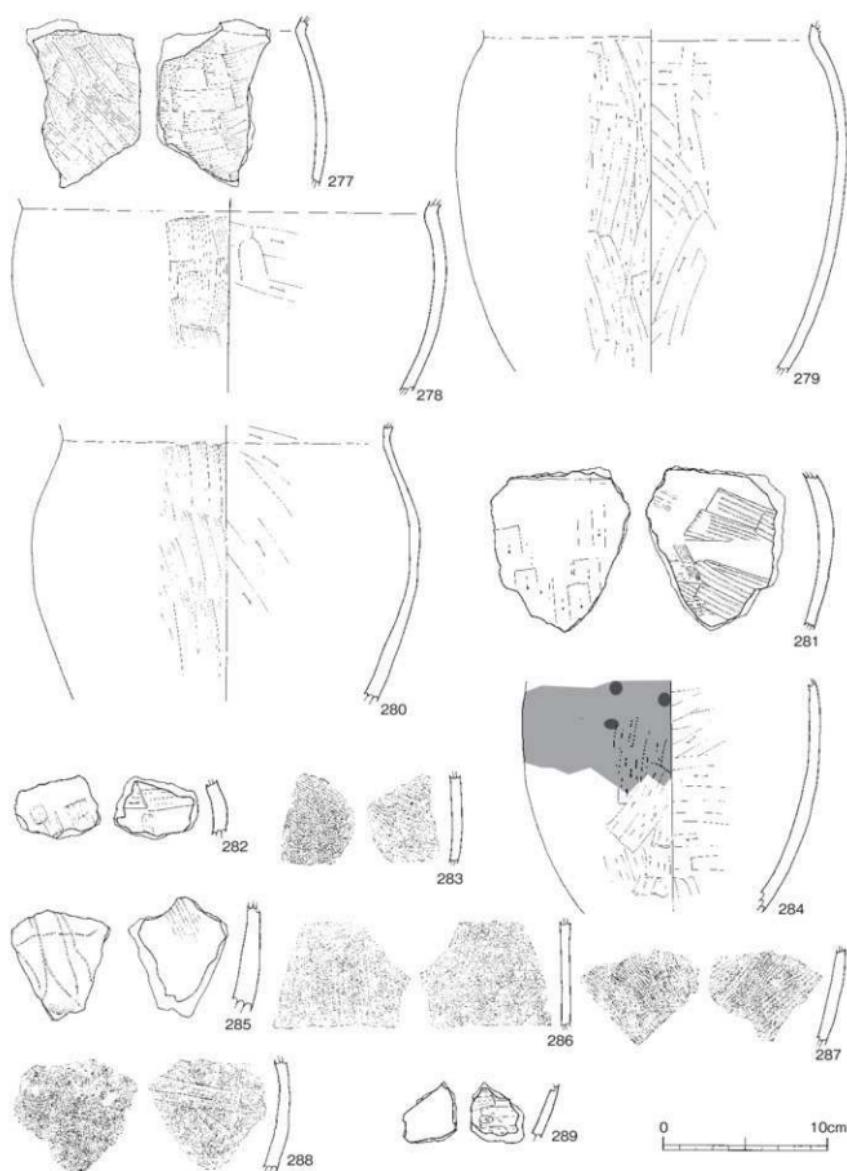
なお、本土器に付する蓋は不明である。



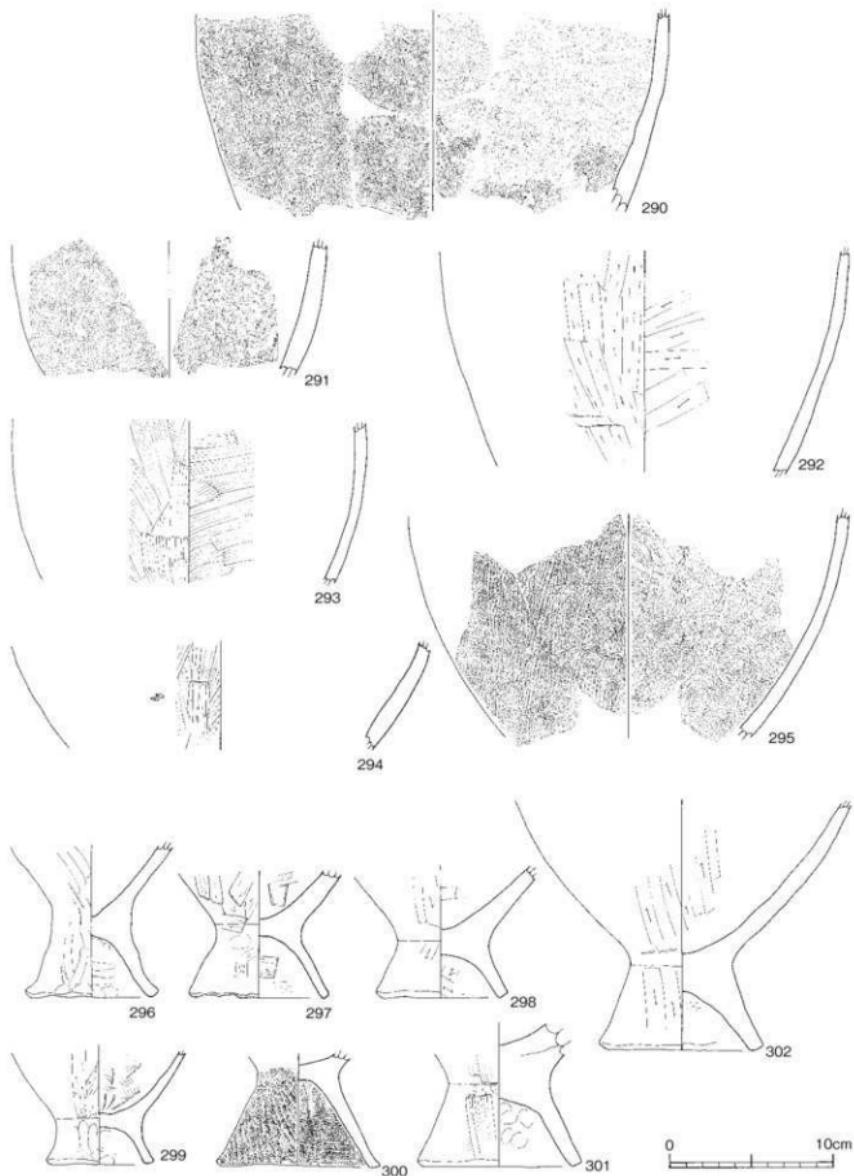
第38図 弥生・古墳時代出土遺物実測図（17）



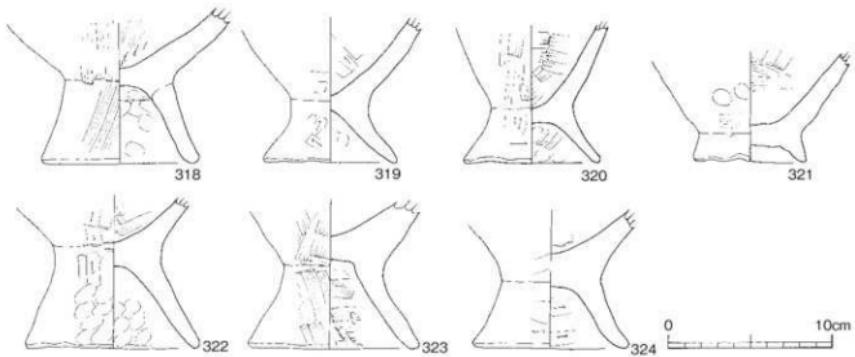
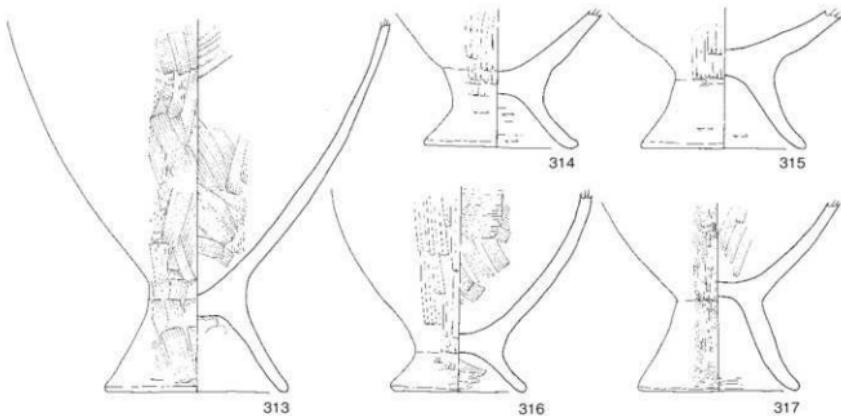
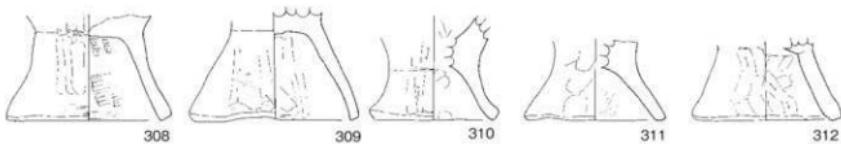
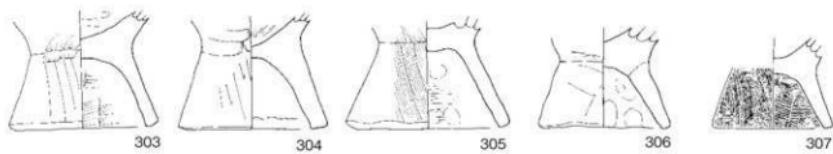
第39図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (18)



第40図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (19)

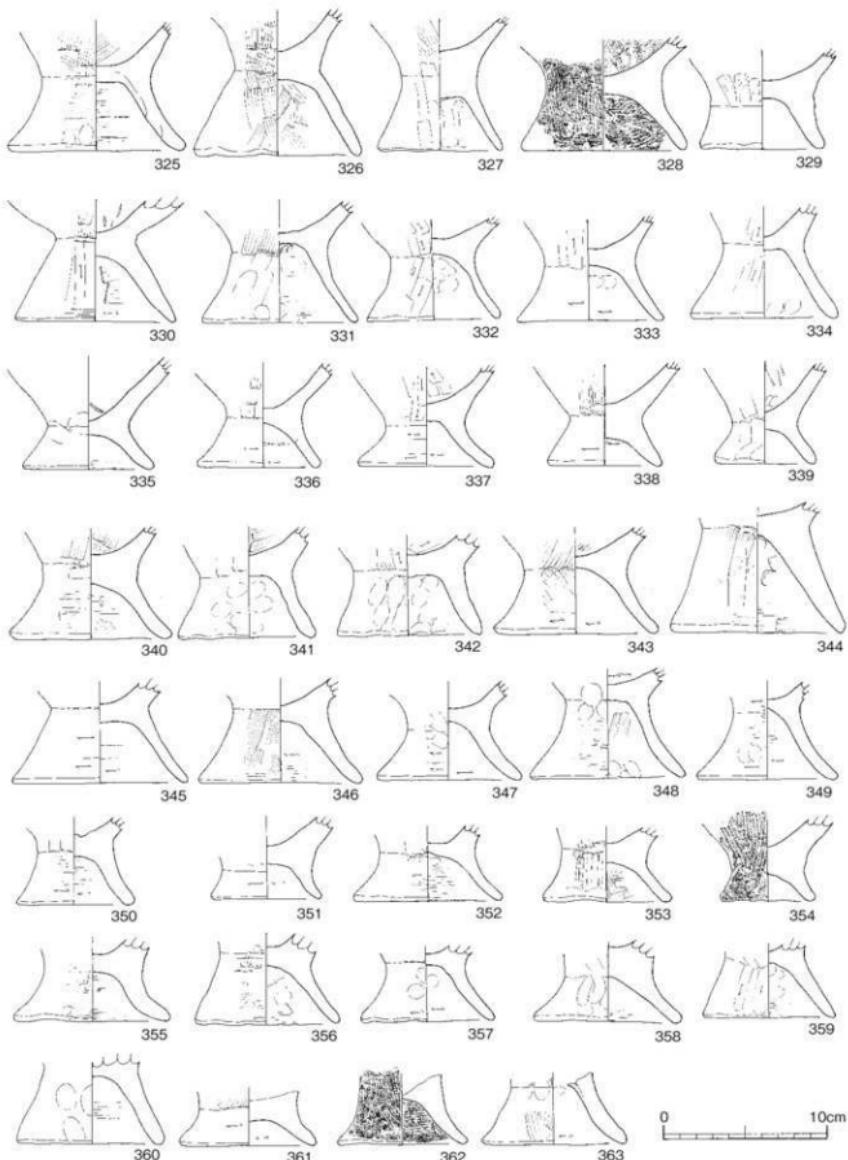


第41図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (20)

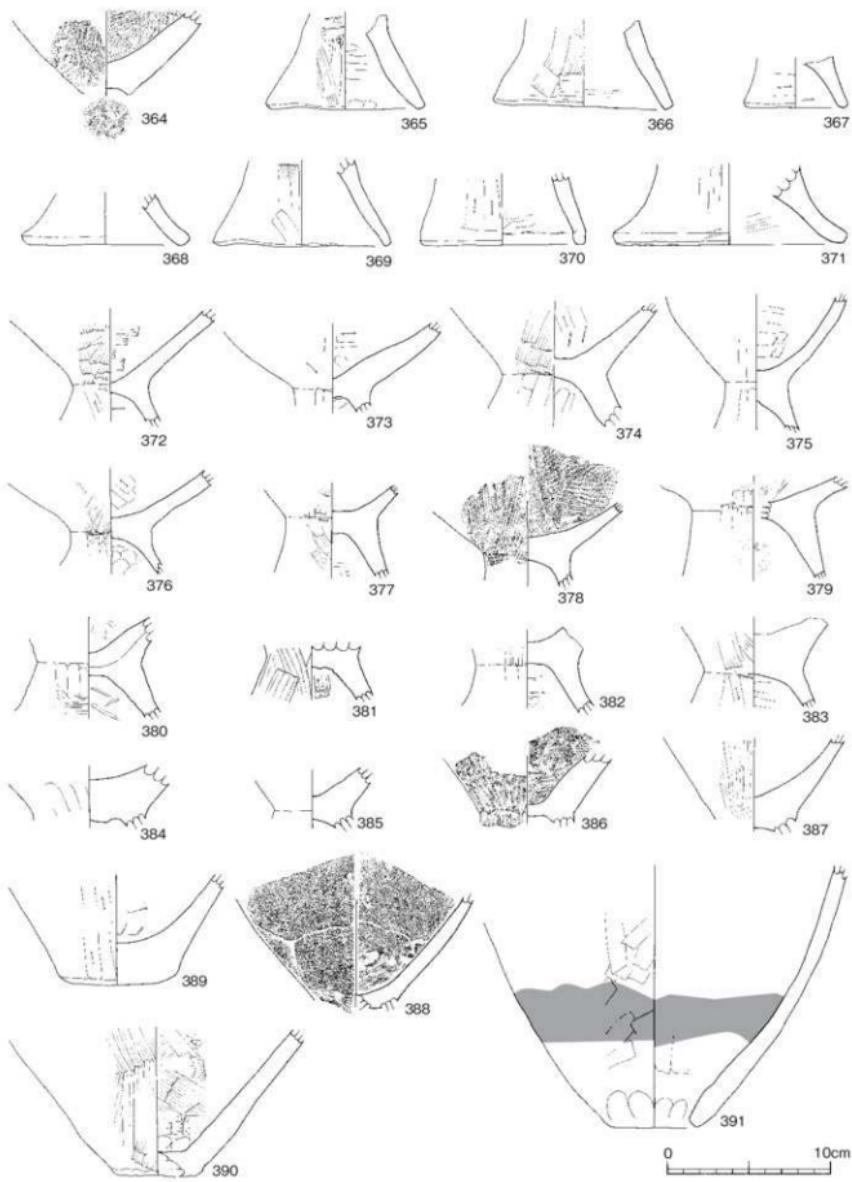


0 10cm

第42図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (21)



第43図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (22)



第44図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (23)

(3) 壺形土器

壺形土器は、口縁部、胴部、底部合わせて87点を図化した。I～IV類は小片が多く、口縁部断面と、口唇部の形状で判断し分類した。形式上I～VII類に分類し、形式不明な胴部、底部をそれぞれVI、IX類とした。

ア I類 (第45図392・393)

口唇部が下がり、口縁部の断面が逆L字状を呈する。口縁端部に沈線を施す。

392は内外面にナデ調整を施し、端部の器壁が厚く、胎土に金雲母が多く混じる。大型の壺形土器の口縁部と思われる。393は、内外面にナデ調整を施す。

イ II類 (第45図394～399)

口縁部の断面が逆L字状、もしくはくの字状を呈し、口縁部の内側が張り出す鈴先口縁である。

394・395は口唇部が上向きで、中がやや凹んでいる。395は外面に丁寧なナデ調整を施している。396は口径約16.5cmを測り、口唇部が平らで、横位にナデ調整を施す。397～399は、外面に粘土を貼り付け肥厚させており

粘土貼り付け部には指ナデ調整を施している。397は口径約16cmを測り、口唇部が丸く膨らんでいる。398は口径約18cmを測り、口唇部は平らで斜め下方向へ下がっている。399は口径約16cmを測り、口唇部はかなり丸く膨らんでいる。

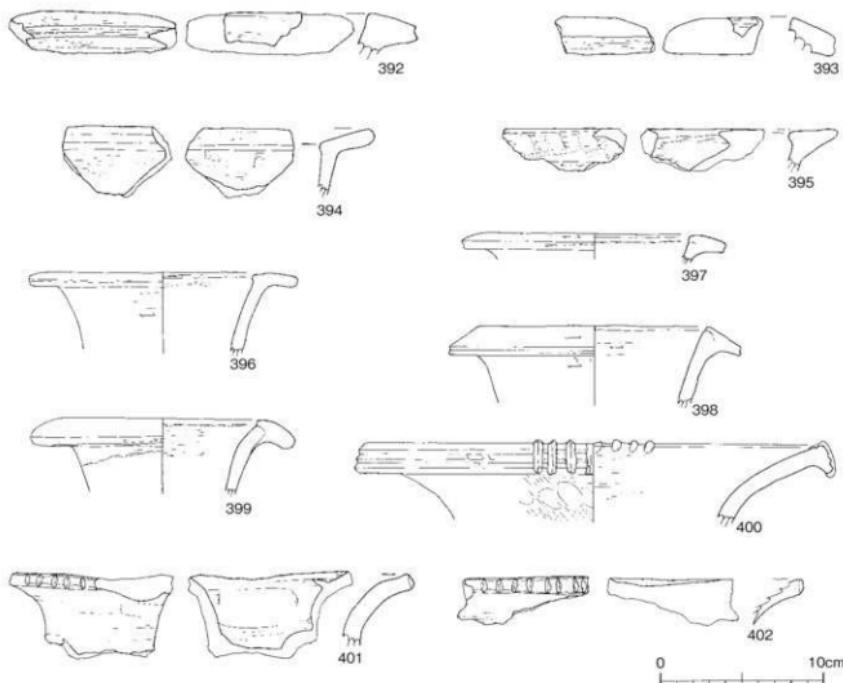
ウ III類 (第45図400)

400は、頭部からやや曲線的に斜め上方向に開き、口縁端部が肥厚している。口縁部の内側は、僅かに張り出す。口唇部に横位への沈線を2条施し、粘土紐により縦に突帯を付着させている。焼成がしっかりしており、内外面にナデ調整を施している。口径は約29cmと、やや大型の壺形土器である。

エ IV類 (第45図401・402)

口縁部がラッパ状に大きく開き、口唇部に連続的な刺突文を施す。

401は、外面に丁寧なハケメ調整が施されている。402は内外面にナデ調整を施している。



第45図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (24)

オ V類 (第46・47図403~407)

口縁部がラッパ状に開き、頸部が強く締まっている広口壺形土器である。口縁部内部に、明瞭な稜をもつ。

403は、口径約20cm、器高約38cmである。胴部中央やや上位に断面が三角状である2条の突帯を有し、その下位に最大径約29cmを測る。器面全体にハケメ調整を施している。頸部から肩部への屈曲が強く、胴部の膨らみも強い。平底で、底径は約3cmである。

404~406は、断面が三角を呈する刻目突帯を有し、胴部の内弯は403よりも弱い。404は口径約12cm、器高32cmで、器面全体にハケメ調整を施す。最大径は約21cm、平底の底径は約4cmである。405は口径約14cm、器高約32cmで胴部上位にハケメ調整を施し、下位にケズリ調整を施す。最大径は約22cmで、底径は約3cmである。406は口径約15cm、器高約32cmで、外面にケズリ後ハケメ調整を施し、内面にケズリ調整を施す。突帯部は最大径約23cmを測り、底径は約5cmである。407は口径約28cmで、内外面にハケメ調整を施す。肩部から下位が欠損しているが、口径の長さと器壁の厚さから、かなり大型の壺形土器であると考えられる。

カ VI類 (第47・48図408~423)

頸部が筒状に長い、長頸壺形土器である。

408は、胴部が大きく張り出した算盤玉状を呈し、口径約21cmで、器面全体にハケメ調整を施す。断面が台形を呈する刻目突帯文を有し、最大径は約40cmを測る。底部は欠損しているが、かなり大型の壺形土器であると考えられる。

409~423は口縁部である。409は口径約25cmで、外面にハケメ調整を施す。410は口径約24cmで、外面は縦位にハケメ調整を施す。411は口径約17cmで、外面は斜位にハケメ調整を施す。412は口径約19cmで、内外面にハケメ調整を施す。413は口径約18.5cmで、外面にナデ調整を施す。414は口径約18.5cmで、内面にナデ調整、内面に指頭圧による調整を施す。414は口径約15.5cmで、外面は縦位にハケメ調整を施す。415は口径約17.5cmで、内外面にハケメ調整を施す。416は口径約16cmで、内外面にハケメ調整を施す。417は口径約16cmで、外面にナデ調整を施す。418は口径約17cmで、外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。419は、口径約15cmで内外面にケズリ調整を施す。420は口径約12cmで、外面は横位にケズリ後、ハケメ調整を施す。421は口径約13cmで、内外面は横位にケズリ調整を施す。422は丁寧なナデ調整を施している。423は外面にハケメ調整を施している。

キ VII類 (第48図424~426)

小型の壺形土器で、短い口縁部が開きながら直線上に立ち上がる。

424は口径約8cm、器高が約11cmで、外面にハケメ調整を施し、内面は粗いケズリ調整を施している。胴部

は強く膨らみ、ほぼ球形を呈する。最大径は約13cmで、平底の底径は約3cmを測る。425は口径約9cm、器高約9cmで、最大径は約10cmを測る。肩部から胴部にかけて強く内弯しており、底部にかけて緩やかに内向している。口縁部外面を横位にケズリ調整、胴部外面にハケメ調整を施し、内面は、指頭圧によって調整を施している。426は口径約10cmで、外面にハケメ調整を施している。

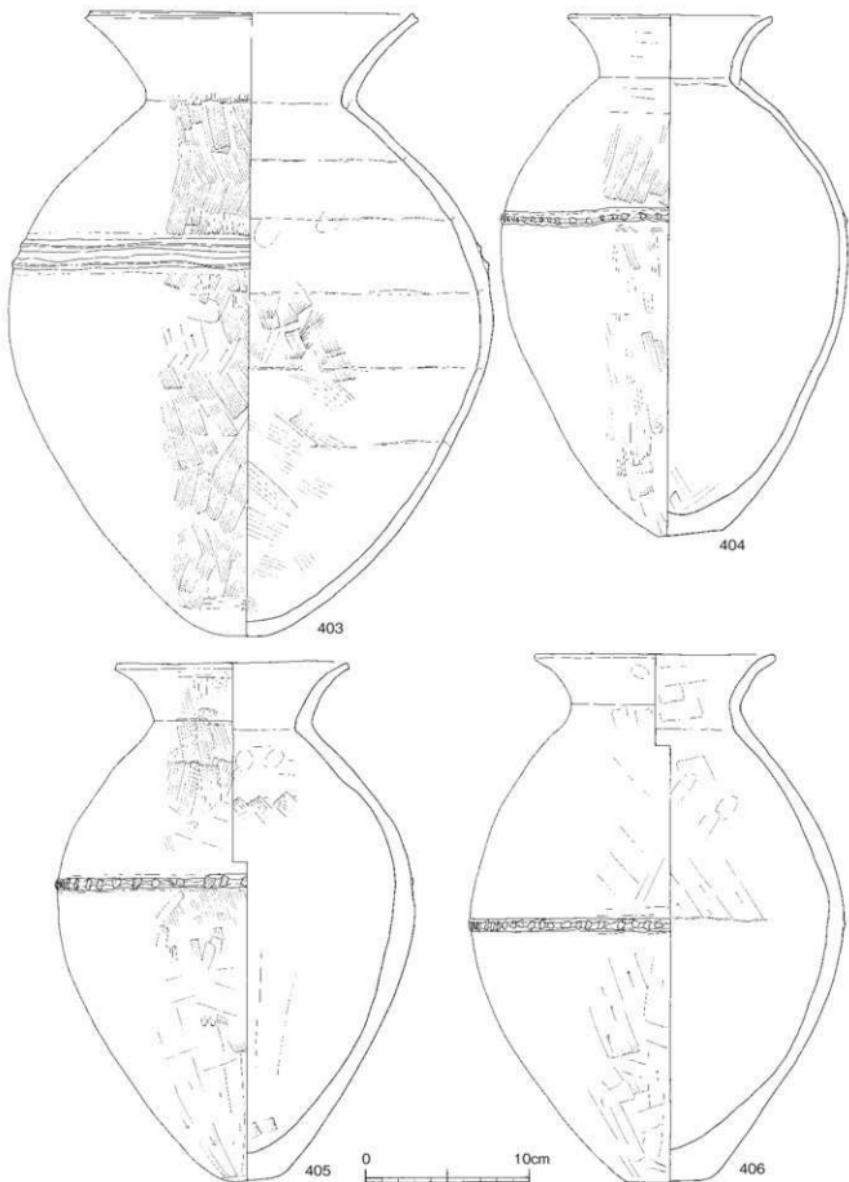
ク VIII類 (第49~54図427~461)

胴部を一括したものである。

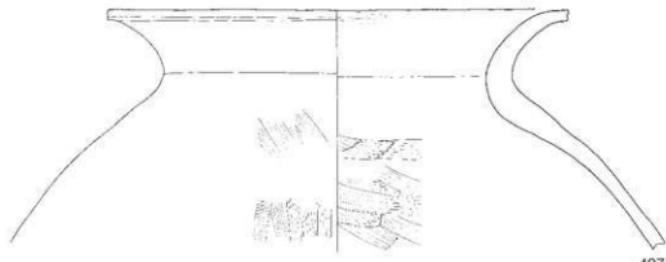
427~430は、頸部が強く締まっている、口縁部内側に明瞭な稜をもつ。427~429は断面が三角を呈する刻目突帯を有し、胴部の内弯が強く影響している。いずれも、器面全体にハケメ調整を施している。427は最大径約20cmを測り、胴部の内弯が強く、ほぼ球形に近い。428は最大径約25cmを測り、427と同じく球形を呈する。430は頸部のみであり、外面にハケメ調整を施している。

431~438は、頸部が直線的に立ち上がり、口縁部内側に明瞭な稜をもつ。431・432は断面が三角を呈する刻目突帯を有し、胴部が強く内弯している。431は外面にハケメ調整を施し、432は外面をナデ調整で仕上げ、内面にハケメ調整を施している。433は頸部から肩部にかかる部分で、頸部内外面は横位にナデ調整を施し、肩部はハケメ調整を施している。434は肩部に沈線を数条施している。丁寧なミガキ調整で仕上げ、焼成もしっかりしている。435は、外面にハケメ調整を施し、内面はケズリ後ナデ調整を施している。肩部から胴部にかけてほぼ直角に内弯し、胴部の膨らみは弱い。436は断面が三角を呈する刻目突帯を有し、内外面にハケメ調整を施している。437は頸部から肩部にかけての一部で、外面は丁寧なハケメ調整を施し、内面は指頭圧による調整後、横位にナデ調整により仕上げている。438は外面にミガキ調整を施し、焼成もしっかりしている。

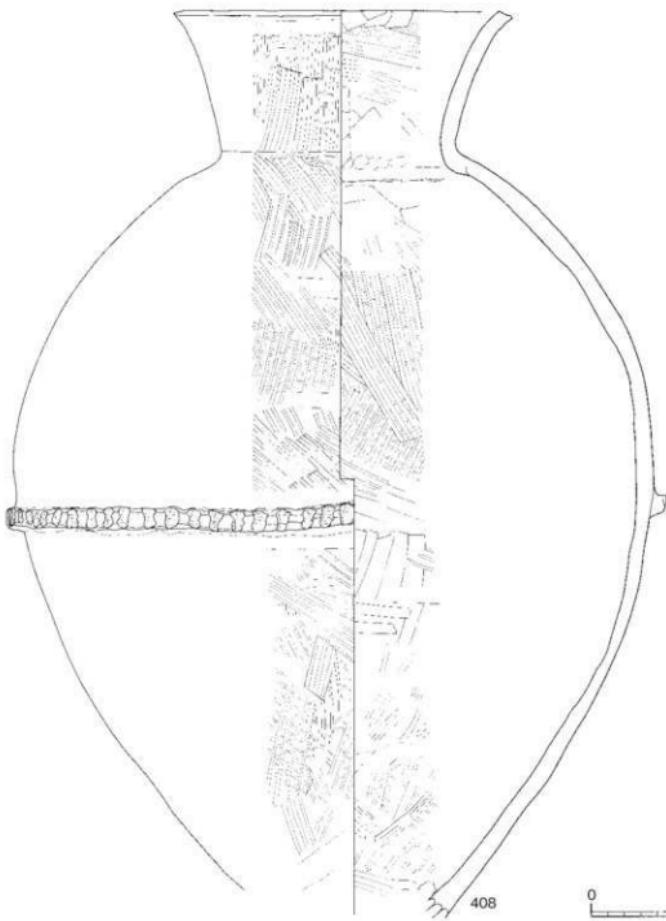
439~442は、頸部から上部のみが欠損しているもので、形式が不明なものである。439は、底部から胴部にかけて直線的に立ち上がり、胴部から肩部にかけて強く内向している。外面は肩部にミガキ調整を施し、胴部はハケメ調整を施している。440は胴部中央付近に三角突帯を1条施し、その下位を上方向へケズリ調整により仕上げている。最大径は約23cmを測り丸底を呈する。441は、肩部から胴部にかけて強く内弯し、底部にかけて緩やかに内向している。胴部中央付近に三角突帯を3条施し、器面全体にハケメ調整を施している。最大径は約30cmを測り、平底を呈すると思われる。442は最大径が約40cmを測る大型の壺形土器である。胴部の膨らみは弱く、卵形を呈する。胴部中央付近に断面が三角を呈する刻目突帯を有し、内外面にハケメ調整を施している。平底で、底径は約5cmである。



第46図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (25)

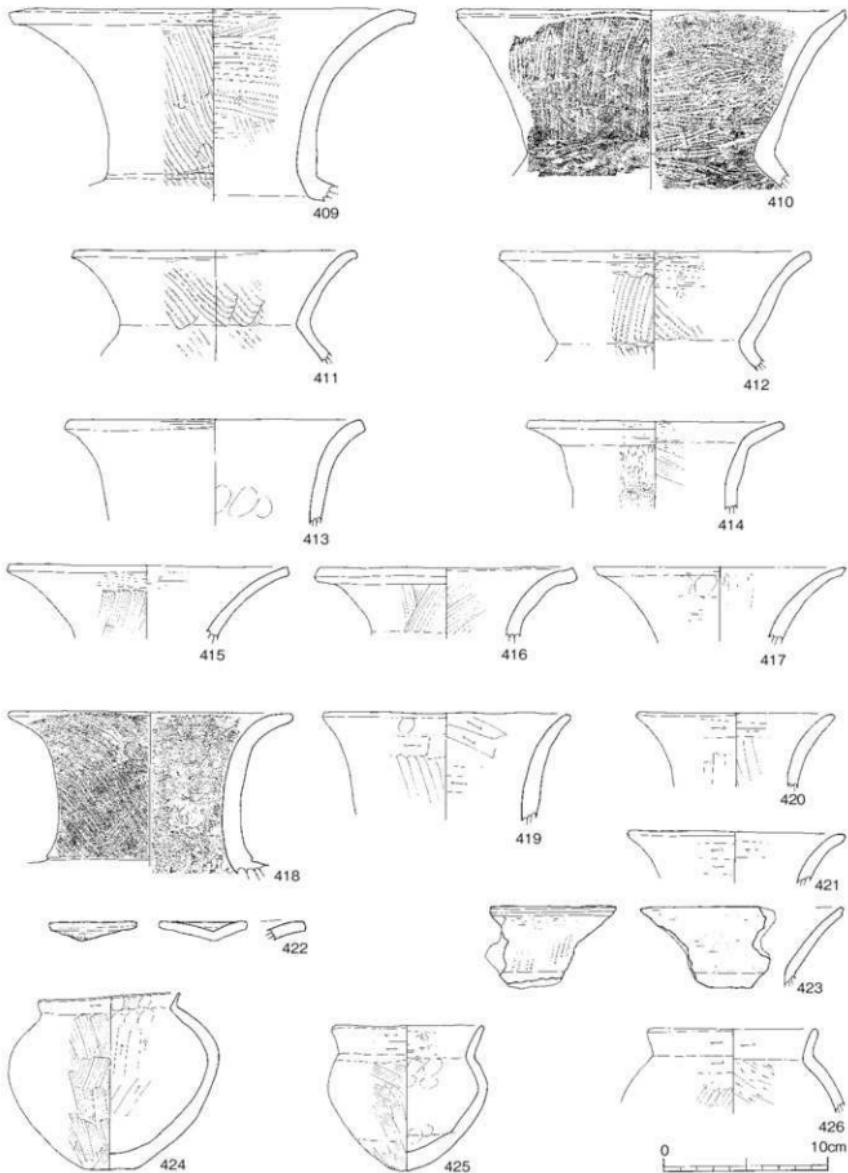


407

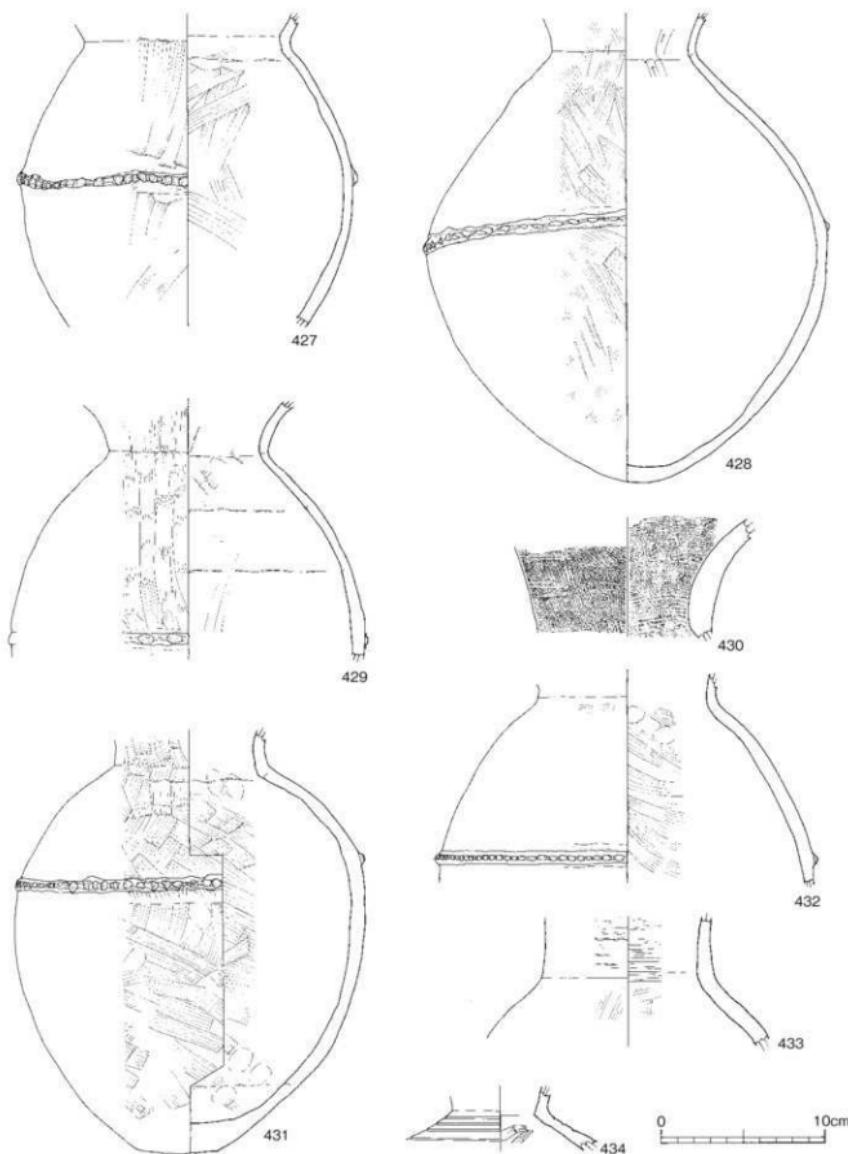


0 10cm

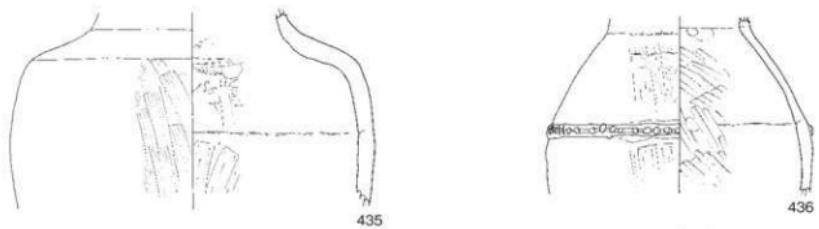
第47図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (26)



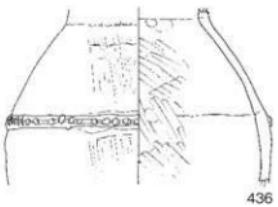
第48図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (27)



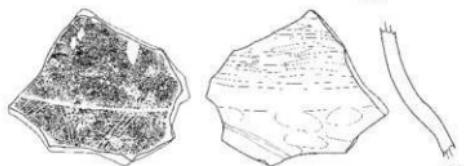
第49図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (28)



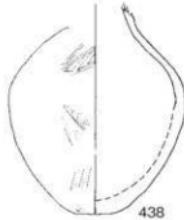
435



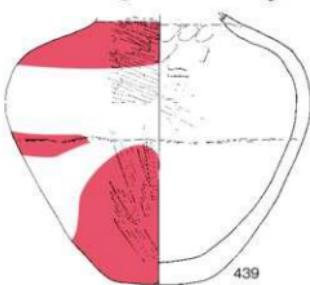
436



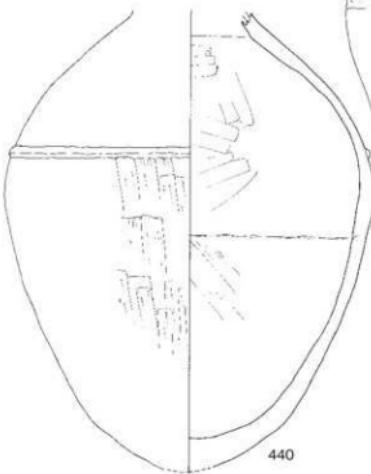
437



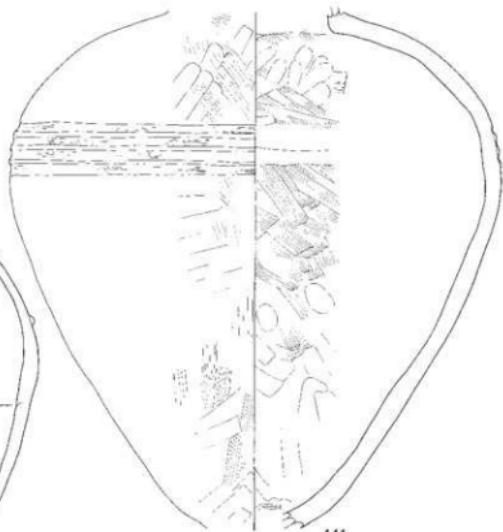
438



439



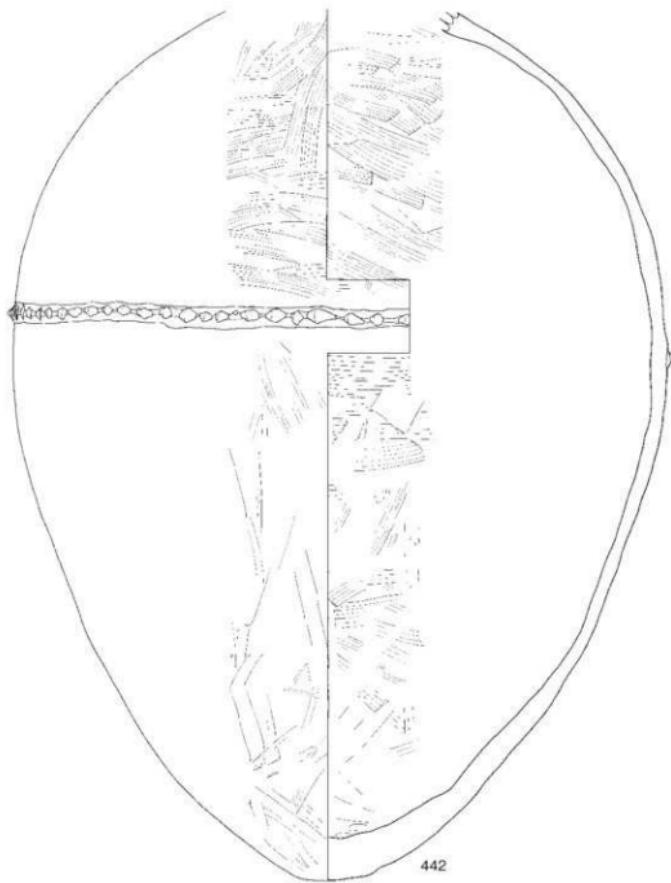
440



441



第50図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (29)



0 10cm

第51図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (30)

443～461は、肩部から底部まで的一部分で、突帯を有するものである。

443～445は肩部で、443は4条の三角突帯を施している。外面にミガキ調整を施し、内面はナデ調整で仕上げている。444は、断面が三角を呈する刻目突帯を有する。突帯の上下に横位にナデ調整を施し、内面はハケメ調整を施す。445は焼成がしっかりしており、工具による痕跡が見られる。446は、突帯の上下に丁寧な横ナデ調整を施す。447は、突帯の上位は下方向へハケメ調整、下位は上方向へハケメ調整を施す。448は4条の三角突帯を施し、内外面にハケメ調整を施す。突帯部が最大径で、約34cmを測る。450は3条の三角突帯が施されている。外面に丁寧なナデ調整を施す。451は、断面が台形を呈する刻目突帯を有し、外面に丁寧なハケメ調整を施す。452は、突帯下位を上方向へハケメ調整を施す。453は突帯下位の部分で、外面に丁寧なハケメ調整を斜位に施し、内面はハケメ調整後、指頭圧による調整を施している。454は断面が台形を呈する突帯を施し、その下位をミガキ調整によって丁寧に仕上げている。455は外面にハケメ調整、内面に指ナデ調整を施す。456～459は、1条の刻目突帯を有し、内外面にハケメ調整を施す。いずれも胴部が強く内弯しており、ほぼ球状を呈している。456は突帯部が最大径で、約24cmを測る。457は胴部上位に突帯を施し、最大径は約17cmを測る。458は突帯部が最大径で、約23cmを測る。460は突帯下位に縱位へ丁寧なナデ調整を施す。内面はハケメ調整で、工具による跡が強く残る。461は胴部の膨らみが強く、底部にかけて内向している。内外面にハケメ調整を施す。

ケ IX類 (第54・55図462～478)

底部を一括したものである。

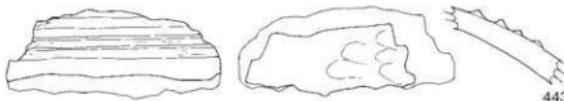
462～473は平底を呈する。462は底径約5cmで、厚みもあることから、やや大型と思われる。463は底径が約6cmで、ほぼ直線的に開きながら立ち上がる。外面を上方向へ、内面を横位にハケメ調整を施している。464は底径約9cmで、胴部への立ち上がりはほぼ直立である。465は底径約5cmで、やや内向気味に立ち上がる。内外面に粗いケズリ調整を施す。

466～469は、胴部への立ち上がりが緩やかに内弯しているものである。466は底径が約6cmで、内外面にハケメ調整を施している。467は底径約4cmで、内外面に丁寧なハケメ調整を施す。468は底径約5cmで、器壁が厚く、内面にナデ調整を施す。469は底径約6cmで、内外面にハケメ調整を施す。

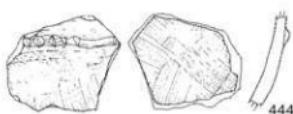
470～472は、開きながら立ち上がり、胴部へかけて内弯する。470は底径約5cmで、内外面にハケメ調整を施す。472は底径約4cmで、外面は縦位に、内面は斜位にハケメ調整を施す。

473は直線的にやや開きながら立ち上がり、胴部へかけて緩やかに内弯している。底径は約4cmで、内外面に丁寧なハケメ調整を施している。

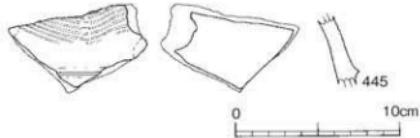
474～478は丸底を呈する。474は開きながら立ち上がり、胴部へかけて緩やかに内弯している。外面は、ケズリ後ハケメ調整を施している。475は肩部から底部まで丸形を呈し、外面にケズリとハケメ調整を施している。476は器壁が厚く、外面にハケメ調整を施す。立ち上がりが大きく開いており、大型の壺形土器の底部と考えられる。477は、内外面にケズリ調整を施している。立ち上がりが強く内弯している。478は底面がほぼ尖っており、直線的に大きく開きながら立ち上がる。



463



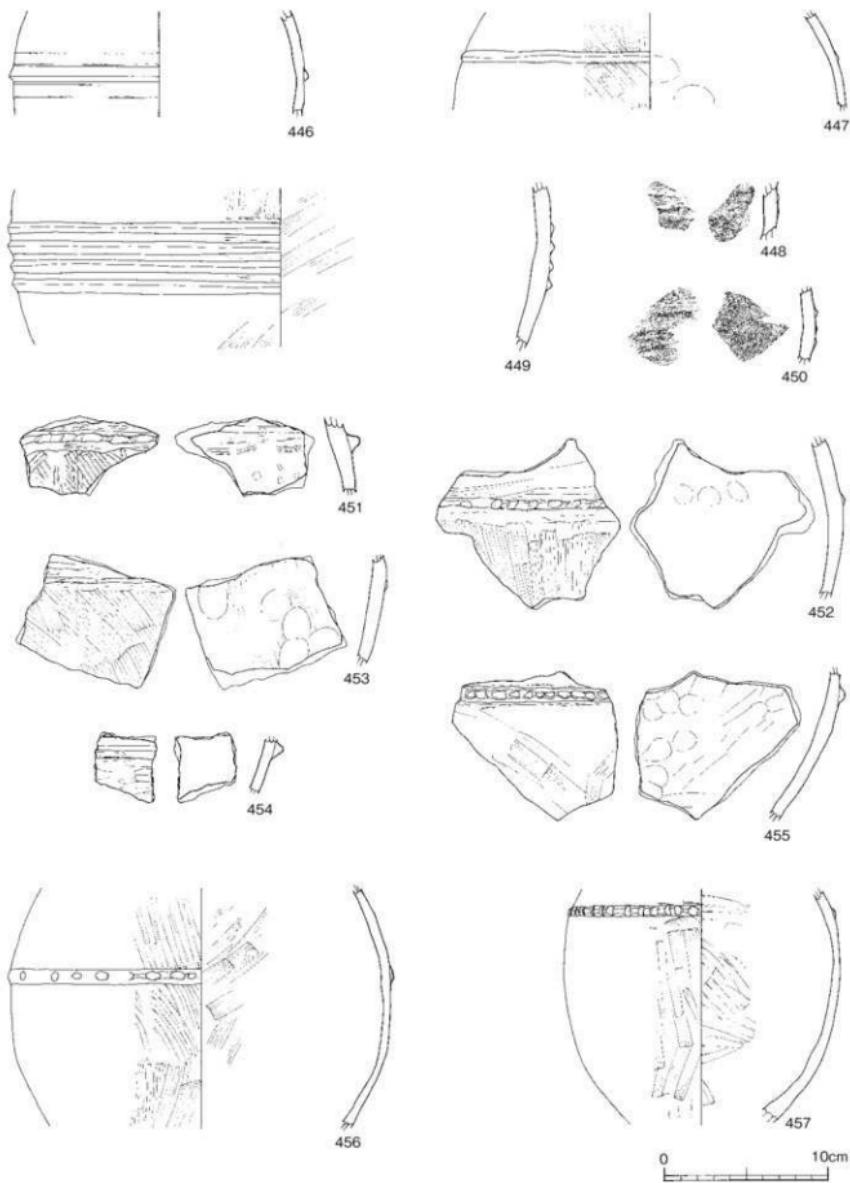
444



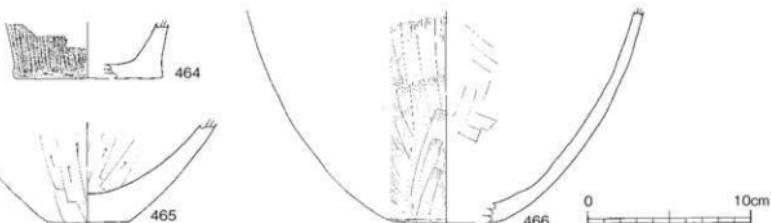
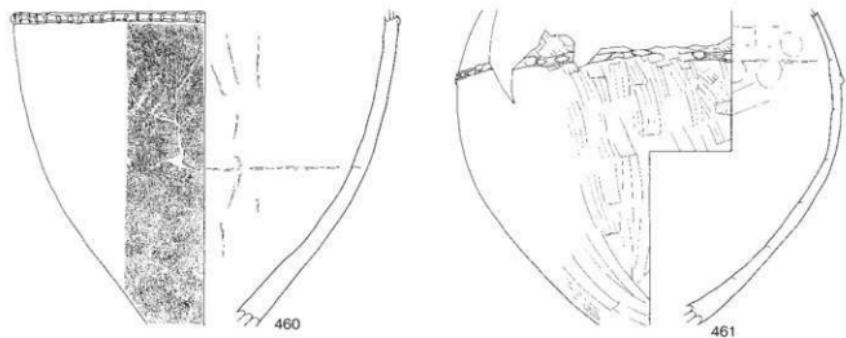
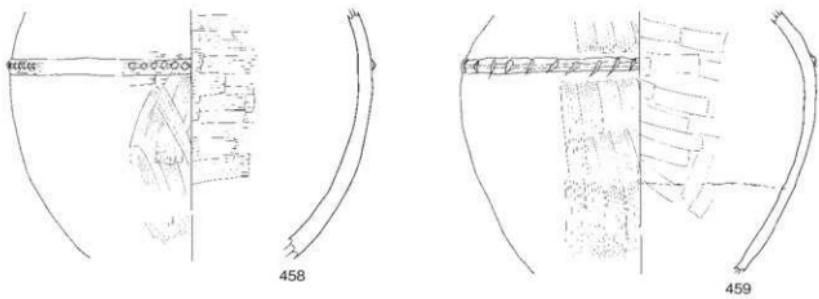
0

10cm

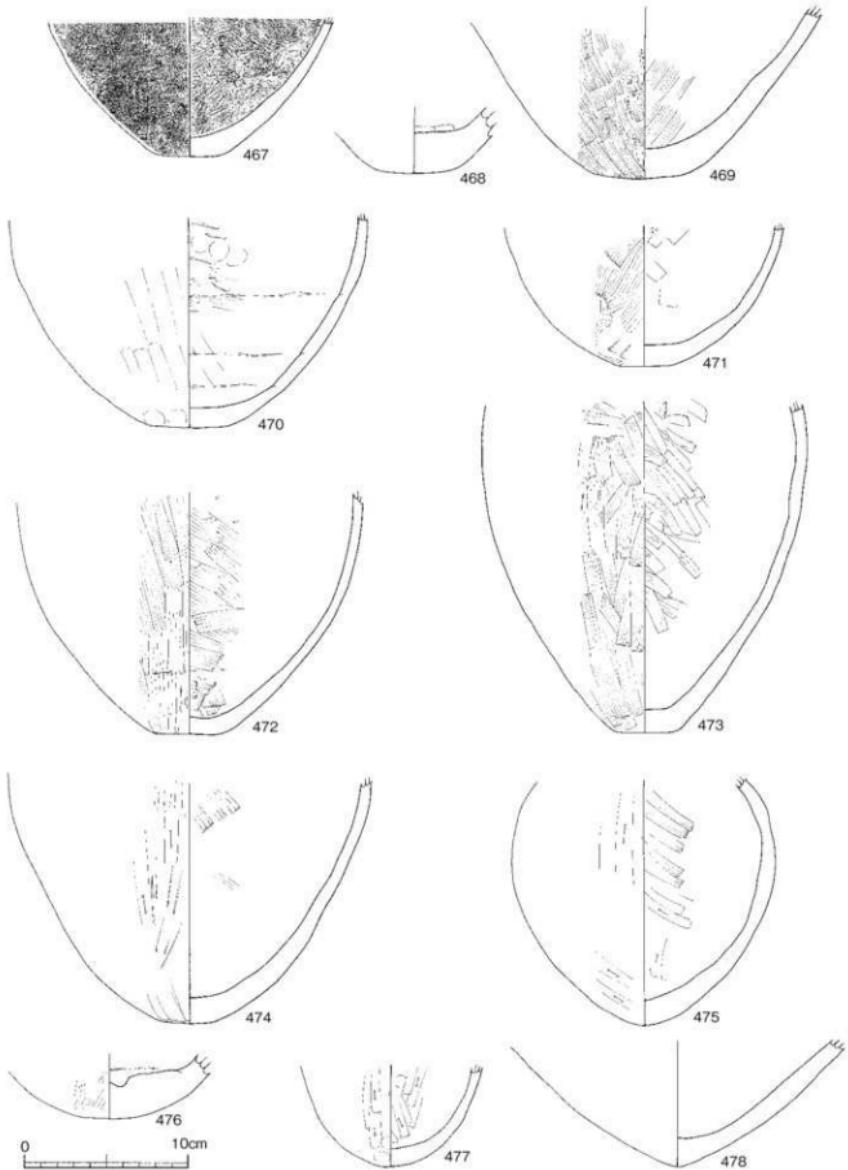
第52図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (31)



第53図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (32)



第54図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (33)



第55図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (34)

(4) 鉢形土器

鉢形土器は、口縁部、胴部、底部合わせて47点を図化した。形式上Ⅰ～Ⅲ類に分類した。

ア Ⅰ類 (第56図479～484)

口径が約10～17cmの小型鉢形土器である。

479～482は口縁部が直線的にのびるもので、479は口唇部がわずかに外反する。482は充実高台気味に肥厚した平底である。483・484は、口縁部が内向しながら立ち上がり、胴部が膨らむ鞠形を呈する。

イ Ⅱ類 (第57図485～497)

口縁部が直線的にのびるものである。

485・486は、口縁部が外反する。485は外面が継位に、内面は横位にハケメ調整を施す。486は口縁端部が欠損している。外面に、ケズリ後ナデ調整を施す。

487～489は、口縁部から底部まで直線的にのびている。490・491は、胴部がやや膨らんで、緩やかに内弯するものである。490は外面にハケメ調整を施し、内面は粗いケズリ調整を施す。492・493は、胴部中央付近から底部にかけて緩やかに内向している。494～497は口縁部である。495は、内外面に粗いケズリ調整を施している。

ウ Ⅲ類 (第58図498～525)

底部を一括したものである。

498～512は、中空をもつ脚台である。513～517は脚台であるが、接地面は欠損している。518は脚台が短い。

519～525は平底を呈する。519・520は充実高台気味に肥厚した平底である。523は底部から胴部にかけて、ほぼ直立気味に立ち上がる。

(5) 高环形土器 (第58・59図526～550)

口縁部、脚柱部、脚部合わせて25点が出土した。

526～528は、頭部の縮まりが強く、内側に段をもつも

のである。外面にミガキ調整を施す。529～531は口縁部のみで、大きく外反する。533～546は脚柱部であり、535～546・548は穿孔を施している。547～550は脚部で幅広がりに大きく外反しながら開く。

(6) 増形土器 (第59図551～560)

551は、底部から口縁部にかけて僅かに外向しながら立ち上がる。553は口縁部が直立し、底部から胴部にかけて強く内弯する。554は、頭部から肩部にかけて強く屈曲し、胴部が強く内弯する。555・556は胴部の一部で、556は算盤玉状を呈する。557～560は底部である。

(7) 手捏ね土器 (第60図561～567)

口径が約8cm以下の小型で、指頭圧痕が全体に残る。

561・562は、胴部が膨らみ鞠形を呈する。563～567は鉢形を呈し、565・566は底部が尖っている。

(8) 蓋類 (第60図568～580)

568～574は底部が大きく外反しており、底部の内面下部にススが付着している。鉢形土器の転用と考えられる。575～580は底の縁部であり、内側にススが付着している。

2 土製品 (第60図581・582)

土製品は鍛錬車と思われるものが2点出土した。

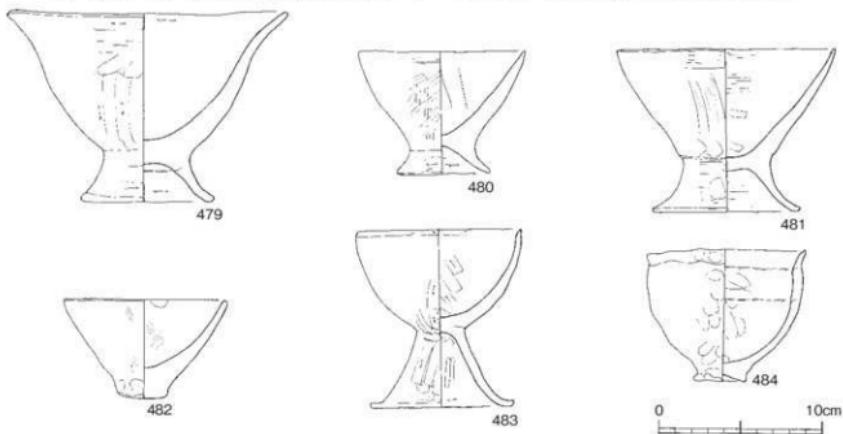
581は、穿孔を施した部分のみが残る。582は、胴部片を利用したものと思われ、中央に穿孔を施す。

3 土師器 (第60図583・584)

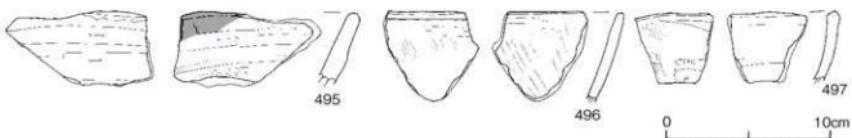
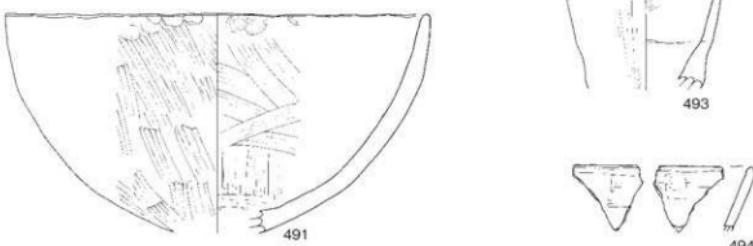
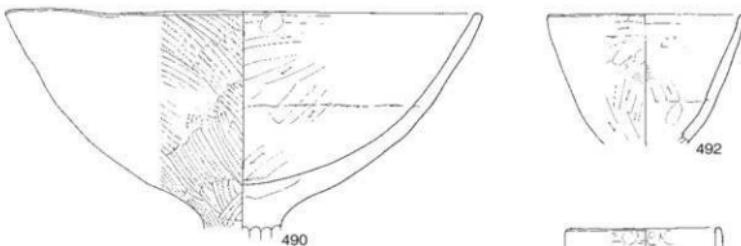
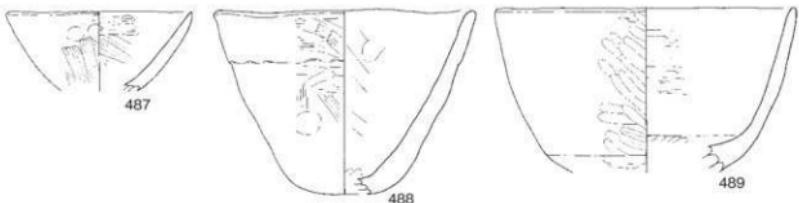
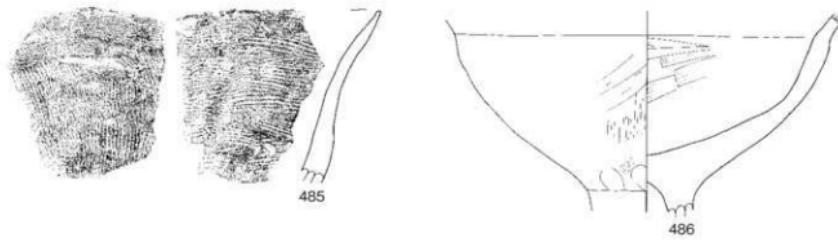
土師器は、古墳時代末期の壺と思われる口縁部が2点出土した。583は、口縁部が直立し、口唇部で大きく外向する。584は、頭部から口縁部の屈曲が強い。

4 須恵器 (第60図585・586)

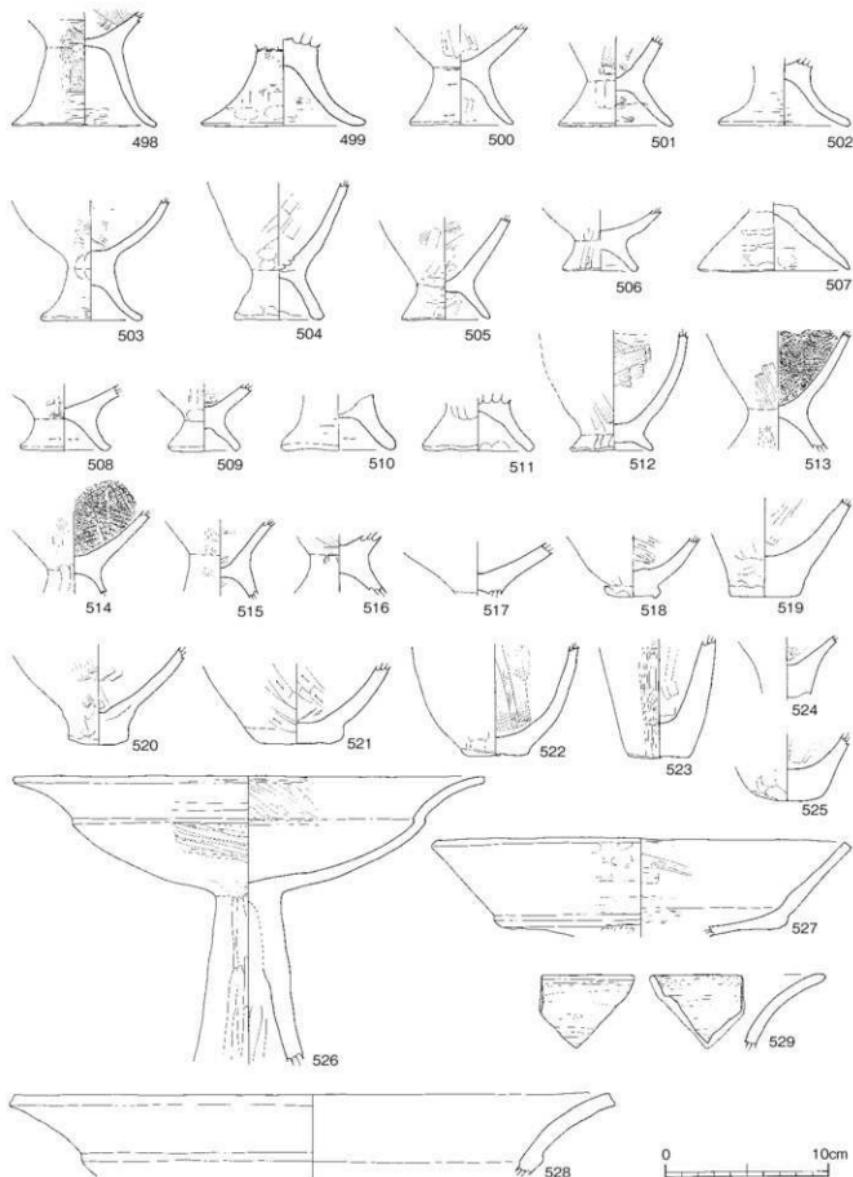
須恵器は、杯身が2点出土した。585は平底で胴部に段をもち、口縁部がやや内向しながら直線的に立ち上がる。586は、高台付の底部で、脚端部が外反する。



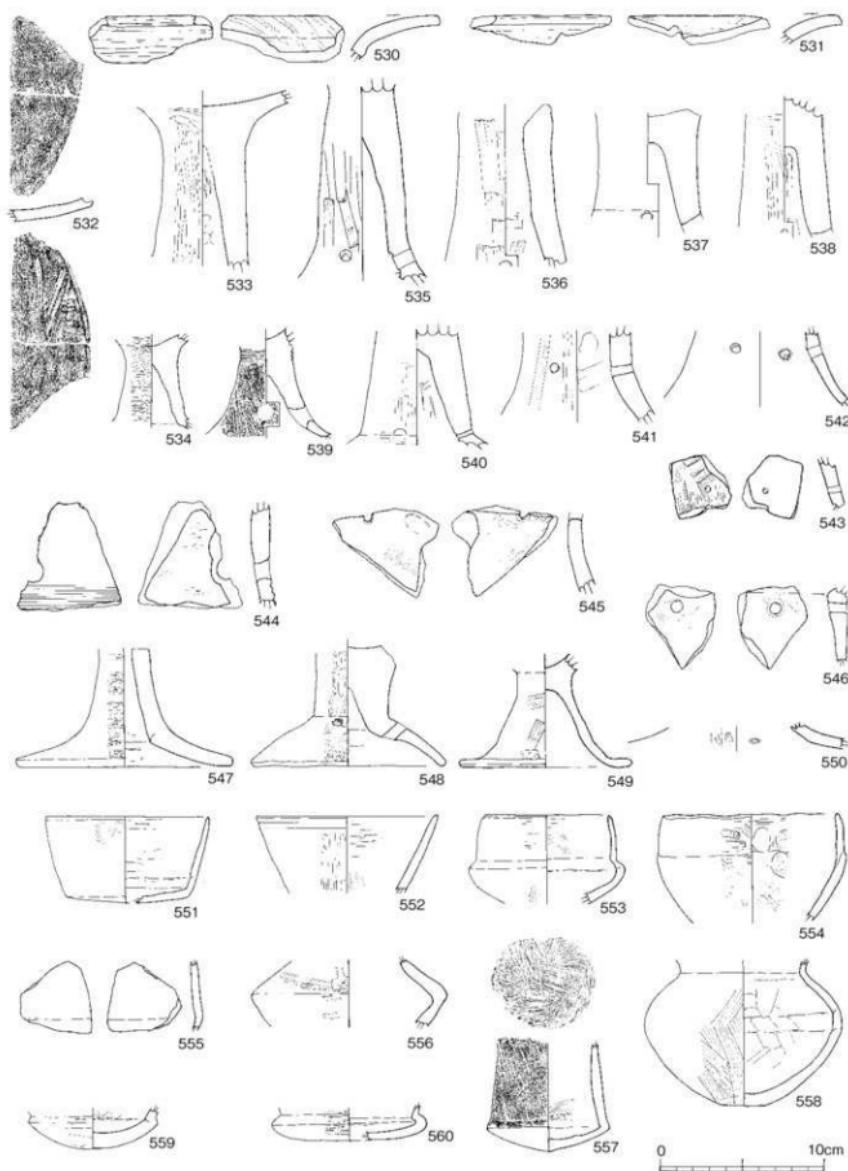
第56図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (35)



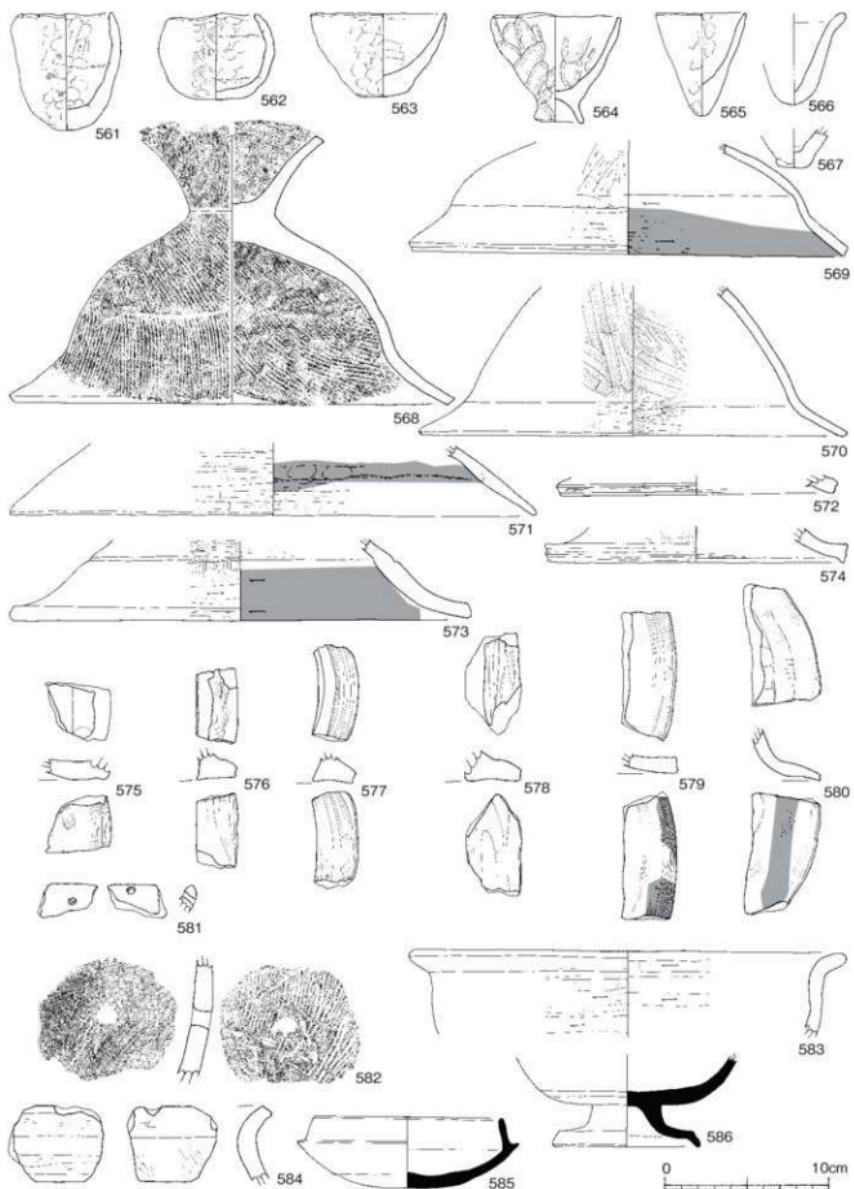
第57図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (36)



第58図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (37)



第59図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (38)



第60図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (39)

5 石器

該期の石器は56点出土した。18点を掲載し、剥片石器と礫石器の2つに分類した。

(1) 剥片石器 (第61図587~589)

ア 磨製石鎌

587は頁岩製であり、全長約48cm、幅約1.9cmのやや大きめの磨製石鎌である。断面はレンズ状を呈する。刃部は表裏両面とも主に横位へ研磨が施されており、基部は縱位に研磨を施す。

イ 石包丁

588は頁岩製であり、全長約7cm、幅約4.5cmの弧状の刃部と直線的な背部をもつ石包丁である。表裏両面だけではなく、背縁や側面にも丁寧な研磨が施されている。穿孔は欠損のため、1か所しか確認できない。

ウ 石核

589は上牛鼻産とみられる黒曜石の小角礫を使用し、平坦打面から小型の剥片を剥離しているものである。

(2) 穂石器 (第61~64図590~604)

ア 磨製石斧

590はホルンフェルス化した頁岩製で、全長約11.3cm、幅約5.4cm、厚さ約2.5cmの磨製石斧である。断面は船形を呈する。

叩打後に丁寧な研磨を行い、体部の整形を施している。刃部には使用痕が残り、背面は使用による欠損と考えられる。

イ 敗石

591は砂岩製で、全長約15.4cm、幅約3.1cmの細長い円錐を使用した敲石である。長軸片側の細い方の突端に著しい敲打痕が見られ、もう一方には敲打痕は見られない。

ウ 四石

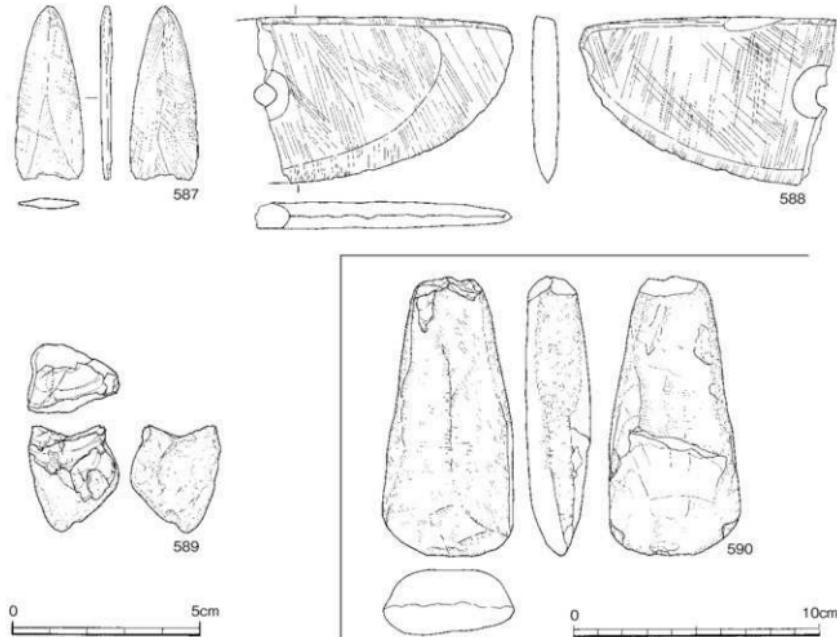
592は半分を欠損している。592・593とも砂岩の円錐を利用したもので、表裏両面の中央に浅く広い敲打痕が見られる。

エ 砥石

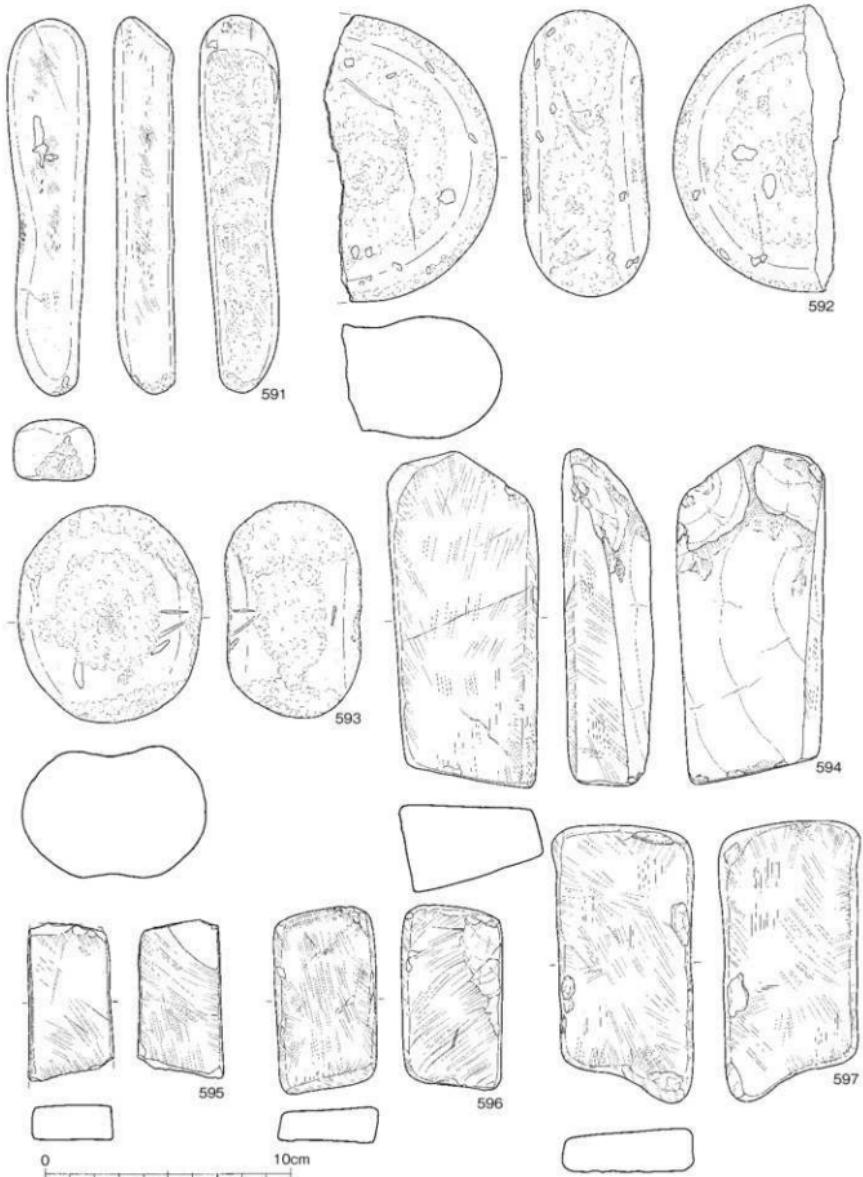
いずれも、頁岩製の礫で平坦面部分を使用している。

594~598は、表裏両面が平坦な長方形を呈している。594は、表面と側面に使用による光沢が見られる。595~598は両面に光沢が見られる。器厚が2cm未満と薄い。

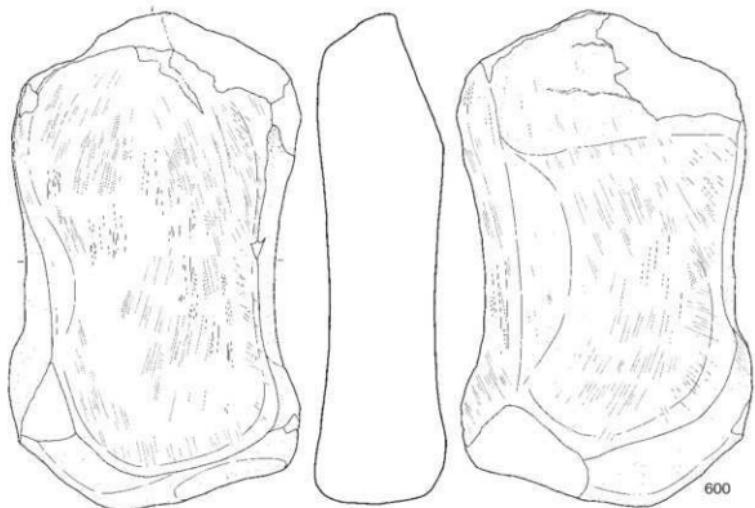
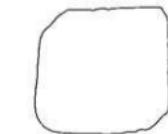
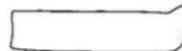
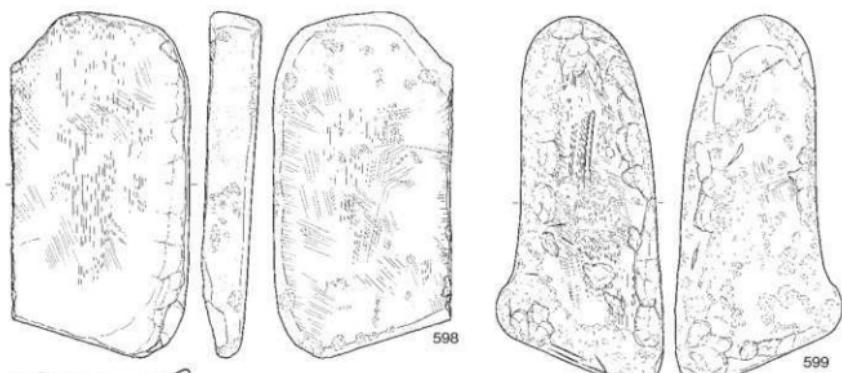
599~600は、不定形で厚い礫の平坦面を使用している。599は断面が方形を呈し、表面の中央部に光沢が見られる。600は表裏全面を使用し、やや中央が凹んでいる。全長が約30cmで重量が6.2kgと、かなり大型の砥石である。



第61図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (40)



第62図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (41)



第63図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (42)

601・602は隅丸方形を呈し、断面が厚い縁を使用している。601は、両面に使用による光沢が見られる。602は断面が台形を呈し、片面のみに使用による光沢が見られる。

603・604は、細長い縦の一部を利用したものである。603は摩耗が激しく、光沢部が点在する。604は、両面に使用による光沢が見られる。

6 石製品（第65・66図605～615）

軽石製品は、約300点余りが出土した。その中で、ほぼ完形に近いものを11点掲載した。形状がはっきりとしたものや穿孔を施すものがあり、浮きあるいは垂飾の類と考えられる。

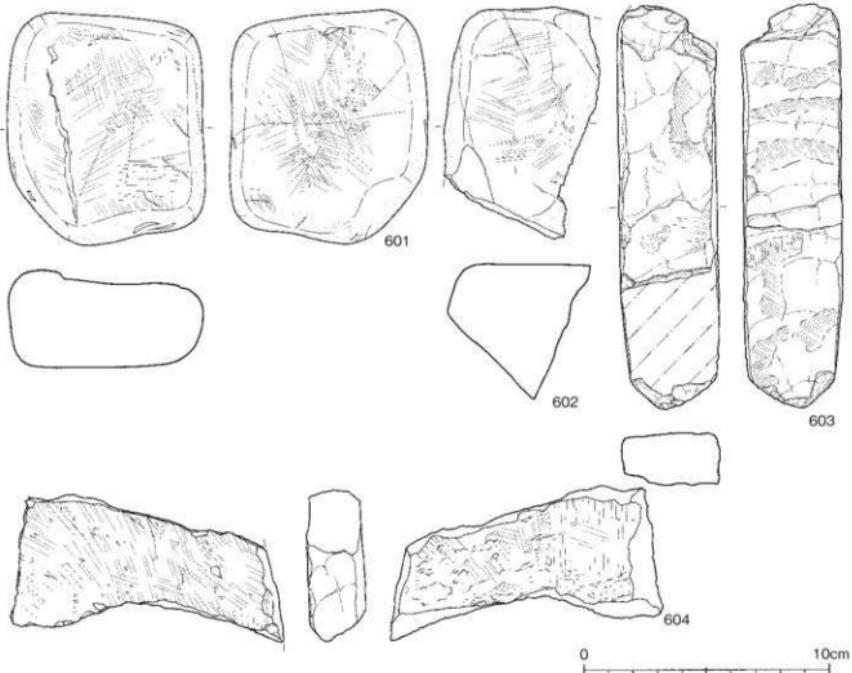
605・606は、平坦面中央部に上下方向から穿孔を施したものである。表裏および側縁に明瞭な擦痕が見られ、扁平状に形成している。605は、全長は約9cm、最大幅約3.2cm、厚さが約1.5cmで三日月状を呈している。606は全長約6cm、幅約4cm、厚さ約1.3cmで隅丸長方形を呈している。

607～611は、凹みをもつ石製品である。607は、船形

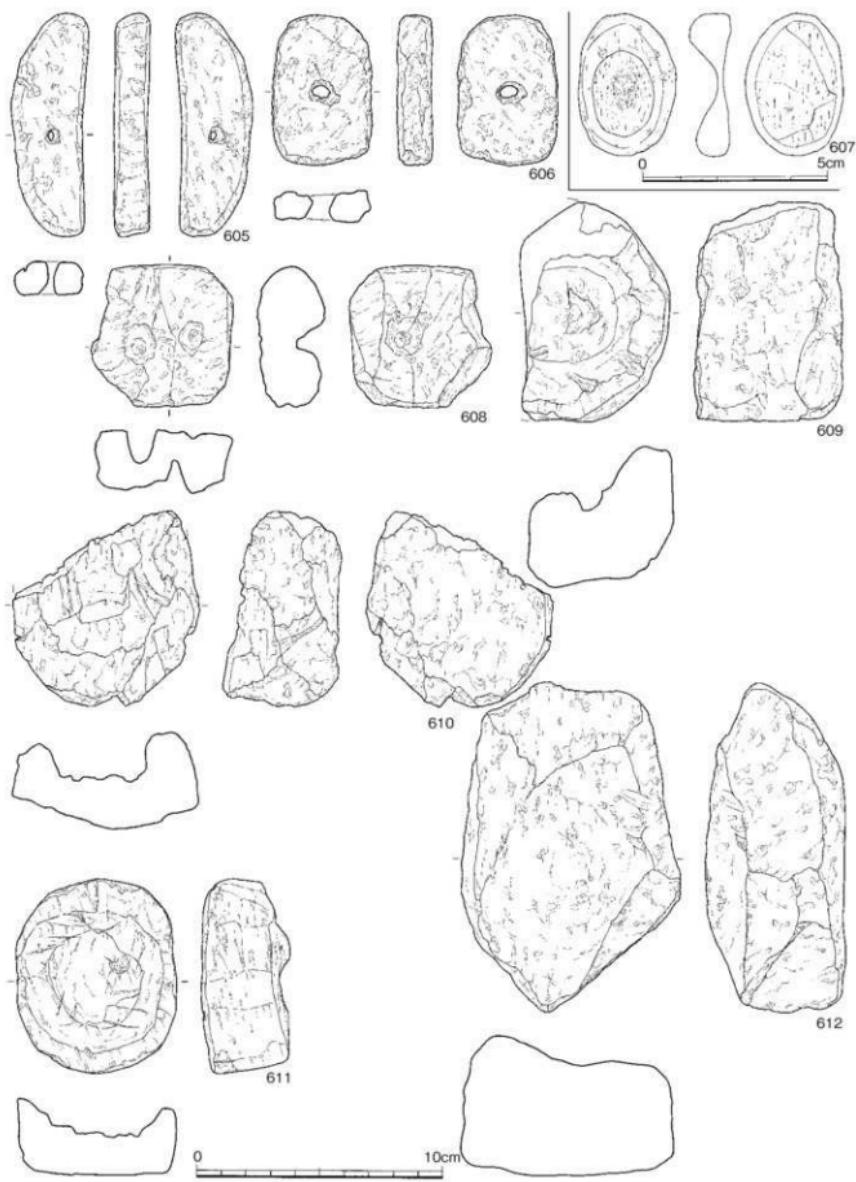
状の凹みをもつ。側縁および下面には擦痕が見られ、丁寧に丸く仕上げられている。608は上面に2か所、下面に1か所の深い凹みをもつ。側縁に擦痕が見られ、調整を施している。609は、V字形の凹みをもつ。左側1/4を欠損しており、下面は擦痕が見られる。610・611は、U字形の凹みをもつ。611は、側縁と下面に擦痕が顕著に見られ、丁寧な調整で仕上げている。

612～614は、上面に浅い凹みが見られ、下面および側縁に擦痕が見られる。613は長方形を呈し、一部欠損している。614は欠損が激しく、大型の軽石を利用したものと思われる。

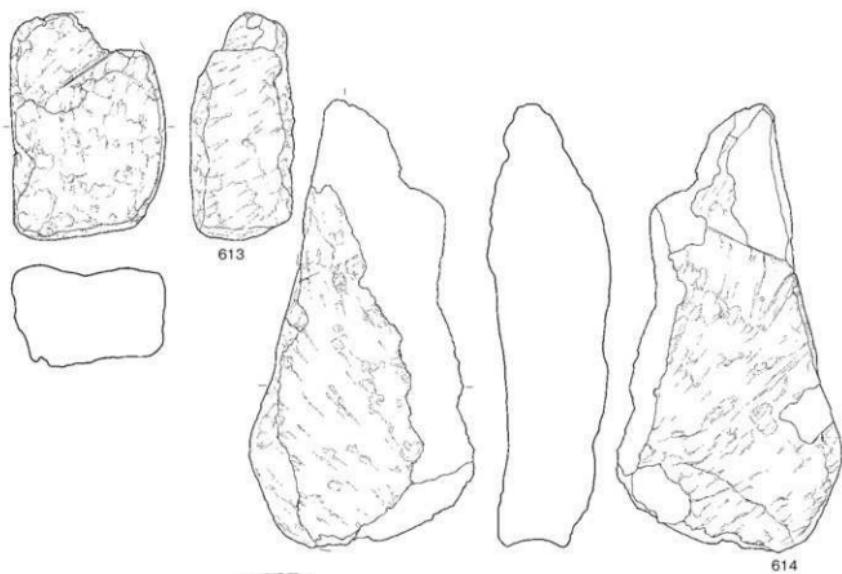
用途については現時点では不明であるが、他の製品と比較して明らかに形状が異なるため、使用目的については今後検討していく必要がある。



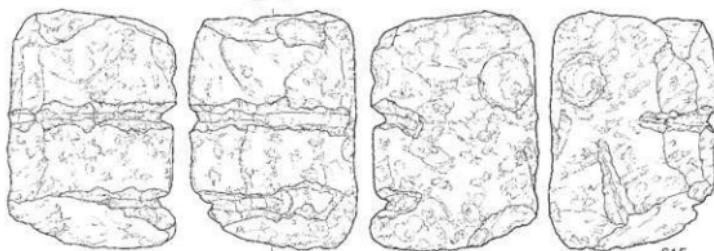
第64図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (43)



第65図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (44)



0 10cm



615



0 10cm

第66図 弥生・古墳時代出土遺物実測図 (45)

表6 残生・古墳時代出土遺物観察表（1）
遺構内遺物

検出番号	レアクト番号	層	区	器種	調整		色調		胎土					備考	
					外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	
11	1	X	W	5	漆	ハケメ漆 ナデケズリ	ナデ	黒褐	にふい褐	○	○	○			2号竪穴住居内出土
	2	X	W	5	鉢	ハケメ	ハケメ	にふい黄褐	明赤褐	○	○	○	○		2号竪穴住居内出土
	3	X	W	5	鉢	ハケメラカゼリ	ハケメ	にふい褐	にふい赤褐	○	○	○			2号竪穴住居内出土
12	4	X	W	6	壺	ナデ	ナデ	黒褐	暗灰青	○	○				3号竪穴住居内出土
	5	X	W	6	鉢	ハケメヘラケズリ	ナデ	オリーブ褐	浅黄	○	○				3号竪穴住居内出土
	6	X	W	6	高杯	ハケメラカゼリ	ナデ	桂	明褐褐	○	○				3号竪穴住居内出土
13	7	X	W	6	壺	ナデ	ナデラミガキ	明黄褐	○	○					3号竪穴住居内出土
	8	X	W	6	壺	ケズリナデ	ケズリナデ	浅黄	浅黄	○	○				3号竪穴住居内出土
	9	X	W	6	鉢	ナデケズリ	ケズリ	にふい黄褐	にふい黄褐	○	○				3号竪穴住居内出土
15	10	X	Y	6	壺	ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○	○				7号竪穴住居内出土
	11	X	Y	6	高杯	ナデ	ナデ	明茶褐	暗茶褐	○	○				7号竪穴住居内出土
16	12	VII	Y	2	鉢	ナデ	ハケメ	暗茶褐	暗茶褐	○	○	○			1号大型土坑内出土
	13	VII	Y	2	壺	ナデ	ケズリ後ナデ	暗茶褐	暗茶褐	○	○				1号大型土坑内出土
18	14	VII	Y	2	壺	ナデ	ハケメ	明赤褐	暗茶褐	○	○				1号大型土坑内出土
	15	X	X	6	壺	ハケメナデ	ナデ	灰褐色	灰褐	○	○	○	○		3号土坑内出土
19	16	X	X	6	鉢	ハクリ	ハクリ	暗褐	暗茶褐	○	○	○	○		3号土坑内出土
	20	VII	V	1	高杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			4号土坑内出土
21	21	VII	Z	3	鉢	ケズリ後ナデ	ナデ	暗茶褐	暗茶褐	○	○				1号ビット内出土
															3号ビット内出土

包含層遺物（土器、土製品、土器師、須恵器）

検出番号	レアクト番号	層	区	器種	調整		色調		胎土					備考	
					外	内	外	内	石英	長石	角閃石	雲母	小礫	滑石	
20	VII	X	3	漆	ハケメ	ナデ	にふい根	にふい黄褐	○						
21	VII	X	3	漆	ナデ	ナデ	にふい根	にふい黄褐	○	○					
22	21	VII	W	2	壺	ナデ	ナデ	にふい黄	にふい黄	○	○	○			
23	VII	W	3	壺	ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○	○	○				スス付箋
24	VII	X	3	壺	ナデ	ナデ	灰青	桂	○	○					
25	VII	X	3	壺	ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○						スス付箋
26	VII	Y	3	壺	ハケメ	ハケメ後ナデ	にふい黄	にふい黄	○						スス付箋
27	VII	Y	2	壺	ナデ	ナデ	黒褐	にふい黄	○						スス付箋
28	VII	X	2	壺	ナデ	ナデ	桂	桂	○	○	○				全雲母
29	VII	Y	3	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○	○					スス付箋
30	VII	X	1	漆	ハクリ後ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○	○	○				
31	VII	X	3	壺	ハラナデ	指頭压痕	暗褐	浅黄	○						
32	VII	X	2	壺	ナデ	ナデ	にふい根	にふい根	○	○	○				全雲母
33	VII	X	3	壺	ハラナデ	指頭压痕	暗褐	浅黄	○						
34	VII	X	3	壺	ナデ	ナデ	暗褐	暗褐	○						
35	VII	X	2	壺	ナデ	ナデ	赤褐	根	○	○	○				
36	VII	X	1	壺	様ハラナデ	指頭压痕	明黄褐	明黄褐	○						
37	VII	W	3	壺	ハケメ	ハケメ後ナデ	桂	にふい根	○						
38	VII	Y	2	壺	ナデ	ナデ	にふい黄	にふい黄	○						
39	VII	X	2	壺	ナデ	工具ナデ	黒褐	黑褐	○						
40	-	Y	2	壺	ヘラケズリ	ヘラケズリ	赤褐	暗褐	○						
41	VII	Y	2	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	赤褐	にふい根	○						
42	VII	X	3	壺	ハケメ後ナデ	ナデ	黒褐	明褐灰	○						
43	VII	W	3	漆	工具ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	○						スス付箋
44	VII	W	3	漆	工具ナデ	ナデ	にふい黄褐	明灰青	○	○	○				スス付箋
45	VII	X	3	漆	ナデ	ナデ指頭压痕	にふい赤褐	にふい赤褐	○	○	○				スス付箋
46	VII	X	3	漆	ハケメ	ハケメ後ナデ	黒褐	にふい根	○						
47	VII	Y	6	壺	ハラナデ	ナデ	灰青	にふい黄褐	○						
48	VII	W	2	壺	工具ナデ	ハケメ後ナデ	赤褐	赤褐	○						
49	VII	W	2	壺	ナデ指頭压痕	ナデ	にふい黄	にふい黄	○						
50	VII	X	3	壺	ナデ	灰青	にふい黄褐	にふい黄褐	○						
51	VII	Y	2	壺	ナデ	ナデ指頭压痕	にふい根	にふい根	○						
52	VII	W	2	壺	ナデ	ナデ	黃褐	黃褐	○	○	○				
53	VII	Y	7	壺	ヘラナデ	ヘラナデ	にふい黄褐	反青褐	○	○	○				
54	VII	X	2	壺	ナデ	ナデ	黃褐	黃褐	○	○	○				
55	VII	W	2	壺	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	○						
56	VII	Y	7	壺	ヘラナデ	ヘラナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	○	○	○				
57	VII	X	3	壺	ナデ	ナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	○	○	○				
58	VII	X	3	壺	ヘラナデ	ヘラナデ	にふい黄褐	にふい黄褐	○	○	○				

表7 拘生・古墳時代出土遺物観察表（2）

辨認 番号	レイアラ 番号	層	区	器種	調整		色調		胎 土						備考	
					外	内	外	内	石英	高石	角閃石	雲母	小礫	漂石	その他	
23	59	VII	Y	2	便	ハラナデ	ハラナデ	にふい黄橙	灰褐色	○	○	○				
	60	VII	Y	3	便	ハケメ	ハラケズリ	にふい黄橙	にふい黄橙	○						
	61	VII	Y	2	便	ハケメ	ハラナデ	にふい黄橙	にふい黄橙	○	○					
	62	VII	X	2	便	ナテ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	○						スス付蓋
	63	VII	W	3	便	ナテ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	○	○					
	64	VII	X	2	便	ハケメナデ	ハケメナデ	にふい黄	にふい黄橙	○	○					
	65	VII	X	2	便	ナテ	ナテ	性	性	○						
	66	VII	b	3	便	ナデケズリ	ナデケズリ	浅黃	○	○	○					
	67	VII	X	3	便	ナテ	にふい橙	にふい橙	○							
	68	VII	X	3	便	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	灰青褐	灰青褐	○	○	○				スス付蓋
24	69	VII	X	3	便	ナテ	ナテ	性	にふい橙	○	○					
	70	VII	X	3	便	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	にふい橙	にふい橙	○						
	71	VII	X	3	便	ナテ	ナテ	にふい橙	橙	○	○	○				
	72	VII	X	3	便	ハラナデ	ハラナデ	にふい橙	にふい橙	○						
	73	VII	Y	3	便	ハケメ	ナテ	性	にふい橙	○						
	74	VII	Y	3	杏	ハケメ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	○	○					
	75	VII	X	3	便	ナテ	ナテ	性	性	○						
	76	VII	W	2	便	ナテ	ナテ	にふい褐	にふい褐	○	○					スス付蓋
	77	VII	X	3	便	ナテ	ナテ	にふい橙	にふい橙	○						スス付蓋
	78	VII	X	3	便	工具ナデ	工具ナデ	にふい黄	にふい黄	○						
25	79	VII	X	2	便	ハラナデ	ハラナデ	にふい橙	にふい橙	○						
	80	VII	Y	3	便	ナテ	ナテ	性	にふい橙	○	○	○				スス付蓋
	81	VII	U	1	便	ナテ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙							
	82	VII	-	2	便	ナテ	ナテ	にふい橙	にふい黄橙	○	○					
	83	VII	X	2	便	工具ナデ	ナテ	性	黄橙	○						
	84	VII	X	3	便	ハケメ	ハラナデ	にふい橙	にふい橙	○	○					
	85	VII	Y	2	便	ナテ	機能ナデ	灰褐	灰褐	○	○	○				
	86	VII	Y	3	便	機能ナデ	機能ナデ	灰褐	灰褐	○	○	○				
	87	VII	X	2	便	ハケメ	ハケメ	明黄褐	明黄褐	○	○	○				○
	88	VII	W	2	便	工具ナデ	ハラナデ	性	性	○						スス付蓋
26	89	VII	W	2	便	ハラケズリ	ハラケズリ	にふい黄橙	にふい黄橙	○	○					
	90	VII	W	2	便	ハケメ	ハケメ後工具ナデ	にふい赤褐	にふい黄橙	○						
	91	VII	W	3	便	ハケメ	ハケメ	にふい赤褐	性	○						
	92	VII	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	性	性	○						
	93	VII	X	3	便	ナテ	ナテ	にふい橙	にふい黄橙	○						
	94	VII	W	2	便	ナテ	ナテ	性	黄橙	○	○	○				
	95	VII	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	性	性	○						
	96	VII	Y	3	便	ナテ	ナテ	にふい橙	にふい黄橙	○	○					スス付蓋
	97	VII	Y	3	便	ナテ	ナテ	にふい褐	にふい褐							スス付蓋
	98	VII	W	2	便	ナテ	ナテ	にふい黄橙	にふい黄橙	○						スス付蓋
27	99	VII	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	浅黃	浅黃	○	○	○				スス付蓋
	100	VII	W	2	便	ハラナデ	ハラナデ	性	明赤褐	○	○	○				スス付蓋
	101	VII	X	2	便	ハラナデ頭頂痕	工具ナデ	性	性	○						スス付蓋
	102	VII	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	にふい橙	にふい橙	○	○					スス付蓋
	103	VII	W	2	便	ケズリ	ケズリ	性	性	○						スス付蓋
	104	VII	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	にふい橙	性	○						スス付蓋
	105	VII	W	3	便	工具ナデ	工具ナデ	にふい橙	にふい橙	○	○	○				
	106	VII	W	3	便	ハケメ	ケズリ	にふい橙	にふい褐	○	○	○				
	107	VII	W	2	便	ケズリナデ	ヘラナデ	にふい黄橙	黑褐	○						
	108	VII	Y	3	便	ハケメ	ハケメ	にふい橙	性	○						
28	109	VII	X	7	便	ケズリ	工具ナデ	黑褐	性	○						一全体
	110	VII	X	8	便	工具ナデ	工具ナデ	にふい橙	性	○						
	111	VII	W	2	便	工具ナデ	ナテ	透黃	にふい橙	○						
	112	VII	X	2	便	ハラナデ	ハラナデ	性	性	○						
	113	VII	W	2	便	工具ナデハケメ	工具ナデハケメ	性	にふい橙	○	○	○				スス付蓋
	114	VII	W	3	便	工具ナデハケメ	工具ナデハケメ	にふい橙	にふい橙	○	○	○				ススゴケ付蓋
	115	VII	W	1	便	ナテ	ナテ	透褐	透白	○	○	○				スス付蓋
	116	VII	W	2	便	ナテ	ナテ	にふい橙	にふい橙	○	○	○				スス付蓋
	117	VII	W	3	便	ハケメ	ハケメナデ	浅黃	性	○						
	118	VII	W	2	便	工具ナデ	ナテ	にふい黄橙	明赤褐	○						
29	119	VII	W	2	便	工具ナデ頭頂痕	ハラナデ	明赤褐	赤褐	○	○	○				
	120	VII	W	2	便	工具ナデ	ナテ	暗灰黃	性	○	○	○				スス付蓋

表8 挿生・古墳時代出土遺物観察表（3）

辨認番号	レイアウト番号	層	区	器種	調整		色調		胎 土					備考	
					外	内	外	内	石英	黄玉	角閃石	雲母	小輝	透石	
29	121	VI	W	3	便	ハケメ指頭压痕	ハケメ指頭压痕	にぶい橙	根	○	○	○			スス付蓋
	122	VI	W	2	便	ナテ	ナテ	にぶい根	根	○	○	○			スス付蓋
	123	VI	W	2	便	ハケメ後ナテ	ハケメ後ヘラナテ	根	明黄根	○	○		○		
	124	VI	W	3	便	ナテ	ナテ	にぶい根	根	○	○				
	125	VI	X	4	便	ハラケズリ	ハケメ後ナテ	にぶい根	明黄根	○	○				
30	126	VI	Y	3	便	ハラケズリ	ヘラナテ	にぶい根	透黄	○	○				
	127	VI	Y	3	便	ナテ	ナテ指頭压痕	にぶい根	にぶい根	○	○				スス付蓋
	128	VI	X	3	便	ナテ	ナテ	黒褐	にぶい根	○	○				
	129	VI	W	2	便	ハケメ後ナテ	ハケメナテ	にぶい根	根	○	○	○			一個体
	130	VI	Y	2	便	ハケメ	ハケメ	根	根	○	○				スス付蓋
31	131	VI	Y	3	便	ナテ	ハケメ	にぶい根	黄根	○	○	○			スス付蓋
	132	VI	W	2	便	ハケメ	ハケメ指頭压痕	明黄根	根	○	○				
	133	VI	W	2	便	ハケメ後ナテ	ハケメ	にぶい根	にぶい根	○	○				一個体
	134	VI	Y	2	便	ハケメ	工具ナテ指頭压痕	にぶい黄根	にぶい根	○	○	○			
	135	VI	W	2	便	ハケメ	ナテ	にぶい根	根	○	○				スス付蓋
32	136	VI	W	2	便	ハケメナテ	ナデミガキ	にぶい根	にぶい根	○	○		○		スス付蓋
	137	VI	W	3	便	ケズリ	ケズリ	にぶい黄根	にぶい根	○	○				スス付蓋
	138	VI	W	3	便	ハケメ	ケズリ後ナテ	反褐	根	○	○				ススコゲ付蓋
	139	VI	X	3	便	ハケメ	ハケメ	根	黄根	○	○				スス付蓋
	140	VI	W	2	便	ナテ	ナテ	根	根	○	○				
33	141	VI	W	3	便	ハケメナテ	ハケメ	にぶい根	根	○	○				スス付蓋
	142	VI	X	2	便	ハケメ	ハケメ	にぶい根	透黄	○	○				
	143	VI	X	3	便	工具ナテ	工具ナテ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	144	VI	X	3	便	ナテ	ナテ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	145	VI	Y	3	便	ハラナテ	ハラナテ	淡根	根	○	○				スス付蓋
34	146	VI	W	2	便	ナテ後指頭压痕	指頭压痕後ナテ	にぶい根	にぶい根	○	○	○			スス付蓋
	147	VI	W	2	便	ナテ	ナテ	反褐	にぶい根	○	○	○			スス付蓋
	148	VI	W	3	便	ナテ後指頭压痕	工具ナテ	にぶい根	根	○	○				スス付蓋
	149	VI	X	3	便	ナテ	ナテ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	150	VI	X	3	便	ハケメ後ナテ	ナテ	にぶい根	根	○	○				
35	151	VI	X	3	便	指頭压痕	ナテ	にぶい根	根	○	○				
	152	VI	X	4	便	ナテ後指頭压痕	ナテ後指頭压痕	にぶい根	根	○	○				
	153	VI	W	2	便	ケズリ	ケズリ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	154	VI	X	3	便	ハケメ	ハケメ	にぶい黄根	灰黄根	○	○	○			
	155	VI	a	3	便	ナテ	ナテ	にぶい根	根	○	○				
36	156	VI	X	1	便	ハラナテ	ハラナテ	にぶい黄根	にぶい根	○	○	○			
	157	VI	Y	2	便	工具ナテ	工具ナテ	暗灰黄	透黄	○	○				
	158	VI	Y	2	便	ナテ	ナテ	黒褐	根	○	○				
	159	VI	X	3	便	ヘラケズリナテ	ナテ	にぶい根	透黄	○	○	○	○		
	160	VI	Y	2	便	ヘラケズリ	ヘラケズリ	反褐	根	○	○				
37	161	VI	X	2	便	ハラナテ	ナテ	にぶい黄根	灰白	○	○				
	162	VI	X	3	便	工具ナテ	工具ナテ	反褐	にぶい根	○	○				
	163	VI	X	3	便	工具ナテ	工具ナテ	透黄根	灰黄	○	○				
	164	VI	X	3	便	ナテ	ナテ	黒褐	赤褐	○	○				
	165	VI	X	4	便	ハケメ	ハケメ	根	根	○	○	○			
38	166	VI	a	2	便	工具ナテ	工具ナテ	根	根	○	○	○			
	167	VI	a	3	便	ナデケズリ	ナデケズリ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	168	VI	X	1	便	ナテ	ナテ	にぶい根	にぶい黄根	○	○				
	169	VI	X	2	便	ハラナテ	ハラナテ	反褐	にぶい根	○	○				
	170	VI	X	3	便	ハラナテ	ハラナテ	黒褐	透黄	○	○				
39	171	VI	X	2	便	横ナテ	ナテ	浅黄根	明黄根	○	○				
	172	VI	Y	3	便	ハケメ	ハケメ	反褐	にぶい根	○	○	○			
	173	VI	Y	2	便	工具ナテ	工具ナテ	黒褐	灰黄根	○	○	○			
	174	VI	W	2	便	ハケメ	ハケメ	にぶい根	にぶい根	○	○				
	175	VI	W	2	悉	ナテ	ナテ	根	根	○	○	○			
40	176	VI	X	3	便	ヘラナテケズリ	ナテ	にぶい黄根	根	○	○				
	177	VI	Y	3	悉	ミガキ	ミガキ	透黄根	透黄根	○	○				スス付蓋
	178	VI	X	2	悉	ナテ後ハケメ	ナテ指頭压痕	根	根	○	○	○			
	179	VI	X	3	便	工具ナテ	工具ナテ	黒褐	にぶい青根	○	○				
	180	VI	Y	3	便	ハケメ	ハケメ	黒褐	透黄	○	○				
41	181	VI	W	2	便	ハケメ	ハケメ	灰白	灰白	○	○				スス付蓋
	182	VI	W	3	便	ハケメ	ハケメ	透黄	にぶい根	○	○	○			

表9 挿生・古墳時代出土遺物観察表（4）

辨認 番号	レイアラ 番号	層	区	器種	調整		色調		胎土					備考					
					外		内		外		内		石英	高石	角閃石	雲母	小礫	漂石	
					ナデ	ナデ指頭圧痕	ナデ	にぶい黄褐色	根	○	○	○							
34	183	VI	W	2	便	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	暗赤褐色	根	○	○	○							
	184	VI	X	2	便	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	暗赤褐色	根	○	○	○							
	185	VI	X	3	便	ケズリ	ケズリ	にぶい黄褐色	根	○	○								
	186	VI	X	4	便	ナデ	ケズリ	にぶい根	根	○	○						○		コゲ付蓋
	187	VI	X	2	便	ミガキハケメ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	○	○	○							
	188	VI	W	2	巻	ハクリ	ハケメ	灰褐色	根	○									
35	189	VI	X	1	便	ハケメ	ハケメ	黒	にぶい黄褐色	○	○								
	190	VI	X	2	便	ハケメ	ケズリ	にぶい根	にぶい黄褐色	○	○								
	191	VI	Y	3	便	ハケメ	ハケメ	黒褐	根	○	○	○							スス付蓋
	192	VI	W	2	便	ナデ	ナデ	根	根	○	○	○							
	193	VI	W	2	便	ケズリナデ	ナデ	黒褐	明赤褐色	○	○	○							スス付蓋
	194	VI	W	2	便	ハケメ	ナデ	黒褐	明赤褐色	○	○								
36	195	VI	Y	3	便	ハラケズリ	ハラナデ	黒褐	淡黃	○	○	○							
	196	VI	Y	4	便	ハラケズリナデ	ハラナデ	灰褐色	淡黃	○	○	○							
	197	VI	X	1	便	工具ナデ	ナデ	黒褐	にぶい赤褐色	○									
	198	VI	X	3	便	ケズリ	ケズリ	黒褐	にぶい赤褐色	○									
	199	VI	W	2	便	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい根	○	○	○							
	200	VI	Y	2	便	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい根	根	○	○								
37	201	VI	X	3	便	ケズリ指頭圧痕	ケズリ指頭圧痕	にぶい根	にぶい根	○	○	○							
	202	VI	X	3	便	ハケメ	ミガキ	にぶい根	にぶい根	○	○	○							
	203	—	W	2	便	ハラナデ後ナデ	ハケメ	黒褐	根	○	○								
	204	VI	X	3	便	ハラナデ	ハラナデ指頭圧痕	にぶい赤褐色	根	○	○	○							スス付蓋
	205	VI	Y	2	便	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄褐色	○	○	○							
	206	VI	Y	2	便	ナデ	ハケメ	にぶい根	明黄褐色	○	○	○							
38	207	VI	Y	2	便	ハラケズリ	ハラケズリ	にぶい根	にぶい根	○	○	○							
	208	—	X	3	便	ナデ	ナデ	明赤褐色	根	○	○	○							
	209	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	灰褐色	明赤褐色	○	○								
	210	VI	—	—	便	ナデ	ナデ	灰褐色	明赤褐色	○	○								
	211	VI	Y	3	便	ハラナデ	ハラナデ	黒	にぶい青褐色	○									
	212	VI	X	3	便	ミガキ	ハラナデ	灰褐色	にぶい黄褐色	○	○								
39	213	VI	X	2	便	ハケメ	根ナデ	にぶい黄褐色	淡黄褐色	○	○								
	214	VI	X	3	便	ナデ	にぶい根	にぶい黄褐色	淡黄褐色	○	○								スス付蓋
	215	VI	X	3	便	ハケメ	ハケメ後ナデ	灰褐色	淡黄褐色	○	○								
	216	VI	X	3	便	ナデ	にぶい根	根	○	○	○								
	217	VI	W	3	便	ナデハラケズリ 指頭圧痕	ハラナデ	にぶい黄褐色	にぶい根	○	○	○							
	218	VI	X	2	便	ハラナデ	ハラナデ	根	明赤褐色	○	○	○							
40	219	VI	a	3	便	ハケメ	ハケメ	根	根	○	○								
	220	VI	X	3	便	ハラナデ	ハラナデ	淡黄褐色	根	○	○	○							
	221	VI	Y	2	便	ハラケズリ	ハラケズリ	淡黄	にぶい根	○	○								
	222	VI	X	3	便	工具ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐色	根	○	○								
	223	VI	X	1	便	ミガキナデ	ナデ	根	根	○	○								
	224	VI	X	3	便	工具ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい根	○	○								スス付蓋
41	225	VI	W	3	便	ナデ	ナデ	淡黄褐色	にぶい根	○	○								
	226	VI	W	2	便	工具ナデ	工具ナデ	にぶい根	にぶい黄褐色	○	○								
	227	VI	Y	2	便	ハケメ	ケズリ	黒褐	灰褐色	○	○								
	228	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	黒褐	灰褐色	○	○								
	229	VI	X	1	便	ナデ	ナデ	根	根	○	○								
	230	VI	X	3	便	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	明褐色	○	○								
42	231	—	Y	2	便	工具ナデ	工具ナデ	黒褐	にぶい黄褐色	○	○								
	232	VI	X	3	便	工具ナデ	工具ナデ	根	淡黄	○	○	○							
	233	VI	Y	2	便	工具ナデ	工具ナデ	灰褐色	にぶい根	○	○								
	234	VI	Y	2	便	工具ナデ	工具ナデ	にぶい根	麻斑	○	○								
	235	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	灰褐色	にぶい赤褐色	○	○								スス付蓋
	236	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	灰褐色	根	○	○								スス付蓋
43	237	VI	a	3	便	ナデ	ナデ	根	にぶい赤褐色	○	○								
	238	VI	X	3	便	ハラナデ	ハラナデ	黒褐	にぶい赤褐色	○	○								
	239	VI	Y	2	便	ナデ	ナデ	黒	にぶい根	○	○	○							
	240	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	根灰	にぶい黄褐色	○	○								スス付蓋
	241	VI	Y	2	便	ナデ指跡	ナデ指跡	にぶい黄褐色	根	○	○								
	242	VI	X	3	便	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	根	○	○								
44	243	VI	X	3	便	ナデ	工具ナデ	黒褐	根	○	○								
	244	VI	Y	2	便	ハラケズリ	ハラケズリ	にぶい黄褐色	にぶい根	○	○								スス付蓋

表10 弥生・古墳時代出土遺物観察表（5）

辨認 番号	レアラク 番号	層	区	器種	調整		色調		胎 土					備考	
					外	内	外	内	石英	黄玉	角閃石	雲母	小礫	漂石	
37	245	W	X 1	便	ナデ	ナデ	に赤い楓	に赤い楓	○	○					
	246	-	Y 2	便	ナデ	ナデ	ナデ指頭痕	黒楓	に赤い楓	○					
	247	VI	X 2	便	ハケメ指頭痕	ハケメ	に赤い楓	明赤楓	○	○	○				
	248	VI	X 3	便	ハケメ	ハケメ	に赤い楓	明赤楓	○	○	○				
	249	VI	W 2	便	ナデ	ナデ	に赤い黄楓	に赤い楓	○	○					
	250	-	X 3	便	ナデ	ナデ	ナデ指ナデ	楓	灰黄楓	○	○				スス付蓋
	251	VI	X 3	便	ナデ	ナデ	ナデ	楓	に赤い楓	○	○				スス付蓋
	252	VI	X 3	便	ハケメ	ナデ	に赤い楓	明赤楓	○	○	○				
	253	VI	Y 2	便	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	楓	に赤い楓	○						
	254	VI	X 3	便	ケズリナデ	ナデ	黒楓	に赤い楓	○	○					
38	255	VI	X 4	便	ハケメ後ナデ	ナデ	楓	楓	○	○					
	256	VI	Y 3	便	ケズリナデ	ハケメ	楓	楓	○	○					
	257	VI	X 3	便	ハケメ	ナデ	楓	楓	○	○					
	258	VI	W 2	便	ナデ	ケズリ後ナデ	に赤い楓	楓	○	○					スス付蓋
	259	VI	Y 3	便	ハケメ	ヘラナデ	に赤い楓	に赤い黄楓	○	○					スス付蓋
	260	VI	Y 3	便	ハケメ	ハケメナデ	楓	に赤い黄楓	○	○	○				スス付蓋
	261	VI	Y 3	便	ハケメ	ハケメ	楓	に赤い楓	○	○	○	○	○		スス付蓋
	262	VI	X 9	便	ナデ	ナデ	明赤楓	楓	○	○					金雲母
	263	VI	X 3	便	ナデ	ハケメ後ナデ	に赤い黄楓	淡黄楓	○						
	264	VI	W 2	便	ナデ	ナデ	に赤い黄楓	に赤い黄楓	○	○					スス付蓋
39	265	VI	Y 2	便	ハケメ	ハケメ指頭痕	灰黄楓	楓	○	○					
	266	VI	Y 2	便	ナデ	ナデ	に赤い楓	楓	○	○					
	267	X	V 2	便	工具ナデ	ナデ	淡青楓	青楓	○						
	268	VI	Y 2	便	ハケメ	俗ナデ	黒楓	明赤楓	○	○					
	269	VI	Y 3	便	ハケメ	ナデ	に赤い楓	に赤い楓	○	○					
	270	VI	X 1	便	ナデ	ナデ	黒楓	に赤い楓	○	○					
	271	VI	Y 2	便	ナデ	指頭痕ナデ	黒楓	に赤い楓	○	○					スス付蓋
	272	VI	X 1	便	ハケメ後ナデ	指頭痕後ナデ	緑楓	明赤楓	○	○					
	273	VI	a 4	便	工具ナデ	ハバメナデ	に赤い黄楓	に赤い黄楓	○	○	○				スス付蓋
	274	VI	X 2	便	ハケメ	ハケメ	に赤い楓	に赤い楓	○	○	○				スス付蓋
40	275	-	X 4	便	ハケメ	ハケメ	黒楓	に赤い楓	○	○					スス付蓋
	276	VI	X 5	便	ナデ	ナデ	指頭痕後	楓	楓	○	○				
	277	VI	W 2	便	ハケメ	ハケメ	楓	楓	○	○					
	278	VI	W 2	便	工具ナデ	ナデ	指頭痕	黒楓	に赤い楓	○	○				
	279	VI	W 2	便	工具ナデ	ナハケメ	に赤い楓	に赤い楓	○	○					
	280	VI	W 3-4	便	ケズリナデ	ケズリナデ	に赤い黄楓	に赤い黄楓	○	○	○				
	281	VI	X 3	便	ケズリ	ハバメナデ	黒楓	明赤楓	○	○					
	282	VI	X 1	便	ハケメ	ハケメ	灰楓	灰楓	○	○					
	283	VI	W 2	便	工具ナデ	工具ナデ	に赤い黄	明黄楓	○	○					
	284	VI	W 2	便	ケズリ	ケズリ	に赤い楓	楓	○	○					ススコゲ付蓋
41	285	VI	W 3	便	ハケメ	ハケメ	に赤い楓	楓	○	○					
	286	VI	W 2	便	ハケメ	工具ナデ	に赤い黄	に赤い黄	○	○					
	287	VI	W 2	便	ハケメ	工具ナデ	に赤い楓	淡黄楓	○	○					
	288	VI	W 2	便	ハケメ	ナデ後ハケメ	黒楓	黒楓	○	○	○				
	289	VI	W 3	便	ナデ	ナデ	黒楓	黒楓	○	○	○				
	290	VI	W 4	便	ナデ	ナデ	に赤い楓	楓	○	○					
	291	VI	W 4	便	工具ナデ	工具ナデ	楓	に赤い楓	○	○					
	292	VI	W 2	便	ハラケメ	ナハケメ	黒楓	楓	○	○					
	293	VI	W 2	便	ハケメ	ハケメ	楓	淡黄楓	○	○					
	294	VI	W 2	便	工具ナデ	ナデ	に赤い黄楓	に赤い楓	○	○					
42	295	VI	W 4	便	工具ナデ	ナデ	に赤い楓	に赤い楓	○	○	○				
	296	VI	W 4	便	ハケメ	ハケメ	楓	明赤楓	○	○					
	297	VI	W 4	便	ハケメ	工具ナデ	に赤い黄	に赤い黄楓	○	○					
	298	VI	W 7	便	ケズリ	ケズリ	明赤楓	に赤い楓	○	○	○				
	299	VI	Y 3	便	ハラケメ	ハラケメ	灰楓	灰楓	○	○					
	300	VI	Y 3	便	ハケメ	ナデ	灰楓	灰楓	○	○					
	301	VI	X 2	便	工具ナデ	ナデ	淡黄楓	淡黄楓	○	○	○				
	302	VI	X 2	便	ケズリ	ケズリ	明赤楓	黄楓	○	○	○				
	303	VI	X 2	便	ナデ	ナデ	灰楓	黑楓	○	○					
	304	VI	X 2	便	ヘラケメ指ナデ	ナデ	緑赤楓	緑赤楓	○	○					
	305	VI	X 2	便	ハケメ	ナデ	明赤楓	黒楓	○	○					
	306	VI	X 1	便	指頭痕	指頭痕	楓	楓	○	○					

表11 弥生・古墳時代出土遺物観察表（6）

辨認 番号	レアブ 番号	層	区	器種	調整		色調		胎土					備考					
					外		内		外		内		石英	高石	角閃石	雲母	小礫	透石	その他
42	307	VI	X	1	便	ハケメ	ハケメ	にぶい赤褐	黒褐	○	○								
	308	VI	X	2	便	ハケメ	ハケメ	赤褐	褐	○	○								
	309	VII	Y	3	便	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	○	○								
	310	VI	Y	2	便	ケズリ	指頭圧痕	褐	褐	○	○						○		
	311	VI	X	1	便	ナデ	ナデ	赤褐	褐	○	○								
	312	VI	W	8	便	ケズリ	ケズリ	褐	褐	○	○								輪積み
	313	VI	W	9	便	ハケメ	ハケメ	性	性	○	○								
	314	VI	W	2	便	ナデ	ナデ	黒褐	黒褐	○	○								
	315	VI	W	2	便	ハケメ	ナデ	褐	黒褐	○	○								
	316	VI	X	2	便	ハラケメ	工具ナデ	にぶい黄褐	褐	○	○								○
43	317	X	Y	4	便	ミガキ	工具ナデ	赤褐	褐	○	○	○							
	318	VII	X	1	便	ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	明黄褐	○	○								
	319	VII	W	2	便	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								○
	320	VI	X	2	便	ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	赤褐	○	○								
	321	VI	X	1	便	ヘラナデ	指頭圧痕	黄褐	褐	○	○								
	322	VI	W	2	便	指頭圧痕	ナデ	にぶい黄褐	黒	○	○								
	323	VI	X	2	便	ヘラナデ	ナデ	明赤褐	黄褐	○	○								
	324	VI	W	2	便	ナデ指頭圧痕	ナデ	褐	褐	○	○								
	325	VI	Y	3	便	ハケメ	工具ナデ	性	にぶい橙	○	○	○	○						
	326	VII	X	1	便	ハケメ	ナデ	にぶい橙	黒	○	○	○	○						○
44	327	VI	X	2	便	ナデ	ナデ指頭圧痕	にぶい黄褐	性	にぶい黄褐	○	○	○						
	328	VII	X	1	便	工具ナデ	ハケメ	赤褐	雌赤褐	○	○								○
	329	VII	X	1	便	ハケメ指頭圧痕	ナデ	明褐灰	明褐灰	○	○	○	○						
	330	VI	X	2	便	ヘラナデ	ヘラナデ	性	性	○	○								○
	331	VII	X	3	便	工具ナデ指頭	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	332	VII	W	2	便	ヘラケメ	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	333	VII	W	2	便	ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰	○	○								
	334	VII	W	2	便	指頭圧痕	指頭圧痕	明褐灰	明褐灰	○	○								
	335	VII	X	3	便	ヘラナデ指頭	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	336	VII	Y	2	便	ナデ	ナデ	性	性	○	○								
45	337	VII	W	2	便	ヘラケメ	ヘラケメ	褐	褐	○	○								
	338	VII	W	2	便	ハケメ後ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○								
	339	VII	W	2-3	便	ヘラナデ	工具ナデ	灰褐	灰褐	○	○								
	340	VI	X	2	便	ハケメ	にぶい黄褐	黃棕	○	○									
	341	VI	W	2	便	指頭圧痕ハケメ	指頭圧痕ハケメ	赤褐	赤褐	○	○								
	342	VI	W	3	便	指頭圧痕ケズリ	指頭圧痕ケズリ	赤褐	赤褐	○	○								
	343	VI	W	2	便	ナデ	ナデ	性	性	○	○								
	344	VII	Y	3	便	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○								
	345	VII	W	2	便	ハケメ	指頭圧痕	性	性	○	○								
	346	VII	X	2	便	指ナデ貝と柔痕	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○								
46	347	VII	X	2	便	ヘラナデ指ナデ	ハケメ	にぶい橙	褐	○	○								
	348	VII	X	1	便	ヘラナデ指頭圧痕	ヘラナデ指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	349	VII	X	2	便	ヘラナデ	ヘラナデ	淡黄	黒	○	○								
	350	VII	W	2	便	ナデ	ナデ	性	性	○	○								
	351	VII	X	2	便	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐	○	○								
	352	VII	X	3	便	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	353	VII	X	3	便	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	354	VII	X	3	便	工具ナデ	自ナデ	灰褐	灰褐	○	○								
	355	VII	Y	3	便	ヘラケメ	ヘラケメ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	356	VI	X	1	便	ナデ	にぶい橙	黒	○	○	○								形状がいづ
47	357	VI	X	2	便	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○								
	358	VII	X	3	便	ナデ	性	性	性	○	○								
	359	VII	W	3	便	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○								
	360	VII	X	2	便	指頭圧痕	指頭圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	361	VII	X	2	便	ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	○	○								
	362	VII	X	3	便	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○								
48	363	VII	X	2	便	ハケメ	ナデ	淡黄	黄棕	○	○								
	364	VII	X	3	便	工具ナデ	ナデ	淡褐	淡褐	○	○								
	365	VII	Y	3	便	ヘラケメ	指頭圧痕	性	性	○	○								
	366	VII	X	3	便	ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○								
	367	VII	W	2	便	指ナデ	自ナデ	褐	褐	○	○								
49	368	VII	W	3	便	ナデ	明褐灰	明褐灰	○	○	○								

表12 弥生・古墳時代出土遺物観察表(7)

辨認 番号	レアラ 番号	層	区	器種	調整		色調		胎 土					備考					
					外		内		外		内		石英	高石	角閃石	雲母	小礫	透石	
					ナテ	白ナテ	桜	桜	ナテ	白ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	
44	369	—	Y 2	便	ナテ	白ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	370	VI	W 3	便	ケズリ	指頭圧痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	371	VI	Y 3	便	ナテ	ナテ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	372	VI	X 2	便	ハケメ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	373	VI	X 2	便	ハケメ	後ナテ	ハケメ後ナテ	黒褐	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	374	VI	X 2	便	ナテ	ハケメ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	375	VI	Y 3	便	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	376	VI	X 2	便	ハラナテ	雨ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	377	VI	X 3	便	ヘラナテ	指頭圧痕	ナテ	にぶい桜	黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	378	VI	X 3	便	工具ナテ	工具ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	379	VI	X 3	便	ハラナテ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	380	VI	X 1	便	ハラナテ後ハラ	ハラケズリ	にぶい桜	暗赤灰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	381	VI	Y 3	便	ハラナテ	ハラナテ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	382	VI	X 3	便	ナテ	ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	383	VI	X 2	便	ナテ	ナテ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	384	VI	X 3	便	指頭圧痕	ナテ	暗赤褐	暗赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	385	VI	X 1	便	指頭圧痕	指頭圧痕	明褐	明褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	386	VI	X 2	便	工具ナテ	ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	387	VI	X 3	便	ハケメ	ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	388	VI	X 1	便	ケズリ	工具ナテ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	389	VI	Y 3	便	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	暗赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	390	VI	X 3	便	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	391	VI	Y 4	瓶	ハケメ指頭圧痕	ハケメ指頭圧痕	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	スヌ付蓋
45	392	VI	W 2	杏	ナテ	ナテ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	全金母
	393	VI	W 3	杏	ナテ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	394	VI	W 2	杏	ナテ	ナテ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	395	VI	Y 3	杏	工具ナテ	工具ナテ	にぶい桜	灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	396	VI	Y 3	杏	ナテ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	397	VI	Y 4	杏	ナテ	ナテ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	398	VI	W 2	杏	ナテ	ナテ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	399	VI	Y 3	杏	ナテ	ナテ	淡黄褐	淡黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	400	—	—	杏	ナテ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	401	VI	Y 3	杏	ハケメ	ナテ指頭圧痕	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
46	402	VI	Y 3	杏	ナテ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	403	—	—	杏	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一個体
	404	VI	W 2	杏	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一個体
	405	VI	W 2	杏	ハケメケズリ	ケズリ後ナテ	明赤褐	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一個体
	406	VI	W 2	杏	ケズリ後ハケメ	ケズリ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	一個体
	407	VI	Y 18	杏	ハケメ	ハケメ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	408	—	—	杏	ハケメ	ハケメ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	409	VI	X 3	杏	ハケメ	ハケメ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	410	VI	X 2	杏	ハケメ	ハケメ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	411	VI	W 2	杏	ハケメ	ハケメナテ	明黄褐	明黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
47	412	VI	X 3	杏	ハケメ	ナテ	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	413	VI	W 3	杏	ナテ	指頭圧痕	にぶい桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	414	VI	X 1	杏	ハケメ	ナテ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	415	VI	X 2	杏	ハケメ	ハケメ	明褐反	明褐反	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	416	VI	W 2	杏	ハケメ	ナテ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	417	VI	Y 3	杏	ナテ	ナテ	淡黄褐	淡黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	418	VI	X 1	杏	ハケメ	ナテ	淡黄褐	淡黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	419	VI	X 3	杏	ケズリ	ナテ指頭	黒褐	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	420	VI	Y 2	杏	ケズリ後ハケメ	ナテ	黒褐	黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	421	VI	W 2	杏	ハケメ	ハケメ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
48	422	VI	W 2	杏	工具ナテ	ハケメ	反褐	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	423	VI	X 1	杏	ハケメ	ナテ	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	424	VI	W 2	杏	ハケメ	ケズリ	明褐反	明褐反	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	425	VI	Y 3	杏	ケズリ後ハケメ	指頭圧痕	淡黄褐	淡黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	426	VI	W 2	杏	ケズリ	ケズリ	にぶい桜	にぶい桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	427	VI	W 2	杏	ハケメ	工具ナテ指頭圧痕	桜	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	428	VI	W 2	杏	ハケメ	ナテ	淡褐	淡褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	429	VI	X 1	杏	ハケメ	ハケメナテ	桜	にぶい黄褐	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	430	VI	X 2	杏	ハケメ	ハケメ後ナテ	黒褐	桜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

表13 弥生・古墳時代出土遺物観察表（8）

辨認 番号	レアワ ト番号	層	区	器種	調整		色調		胎土					備考	
					外	内	外	内	石英	高石	角閃石	雲母	小礫	漂石	
49	431	VII	W	2	杏	ハケメナデ	ハケメナデ	褐	褐	○	○				
	432	VII	W	2	杏	ナデ	ヘラナデ	褐	褐	○	○				
	433	VII	X	8	杏	ナデ	ハケメ	褐	褐	○	○	○			
50	434	VII	X	8	杏	ミガキ	指頭圧痕	灰黄	褐	○	○				
	435	VII	Y	2	杏	ハケメ	ケズリ後ナデ	にふい橙	褐	○	○				
	436	VII	W	2	杏	ハケメ	ハケメ指頭圧痕	褐	にふい橙	○	○				
51	437	X	Z	4	杏	ハケメ	指頭圧痕ナデ	浅黄褐	褐	○	○				
	438	X	X	4	杏	ミガキナデ	ナデ	褐	褐	○	○				
	439	—	—	杏	ミガキ壓耗	ハケメ	褐	褐	○	○					朱
52	440	VII	W	2	杏	ケズリナデ	ナデ	褐	黑褐	○	○				
	441	—	—	杏	ハケメ	ハケメ	にふい橙	褐	○	○					
	442	—	—	杏	ハケメ	ハケメ	にふい橙	褐	○	○					
53	443	VII	X	1	杏	ミガキ	ナデ指頭圧痕	褐	褐	○	○	○	○		
	444	VII	Y	2	杏	工具ナデ	ケズリ	褐	黑褐	○	○				
	445	VII	V	1	杏	工具ナデ集積	ヘラナデ	灰黄	暗灰黄	○	○				
54	446	VII	X	9	杏	ナデ	ナデ	浅青	にふい青褐	○	○				
	447	VII	X	1	杏	ハケメ	ハケメ	褐	にふい青褐	○	○				
	448	VII	X	2	杏	ナデ	ナデ	にふい青褐	にふい青褐	○	○		○		
55	449	VII	X	3	杏	ハケメ	ハケメ	黑褐	褐	○	○				
	450	VII	X	7	杏	工具ナデ	ナデ	反黄褐	にふい青褐	○	○				
	451	VII	V	3	杏	工具ナデ	ナデ	褐	明黄褐	○	○				
56	452	VII	W	2	杏	ハケメ後ナデ	ナデ	暗灰黄	黄灰	○	○				
	453	VII	Y	2	杏	楊ナデ	ハケメ	にふい橙	暗褐	○	○				
	454	VII	a	3	杏	ミガキ後ナデ	ナデ	黑褐	にふい青褐	○	○				
57	455	VII	X	2	杏	ハケメ	ナデ指頭圧痕	褐	褐	○	○				
	456	VII	Y	2	杏	ハケメ	ハケメ	にふい黄	にふい橙	○	○				
	457	VII	W	2	杏	ハケメ	ハケメ	褐	褐	○	○				
58	458	VII	X	4	杏	ハケメ	ハケメ	にふい橙	にふい橙	○	○				
	459	VII	X	1	杏	ハケメ後ナデ	ハケメ	にふい黄	黑褐	○	○	○			
	460	VII	W	2	杏	ハケメ	ナデ	褐	褐	○	○				
59	461	VII	W	3-4	杏	ハケメ	工具ナデハケメ	褐	にふい黄	○	○	○			
	462	VII	Y	2	杏	ケズリ	ケズリ	褐	反オーリーブ	○	○				
	463	VII	W	6	杏	ナデ	ハケメ	にふい黄	黑褐	○	○				
60	464	VII	W	2	杏	ハケメ	ハケメ	褐	褐	○	○				
	465	VII	W	2	杏	ケズリ	ケズリ	赤褐	赤褐	○	○				
	466	VII	X	1	杏	ハケメ	ハケメ	褐	灰白	○	○	○	○		
61	467	VII	a	3	杏	ハケメ	ハケメ	にふい黄	にふい青褐	○	○	○			
	468	VII	X	3	杏	ナデ	ヘラナデ	褐	にふい橙	○	○				
	469	VII	X	2	杏	ハケメ後ナデ	ハケメ	にふい黄	灰白	○	○	○			
62	470	VII	X	2	杏	ハケメ	ハケメ後ナデ	褐	黄褐	○	○				
	471	VII	W	2	杏	工具ナデ	ナデ	褐	褐	○	○				
	472	VII	W	2	杏	ハケメ	ハケメ	明褐	灰褐	○	○				
63	473	VII	X	1	杏	ハケメ	ハケメ	褐	褐	○	○				
	474	VII	W	2	杏	ケズリ後ハケメ	ナデ	褐	褐	○	○	○			
	475	VII	W	2	杏	ハケメケズリ	工具ナデ	褐	褐	○	○	○			
64	476	VII	X	3	杏	ハケメ	指頭圧痕	赤褐	褐	○	○				
	477	VII	W	2	杏	ケズリ	ケズリ	褐	黑褐	○	○	○			
	478	VII	X	1	杏	ナデ	ハクリ	浅黄褐	浅黄褐	○	○				
65	479	VII	W	2	鉢	ケズリ	ケズリ	褐	褐	○	○		○		一個体
	480	VII	W	2	鉢	ナデ	工具ナデ	褐	にふい橙	○	○				一個体
	481	VII	W	2	鉢	ナデ	ヘラナデ	褐	赤褐	○	○				一個体
66	482	VII	W	2	鉢	ナデ指頭圧痕	ナデ	にふい橙	褐	○	○	○	○		一個体
	483	X	X	4	鉢	ケズリ	ケズリ	浅黄褐	浅黄褐	○	○				一個体
	484	VII	X	1	鉢	指頭圧痕	指頭圧痕	褐	褐	○	○				一個体
67	485	VII	X	1	鉢	工具ナデ	ハケメ	案褐	にふい赤褐	○	○				
	486	VII	Y	1	鉢	ケズリ後ナデ	ハケメナデ指頭	にふい橙	にふい橙	○	○				
	487	VII	Y	3	鉢	ハケメ	ハケメ	にふい橙	にふい橙	○	○				
68	488	X	X	4	鉢	ヘラナデ指ナデ	指頭圧痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○			
	489	X	X	4	鉢	ミガキ	ナミガキ	赤褐	にふい橙	○	○				
	490	VII	X	1	鉢	ハケメ	ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○		
69	491	VII	X	2	鉢	ナデ	ナデ	褐	にふい橙	○	○				
	492	VII	X	2	鉢	ハケメ	ナデ	褐	褐	○	○				

表14 弥生・古墳時代出土遺物観察表（9）

神岡 番号	レアワ 番号	属 区	器種	調整		色調		胎 土					備考	
				外	内	外	内	石英	黄石	角閃石	雲母	小礫	透石	
						柾	柾	○	○	○	○	○	○	
57	493	VI	X 3	鉢	ナデ	ナデ	柾	○	○					
	494	VI	X 3	鉢	ナデ	ナデ	にふい柾	灰柾	○	○				
	495	VI	X 4	鉢	ケズリ	ケズリ	柾	にふい赤柾	○	○	○			
	496	VI	X 1	鉢	ナデ	ハケメ	にふい黄柾	にふい赤柾	○	○				
	497	VI	X 3	鉢	ヘラナナ指頭圧痕	ナデ	にふい黄柾	灰柾	○	○	○			
	498	VI	X 1	鉢	ヘラナナ	ヘラナナ	明黄柾	明黄柾	○	○	○			
	499	VI	X 7	鉢	ヘラナナ指頭ナデ	ナデ	にふい黄柾	にふい黄柾	○	○				
58	500	VI	Y 3	鉢	ナデ後指頭圧痕	ナデ後指頭圧痕	にふい黄柾	にふい黄柾	○	○				
	501	VI	X 3	鉢	ハケメナデ	ナデ	硅赤柾	硅赤柾	○	○				
	502	VI	Y 3	鉢	ナデ	ナデ	明黄柾	明黄柾	○	○				
	503	VI	Y 3	鉢	工具ナデ	工具ナデ	柾	にふい黄柾	○	○				
	504	VI	Y 3	鉢	ナデ	ナデ	にふい黄柾	にふい黄柾	○	○				
	505	VI	Y 3	鉢	工具ナデ	ナデ	黒柾	黒柾	○	○	○			
	506	VI	Y 2	鉢	ヘラケズリ	ヘラケズリ	柾	柾	○	○				
	507	VI	X 1	鉢	ナデ	ナデ指頭圧痕	にふい柾	にふい柾	○	○				
	508	VI	X 2	鉢	ナデ	ナデ	透青	にふい黄柾	○	○				
	509	VI	Y 3	鉢	ナデ	ナデ	柾	柾	○	○				
	510	VI	W 2	鉢	ナデ	ナデ	明黄柾	柾	○	○				
	511	VI	X 3	鉢	指頭圧痕	ナデ	反青柾	にふい柾	○	○				
	512	VI	W 2	鉢	ナデ	工具ナデ	黄柾	柾	○	○	○			
59	513	VI	Y 1	鉢	ナデ	ナデ	にふい柾	透青	○	○				
	514	VI	Y 2	鉢	ナデ	工具ナデ	にふい柾	黄柾	○	○				
	515	III	Y 3	鉢	ナデ	ナデ	にふい柾	にふい柾	○	○				
	516	VI	X 1	鉢	ナデ	ナデ	にふい黄柾	灰柾	○	○				
	517	VI	X 3	鉢	ナデ	ナデ	柾	柾	○	○				
	518	VI	W 2	鉢	工具ナデ	工具ナデ	にふい黄柾	柾	○	○				
	519	VI	W 3	鉢	ケズリ	指頭圧痕	柾	柾	○	○				
	520	VI	X 2	鉢	ヘラナデ	ヘラナデ	にふい柾	柾	○	○				
	521	VI	W 3	鉢	ナデ	ナデ	にふい黄柾	灰柾	○	○				
	522	VI	W 2	鉢	工具ナデ	工具ナデ	柾	柾	○	○				
	523	VI	X 1	鉢	ナデ	ナデ	指頭圧痕	にふい黄柾	柾	○				
	524	VI	Y 2	鉢	ケズリ	ケズリ	灰白	灰白	○	○				
	525	VI	W 2	鉢	指ナデ	ナデ爪跡	硅赤柾	にふい赤柾	○	○				
59	526	VI	Y 3	高坏	ミガキ	ミガキ	ミガキ	赤柾	○	○				
	527	VI	W 2	高坏	ミガキ	ミガキ	にふい黄柾	透黄柾	○	○				
	528	VI	a	高坏	ミガキ	ミガキ	柾灰	にふい柾	○	○				
	529	VI	Y 2	高坏	ミガキ	ミガキ	にふい黄柾	黒柾	○	○				
	530	VI	Y 3	高坏	ナデミガキ	ナデミガキ	明赤柾	明赤柾	○	○				
	531	—	—	高坏	ナデ	ナデ	赤柾	赤柾	○	○				
	532	VI	X 1	高坏	ヘラナデ	ミガキ	にふい黄柾	にふい黄柾	○	○				
	533	VI	X 2	高坏	ナデ	ナデ	指頭圧痕ナデ	柾	にふい黄柾	○				
	534	VI	X 2	高坏	ミガキ	ナデ	明赤柾	赤柾	○	○				
	535	VI	X 3	高坏	ハケメ	ハケメ	明赤柾	赤柾	○	○				
	536	III	Y 3	高坏	ハケメ	ナデ	にふい柾	にふい柾	○	○				
	537	VI	X 3	高坏	ナデ	ナデ	灰白	灰白	○	○				
	538	VI	X 3	高坏	工具ナデ	工具ナデ	にふい柾	にふい柾	○	○				
	539	VI	W 3	高坏	ハケメナデ爪跡	ナデ	柾	柾	○	○				
	540	VI	X 2	高坏	ナデ	ナデ	指頭圧痕	透黄柾	にふい柾	○				
	541	VI	X 2	高坏	ハケメ	ナデ指頭圧痕	柾	柾	○	○				
	542	VI	X 3	高坏	ヘラナデ	ナデ	にふい柾	柾	○	○				
	543	VI	Y 3	高坏	ミガキ	ミガキ	柾	黄柾	○	○				
	544	VI	X 3	高坏	ナデ	ナデ	柾	柾	○	○				
	545	VI	X 3	高坏	ナデ	ナデ	柾	柾	○	○				
	546	VI	X 2	高坏	ナデ	ナデ	にふい柾	黄柾	○	○				
	547	VI	X 3	高坏	横ナデ	横ナデ	柾	にふい柾	○	○				
	548	VI	X 2	高坏	ナデ	ハケメ後ナデ	にふい柾	にふい柾	○	○				
	549	VI	Z 3	高坏	ナデ	ナデ	明黄柾	明黄柾	○	○				
	550	VI	Y 2	高坏	ナデ	ナデ	透青	透青	○	○				
	551	VI	Y 2	坦	ケズリ	ヘラケズリ	柾	柾	○	○				
	552	VI	Y 3	坦	ナデ	ナデ	にふい柾	にふい柾	○	○				
	553	X	W 6	坦	ナデ	ハケメ後ナデ	柾	柾	○	○				
	554	VI	X 7	坦	ハケメ後ナデ	ナデ	にふい柾	黒柾	○	○				

表15 弥生・古墳時代出土遺物観察表(10)

辨認 番号	レアラ ト番号	層	区	器種	調整		色調		胎土						備考	
					外	内	外	内	石英	高石	角閃石	雲母	小矽	透石	その他	
59	555	VII	X	2	埴	ナデ	ナデ	褐	栗褐	○	○					
	556	VII	a	4	埴	ハケメ後ナデ	ナデ	明黄褐	黒	○						
	557	VII	X	2	埴	ナデ	ナデ	灰黄褐	褐反	○	○					
	558	VII	X	2	埴	工具ナデ	南ナデ	棕	にぶい黄褐	○						
	559	VII	X	2	埴	ナデ	ハケメ後ナデ	にひい黄褐	にひい黄褐	○	○					
	560	VII	X	2	埴	ナデ	ナデ	にひい黄褐	にひい黄褐	○	○					
60	561	VII	X	3	小型土器	指須压痕	南ナデ	にひい植	にひい植	○	○	○	○			一個体
	562	VII	W	2	小型土器	指須压痕	南ナデ	明黄褐	棕	○	○					一個体
	563	VII	W	3	小型土器	指須压痕	指ナデ工具ナデ	明黄褐	棕	○	○	○				一個体
	564	VII	X	4	小型土器	指須压痕ナデ	指須压痕	明黄褐	棕	○	○					一個体
	565	VII	W	2	小型土器	ミガキ	工具ナデ	にひい黄褐	褐反	○	○					一個体
	566	VII	Y	6	小型土器	指須压痕工具ナデ	工具ナデ	棕	○	○	○					一個体
	567	VII	X	2	小型土器	ナデ	ナデ	にひい黄褐	にひい黄褐	○	○					スス付蓋
	568	VII	Z	5	蓋	工具ナデ	工具ナデ	棕	○	○						スス付蓋
	569	VII	Y	3	蓋	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	棕	棕	○	○					スス付蓋
	570	VII	W	2	蓋	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○					スス付蓋
	571	VII	b	5	蓋	ナデ	ナデ	にひい黄褐	にひい黄褐	○	○	○	○			スス付蓋
	572	—	X	3	蓋	ナデ	ナデ	褐反	褐反	○						スス付蓋
	573	VII	a	4	蓋	ミガキ後ナデ	ナデ	灰褐	褐	○	○					スス付蓋
	574	VII	b	5	蓋	ナデ	ナデ	棕	棕	○	○					スス付蓋
	575	VII	X	4	蓋	指須压痕	ナデ	棕	棕	○	○					スス付蓋
	576	VII	X	2	蓋	ナデ	ナデ	にひい植	にひい植	○	○					スス付蓋
	577	VII	Y	2	蓋	工具ナデ	工具ナデ	にひい植	にひい植	○	○					スス付蓋
	578	VII	X	1	蓋	ナデ	ナデ	にひい植	にひい植	○	○	○				スス付蓋
	579	VII	X	3	蓋	ナデ	ナデ	棕	棕	○	○					スス付蓋
	580	VII	X	3	蓋	ヘラケズリナデ	ナデ	にひい植	浅黃	○	○					スス付蓋
60	581	VII	X	4	円盤型 土製品 (メンコ)	ナデ	ナデ	にひい植	棕	○	○					
	582	VII	X	3	円盤型 土製品 (メンコ)	ハケメ	ナデ	にひい植	棕	○	○					
60	583	VII	X	5	土陸壁	ナデ	ナデ	淡褐	担当	○	○					
	584	VII	X	1	土陸壁	ナデ	ナデ	にひい植	にひい植	○	○					
60	585	VII	X	2	須恵器壇	ナデ	ナデ	灰	灰							
	586	VII	W	3	須恵器壇	ナデ	ナデ	灰	灰							

包含層遺物(石器、石製品)

辨認 番号	レアラ ト番号	層位	出土区	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	
61	587	VII	X	2	磨製石器	青碧	4.8	1.9	0.3	3	完形
	588	VII	X	3	石包丁	青碧	7.0	4.5	0.7	36	
	589	VII	X	5	石核	黑曜石(上牛鼻)	3.9	2.4	1.9	13	
	590	VII	X	4	磨製石斧	青碧	11.3	5.4	2.5	220	
62	591	VII	X	6	敲石	砂岩	15.3	3.3	2.5	196	完形
	592	VII	X	7	凹石	砂岩	11.6	7.0	5.2	566	
	593	VII	X	7	凹石	砂岩	8.8	7.5	5.5	516	
	594	VII	W	6	砾石	青碧	13.7	6.1	3.6	435	
63	595	VII	W	6	砾石	青碧	6.4	3.5	1.4	62	
	596	VII	W	9	砾石	青碧	7.5	4.1	1.4	83	
	597	VII	V	5	砾石	青碧	11.3	5.8	1.7	216	
	598	VII	W	6	砾石	青碧	20.9	10.9	3.6	1,000	
64	599	VII	X	7	砾石	青碧	22.3	10.2	8.3	2,200	完形
	600	VII	X	7	砾石	青碧	30.2	17.8	8.5	6,100	
65	601	VII	Y	7	砾石	青碧	9.4	8.1	4.0	558	
	602	VII	V	9	砾石	青碧	9.4	6.4	5.5	330	
	603	VII	X	8	砾石	青碧	16.5	4.1	2.1	223	
	604	VII	U	3	砾石	青碧	6.1	11.1	2.4	184	
66	605	VII	X	5	輕石製品	輕石	9.0	3.2	1.5	14	完形
	606	VII	X	5	輕石製品	輕石	6.1	4.1	1.4	13	完形
	607	VII	W	2	輕石製品	輕石	3.8	2.8	1.4	1	完形
	608	VII	W	6	輕石製品	輕石	6.1	6.1	2.7	18	
67	609	VII	X	9	輕石製品	輕石	8.9	6.1	6.1	49	
	610	VII	X	3	輕石製品	輕石	7.9	7.6	4.8	54	
	611	VII	X	3	輕石製品	輕石	7.9	6.6	3.6	54	
	612	VII	W	9	輕石製品	輕石	13.3	8.9	5.7	146	完形
68	613	VII	W	9	輕石製品	輕石	9.2	6.4	4.2	63	
	614	VII	W	9	輕石製品	輕石	18.2	9.2	5.6	170	
	615	VII	X	7	輕石製品	輕石	14.5	10.2	10.3	1,100	

第5章 古代の調査

第1節 調査の概要

古代の調査対象となる層位は、V・VI層である。

しかし、弥生・古墳時代と同様に層位が安定していなかったため、表土直下層から検出された遺物も多く、それらは一括して取り上げることにした。

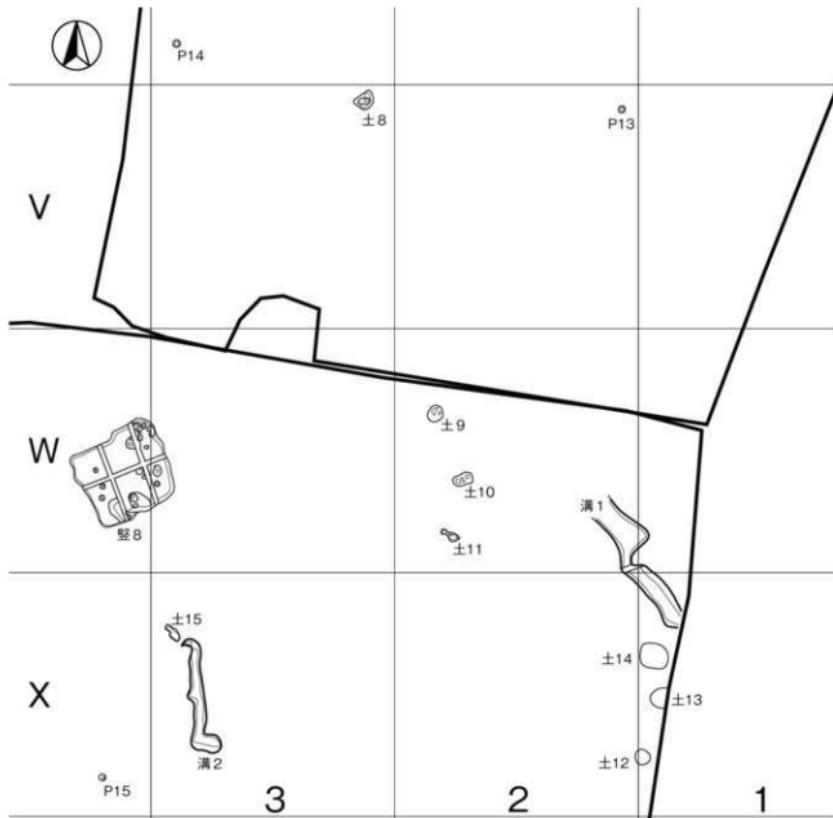
遺構検出は、V b～VI層で行った。その結果、該期の遺構として竪穴住居跡3軒、溝状造構2基、大型土坑1基、土坑16基、ピット11基を検出した。(第67～69図)

遺物総数は約2,000点で、遺構内出土遺物は全て番号

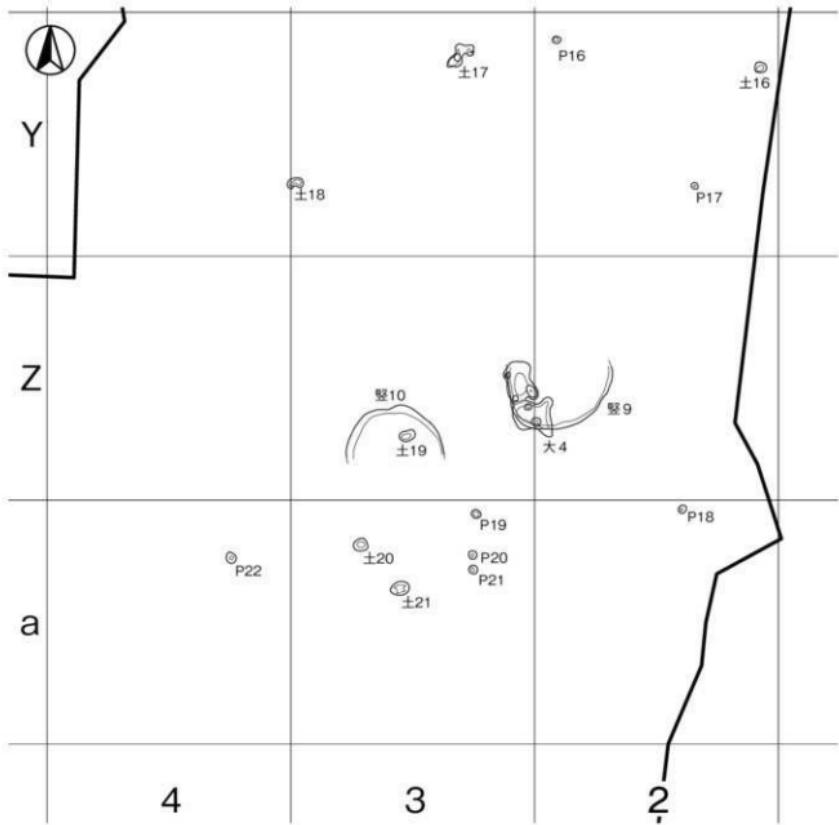
を付けて取り上げを実施し、それ以外は一括して取り上げた。

遺物は、ほとんどが土師器の小破片と須恵器の小破片であった。

遺物の分類は、土師器、須恵器、土製品、陶磁器に分けた。さらに土師器については、皿、壺、塊、蓋、内黒土器、赤色土器、土師壺に、須恵器については碗、蓋、壺、壺に分けた。

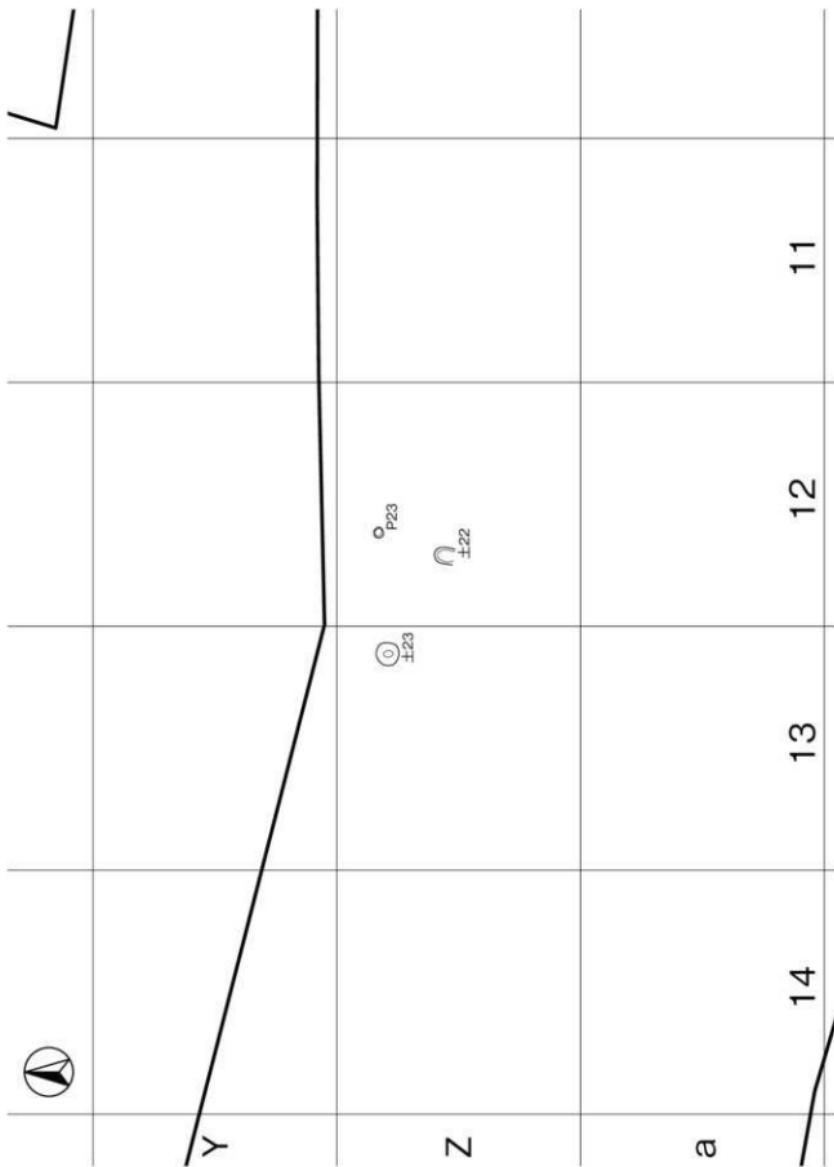


第67図 古代検出遺構配置図（1）



第68図 古代検出遺構配置図 (2)

第69圖 古代檢出遺構配置圖 (3)



第2節 遺構

該期の遺構は、U-a-1-4区とZ-12・13区の範囲に集中して検出した。

層序で示したとおり、V-Y-5~10区はⅢ~V層が削平されていたため、該期の遺構は検出されなかった。

1 穫穴住居跡

(1) 8号竪穴住居跡（第70図）

W-3・4区のVI層上面で検出した。

最終的なプランの長径は約3.8m、短径は約3.3mの隅丸長方形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約20cmである。

南方部に落ち込みが2か所あり、多数検出された柱穴と思われるビットは、確定が困難なため全て掲載することにした。

また遺構に伴う該期の遺物は、土師器の小片が少量出土した。

(2) 9号竪穴住居跡（第71図）

Z-2・3区のVb層上面で、南側半分を検出した。

最終的なプランである残存部の長径は約4.3mで、半

円形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約43cmである。

埋土はVa層の黄褐色砂層で、遺構内にビットは検出されなかった。また硬化面の下位であるVI層から4号大型土坑を検出した。

遺構に伴う該期の遺物は、土師器と思われる小片が少量出土したが形式不明のため掲載しなかった。

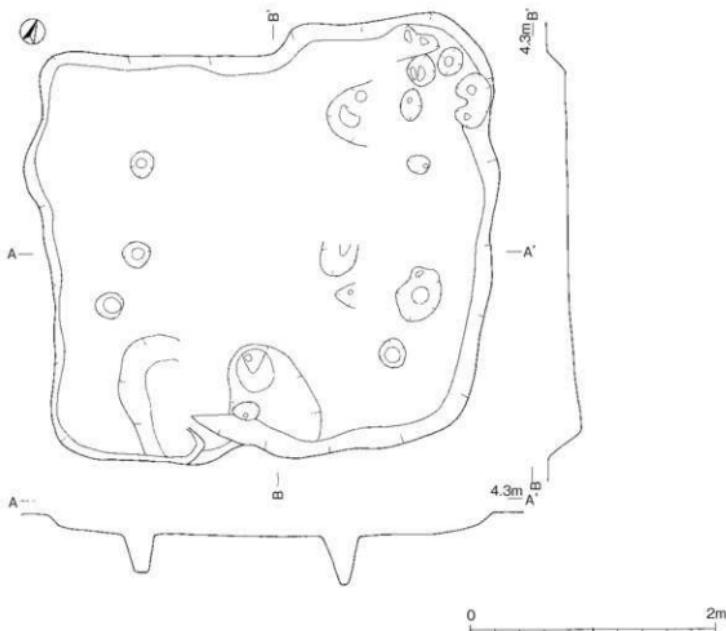
(3) 10号竪穴住居跡（第71図）

Z-3区のVb層上面で、北側半分を検出した。

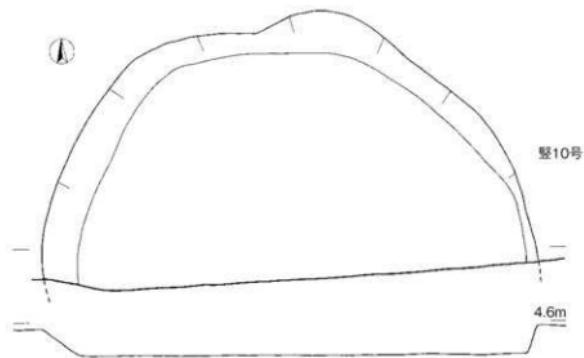
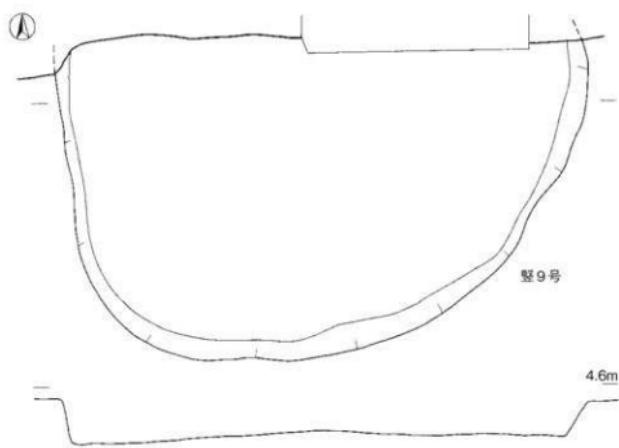
最終的なプランである残存部の長径は約4mで、半円形を呈する。検出面から張り床とみられる硬化面までの深さは約23cmである。

埋土はVa層の黄褐色砂層で、遺構内にビットは検出されなかった。また硬化面の下位であるVI層から19号土坑が検出された。遺構に伴う該期の遺物は、土師器の小片が少量出土した。

9号と10号は、形状や埋土状況が似ていることから、同時期の遺構と考えられる。



第70図 8号竪穴住居跡実測図



0 2m

第71図 9・10号豎穴住居跡実測図

2 溝状遺構

(1) 1号溝状遺構 (第72図)

W・X-1・2区のVI層上面で検出した。

最終的なプランは、全長が約5.7m、最小幅約50cm、最大幅約1.4mあり、北西方向にのびている。調査区範囲外により検出できなかったが、東南方向へまだ続くものと考えられる。深さは約20cm程度で浅く、埋土はIV b層の茶褐色砂質土である。

遺構に伴う遺物は多数出土したが、形式的に見て中・近世のものが多く、該期のものとは異なるため、流れ込みによるものと判断し、ここでは掲載しなかった。

(2) 2号溝状遺構 (第72図)

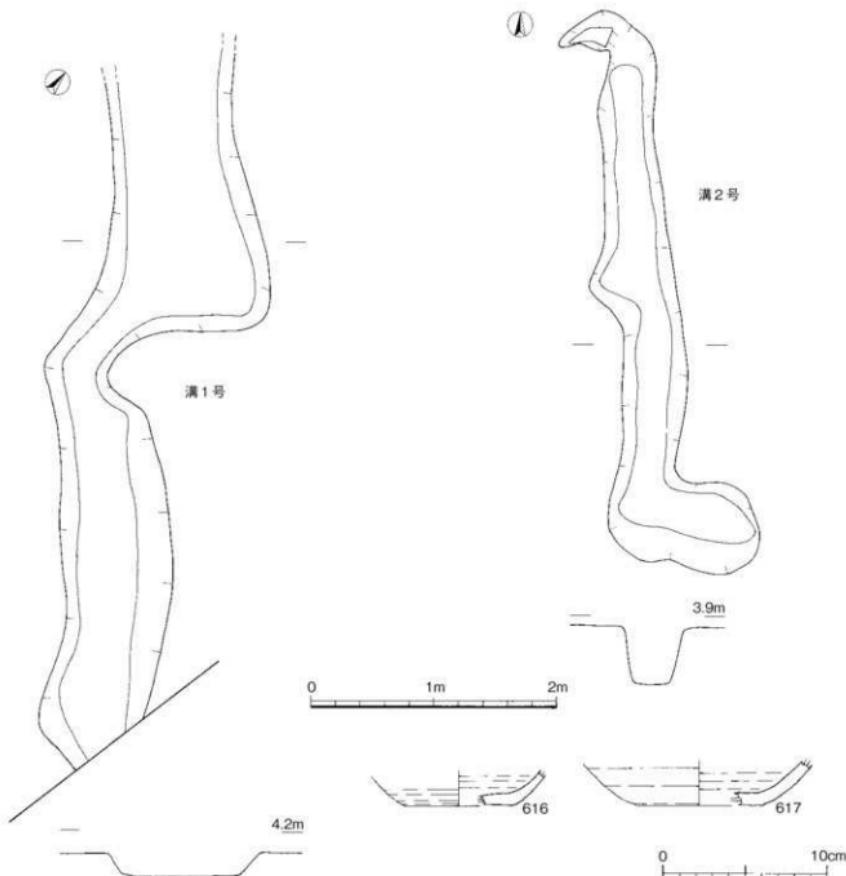
X-3区のVI層上面で検出した。

最終的なプランは、全長約4.5m、最小幅約50cm、最大幅約1.2mあり、南北方向にのびている。深さは約45cm程度で、埋土はVI層の黒褐色砂質土とIV b層の茶褐色砂質土が混在したものである。

遺構に伴う遺物は多数出土したが、該期のものと判断されるのは土師器の5点のみで、その内2点を掲載した。

2号溝状遺構内出土遺物 (第72図616・617)

616・617は、古代土師器壺の底部付近である。



第72図 1・2号溝状遺構及び出土遺物実測図

3 大型土坑

(1) 4号大型土坑 (第73図)

9号竪穴住居跡の硬化面下位であるZ-2・3区のVI層上面から検出した。

二つの土坑が隣接した状態で検出したが、切り合いかはつきりしないことと、埋土と同じVI層黒褐色砂質土とIVb層茶褐色砂質土の混土であることから同一のものと判断し、大型土坑とした。長径が約3.4m、短径が約1.75mで、検出面からの最深部は約40cmである。

遺構に伴う遺物は、土器器塊の小片が8点出土し、その内1点を掲載した。

4号大型土坑内出土遺物 (第73図618)

618は、古代土器器塊の断部である。外面は摩耗が激しく、内面はミガキ調整により丁寧に仕上げている。

4 土坑

該期の土坑は、16基検出した。遺構に伴う該期の遺物は、13号土坑と20号土坑に1点ずつしか出土しなかった。

(1) 8号土坑 (第74図)

8号土坑はV-3区のVI層上面で検出した。長径約80cm、短径約60cmで、掘り込みの深さが約30cmの開丸台形を呈する。

(2) 9~11号土坑 (第74図)

9~11号土坑はW-2区VI層上面で検出した。

9号は長径約70cm、短径約60cmで、掘り込みの深さが約35cmで梢円形を呈する。

10号は長径約80cm、短径約50cmで、掘り込みが2か所あり、最深部は約30cmの梢円形を呈する。

11号は長径約80cm、短径約35cmで、掘り込みが2か所あり、西側は5cmと浅いが東側は約40cmと深い。

(3) 12~15号土坑 (第74・75図)

12~15号土坑はX-1~3区VI層上面で検出した。

12号は径が約60cmの円形を呈し、掘り込みの深さは約40cmである。

13号は西側半分を検出した。残存部の長径が約80cm

で、掘り込みの深さは約30cmである。

14号は長径約1.2m、短径約1.1mで掘り込みの深さは約35cmで、中央部に厚さ約10cmの焼土跡を有する。

15号土坑は2号溝状造構の北側で検出した。長径約85cm、短径約40cmで、掘り込みの深さは約15cmである。

13号土坑内出土遺物 (第74図619)

619は、赤色土器塊の底部である。内側に朱塗りが施されているが、摩耗が激しいため残存が少ない。

(4) 16~18号土坑 (第75図)

16~18号土坑はY-2~4区VI層上面で検出した。

16号は径が約50cmの円形を呈し、掘り込みの深さは約38cmである。

17号土坑は長径約1.35m、短径約50cmで掘り込みが2か所あり、最深部は約53cmである。

18号土坑は長径が約65cm、短径約40cmの梢円形を呈する。

(5) 19号土坑 (第75図)

19号土坑はZ-3区VI層上面から10号竪穴住居跡の硬化面下位で検出した。長径約70cm、短径約42cm、掘り込み面の深さが約45cmの梢円形を呈する。

(6) 20・21号土坑 (第75図)

20・21号土坑はa-3区VI層上面で検出した。

20号は径約60cmで、掘り込みの深さは約10cmで円形を呈する。

21号は長径約85cm、短径約55cmで、掘り込みの深さは約40cmである。

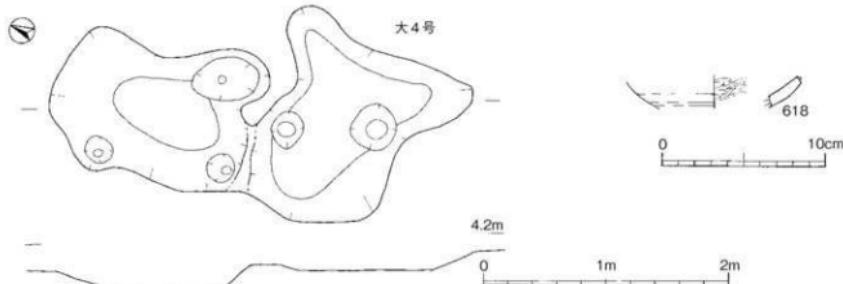
20号土坑内出土遺物 (第75図620)

620は、古代赤色土器塊の底部である。内側に朱塗りが施されている。

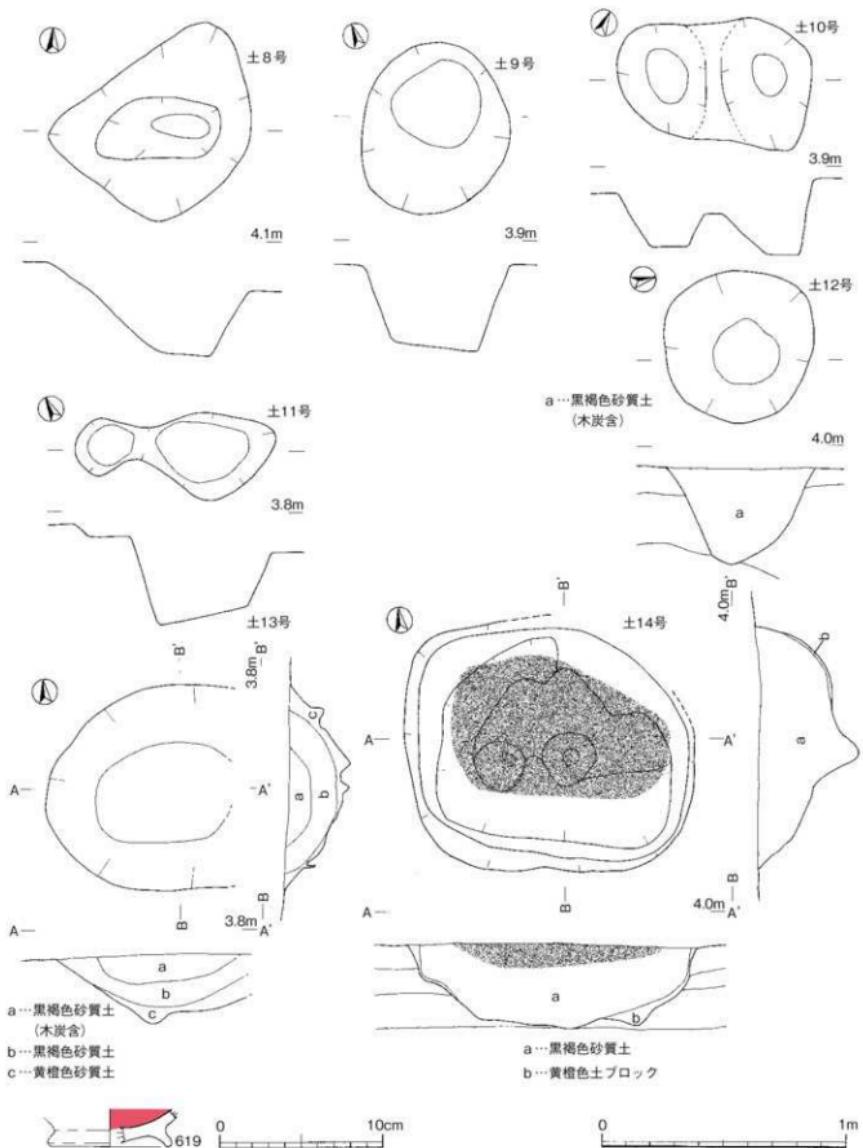
(7) 22・23号土坑 (第75図)

22・23号土坑はZ-12・13区VI層上面で検出した。22号は南側約1/3を削平された状態で検出され、残存部の長径が約80cm、掘り込みの深さ約34cmの梢円形を呈する。

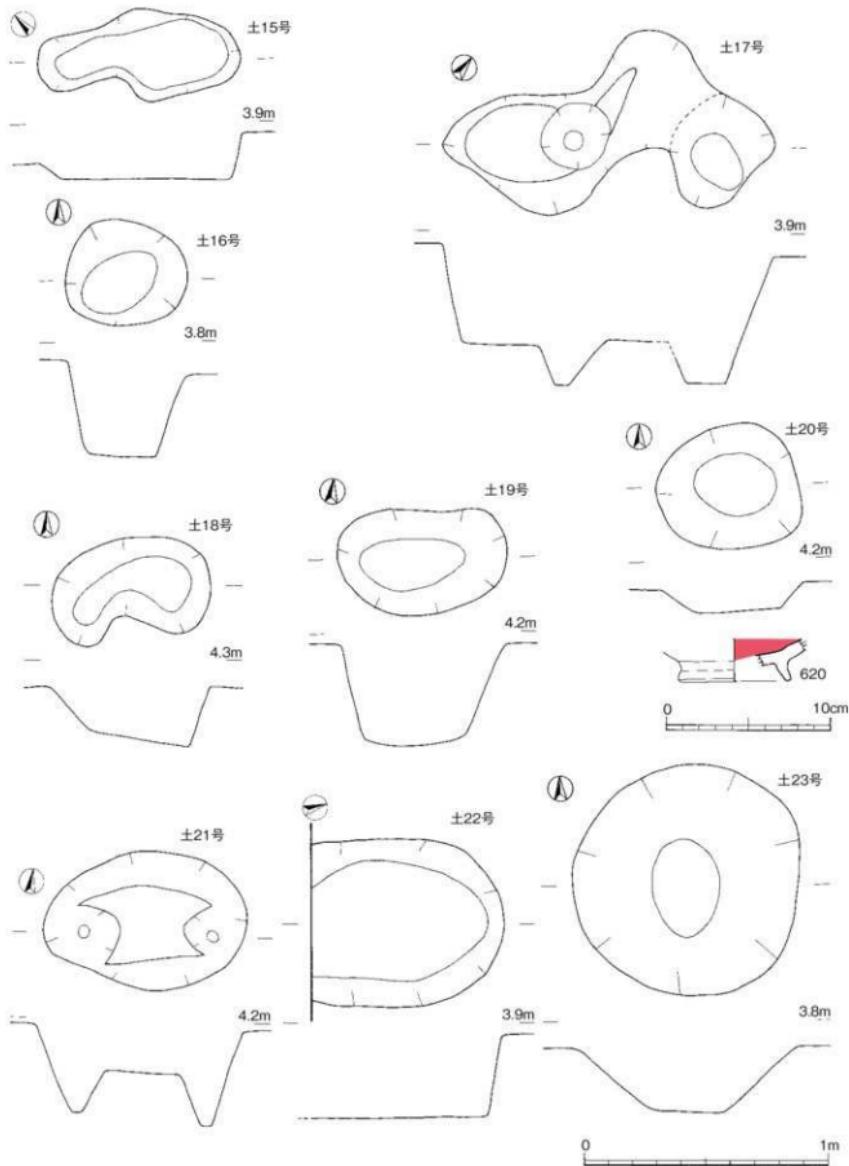
23号土坑はZ-13区のVI層上面で検出した。径が95cmで、掘り込みの深さ約25cmの円形を呈する。



第73図 4号大型土坑及び出土遺物実測図



第74図 8~14号土坑及び出土遺物実測図



第75図 15～23号土坑及び出土遺物実測図

4 ピット

該期のピットは、11基検出した。

遺構に伴う該期の遺物は、16号ピットと19号ピットに1点ずつしか出土しなかった。

(1) 13号ピット（第76図）

13号ピットはV-2区のVI層上面で検出し、径が約30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約23cmである。

(2) 14号ピット（第76図）

14号ピットはU-3区のVI層上面で検出し、径が約30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約26cmである。

(3) 15号ピット（第76図）

15号ピットはX-4区のVI層上面で検出し、径が約30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。

(4) 16・17号ピット（第76図）

16・17号ピットはY-2区のVI層上面で検出した。

16号は径が約35cmで、検出面からの深さが約28cmの円形を呈する。

17号は径が約30cmで、検出面からの深さが約50cmの円形を呈する。

16号ピット内出土遺物（第76図621）

遺構に伴う該期の遺物は1点出土した。

621は、古代ヘラ書き土器の底部である。

(5) 18~22号ピット（第76図）

18~22号ピットは、a-2~4区のVI層上面で集中して検出した。

18号は径が約34cmの円形を呈し、検出面からの深さは約27cmである。

19号は径が約40cmの円形を呈し、検出面からの深さは約18cmである。

20号は径が約35cmの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。

21号は径が約35cmの円形を呈し、検出面からの深さは約38cmである。

22号は長径約50cm、短径約40cmの梢円形を呈し、検出面からの深さは約35cmである。

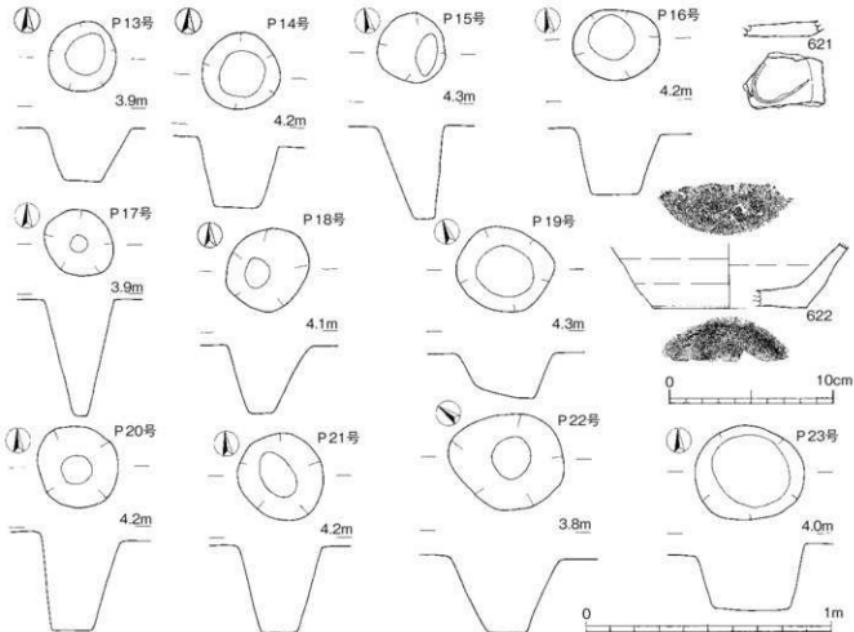
19号ピット内出土遺物（第76図622）

遺構に伴う該期の遺物は1点出土した。

622は古代土師器環の底部で、底径は約10cmである。

(6) 23号ピット（第76図）

23号ピットはZ-12区のVI層上面から検出した。径が約45cmの円形を呈し、検出面からの深さは約28cmである。



第76図 13~23号ピット及び出土遺物実測図

第3節 遺物

1 土師器 (第77~84図623~804)

土師器は供器具として、皿、高台付皿、壺、塊、蓋の5つに分類した。また、黒色土器、赤色土器、刻書土器類については別分類とし、その中で器形による分類を行った。煮炊具としては、口縁部のみの出土が多く、器形の分類が困難なために、全て甕として取り扱った。

(1) 皿 (第77図623~626)

器高が低く、底面が広いもので、口縁部から底部まで残っているもの4点を図化した。

口径は約12~15cmで、底径が約9~10cmと少し差があり、器高は約3cmと浅めの皿である。

623・626の体部は、丸味をもって開いている。器面下位および底面に、工具による回転ヘラケズリ調整を施す。624は、胴部中央で僅かに段をもつ。625は、指頭圧による調整を施している。

(2) 高台付皿 (第77図627~630)

皿部の口径が約10cm未満の小型高台付皿が4点出土した。

627・628は皿部底面が凹み、断面でみると抉れしている。高台はハの字状に広がり、内外面ともに横ナデ調整を施す。627は口径約10cm、底径約8cm。器高は約4.5cmで底部中央に穿孔を有する。628は口径約9cm、底径約6cm。器高は約3cmである。628・629は、高台の天井部が平坦で、629には凹みは見られない。630は高台の脚部のみである。

(3) 壺 (第77~79図631~682)

土師器の壺と思われる小片は多量に出土し、その内52点を掲載した。ただし、口縁部のみが残るものについては、壺との判別が困難なため壺として掲載することにした。

631~647は、内外面ともに横ナデ調整を施し、底部は回転ヘラ切りによる切り離し後、ナデ調整を施している。底面は平坦で、体部が直線的に開く。631は口径約12cm、器高約4cmで、ほぼ完形品である。632~634は底部の器壁がやや厚い。639・640は、底部が僅かに直行し胴部にかけて内弯している。645は底部からの立ち上がりが鋭く、器高も約5cmと高い。648~650は底部から胴部にかけて、やや丸味をもって立ち上がる。底部は回転ヘラ切りによる切り離しで調整は施していない。

651~655は、立ち上がり部にナデ調整を施している。651は、底部が広い円盤状を呈する。652・654は口縁端部がやや外交し、653は玉縁状にやや肥厚させている。654は、器高が約2cmと低い。

656~664は、口縁部のみである。658は口縁端部が尖る。664は、ほぼ直行している。

665~682は、底部である。675・678~681は、回転ヘラ切りによる切り離しで調整は施していない。682は内面にミガキ調整を施している。

(4) 塊 (第79図683~698)

塤は、口縁部から底部まで残っているものがなかったため、器形が分かる中空の輪高台をもつ底部のみを図化した。

683~690は脚がやや長く、ハの字状に広がるものである。683は、体部が直線的に開く。684・685はやや内弯気味に開く。686~688は、底部に回転ヘラケズリ調整の痕を明瞭に残している。689は、高台の天井部が低く下がっている。

691~697は、脚部が短い。694は、脚端部が断面四角形を呈する。696・697は底部の器壁が厚く、脚部の器壁は薄い。

698は、脚が長くて細くなると思われる。高台上部が欠損しており、器形は不明である。

(5) 黒色土器 (第79~80図699~714)

内面のみを黒く焼したもののが15点と、内外面とも黒く焼したものを1点のみ掲載した。器種は、皿、壺、塊である。

699は、内外面とも黒く焼している。器種は口径約9cm、器高が約2cmの小型の皿で、内外面にヘラミガキ調整を施している。

700~714は、内面のみを黒く焼した内黒土器である。700は口径約17cm、底径約11cmの壺である。内面にヘラミガキ調整を施し、外面上にはススが付着している。701は口径約14cm、底径約7cmの塊である。704~711は底部であり、704・705は壺、706~713は壺である。714は小型の高台付皿で、黒色がやや剥がれている。

(6) 赤色土器 (第80図715~734)

内面のみに赤色顔料が施された内朱土器と、内外面ともに施された両朱土器がある。器種は、ほとんどが高台をもつ壺の底部である。

715は、小型の高台付皿である。716・717は摩耗が激しいが両面に丁寧なミガキ調整を施している。716は口径約15cmを測る壺の口縁部で、717は底径約8cmを測る壺の底部である。

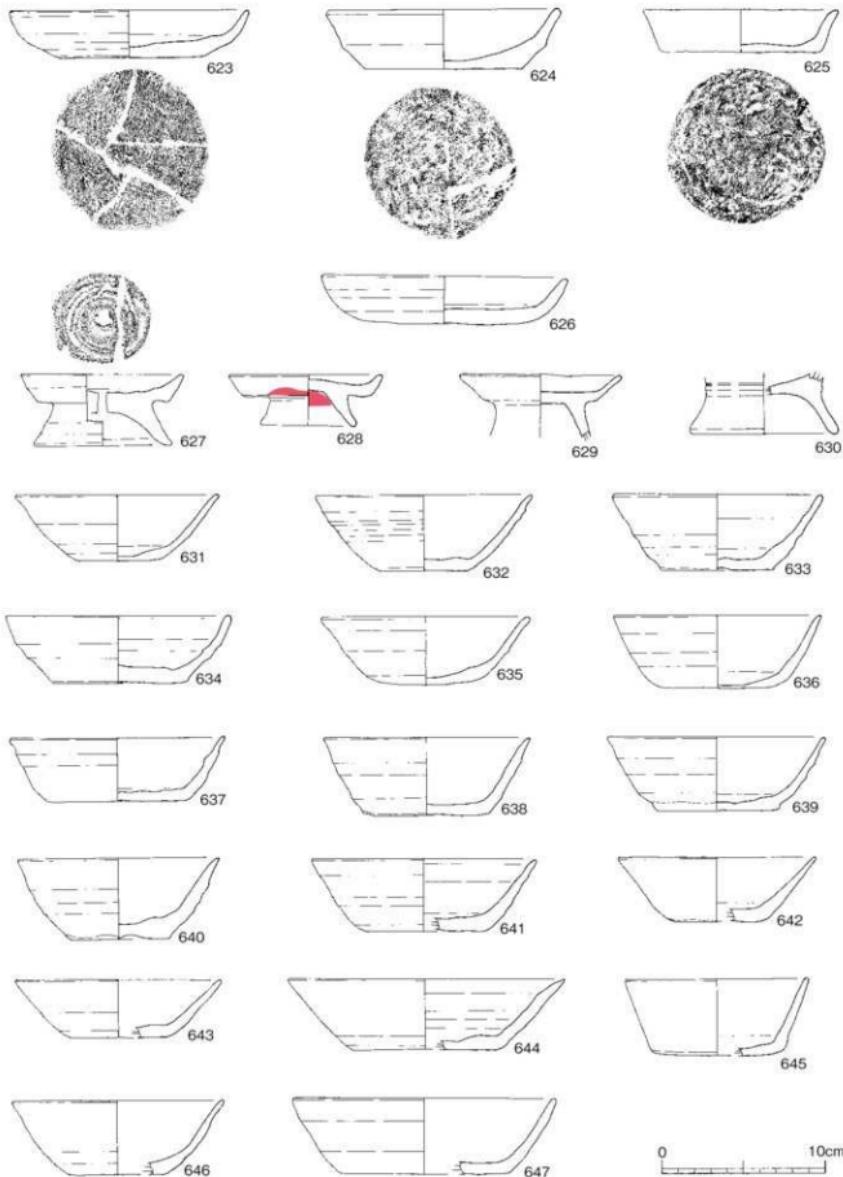
718は、両朱土器で脚部の短い壺である。口径約23cm、底径約8cmで内外面にヘラミガキ調整を施している。

719~734は、内朱土器である。719は口径約12cm、底径約7cmの小型壺である。720は立ち上がりが直線的で、口縁部が直角的で、内面にヘラミガキ調整を施している。721は、脚部が短く内向している。732~734は、体部と高台の接合部で、脚端部は欠損している。

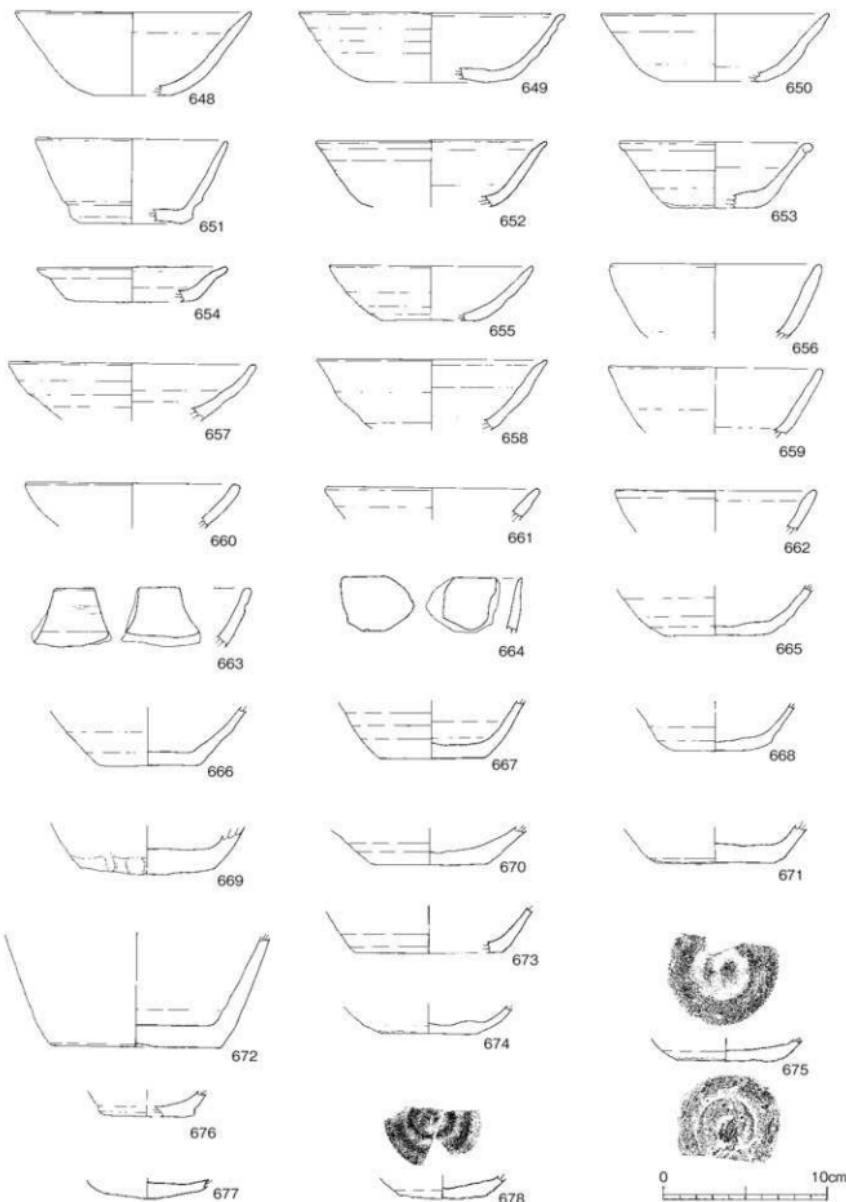
(7) 蓋類 (第80図735~736)

土師器の蓋類は、全体の多さと比較するとかなり少ない。器形全体を把握できるものはなく、蓋のつまみを2点掲載した。

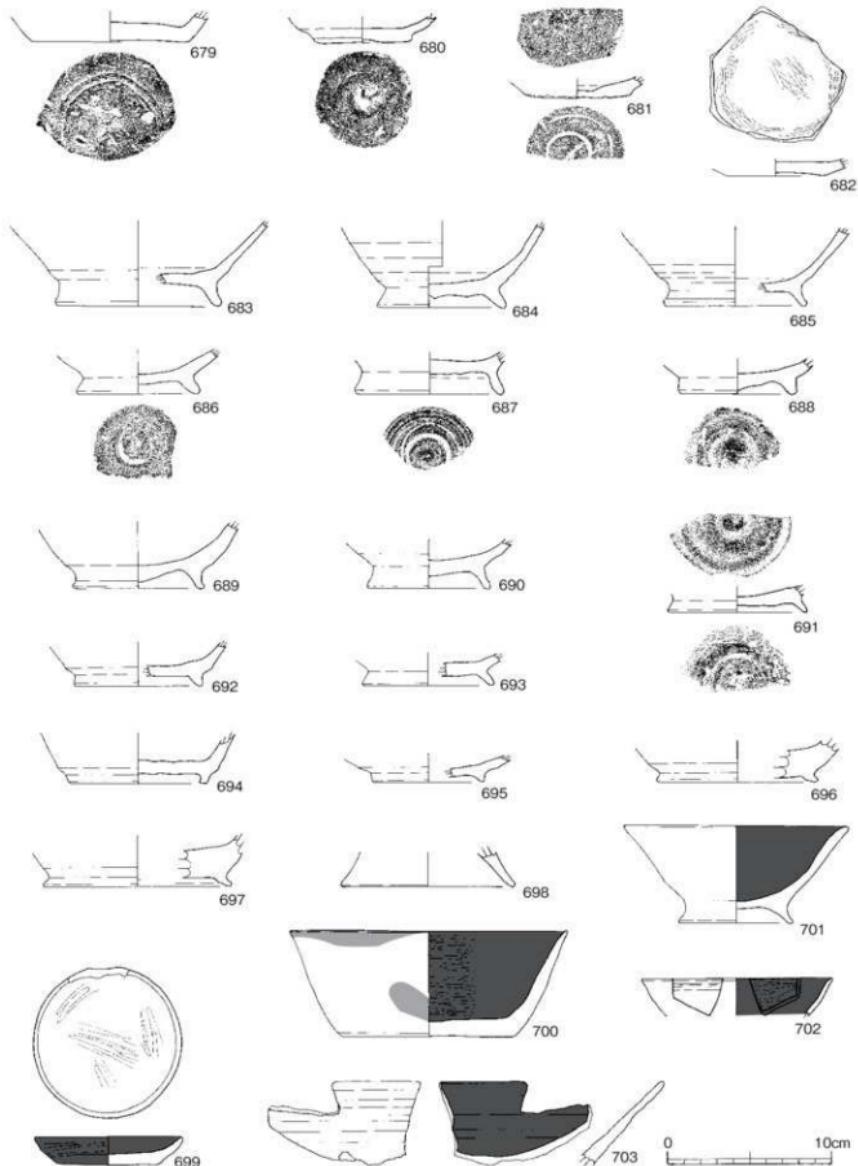
735・736は、上部は平坦でナデ調整を施している。



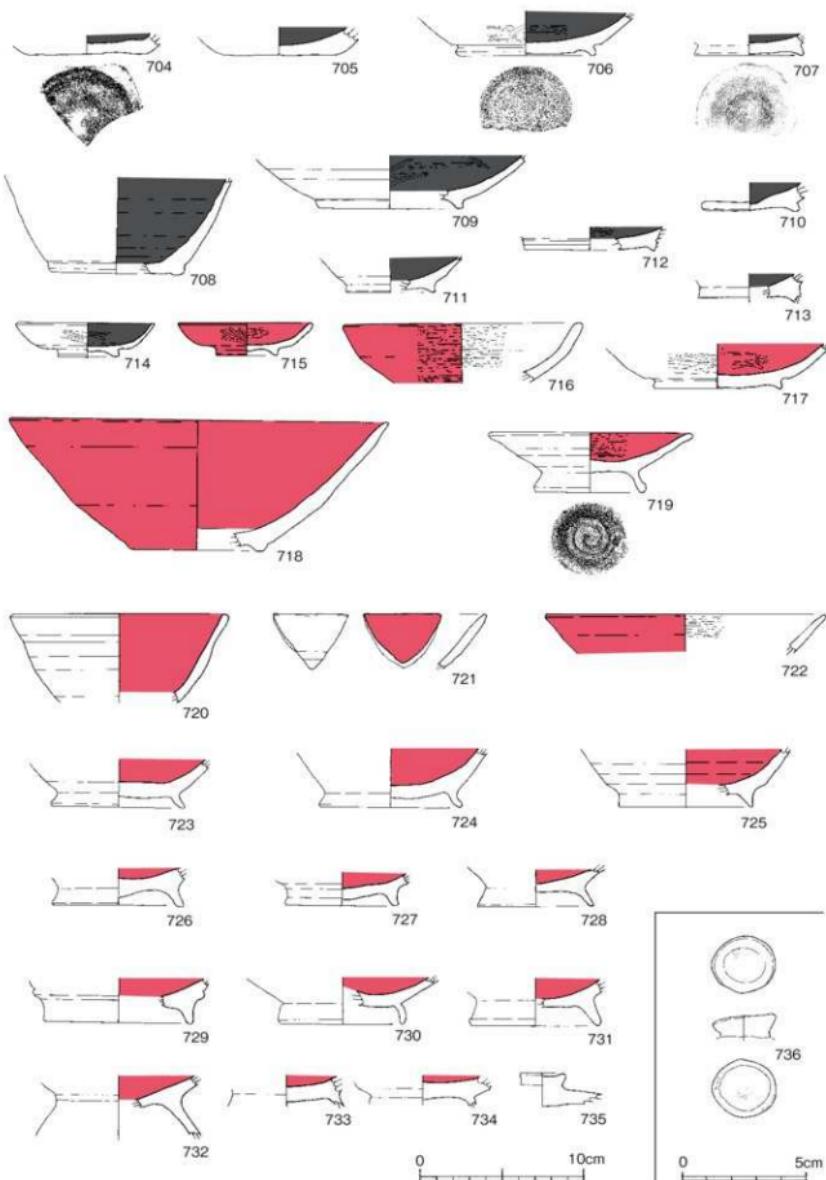
第77図 古代出土遺物実測図（1）



第78図 古代出土遺物実測図（2）



第79図 古代出土遺物実測図（3）



第80図 古代出土遺物実測図（4）

(8) 刻書土器・ヘラ書き土器・墨書き土器

刻書土器は1点、ヘラ書き土器が32点、墨書き土器が8点出土した。器種は塊、皿、坏であり、ほとんどが底部に記されているが、口縁部、胴部に記されているものもある。

なお、墨書き土器に記されている文字の詳細については、第8章で後述する。

ア 刻書土器 (第81図737)

737は刻書土器で、1点のみの出土であった。塊の口縁部から胴部にかけて刻まれており、刻書は連続する二文字の一部であると思われる。

イ ヘラ書き土器 (第81・82図738~769)

738・739は、ヘラ書きの一部分が施されているが、残存部が僅かであるため文字かどうかも不明である。738は口径約10cmの小型皿で、胴部下位から底部にかけてヘラ書きが施される。739は胴部にヘラ書きが施される。740は、口縁部が約17cm、底径約13cm、器高約2cmの平底を呈するやや大きめの皿である。文字と思われるヘラ書きの一部が、底部内面に施されている。

741は口径約16cm、底径約8cm、器高約5cmの坏である。底部内面に「門」という文字が施されている。同様に742の塊底部内面にも「門」という文字が施されている。743は、坏の底面内部に文字が施されている。

744~769は、坏と塊の底部で、744~758は底部内面に文字が施されている。ほとんどが文字の一部であるが、745は「林」という文字がほとんど残った状態で判断できる。747~753は、先述の「門」という文字の一部であると思われる。754・755は、同形の文字の一部であるが、

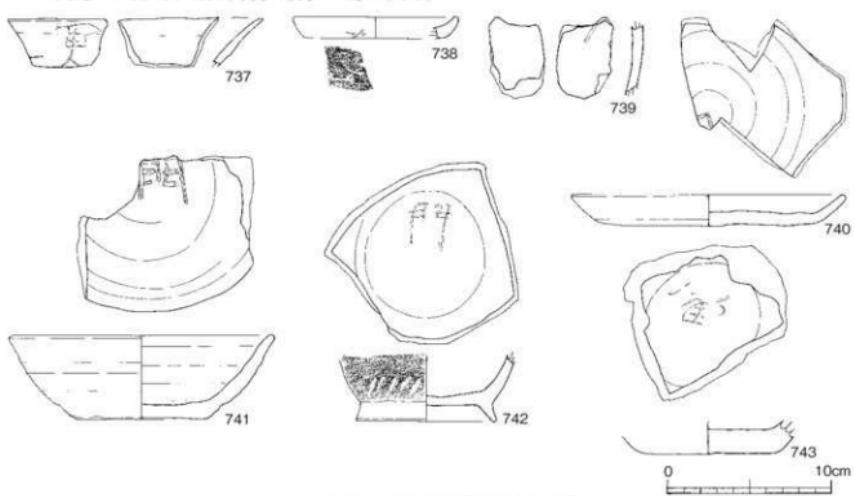
現代の文字として該当するものは不明である。756は、葉脈あるいは針葉樹の葉先を模したヘラ書きが施される。文字の一部というより、図か記号として捉えたい。

759~769は、底部外面に文字が施されている。759は、口径約12cm、底径約8cm、器高約4cmの坏である。763は、底径約7cmを測る高台付皿の底部である。施されたヘラ書きの全て示されているが、754・755と同様に現代の文字として該当するものは不明であり、記号として使用されている可能性も多い。764~769は、残存率が低く、文字の解明は困難である。

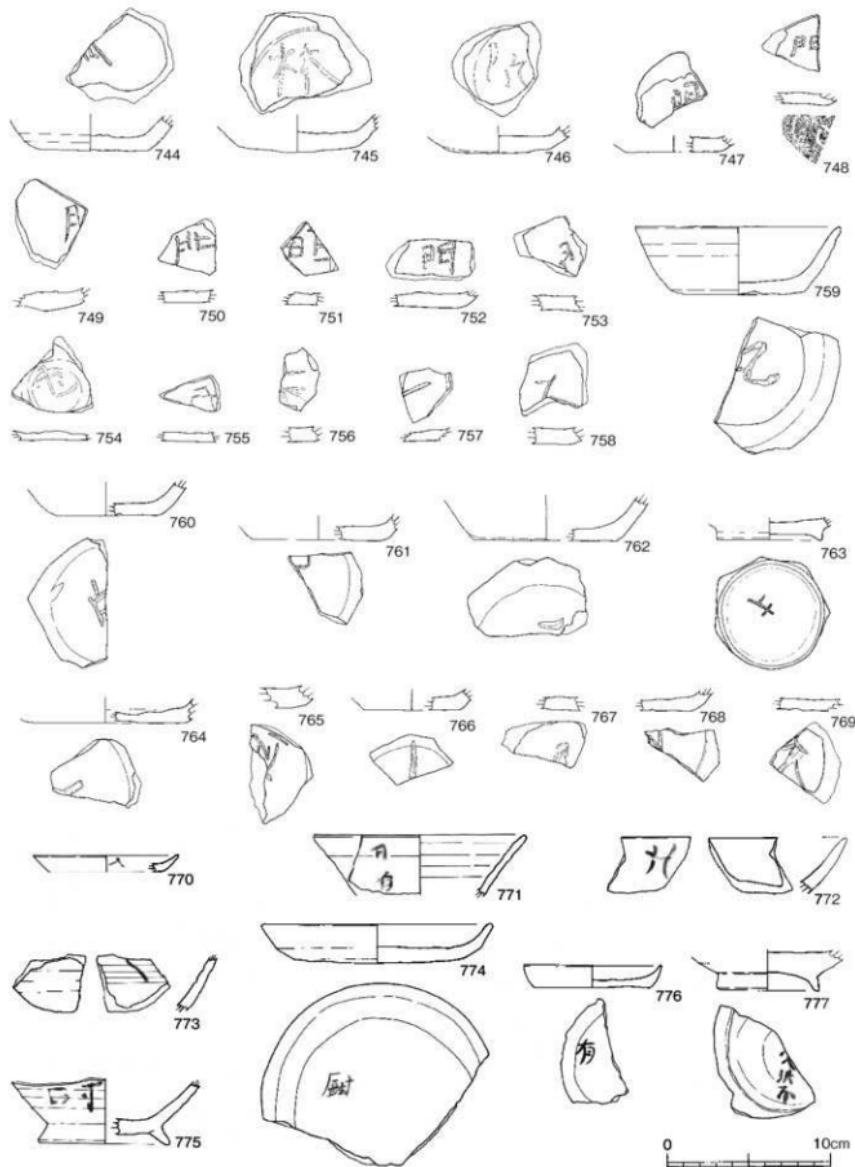
ウ 墨書き土器 (第82図770~777)

墨書き土器は、5点が口縁部から胴部にかけて、3点が底部外面に施されている。

770は、口径約9cm、底径約7cm、器高約1cmの小型平底皿である。体部に「入」に類似した文字が施されている。771は口径約13cmの坏で文字が口縁部に1点、胴部下位に1点施されている。前者は、現代にはない文字であるが、後者は「有」に酷似している。772は坏の口縁部で「土」という文字に似たものが横位に施されている。774・775は「厨」という文字に酷似したものである。774は口径約14cm、底径約10cm、器高約2.4cmの平底皿で、底部外面に文字が施されている。775は底径約8cmの塊の胴部に文字が施されている。776は、771と同様で「有」という文字に酷似したもののが施されており、他の墨書きと比較して非常に濃く書かれてある。口径約8cm、底径約7cm、器高約1.5cmの小型の平底皿である。777は、複数の文字が底部外面に施された塊である。



第81図 古代出土遺物実測図 (5)



第82図 古代出土遺物実測図（6）

(9) 土師壺 (第83・84図778~804)

出土した壺については、口縁部のみ27点を掲載した。

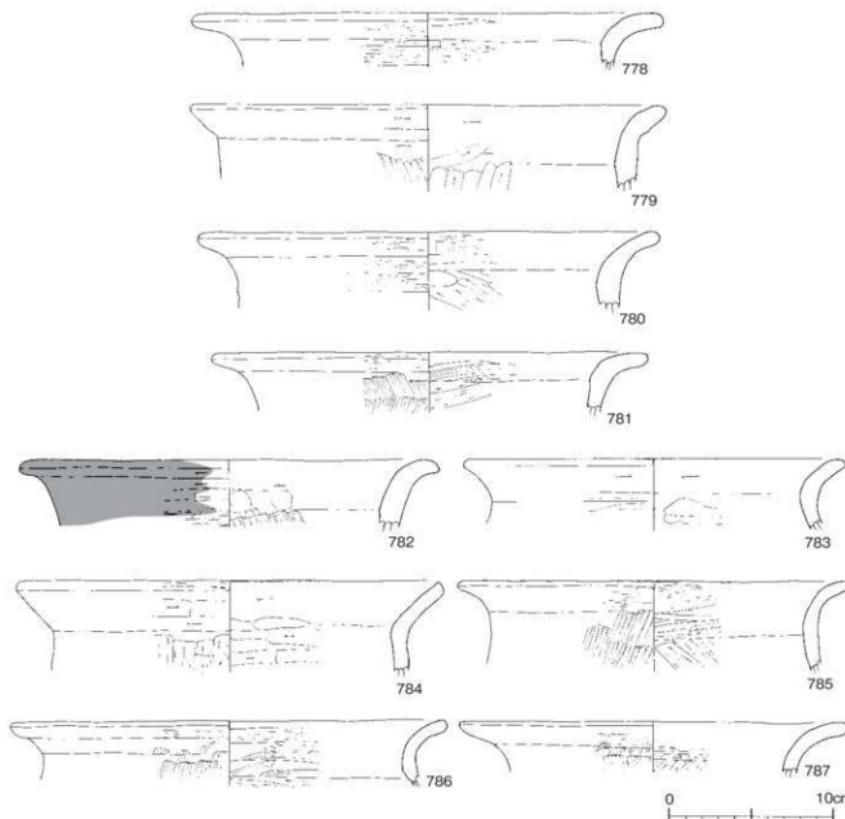
778~796は、口縁部が短く外反するものである。778は口径約29cmを測り、外面に横ナデ調整、内面にケズリ調整を施す。779は口径約29cmを測り、内外面にケズリ調整を施す。781は口径約27cmを測り、外面にハケメ後、内面にケズリ後、口縁部内外面に横ナデ調整を施す。

782~784は口径が約24~27cmで、内外面にケズリ調整を施している。785は口径約24cmで、内外面にハケメ後、口縁部に丁寧な横ナデ調整を施している。786は、口径約27cmで外面に上方向へハケメ後横ナデ調整を施している。788は口径約26cmを測り、口縁部外面に横ナデ後、肩部に上方向へハケメ調整を施している。

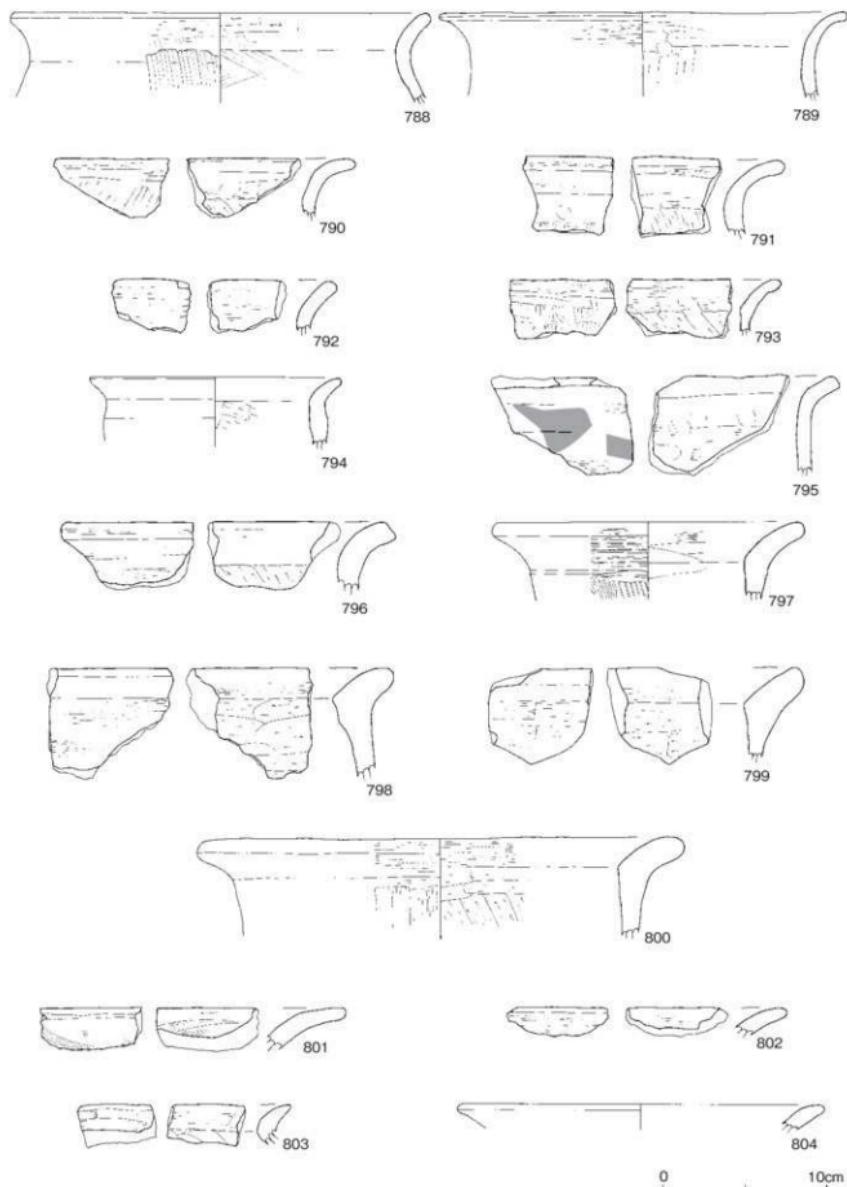
790~796は口縁部の小片である。794は、口径約15cmの小型壺で、外面にナデ調整、内面にケズリ調整を施している。795は、外面にスヌが強く付着している。796は、口唇部に丁寧なナデ調整を施し、やや凹んでいる。

797~800は、口縁部断面がくの字もしくは逆L字を呈するものである。797は口径約20cmを測り、ハケメ後、口縁部外面に工具による丁寧なナデ調整を施す。800は口径約30cmを測り、外面に上方向へハケメ調整、内面にケズリ調整後、口唇部外面に丁寧な横ナデ調整を施している。

801~804は、口縁部の一部である。いずれも器壁が薄い。803は口唇部に丁寧なハケメ調整を施している。804は口径約23cmで、ナデ調整を施している。



第83図 古代出土遺物実測図 (7)



第84図 古代出土遺物実測図（8）

2 土製品（第85図805～814）

土製品は、土錘、土玉、紡錘車が出土した。

(1) 土錘（第85図805～810）

土錘は6点出土した。いずれも手捏ねによる調整を施している。

805～807は、やや大きめの土錘である。805は最大長約5.5cmで、最大幅約3.5cmである。806は最大長約4.8cmで、最大幅約2.5cmである。807は最大長約5.5cmで、最大幅約2cmである。

808～810は小さめの土錘で、808は最大長約4cmで、最大幅約1.8cmである。809は最大長約3.7cmで、最大幅約1.4cmである。810は最大長約3.8cmで、最大幅約1.7cmである。

(2) 土玉（第85図811・812）

811は、残存部で最大長約2.8cmで最大幅約1.5cmを測る。基部の上位に穿孔を施しており、上位端部には僅かに凹みが見られるが、その用途は不明である。

812は、土錘を短くしたもので球状を呈す。径は約2.3cmである。

(3) 紡錘車（第85図813・814）

2点出土したが、いずれも欠損部が大きい。

813は、径が約4cmで厚さが約6mmの円状を呈すると思われる、中央部に穿孔を施している。

814は、径は不明で厚さが約6mmの円状を呈すると思われるが、穿孔の痕跡は認められないため、土製メンコの可能性も高い。

3 須恵器（第85～91図815～900）

須恵器は、蓋、坏、皿、壺、甕、壺、壺の6器種が出土した。甕の胴部片が多量に出土したが、大きい破片のみを抜粋して掲載することにした。また、判別不明の底部は一括して掲載することにした。

(1) 蓋（第85図815～819）

蓋は5点掲載した。

815は、口径約2.2cmで端部は大きく外反している。回転ヘラケズリ調整を施し、端部外面にはシャープな稜をもつ。816は輪状のつまみ部を有するもので、天井部は欠損している。817～819は、天井端部を下方に折り曲げたもので、端部外面にシャープな稜をもつ。

(2) 坏（第85・86図820～829）

坏は、平底坏と高台付坏に分けられる。

820～825は口縁部で、820は口径約12cm、底径約7.5cm、器高3.5cmの平底を呈す。底部からの立ち上がりは、直線的に開きながらびる。821は口径約19cmで、口縁部は直線的に開いている。822・824・825は、胴部中央付近に段をもつ。口径はそれぞれ約16cm、約13.5cm、約11cmである。823は口径約20cmで、口縁部が直立気味に立ち上がる。

826～829は、底部である。826は平底を呈し、底径約

7.5cmである。

(3) 皿（第86図830）

1点のみの出土で、830は口径約13cmで、底径約11cm、器高約3cmの小型の平底皿である。ほぼ直立気味に立ち上がり、口縁端部がやや外反している。底部底面は、回転ヘラケズリ調整を施している。

(4) 壺（第86図831・832）

壺は、器形から判断して明瞭なものを2点のみ掲載した。831は口径約20cm、底径約10cm、器高約8cmで高台をもつ。832は口径約16cmで、底部から直線的に開きながらびる。

(5) 甕（第86～91図833～887）

出土した甕の中には、口縁部から底部まで全体の器形が分かるものは残念ながらなかった。

833～845は、口縁部である。833は口径約34cmで、口縁部が短く外反している。口縁端部の断面は、四角を呈する。834～836は、外反する口縁部が端部近くで屈曲し、二重口縁状となるものである。834は口径約47cmを測る大型甕で、横ナデ調整を施している。835は口径約33cmを測り、器面上に格子目タタキを施している。837～844は、口縁端部がやや肥厚しながら、下向きに外向している。845は、口縁部が内弯しながら大きく開き、二重口縁状を呈している。

846～850は、甕の頸部である。846は、外面に格子目タタキを施している。849は、頸部から肩部にかけての屈曲が強く、外面に格子目タタキ、内面に同心円当て具痕が見られる。

851～887は、肩部、胴部である。857は外面に平行文タタキを施し、内面に同心円当て具痕が見られる。852・857は赤褐色を呈する赤焼きの酸化炎焼成である。

(6) 壺（第91図888～892）

888・889は、頸部がくの字に屈曲しており、二重口縁となるものである。

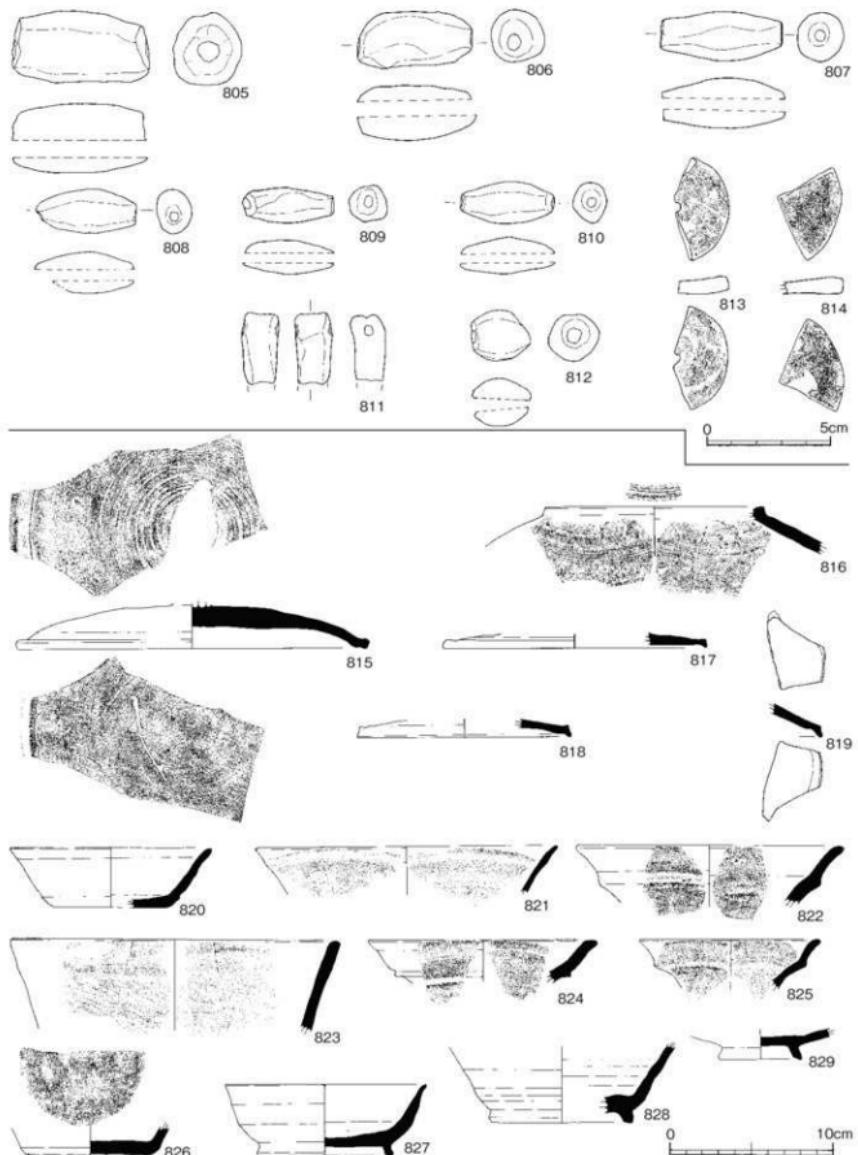
890は、肩部から胴部にかけて内弯し、胴部は直行する。外面に平行文タタキが見られ、内面はヘラケズリを施している。891は、肩部と胴部の屈曲部に突帯を有し、胴部がくの字に内弯する。

892は、胴部が直行し、底部は平底を呈する。外面に平行文タタキが見られ、内面はヘラケズリを施している。白灰色を呈し焼成がやや弱い。

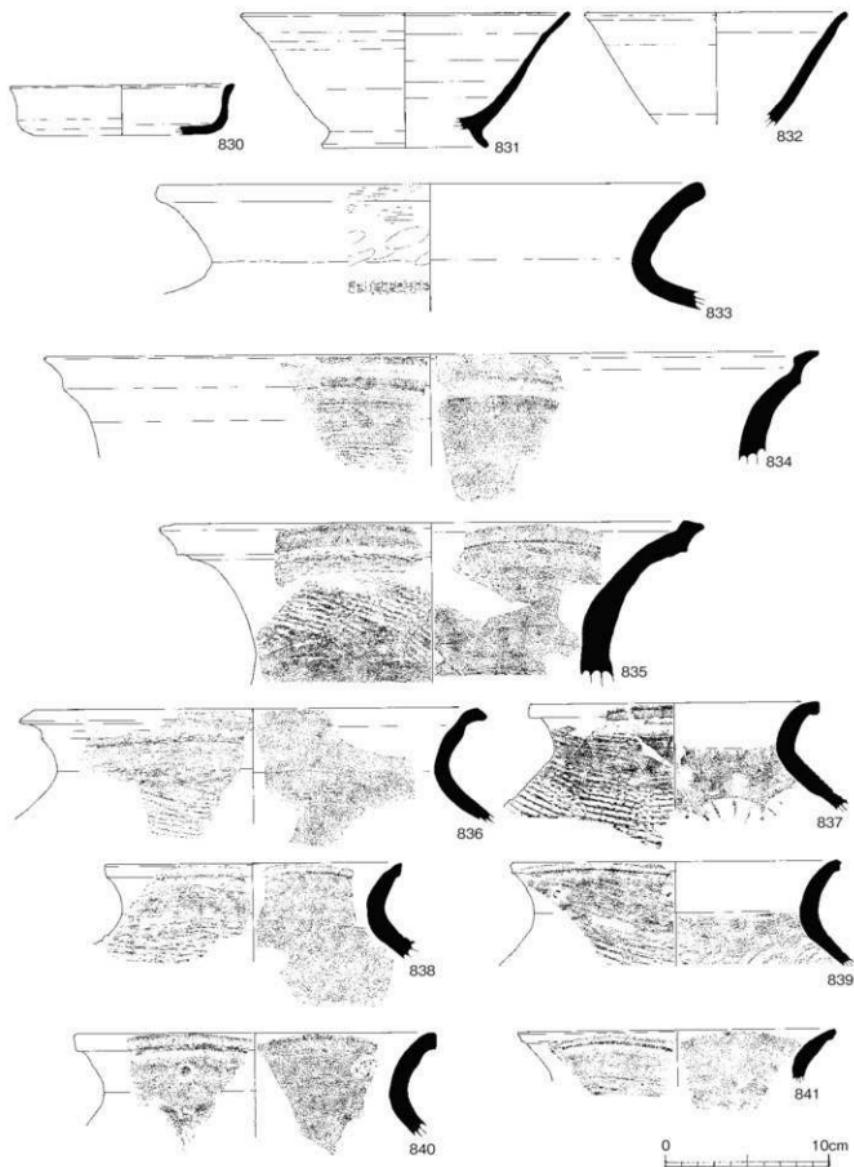
(7) 底部（第91図893～900）

器面には格子目タタキや平行文タタキが見られ、内面には粘土接合痕や指痕やナデが見られる。また、底部底面には、同心円タタキが見られる。

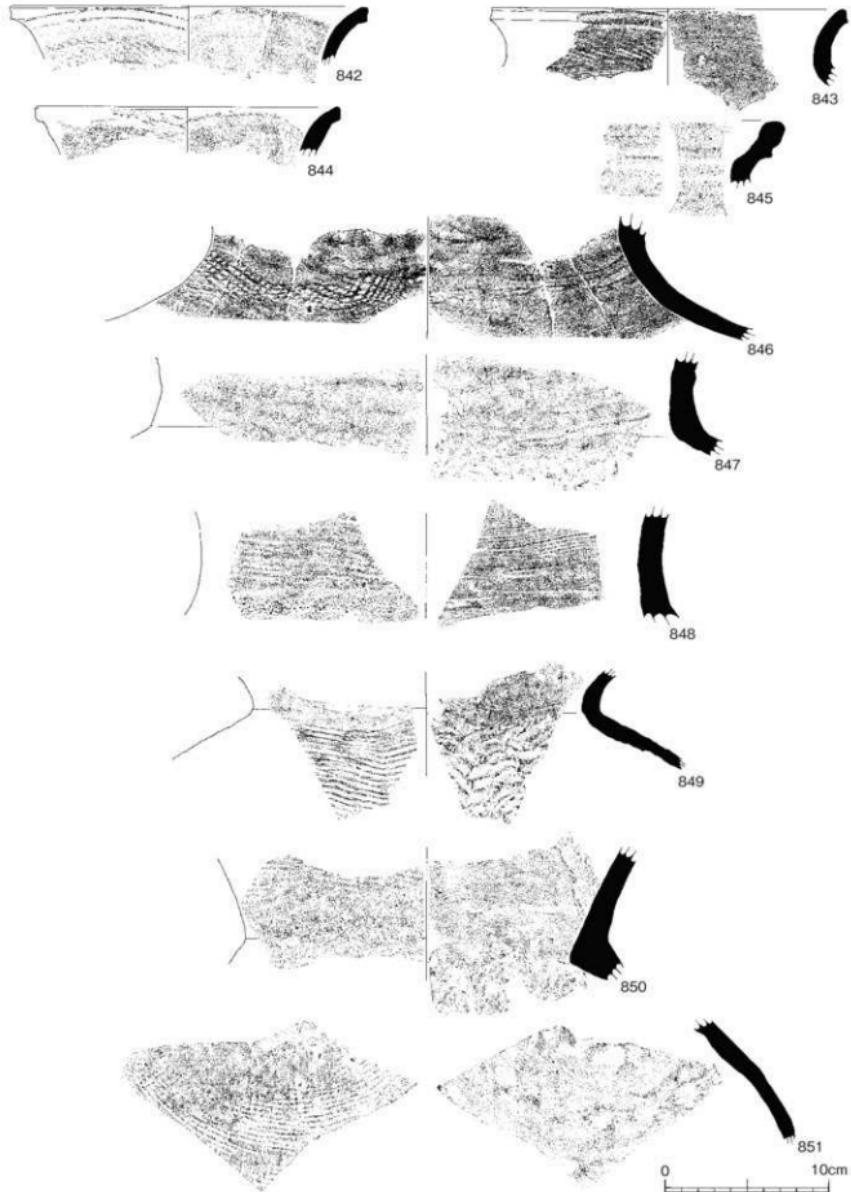
893～899は、底部から胴部へ直立気味に立ち上がる。900は、外向しながら直線的に立ち上がる。



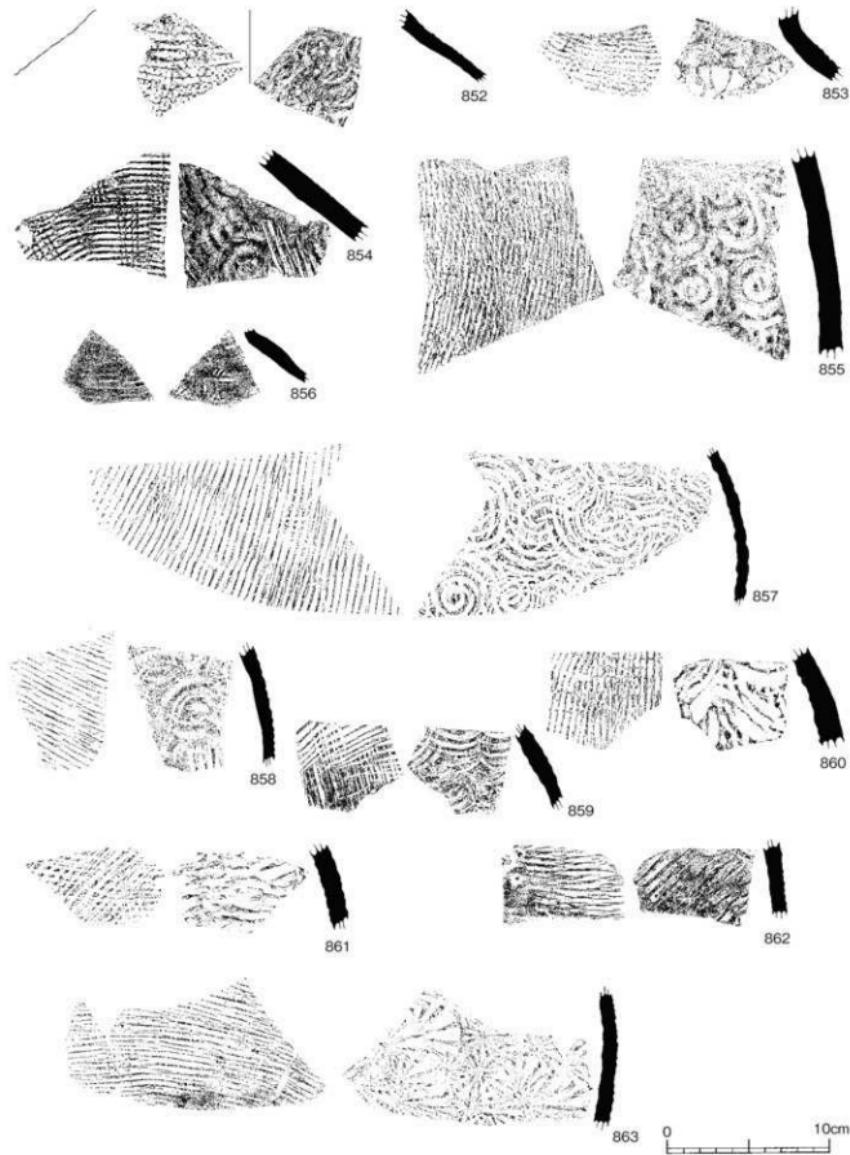
第85図 古代出土遺物実測図（9）



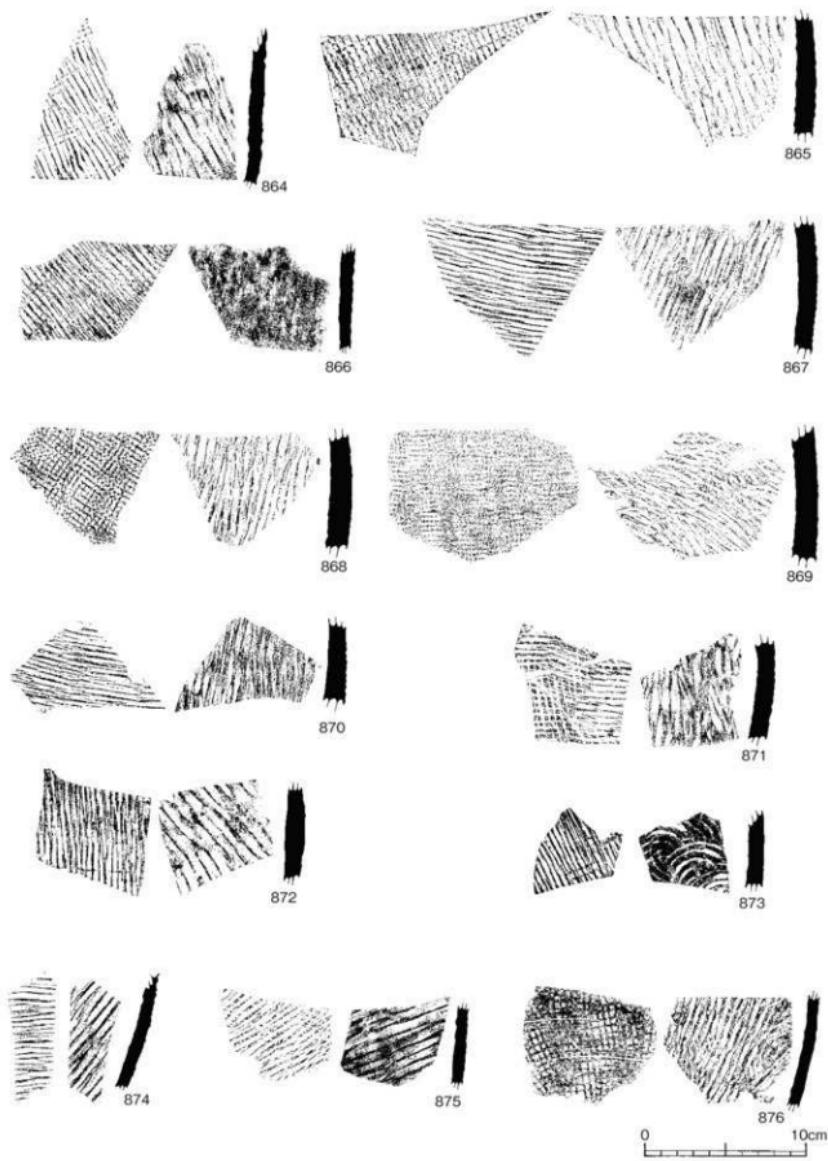
第86図 古代出土遺物実測図 (10)



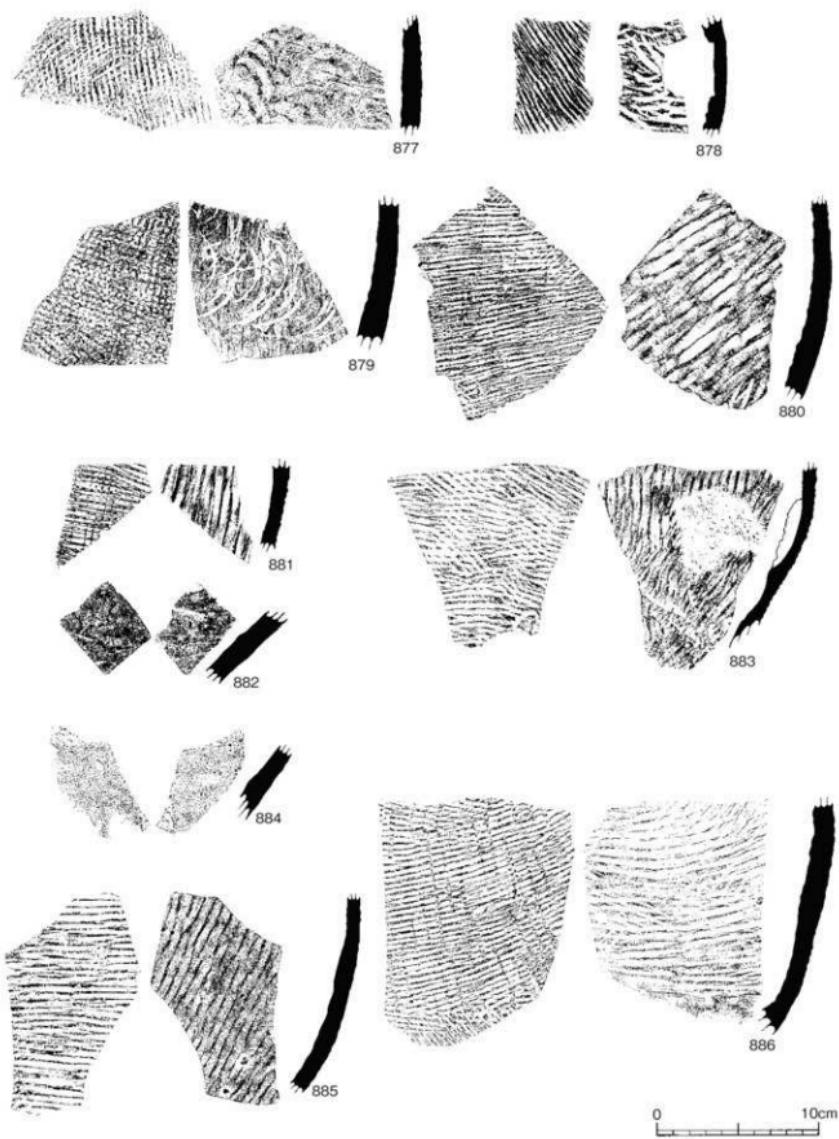
第87図 古代出土遺物実測図 (11)



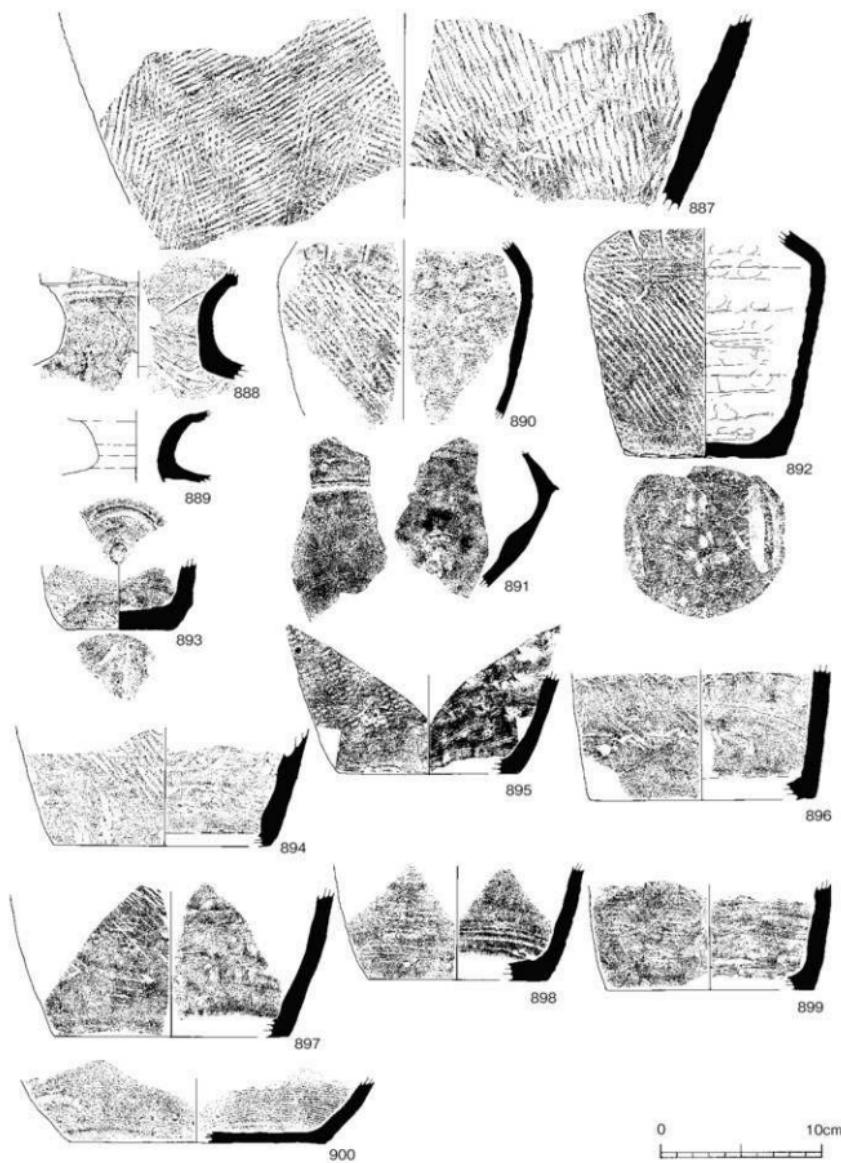
第88図 古代出土遺物実測図 (12)



第89図 古代出土遺物実測図 (13)



第90図 古代出土遺物実測図 (14)



第91図 古代出土遺物実測図 (15)

表16 古代出土遺物觀察表（1）

遺構内遺物

検査番号	レアクト番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整		色調		備考	
								外	内	外	内		
72	616	VI	X	3	坪	—	6.9	—	回転ナデ	回転ナデ	椎	浅黄緑	2号溝状遺構内出土
	617	VI	X	3	坪	—	7.8	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい黄緑	にふい黄緑	2号溝状遺構内出土
73	618	VI	Z	2	甕	—	—	—	回転ナデ	ヘラミガキ	にふい黄緑	黒	4号大型土坑内出土
74	619	VI	X	1	甕	—	7.4	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	椎	13号土坑内出土
75	620	VI	a	3	甕	—	6.9	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	にふい椎	20号土坑内出土
76	621	VI	Y	2	坪	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	16号ビット内出土
	622	VI	a	3	坪	—	9.6	—	回転ナデ	回転ナデ	椎	明黄緑	19号ビット内出土

包含層遺物

検査番号	レアクト番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整		色調		備考		
								外	内	外	内			
77	623	IV	V	1	皿	14.8	8.9	3.0	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	624	VI	X	3	皿	14.6	9.8	3.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	625	VI	X	2	皿	11.9	9.7	2.7	指ナデ	指ナデ	浅黄緑	浅黄緑	一個体	
	626	IV	25T	皿	15.2	9.4	2.9	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎			
	627	IV	V	1	高台付皿	10.3	8.4	4.5	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎	穿孔あり	
	628	IV	V	2	高台付皿	9.4	5.9	3.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	一個体	
	629	IV	Z	3	高台付皿	9.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	630	IV	V	1	高台付皿	—	8.8	—	回転ナデ	回転ナデ	浅青	浅青		
	631	VI	W	2	坪	12.2	5.0	4.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	632	VI	X	2	坪	13.2	5.6	4.7	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	633	VI	W	3	坪	12.8	6.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	634	IV	b	W	2	坪	13.8	8.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	635	V	b	X	3	坪	13.0	6.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	636	VI	W	2	坪	12.7	7.0	4.4	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	637	VI	X	2	坪	13.2	8.4	3.9	回転ナデ	回転ナデ	黄緑	黄緑		
	638	V	b	X	2	坪	12.6	7.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	椎	椎	
	639	V	b	X	2	坪	13.5	7.6	4.6	回転ナデ	回転ナデ	椎	椎	
	640	VI	X	2	坪	12.3	6.0	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	641	V	b	X	2	坪	13.8	7.6	4.5	回転ナデ	回転ナデ	淡青	淡青	
	642	V	b	X	2	坪	12.2	5.2	4.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	643	V	b	X	2	坪	12.5	5.8	3.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
	644	V	b	X	3	坪	17.0	8.8	4.2	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎	
	645	VI	W	2	坪	11.2	7.8	4.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	646	V	b	Z	3	坪	13.1	5.8	4.6	回転ナデ	回転ナデ	椎	椎	
	647	VI	V	1	坪	16.1	10.5	4.8	回転ナデ	回転ナデ	黄緑	灰白		
78	648	VI	X	2	坪	14.6	5.0	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	灰白		
	649	VI	Y	8	坪	16.3	8.8	4.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	650	VI	W	2	坪	14.1	6.2	4.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	651	V	b	Z	3	坪	12.1	6.8	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
	652	VI	X	2	坪	14.3	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	653	VI	a	3	坪	11.9	5.6	4.0	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	654	VI	V	1	坪	11.8	7.8	2.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	655	VI	X	2	坪	12.5	5.8	3.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	656	VI	X	3	坪	12.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	657	VI	X	2	坪	15.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	658	VI	X	2	坪	14.3	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	659	VI	X	2	坪	13.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	660	VI	V	7	坪	13.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	椎	椎		
	661	VI	U	3	坪	13.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	662	VI	Y	3	坪	12.2	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑		
	663	VI	X	2	坪	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	664	VI	Y	3	坪	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	665	V	b	Y	3	坪	—	6.0	—	摩耗	摩耗	浅黄緑	浅黄緑	
	666	V	b	X	3	坪	—	6.4	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
	667	V	b	Y	3	坪	—	6.6	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄緑	浅黄緑	
	668	VI	X	2	坪	—	5.2	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	669	VI	X	3	坪	—	8.4	—	回転ナデ	回転ナデ	にふい椎	にふい椎		
	670	—	V	2	坪	—	7.2	—	回転ナデ	回転ナデ	椎	椎		

表17 古代出土遺物觀察表（2）

神社 番号	レアク ト番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		備考		
								外	内	外	内			
78	671	—	V	2	坪	—	7.0	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	桜		
	672	Vt	X	2	坪	—	10.0	—	回転ナデ	回転ナデ	明褐色	明褐色		
	673	Vt	X	2	坪	—	9.0	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
	674	Vt	X	2	坪	—	5.6	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	675	Vt	X	2	坪	—	5.6	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	676	Vt	X	2	坪	—	5.2	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	677	Vt	X	2	坪	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜		
	678	Vt	Y	3	坪	—	5.0	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜		
79	679	V	b	Y	3	坪	—	9.2	—	摩耗	摩耗	浅黄桜	浅黄桜	
	680	Vt	X	3	坪	—	6.0	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	681	Vt	V	1	坪	—	6.0	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	682	Vt	X	3	坪	—	6.0	—	回転ナデ	ヘラミガキ	桜	桜		
	683	Vt	X	2	碗	—	10.2	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	桜		
	684	Vt	X	2	碗	—	8.0	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜		
	685	Vt	X	3	碗	—	8.6	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	桜		
	686	Vt	Y	3	碗	—	7.4	—	回転ナデ	回転ナデ	明黄色	明黄色		
	687	X	I	V	3	碗	—	8.6	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄桜	にぶい黄桜	
	688	Vt	W	9	碗	—	7.0	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	浅黄桜		
	689	Vt	b	Y	4	碗	—	8.0	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜	
	690	III	Y	3	碗	—	8.2	—	摩耗	摩耗	にぶい桜	にぶい桜		
	691	Vt	Y	2	碗	—	8.4	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜		
	692	Vt	V	3	碗	—	7.6	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	浅黄桜		
	693	Vt	Y	2	碗	—	7.8	—	回転ナデ	回転ナデ	明黄色	明黄色		
80	694	Vt	V	3	碗	—	8.2	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	にぶい桜		
	695	N'a	X	2	碗	—	6.8	—	摩耗	摩耗	桜	桜		
	696	Vt	X	2	碗	—	9.6	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	697	Vt	X	3	碗	—	11.3	—	回転ナデ	回転ナデ	桜	桜		
	698	Vt	V	3	碗	—	10.4	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	にぶい桜		
	699	Vt	X	3	黑色土器	9.1	6.2	1.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒	黒		
	700	Vt	U	2	黑色土器	17.3	10.4	6.4	回転ナデ	ヘラミガキ	黒	黒	スス付箋	
	701	Vt	X	3	黑色土器	13.8	7.0	5.8	回転ナデ	ナラミガキ	にぶい桜	黒		
	702	Vt	X	2	黑色土器	11.6	—	—	回転ナデ	ナラミガキ	浅黄桜	黒		
	703	Vt	X	2	黑色土器	—	—	—	回転ナデ	ナラミガキ	浅黄桜	黒		
	704	Vt	X	2	黑色土器	—	7.4	—	回転ナデ	ナラミガキ	にぶい桜	黒		
	705	Vt	b	X	3	黑色土器	—	7.1	—	回転ナデ	ナデ	浅黄桜	黒	
	706	Vt	V	3	黑色土器	—	8.8	—	回転ナデ	ナラミガキ	にぶい桜	黒		
	707	Vt	X	2	黑色土器	—	6.8	—	回転ナデ	ミカキ	桜	黒		
	708	Vt	X	2	黑色土器	—	8.4	—	回転ナデ	ミカキ	黄灰	黒		
	709	Vt	Y	2	黑色土器	—	8.9	—	回転ナデ	ミカキ	黄灰	黒		
	710	Vt	Y	2	黑色土器	—	6.0	—	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい桜	黒		
	711	Vt	X	3	黑色土器	—	5.6	—	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	黒		
	712	Vt	V	1-2	黑色土器	—	8.2	—	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄	黒		
	713	Vt	Y	2	黑色土器	—	—	—	回転ナデ	ヘラミガキ	にぶい黄	黒		
	714	Vt	W	2	黑色土器	8.5	3.8	2.2	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	黒	一個体	
	715	Vt	W	3	赤色土器	8.4	3.8	2.0	回転ナデ	ヘラミガキ	黄灰	桜	一個体	
	716	Vt	Z	2	赤色土器	14.6	—	—	ミガキ摩耗	ミカキ	にぶい黄	にぶい桜		
	717	N'	Y	2	赤色土器	—	7.8	—	ミガキ摩耗	ミカキ	黄灰	黄灰		
	718	Vt	Z	2	赤色土器	23.2	8.3	8.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄	にぶい黄		
	719	Vt	W	3	赤色土器	12.4	6.9	3.8	回転ナデ	回転ナデ	桜	桜		
	720	Vt	W	2	赤色土器	13.6	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	721	Vt	V	7	赤色土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	722	Vt	X	2	赤色土器	17.3	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	723	Vt	W	2	赤色土器	—	8.3	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	724	Vt	b	Z	3	赤色土器	—	8.7	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜	
	725	Vt	X	3	赤色土器	—	8.1	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	726	Vt	X	3	赤色土器	—	7.9	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	727	Vt	Z	2	赤色土器	—	7.0	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄	桜		
	728	Vt	V	3	赤色土器	—	7.2	—	回転ナデ	回転ナデ	にぶい桜	桜		
	729	Vt	X	6	赤色土器	—	9.2	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	730	Vt	V	2	赤色土器	—	7.8	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄桜	桜		
	731	Vt	X	2	赤色土器	—	8.0	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	桜		

表18 古代出土遺物觀察表（3）

辨認 番号	レアラ ト番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		備考		
								外	内	外	内			
80	732	VII	V	4	赤色土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	模		
	733	VII	V	2	赤色土器	—	—	—	摩耗	摩耗	浅黄模	褐灰		
	734	VII	X	6	赤色土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	模	模		
	735	—	Y	4	壺	2.8	—	—	指ナデ	指ナデ	浅黄模	模		
	736	VII	Y	2	壺	2.7	—	—	指ナデ	指ナデ	浅黄模	模		
81	737	VII	V	3	刻畫土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	模		
	738	VII	W	2	ヘラ書き土器	10.4	8.4	1.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模		
	739	VII	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い黄模		
	740	VII	W	2	ヘラ書き土器	16.9	13.1	1.9	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い黄模		
	741	VII	Z	3	ヘラ書き土器	16.3	8.1	5.2	回転ナデ	回転ナデ	明褐色	明褐色		
	742	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	8.5	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	に赤い黄模		
	743	VII	Z	2	ヘラ書き土器	—	8.2	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い黄模		
	744	VII	W	2	ヘラ書き土器	—	6.5	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黃	灰白		
	745	VII	X	3	ヘラ書き土器	—	7.6	—	摩耗	摩耗	灰白	灰白		
	746	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	6.1	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白		
82	747	VII	D	W	2	ヘラ書き土器	—	5.7	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模	
	748	VII	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黃模	に赤い黄模		
	749	VII	D	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	灰白	
	750	VII	W	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い模		
	751	VII	X	1	ヘラ書き土器	—	—	—	ミカキ	ナデ	灰黃模	灰黃模		
	752	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い黄模		
	753	VII	D	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い黄模	
	754	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黃模	灰黃模		
	755	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰黃模	に赤い黄模		
	756	—	Y	4	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	模	に赤い黄模		
83	757	VII	Y	3	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	に赤い黄模		
	758	VII	W	8	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	青模	青模		
	759	VII	B	3	ヘラ書き土器	12.4	7.7	4.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	灰白		
	760	VII	B	2	ヘラ書き土器	—	6.4	—	摩耗	摩耗	浅黄模	浅黄模		
	761	VII	Y	2	ヘラ書き土器	—	8.2	—	摩耗	ナデ	に赤い黄模	に赤い黄模		
	762	VII	Y	3	ヘラ書き土器	—	8.6	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白	浅黄模		
	763	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	6.7	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模		
	764	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	ヘタミガキ	灰黃	黑		
	765	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	灰白		
	766	VII	Y	3	ヘラ書き土器	—	6.0	—	摩耗	ナデ	灰白	浅黄模		
84	767	VII	Y	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	模	模		
	768	VII	W	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模		
	769	VII	X	2	ヘラ書き土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	灰白		
	770	VII	B	Y	3	磨擦土器	8.9	7.1	1.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模	
	771	VII	B	Z	2-3	磨擦土器	13.1	—	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	に赤い模	
	772	VII	B	X	2	磨擦土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	模	模	
	773	VII	B	Z	2	磨擦土器	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ	模	模	
	774	VII	B	Y	3	磨擦土器	14.2	10.1	2.3	回転ナデ	回転ナデ	に赤い黄模	に赤い黄模	
	775	VII	X	3	磨擦土器	—	8.0	—	回転ナデ	回転ナデ	浅黄模	浅黄模		
	776	VII	a	3	磨擦土器	8.3	7.2	1.4	回転ナデ	ハケメ後ナデ	浅黄模	に赤い模		
85	777	VII	Y	2	磨擦土器	—	6.3	—	回転ナデ	回転ナデ	に赤い模	に赤い模		
	778	—	—	土師壺	—	28.7	—	—	ナデ	ヘラケズリ	浅黄模	黒褐		
	779	VII	B	X	3	土師壺	29.2	—	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い黄模	に赤い黄模	
	780	VII	X	2	土師壺	—	28.2	—	ナデ	ヘラケズリ	に赤い黄模	に赤い黄模		
	781	VII	Y	3	土師壺	—	26.6	—	横ナデ	ヘラケズリ	模	模	金雲母	
	782	VII	X	2	土師壺	—	25.8	—	ナデ	ヘラケズリ	に赤い黄模	に赤い黄模	金雲母	
	783	VII	X	1	土師壺	—	23.4	—	ナデ	ヘラケズリ	に赤い模	模	金雲母	
	784	VII	X	3	土師壺	—	26.2	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い模	小唯多	
	785	VII	Y	2	土師壺	—	24.1	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い模	小唯多	
	786	VII	Y	3	土師壺	—	26.8	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い模	金雲母	
86	787	VII	Y	2	土師壺	—	23.8	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い黄模	金雲母	
	788	VII	X	2	土師壺	—	25.8	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い黄模	金雲母	
	789	VII	Y	3	土師壺	—	25.0	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い模	金雲母	
	790	VII	Y	2	土師壺	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い模	金雲母	
	791	VII	Y	3	土師壺	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	黄灰		
	792	VII	X	3	土師壺	—	—	—	ナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	に赤い黄模		

表19 古代出土遺物觀察表（4）

博団 番号	レイアラ 番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整		色調		備考
								外	内	外	内	
84	793	Vt	X	2	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄	明黄褐	
	794	Vt	X	2	土師壺	15.2	—	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	795	Vt	W	2	土師壺	—	—	ナデ後ハケメ	ハケメ後ナデ	淡黄	にぶい黄	
	796	Vt	Y	2	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい黄	金雲母	
	797	Vt	X	2	土師壺	20.1	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
	798	Vt	Z	2	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	金雲母
	799	Vt	X	2	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	金雲母
	800	—	V	3	土師壺	30.0	—	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	金雲母
	801	Vt	Z	2-3	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	802	Vt	a	2	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
85	803	Vt	a	3	土師壺	—	—	ナデ	ヘラケズリ	橙	橙	
	804	Vt	X	2	土師壺	22.8	—	ナデ	ヘラケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
					最大長	最大幅	最大厚					
	805	Vt	X	3	土錐	5.5	2.9	—	手捏ね	手捏ね	灰青	灰青
	806	Vt	X	3	土錐	5.0	2.1	—	手捏ね	手捏ね	灰青	灰青
	807	Vt	X	2	土錐	5.0	2.0	—	手捏ね	手捏ね	明褐色	明褐色
	808	Vt	a	3	土錐	4.0	1.8	—	手捏ね	手捏ね	灰青	灰青
	809	Vt	X	3	土錐	4.0	1.4	—	手捏ね	手捏ね	橙	にぶい橙
	810	Vt	Y	3	土錐	4.0	1.7	—	手捏ね	手捏ね	にぶい橙	にぶい橙
	811	Vt	Y	3	土玉	3.0	1.5	—	手捏ね	手捏ね	にぶい橙	にぶい橙
85	812	Vt	Y	3	土玉	2.5	2.5	—	手捏ね	手捏ね	明褐色	明褐色
	813	Vt	Y	3	鉢輪車	5.0	—	0.7	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙
	814	Vt	Z	2	鉢輪車	—	—	0.7	ナデ	ナデ	灰白	灰白
					口径	底径	高さ					
	815	Vt	X	2	壺	22.1	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい橙	橙
	816	Vt	U	3	壺	—	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	明褐色	灰
	817	Vt	Z	2	壺	16.0	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰白	明褐色
	818	Vt	X	2	壺	13.2	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	橙	橙
	819	Vt	Y	3	壺	—	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰青	灰
85	820	Vt	X	2	坪	12.4	7.4	3.4	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰
	821	Vt	V	1	坪	18.6	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰
	822	Vt	X	3	坪	16.4	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰	灰
	823	Vt	a	3	坪	20.1	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	暗灰	暗灰
	824	Vt	X	2	坪	13.5	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	褐色	褐色
	825	Vt	Y	3	坪	11.1	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	褐色	褐色
	826	Vt	a	3	坪	—	7.6	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰青	灰青
	827	Vt	X	2	坪	12.2	8.2	4.4	ろくろナデ	ろくろナデ	灰黃褐色	灰黃褐色
	828	Vt	X	3	坪	—	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	褐色	褐色
	829	Vt	X	4	坪	—	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	褐色	褐色
86	830	Vt	X	2	皿	13.1	11.1	3.1	ろくろナデ	ろくろナデ	黃灰	黃灰
	831	Vt	Y	3	皿	20.1	10.2	8.2	ろくろナデ	ろくろナデ	黃灰	黃灰
	832	Vt	X	3	碗	16.1	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	褐色	褐色
	833	Vt	X	3	皿	33.8	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	834	Vt	X	2	皿	47.3	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	835	Vt	X	3	皿	33.2	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	黃灰	黃灰
	836	Vt	X	3	皿	28.6	—	—	平行タキ	ろくろナデ	にぶい赤褐色	灰赤
	837	Vt	a	3	皿	17.8	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	黑褐色	黑褐色
	838	Vt	Y	3	皿	18.2	—	—	平行タキ	ろくろナデ	にぶい赤褐色	黃
	839	Vt	X	2	皿	20.2	—	—	平行タキ	圓心円当て具	にぶい赤褐色	黃
87	840	Vt	X	3	皿	22.2	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	841	Vt	Y	2	皿	19.4	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい橙	にぶい橙
	842	Vt	U	3	皿	21.8	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	灰黃褐色	灰黃褐色
	843	Vt	Z	2	皿	21.8	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	844	Vt	a	4	皿	18.8	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	845	Vt	V	2	皿	—	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい黃
	846	Vt	a	4	皿	—	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	灰青	橙
	847	Vt	V	2	皿	—	—	—	平行タキ後ナデ	車輪文当て具	にぶい橙	にぶい黃
	848	Vt	Y	2	皿	—	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	にぶい橙	にぶい橙
	849	Vt	Y	3	皿	—	—	—	平行タキ後ナデ	圓心円当て具	褐色	にぶい橙
88	850	Vt	Y	2	皿	—	—	—	格子目タキ後ナデ	圓心円当て具	灰褐色	灰青
	851	Vt	Y	3	皿	—	—	—	格子目タキ	ろくろナデ	にぶい黃	にぶい赤褐色
	852	Vt	W	2	皿	—	—	—	格子目タキ	圓心円当て具	オーラーブ	にぶい赤褐色
88	853	Vt	W	2	皿	—	—	—	平行タキ	圓心円当て具	オーラーブ	オーラーブ

表20 古代出土遺物觀察表（5）

博物 館番号	レアク ト番号	層	区	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整		色調		備考	
								外	内	外	内		
88	854	VII	W	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	黒灰	黒灰		
	855	VII	W	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	オリーブ緑	灰黄		
	856	VII	V	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	にふい黄褐色	にふい赤褐色		
	857	VII	X	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	明黄褐色	明黄灰		
	858	VII	X	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	黒褐色	黒灰		
	859	VII	X	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	橙	橙		
	860	VII	X	7	便	—	—	平行タキ後ナデ	同心円当て具	黒褐色	黒灰		
	861	VII	Y	3	便	—	—	格子目タキ	同心円当て具	灰白	灰黄褐色		
	862	VII	a	3	便	—	—	平行タキ	平行タキ後ナデ	灰黃	橙		
	863	VII	X	2	便	—	—	平行タキ	車輪状当て具	暗灰黃	暗紅黃		
89	864	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	淡黃	淡黃		
	865	VII	Y	3	便	—	—	格子目タキ	平行當て具	橙	にふい黄褐色		
	866	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	にふい赤褐色	にふい橙		
	867	VII	U	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	淡黃褐色	にふい橙		
	868	VII	Z	2	便	—	—	格子目タキ	平行當て具	オリーブ緑	黄褐色		
	869	VII	X	2	便	—	—	格子目タキ	平行當て具	暗灰黃	黃灰		
	870	VII	a	3	便	—	—	格子目タキ後ナデ	平行當て具	褐色	褐		
	871	VII	Y	3	便	—	—	ろくろナデ	同心円当て具	オリーブ緑	黒灰		
	872	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	灰褐色	にふい褐		
	873	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	黄褐色	黄褐色		
90	874	VII	X	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	灰黃	にふい黄褐色		
	875	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	灰黃	にふい黄褐色		
	876	VII	X	3	便	—	—	格子目タキ後ナデ	同心円当て具	にふい褐	褐色		
	877	—	V	2	便	—	—	格子目タキ	同心円当て具	にふい褐	青橙		
	878	V	b	a	2	便	—	平行タキ	同心円当て具	褐色	暗灰黃		
	879	V	b	a	3	便	—	格子目タキ	同心円当て具	橙	橙		
	880	V	b	Y	3	便	—	平行タキ	平行當て具	褐色	灰		
	881	V	b	Y	3	便	—	格子目タキ	平行當て具	黑褐色	黃灰		
	882	VII	Y	3	便	—	—	平行タキ	平行當て具	にふい黄	黃灰		
	883	VII	X	2	便	—	—	平行タキ	同心円当て具	黒灰	暗紅黃		
91	884	VII	U	3	便	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	灰褐色	橙		
	885	VII	X	9	便	—	—	平行タキ	平行當て具	にふい橙	明黄褐色		
	886	VII	X	2	便	—	—	格子目タキ	平行當て具	淡黃褐色	にふい黄褐色		
	887	VII	Z	2	便	—	—	平行タキ	平行當て具	にふい赤褐色	にふい黄褐色		
	888	VII	X	2	杏	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	淡黃褐色	にふい橙		
	889	VII	Z	2	杏	—	—	ろくろナデ	ろくろナデ	淡黃	淡黃		
	890	VII	V	2	杏	—	10.1	—	平行タキ	ナデ	オリーブ緑	にふい黄	
	891	VII	X	2	杏	—	—	平行タキ	ナデ	淡黃	淡黃		
	892	VII	V	2	杏	—	—	平行タキ	平行タキ	白灰色	白灰色		
	893	VII	W	6-7	底部	—	6.6	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にふい黄	褐	
92	894	VII	Z	2	底部	—	13.4	—	平行タキ	ろくろナデ	にふい赤褐色	にふい黄褐色	
	895	VII	X	2	底部	—	11.2	—	格子目タキ	ろくろナデ	暗灰黃	暗紅黃	
	896	VII	Y	3	底部	—	14.1	—	格子目タキ後ナデ	ナデ	にふい赤褐色	暗紅黃	
	897	VII	X	2	底部	—	14.6	—	平行タキ後ナデ	ナデ	灰白	オリーブ緑	
	898	VII	Z	2	底部	—	11.1	—	平行タキ後ナデ	ナデ	暗灰黃	灰黃	
	899	VII	X	2	底部	—	12.8	—	ろくろナデ	ろくろナデ	オリーブ黒	灰	
	900	VII	Z	2	底部	—	15.8	—	ろくろナデ	ろくろナデ	にふい黄	にふい黄	

第6章 中・近世の調査

第1節 調査の概要

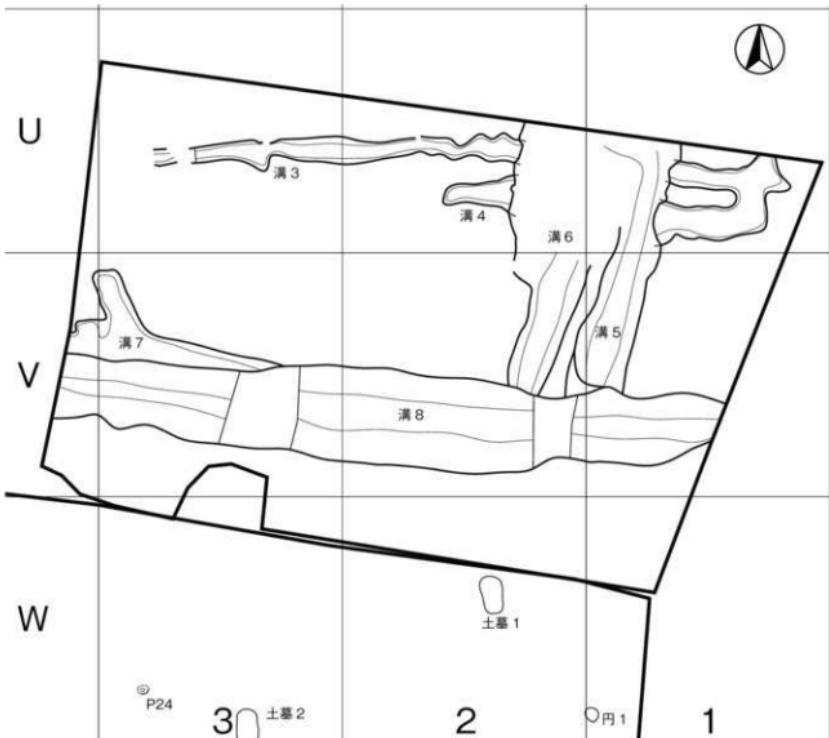
中・近世の調査対象となる層位は、II～IV層である。しかし、層序で述べたとおり河川の氾濫等によって層位が安定していないため、弥生・古墳時代～古代にかけて検出された遺構内へ流れ込んだ該期の遺物も多い。それらについては、包含層遺物として報告することにした。

また、表層とII層が混在している箇所も多く、そこで出土した遺物については、表探遺物として一括で取り上

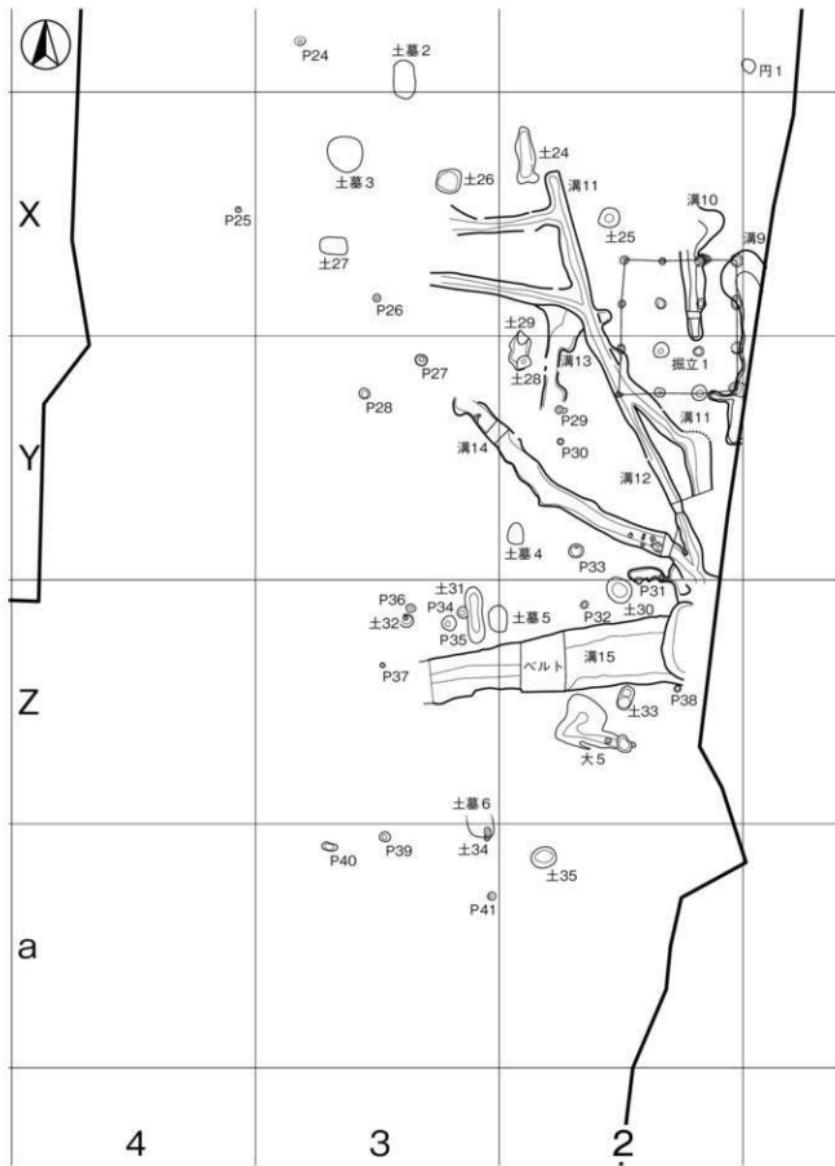
げ、資料的価値が高いものは掲載することにした。

遺構検出は、Vb～VI層で行った。その結果、該期の遺構として掘立柱建物跡1軒、溝状遺構16基、井戸状遺構1基、炉状遺構3基、土壙墓6基、大型土坑2基、円形粘土塊状遺構1基、土坑12基、ビット19基を検出した。(図92～94)

遺物は、土師器、須恵器、白磁、青磁、青花、輸入陶器、国内産陶器、国内産磁器、瓦質土器、土師質土器、土製品、滑石製品、古錢等が出土した。

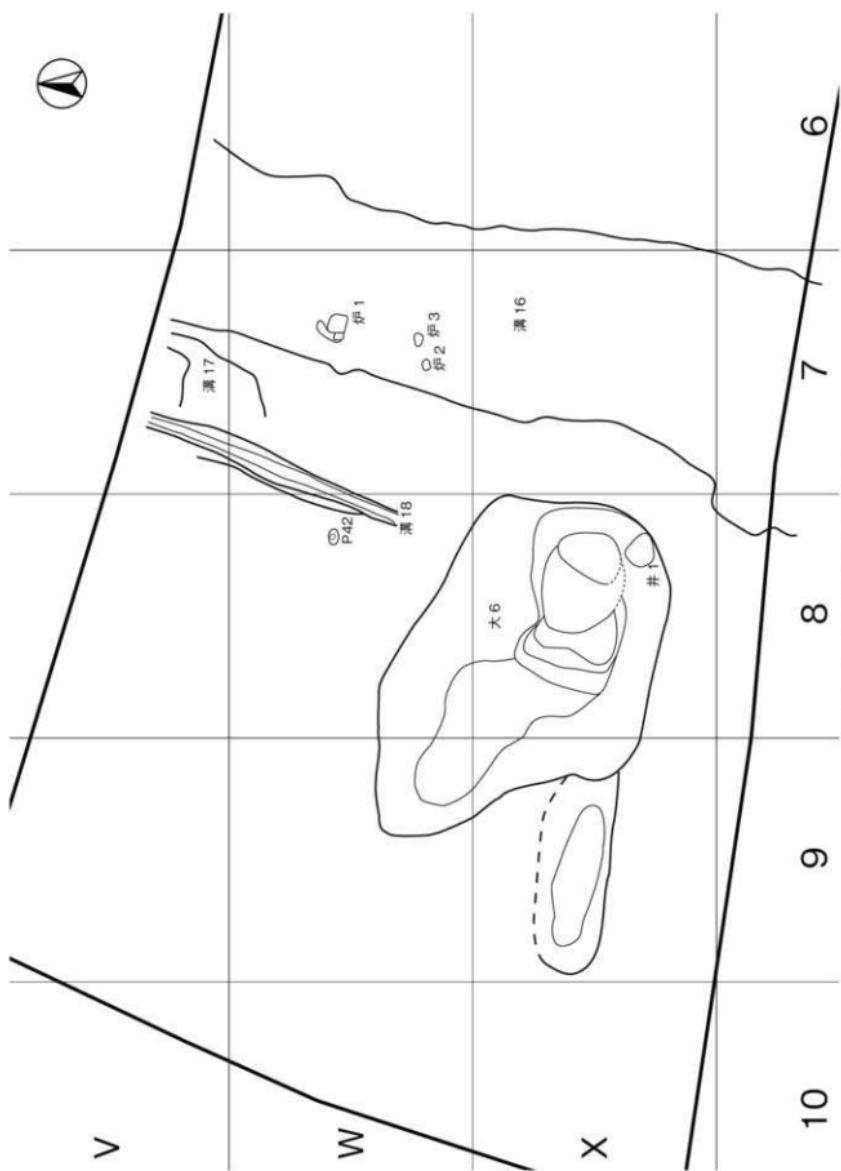


第92図 中・近世検出遺構配置図(1)



第93図 中・近世検出遺構配置図（2）

第94図 中・近世検出遺構配置図 (3)



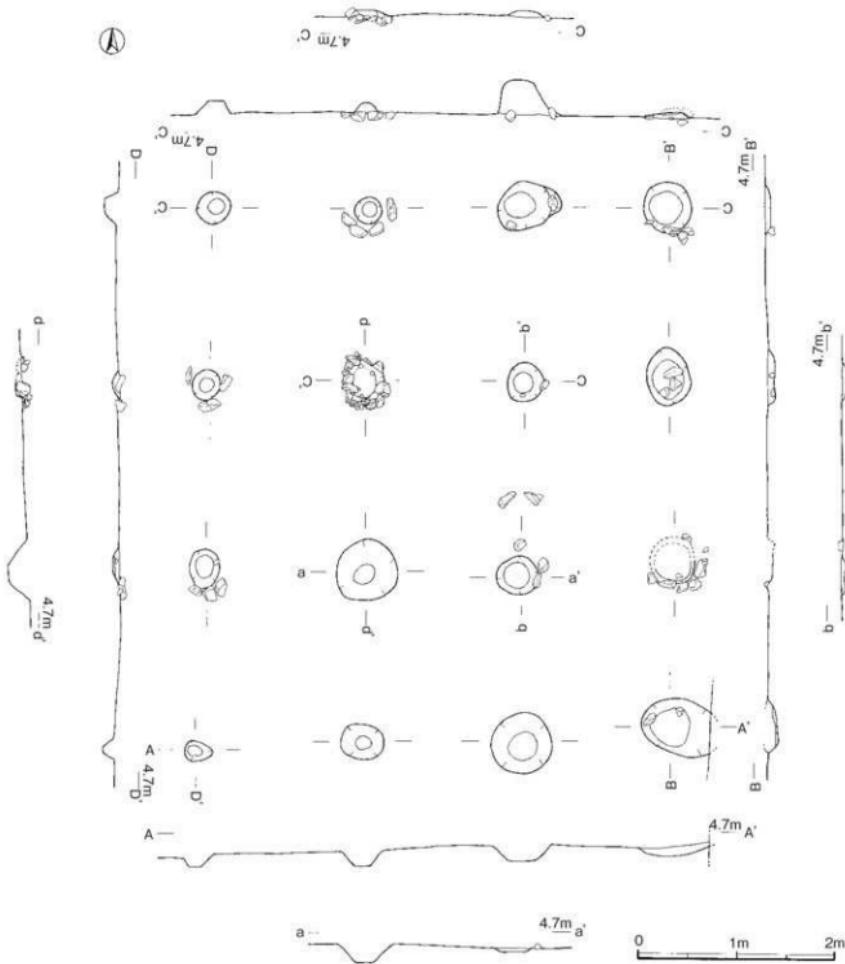
第2節 遺構

該期の遺構は、U～a～1～4区の範囲に集中して検出した。また、V～Y～5～10区については、中世の包含層であるⅢ・Ⅳ層は削平されていたが、近世の遺物包含層であるⅡ層は確認できた。

1 据立柱建物跡（第95図）

X～Y～2区のⅢ層上面で、柱穴跡と考えられるピットが16基検出した。

南北方向、東西方向ともに柱間3間の総柱建物跡である。



第95図 据立柱建物跡実測図

柱間隔は、東西方向が北からおおよそ1.6m + 1.5m + 1.5mで4.6m、1.55m + 1.55m + 1.5mで4.6m、1.55m + 1.55m + 1.55mで4.65m、1.6m + 1.55m + 1.55mで4.7mとほぼ同間隔である。

南北方向は、西からおおよそ1.9m + 1.8m + 1.8mで5.5m、1.7m + 2m + 1.7mで5.4m、1.8m + 2m + 1.8mで5.6m、1.8m + 1.9m + 1.8mで5.5mと同様にはほぼ同間隔である。

それぞれの柱穴跡は、直徑が約20cm～70cmで深さが約10cm～40cmと異なっており、石組みによる補強がされているものもある。

柱穴跡が同間隔に配列されていることと、配列方向が真北、真西を向いていることが特筆すべき点である。

遺構に伴う遺物は大量に出土したが、小片が多いため該期のものとして形式がはっきりしているもの8点を掲載した。

掘立柱建物跡内出土遺物（第96図901～908）

901～904は土師器である。901・902は皿で、901の体部は丸みを帯びながら立ち上がる。903は壺である。904は黒色土器B類の皿である。内面と外側面はミガキが施される。

905・906は、中国南部産と思われる輸入陶器である。905は水注等の口縁部で、揭露がかかるが剥落している。906は瓶もしくは壺等の胴部である。外面の一部に鉄軸がかかる。

907・908は胎土が小豆色を呈するカムイヤキで、壺の胴部と頸部と思われる。

その他、土師器の皿・壺約190点、須恵器5点、カムイヤキ2点、白磁5点、青磁1点、布目瓦1点が出土している。出土遺物等から、中世前期11世紀後半～13世紀代を中心とする遺構と思われる。

2 溝状遺構

(1) 3～8号溝状遺構（第97図）

U・V-1～4区のⅡ層上面から、6基が集中して検出した。

切り合い関係は、3・4号が5・6号に切られ、さらに5・6号が8号に切られた状態であることから、8号が最も新しい溝であると考えられる。しかし、いずれも埋土は表層の灰褐色砂質土が含まれていることから、6基に大きな時期差はないと考えられる。

3号は全長約26.5m、幅約1.1mで最深部は約16cmあり、東西方向にのびている。

遺物は、土器片等が43点出土したが、時期を確定できない形式不明のものがほとんどであるため掲載しなかった。

4号は全長約14.2m、幅約1mで最深部は約14cmあり3号溝状遺構と平行して東西方向にのびている。

出土遺物は11世紀後半～12世紀前半に相当すると考えられる白磁の碗が1点出土した。

5号は全長約9.9m、幅約2.4mで最深部は約45cmあり、南北方向にのびている。

遺物は、該期のものを12点掲載した。

6号は全長約6m、幅約3mで最深部は約40cmあり、5号と平行して南北方向にのびている。

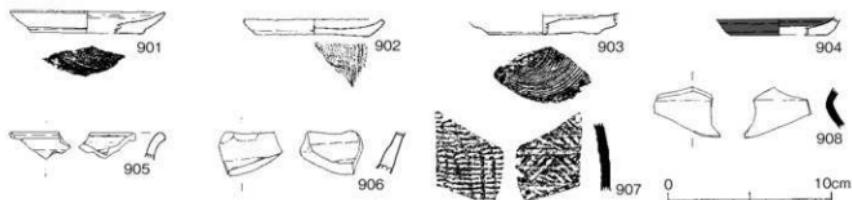
遺物は、該期のものを5点掲載した。

7号は全長約9m、幅約4mで最深部は約25cmあり、8号溝状遺構の北側に隣接している。

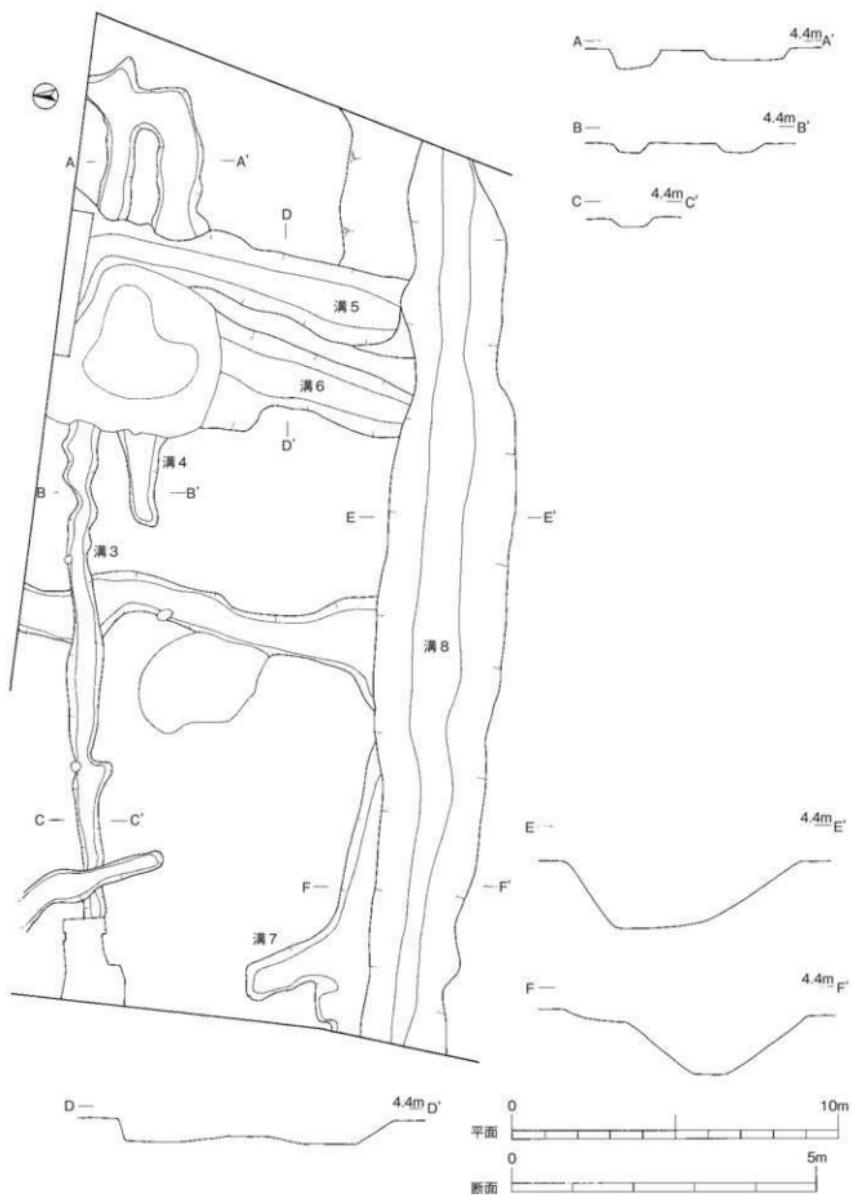
遺物は、該期のものを14点掲載した。

8号は全長約27.2m、幅約3.8mで東西方向に長くのび、最深部は約1.1mの大型溝状遺構である。

該期の遺物は大量に出土し、その内53点を掲載した。



第96図 掘立柱建物跡内出土遺物実測図



第97図 3～8号溝状遺構実測図

3~8号溝状遺構内出土遺物

4号溝状遺構内出土遺物(第98図909)

909は白磁で、内面に短い櫛目文が施される。

5号溝状遺構内出土遺物(第98図910~921)

910は土師器の壺である。外底面の一部には赤色顔料が塗布されている。内面にはスヌが付着する。

911~914は、龍泉窯系の碗である。911は口縁部がわずかに外反し、外面には中央に竜をもつ片影運弁文が描かれる。912・913は底部である。壺付と高台内面は釉剥ぎされる。外面には竜を有する片影運弁文が描かれる。914は壺付まで釉がかかり、内底面と見込みは円状に釉剥ぎされる。915は、同安窯系碗の口縁部である。口縁部下位で内側に屈曲し、外面には縦位に櫛目文、内面にはジグザグ連点文が描かれる。

916・917は白磁である。916は碗の底部で、外面腰部から高台内底面にかけては無釉であり、見込みも輪状に釉剥ぎされる。917は壺である。外面腰部から高台内面にかけて露胎し、高台には抉りが入る。見込みには重ね焼きの高台痕が残る。

918は、輸入陶器の水注もしくは壺の口縁部である。中国南部産と思われる。

919は、桿万丈産と思われる捏鉢である。

920は、瓦質土器の捏鉢である。

921は、備前産捏鉢である。

その他には、土師器約50点、須恵器7点、白磁5点、青磁2点、輸入陶器8点が出土している。出土遺物等から、遺構の年代は13~15世紀頃のものと思われる。

6号溝状遺構内出土遺物(第98図922~926)

922は、口縁部が玉縁を呈する白磁の碗である。

923は、輸入陶器の鉢と思われる。胎土は鈍い灰褐色で粗く、白色の微細な砂粒を多く含む。残存部の内面に褐釉がかかる。

924は、瓦質土器で、捏鉢の底部である。

925は、肥前産染付碗である。

926は、肥前陶器の碗である。腰部に弱い棱を有する。壺付と高台内面を除き、厚めの黒釉がかかる。

その他、土師器9点、須恵器2点が出土しているが、出土遺物の年代幅が大きく、遺構の詳細な年代は不明である。

7号溝状遺構内出土遺物(第98・99図927~940)

927・928は、龍泉窯系青磁の碗である。927は、内面に片影り文様と短い櫛目文が描かれる。

929は、中国南部産の輸入陶器と思われるもので、水注等の把手である。外面には褐釉がかかる。

930は、桿万丈産と思われる捏鉢である。内面には筋状の調整痕が残る。

931は、東播磨系須恵器の捏鉢である。

932は、景徳鎮窯系青花の碗である。

933は肥前陶器で、唐津焼の皿である。灰色の灰釉がかかる。

934~939は薩摩焼で、苗代川系のものである。934~936は鉢で、934は口縁部が逆L字状を呈する。935は、口唇部が平坦につくられたものである。936は、口縁部を外側から内側に折り返してつくるもので、口唇部に具目が残る。935・936は鉢としたが、甕や壺の蓋としての機能をもつ可能性も考えられる。937は擂鉢である。口縁部は外側に折り返して肥厚させ、外面口縁部下位に2条の突帯をつくる。内面の擂り目は、口縁部下位に余白を残して入れられる。938は土瓶の蓋である。上面の鉄釉がかかる。939は土瓶の注口部である。一穴の注口である。

940は土師質土器の熔炉である。外面全体にスヌが付着する。

その他に須恵器が1点(桿万丈?)、輸入陶器4点、青磁8点、国産陶器(薩摩焼苗代川系)7点が出土している。中世後期~近世中頃の遺構と考えられる。

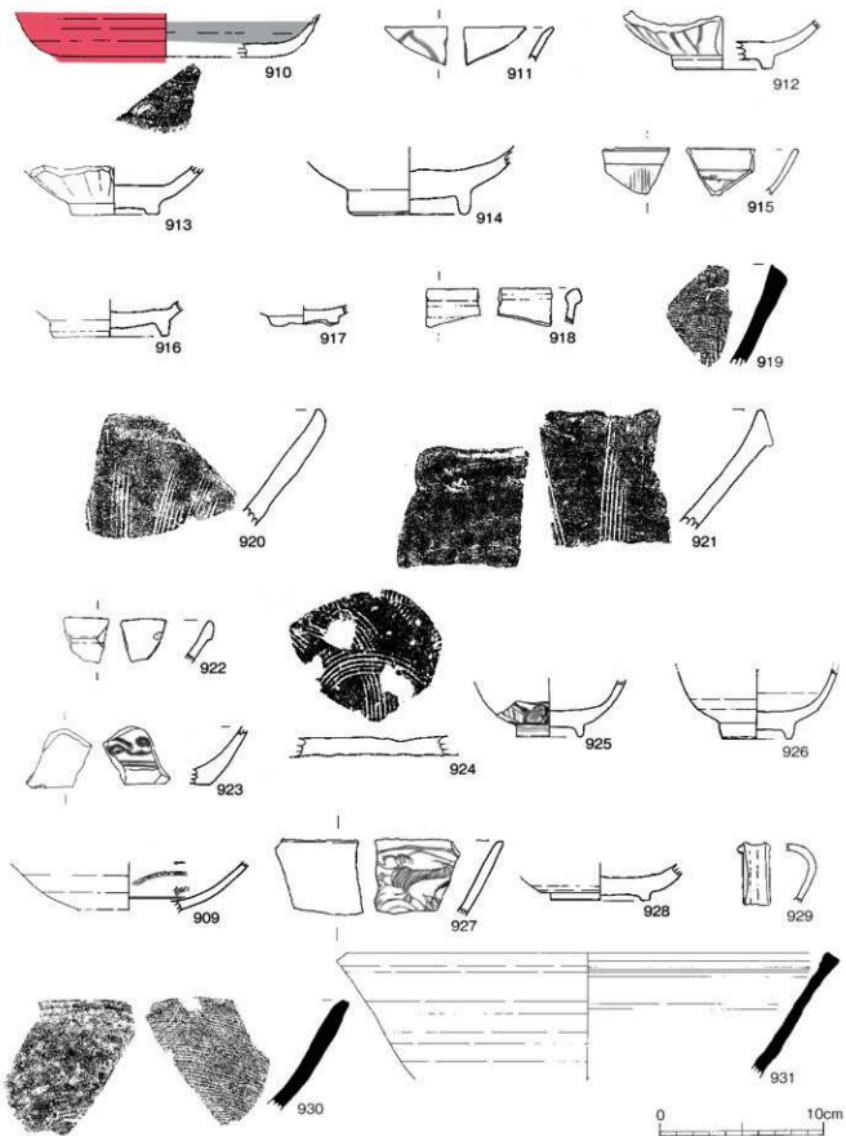
8号溝状遺構内出土遺物(第100図~102図941~993)

941~951は土師器である。941・942は皿で、どちらも体部は丸く立ち上がる。口径は941が約10cm、942が約8cmを測る。943~947は壺である。943はほぼ完形に近いもので、体部は丸みをおびる。内面には回転ナデが観察され、体部との境はナデにより溝状をなす。944は体部が直線的にのびるもので、底部の切り離しが難で、底部と体部の境にくびれができる。948~950は黒色土器A類である。948の体部は丸みを帯び、内外面とも横向向のミガキが施される。高台は短く、「ハ」の字状を呈する。951は土師器の壺の底部を再利用したメンコである。

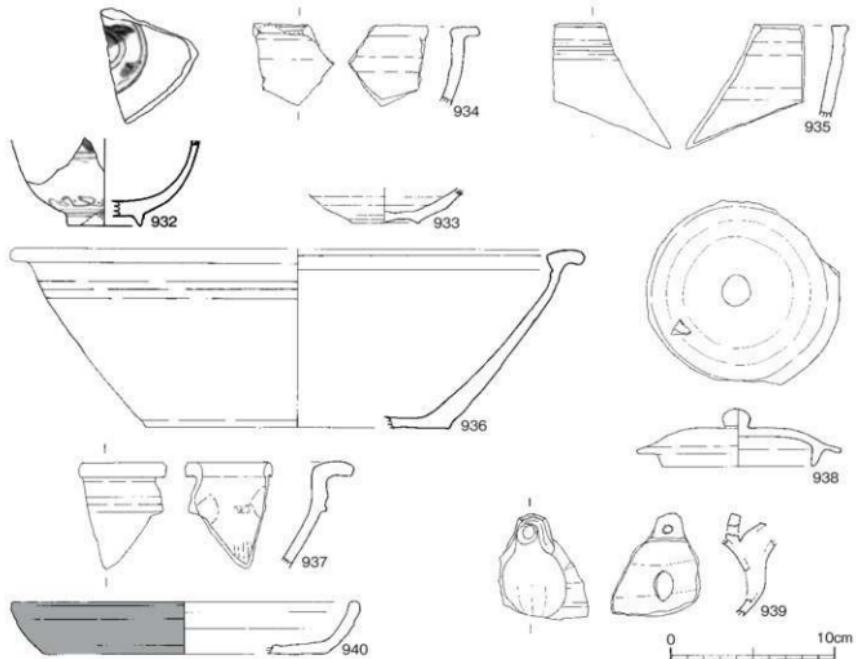
952~964は白磁である。952は、口縁部に小さめの玉縁を有する碗の底部と思われる。953は、口縁部が玉縁状を呈する碗の口縁部で、954は底部である。955~959は、口縁端部が外側に屈曲する形状を呈する碗である。957・958・960は、内面に短い櫛目文が施される。961・962は、高台が先細る形状を呈する底部である。963は皿である。口縁部はわずかに外反する。964は、甕や壺等、袋物の底部である。

965~972は青磁である。965~967は、龍泉窯系青磁の碗である。965は内面を二叉片刃で区画し、その中に花文を描く。966は外面に繊細による運弁文が描かれるが、劍頭が省略されている。967は外面に、弁の中央に後を有する運弁文が描かれる。

968~971は、同安窯系青磁である。968・969は碗である。968は内面にヘラ状の施文具を用いた文様と棒の先端を用いたジグザグ文が描かれる。外面は細かい縦の櫛目文が描かれる。969は外面に、ヘラ状の施文具で運弁を描き、その中に針先のように先端が尖った工具で細い



第98図 3~8号溝状造構内出土遺物実測図（1）



第99図 3~8号溝状構内出土遺物実測図(2)

縦の櫛目文を描く。970・971は皿である。体部が中位で屈曲するもので、970は無文であるが、971は内面にヘラ状工具による文様とジグザグ連点文が描かれる。

972は、器種不明の資料である。口唇部は蓋を受けるものと考えられ、釉剥ぎされる。973~979は、中国南部産と考えられる輸入陶器である。

973・974は陶器の捏鉢である。口縁部内面には2条の突帯を有する。973は無釉であるが、974は外面と口縁部内面上位のみ施釉される。

975・976は、磁州窯系の瓶の胸部と思われる。灰褐色の素地に褐釉をかけ、白化粧土を塗り、地の部分を搔き落として唐草文を描く。同一個体と思われる2点である。

977~979は壺である。977は、褐釉がかかる小型の壺である。978・979は胎土が粗く、微細な砂粒を多く含む。978は、内面と体部下位以下は無釉である。979は外面は無釉であるが、内面に淡灰褐色に発色した釉薬がかかる。

980は、樺万丈産と思われる捏鉢である。981・982は東播磨系須恵器の捏鉢である。981は片口部である。983・984はカムイヤキの壺である。983は外面に格子状のタタキ目、984は矢羽根状のタタキ目が見られる。

985は、瓦質土器の捏鉢である。

986は備前産の壺の胴部と思われる。

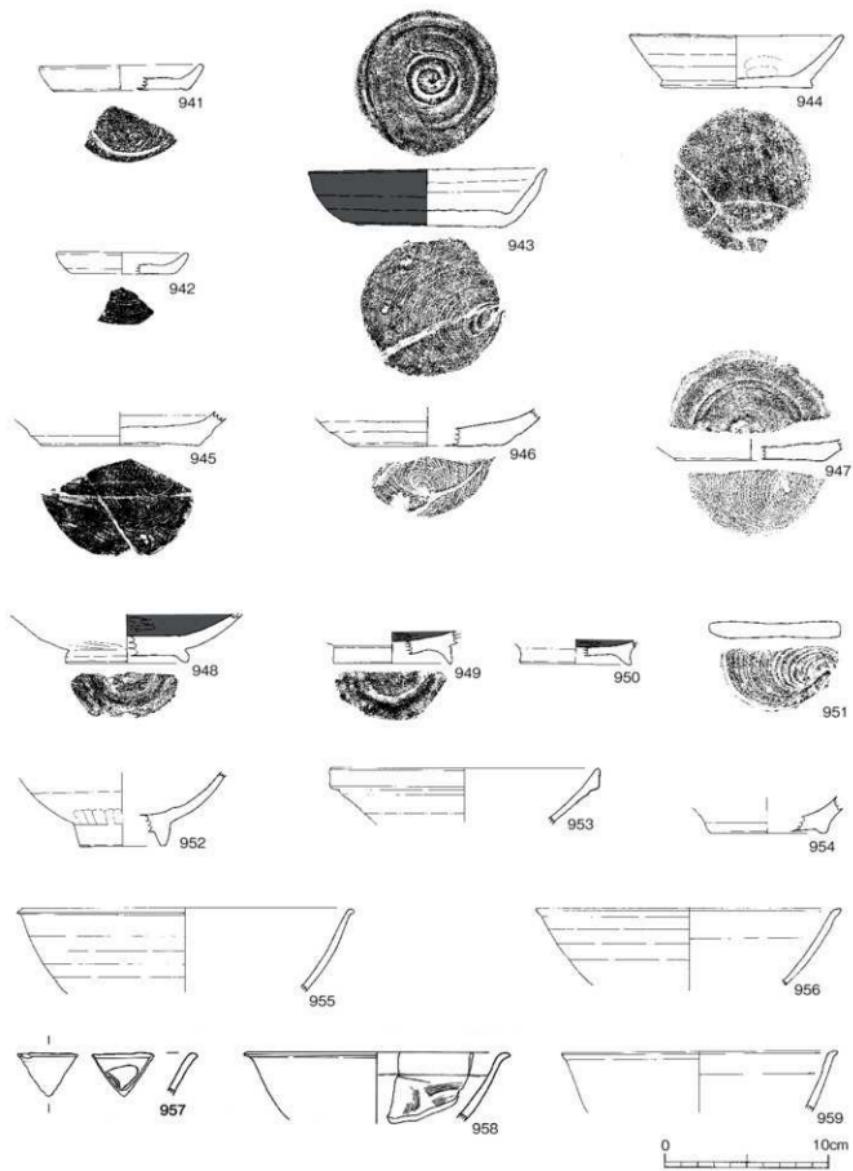
987は滑石製石鍋の底部である。外面に縦位にノミ痕が残る。

988~990は薩摩焼である。988は龍門司系の碗で、豊付と高台内面を除き、鉄軸がかけられる。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。989・990は、苗代川系のものである。989は片口で、口唇部を除き内外面に黒色に発色した鉄釉がかかる。外面の釉下には横位に調整痕が見られる。990は壺や壺に被せる蓋の口縁部と思われる。口唇部は平坦につくられる。

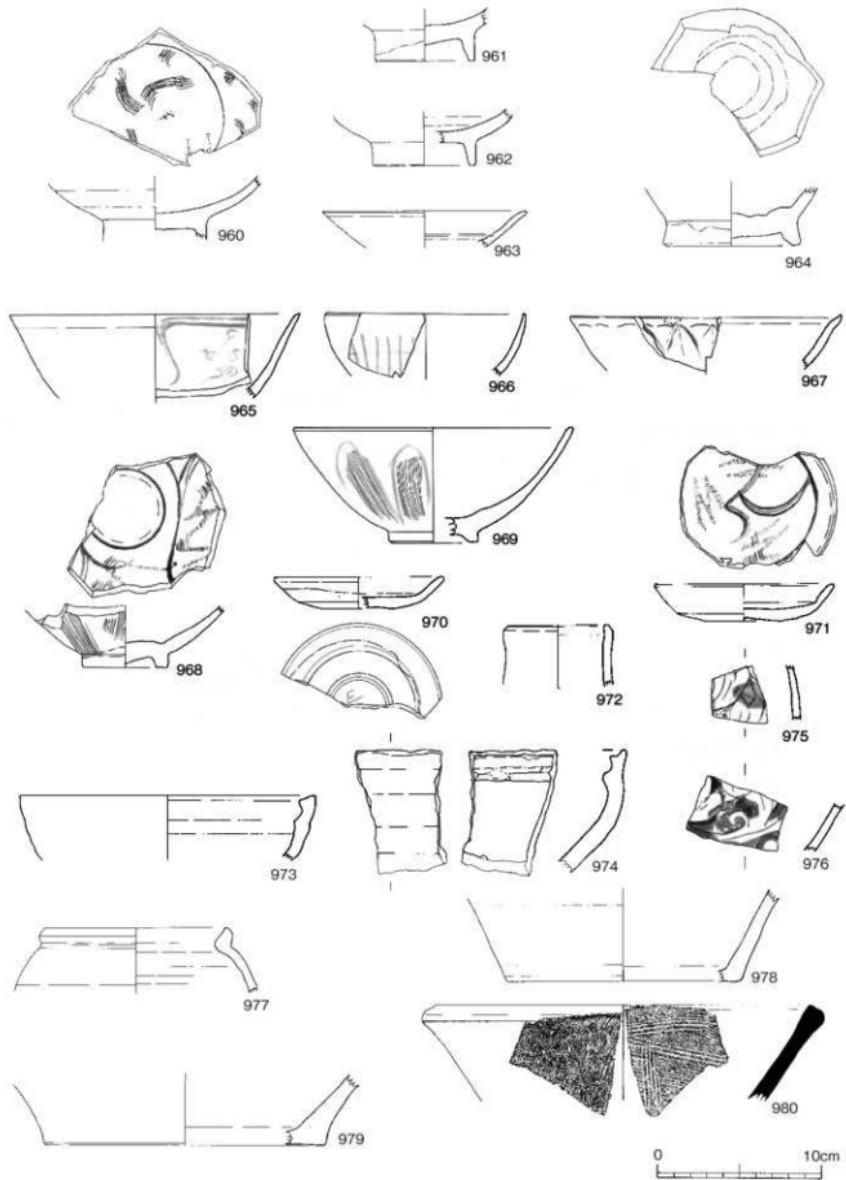
991は土師質土器の培焰の把手部である。下部にはススが付着する。

992は縁の羽口である。

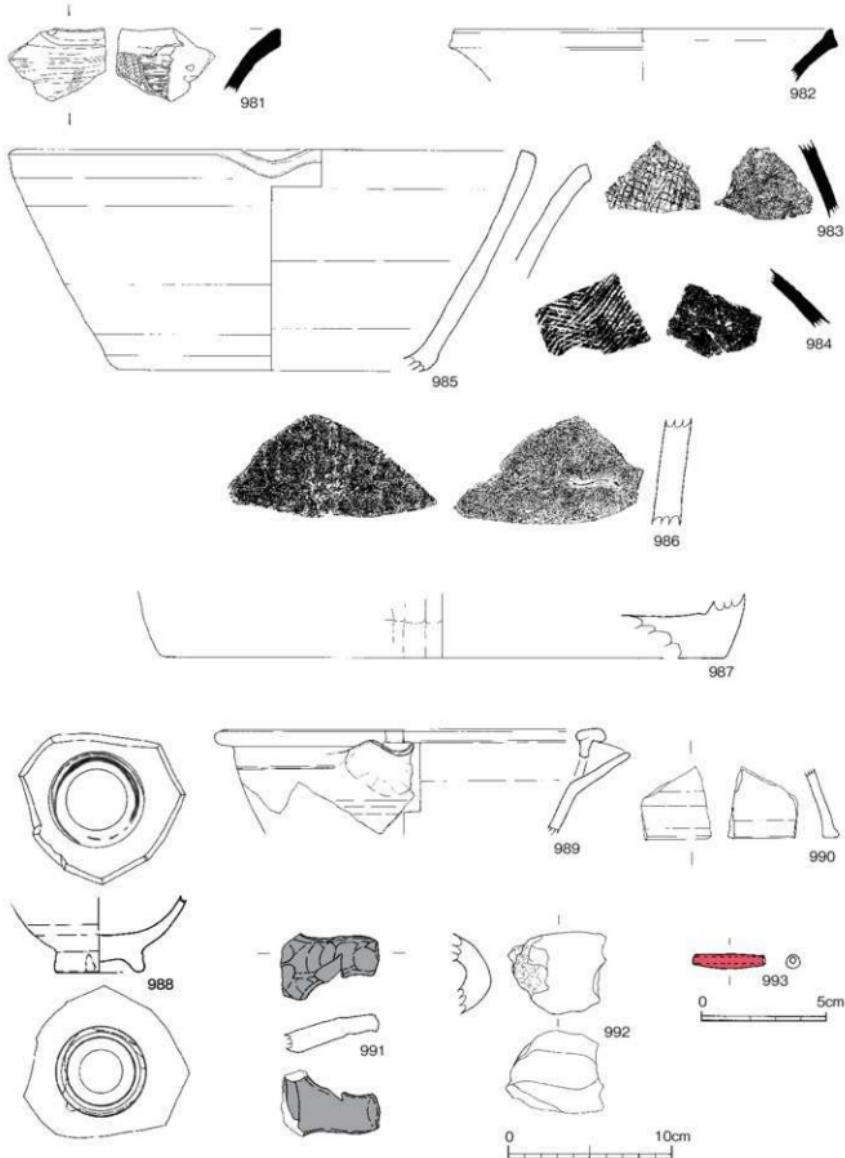
993は管状土錘である。外面には赤色顔料が塗付される。その他の出土物として、土師器約45点、白磁16点、青磁20点、輸入陶器24点、瓦質土器3点、国内産陶磁器4点が出土している。遺構年代としては12~13世紀頃を想定したいが、それ以降の時代のものも混入しており、断定は難しい。



第100図 3～8号溝状遺構内出土遺物実測図（3）



第101図 3～8号溝状遺構内出土遺物実測図（4）



第102図 3~8号溝状遺構内出土遺物実測図（5）

(2) 9・10号溝状遺構 (第103図)

X・Y-1・2区のIV層上面から検出した。いずれも埋土は表層の灰褐色砂質土である。

9号は全長約8m、幅約2mで、最深部は約28cmあり、南北方向に伸びている。

出土遺物は土師器の皿1点、黒色土器A類2点、輸入陶器の胴部1点である。そのうち図化できたものは、994の土師器皿の底部のみであった。遺構の年代については、中・近世の範疇ではあるが、絞り込みは不可能である。

10号は全長約5.6m、幅約1.1m、最深部約21cmで、9号と平行して南北方向に伸びている。

該期の出土遺物は21点で、その内5点を掲載した。

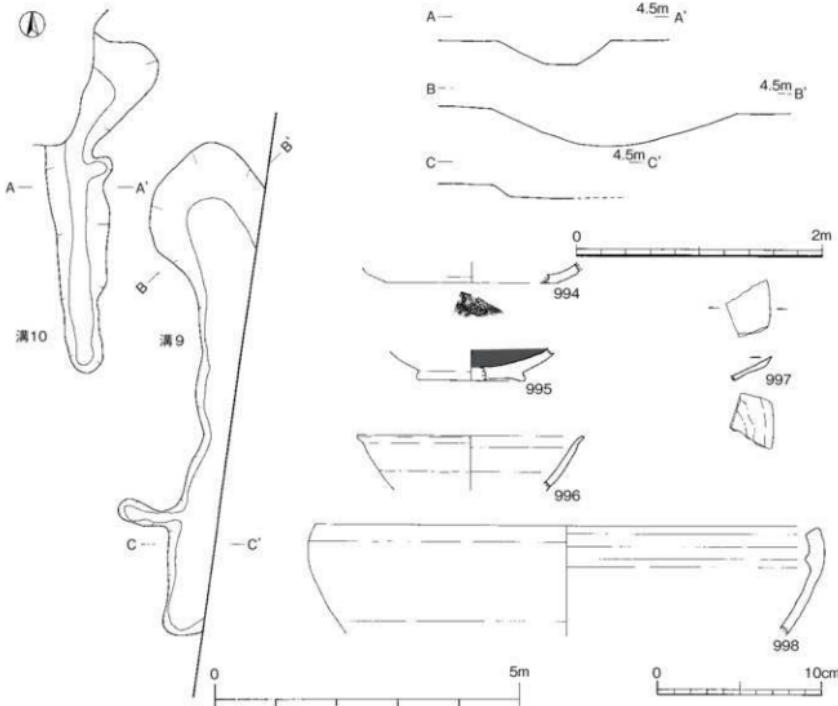
9・10号溝状遺構内出土遺物 (第103図994~998)

994は土師器の皿で、995は土師器で黒色土器A類の塊である。高台は短く、バチ状に貼り付けられる。

996は白磁の碗である。口縁端部が外反する。997は口縁部がわずかに玉緑状を呈する皿である。

998は輸入陶器の捏鉢である。中国南部産のものと思われる。口縁部内面は2段の突帯を有する。胎土は粗く、白色の小石粒を多く含む。

その他の遺物としては、土師器12点、赤色土器A類1点、カムイヤキ1点、白磁3点が出土した。遺構の年代は、12~13世紀頃と思われる。



第103図 9・10号溝状遺構及び出土遺物実測図

(3) 11~14号溝状遺構 (第104図)

X・Y-2・3区のIV層上面から検出した。

11号は全長約14.4m、幅約1.1m、最深部約20cmで南北方向へのびている。北部では西方向へ2基枝分かれしているが、この2基からは遺物の出土ではなく、遺構としては取り扱わなかった。

該期の出土遺物は、大量に出土した。その中で、ほぼ完形状態である青磁碗2枚、皿1枚、青白磁碗3枚の計6枚(999~1004)が伏せた状態で出土した。

12号は全長約8m、幅約2m、最深部が約19cmで、11号から枝分かれしている。両者に切り合い関係は認められなかった。

遺物は、土師器の小片等が数点出土したが、時期を確定できない形式不明のものがほとんどであるため掲載しなかった。

13号は全長約4m、幅約1.2m、最深部約13cmで南北のびており、11号から枝分かれしている。

遺物は10点出土し、2点掲載した。

14号は全長約12.2m、幅約1m、最深部約15cmである。遺構に伴う遺物は数十点出土し、そのうち7点掲載した。

11~14号溝状遺構内出土遺物

11号溝状遺構内出土青白磁 (第105図999~1004)

999・1000は同安窯系青磁の碗である。体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁先端でやや内側に屈曲する。高台は厚く、逆台形を呈する。外面には細かい綫の櫛目文があり、内面はヘラ状工具による文様と櫛目状工具によるジグザグ文がある。内面見込みと体部の境には明瞭な段を有し、内面上位には沈線を入れる。胎土は灰褐色、釉は緑褐色の色調を呈し、外面底部以下は露胎する。

1001は、同安窯系青磁の高台付の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で外方向に弱く屈曲する。高台は台形状を呈し、低い。内外面とも無文であるが、内面見込みに沈線による圓線が巡る。胎土は灰褐色、釉は緑褐色の色調を呈する。

1002~1004は青白磁の碗である。体部はほぼ直線的に外上方へ大きく開くように立ちあがる。高台は四角形形状に削り出される。内外面とも無文であるが、内面口縁部上位以下は露胎し、内面見込みは輪状に釉剥ぎされる。胎土は灰色、釉は浅黄色の色調を呈する。

11号溝状遺構内出土遺物 (第106図1005~1021)

青白磁以外で、溝内から出土した遺物は次のとおりである。

1005~1008は土師器である。1005・1006は皿で、内底面には輪状の沈線が観察される。1007は壺である。1008は黒色土器A類の壺である。口縁端部はやや内弯する。内面には丁寧なナダが施される。

1009~1011は白磁の碗である。1009は口縁端部が、外側に屈曲するものである。内面には短い櫛目文が描かれる。1010・1011は口縁部が玉縁状を呈するものである。

1012は白磁の皿である。見込みに釉剥ぎが観察される。

1013は小壺と思われるが、詳細は不明である。外面に沈線と櫛目状の文様が観察され、縁釉がかかる。

1014・1016~1019は輸入陶器である。1014は壺の口縁部と思われる。1015はカムイヤキの壺の肩部である。内面はタタキ成形後、横ナダが施される。1016は瓶等の口縁部と思われる。1017は素焼きの大甕である。口唇部は内側に段を有する。胎土は粗細かい砂粒が多く含む。1018は瓶等の肩部である。内外面とも無釉で、肩部に2条の沈線が入る。1019は小壺と思われる。产地等詳細は不明である。1020は、管状土糞である。外面には赤色顔料が塗布されているが、一部剥落している。1021は、滑石製の石鍋である。口縁部下位に鈎が巡る。

その他の遺物としては、土師器約80点、外面に赤色顔料が塗布された土師器2点、白磁(太宰府V類)20点、輸入陶器4点、備前焼胴部1点、布目瓦3点が出土している。

出土遺物等から遺構の年代は、12~13世紀頃と想定される。

13号溝状遺構内出土遺物 (第106図1022・1023)

1022・1023は土師器皿の底部である。

その他、土師器が8点出土している。中世の遺構と思われるが、詳細な年代は不明である。

14号溝状遺構内出土遺物 (第106図1024~1029)

1024は土師器の壺の底部である。体部の立ち上がりは、大きく外側に聞く形状を呈すると思われる。

1025はカムイヤキの壺である。胎土は小豆色で、白色の砂粒を含む。内外面にタタキ成形のあて具痕が残る。

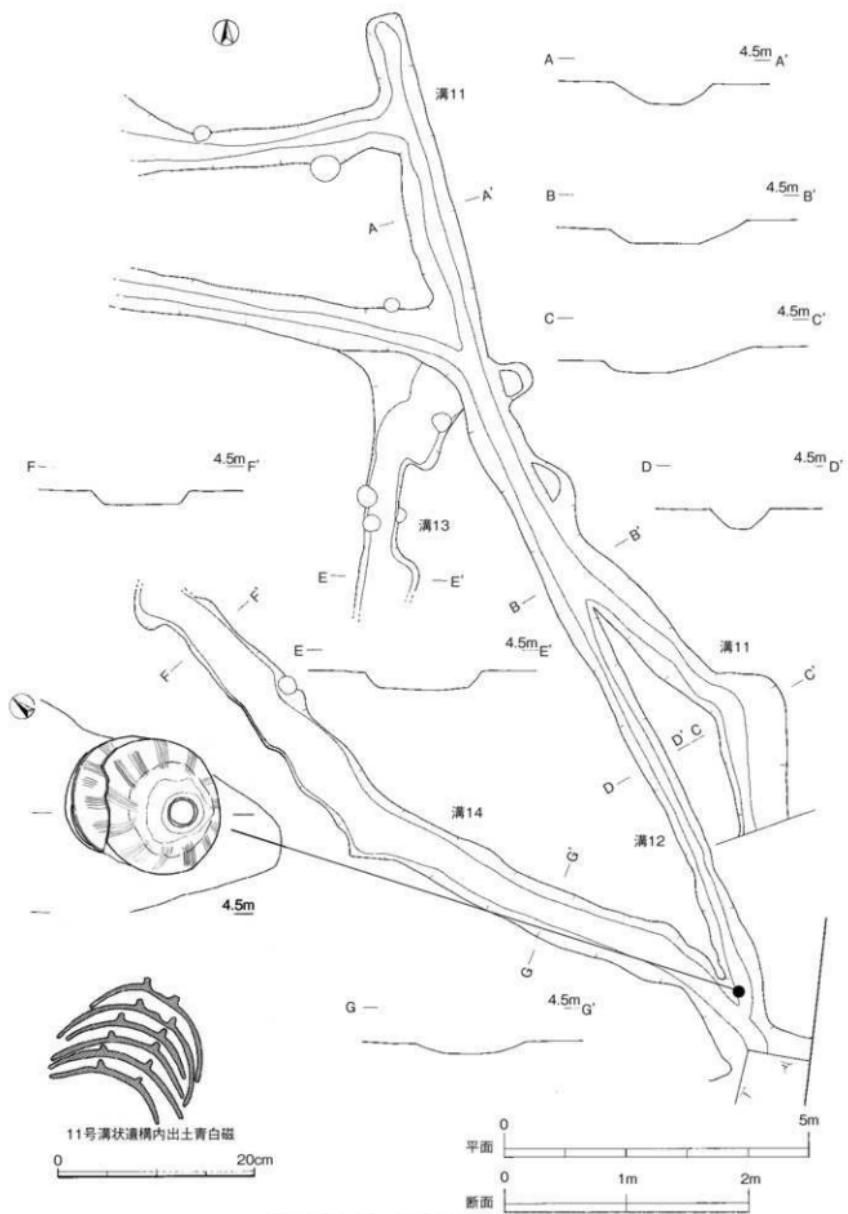
1026~1029は、溝状遺構12・14号の合流地点から出土した資料である。

1026は白磁の碗である。口縁端部が外側に屈曲するもので、内面には短い櫛目文が描かれる。

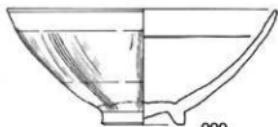
1027は土師器の壺である。黒色土器A類で、内面にはミガキが施される。高台は低く、輪状に貼り付けられる。

1028・1029はカムイヤキの壺である。1028は頭部で、1029は底部である。内外面ともタタキ成形の痕跡をナデ消しているが、一部に痕跡が残る。

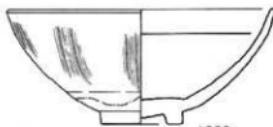
出土遺物等より、12~13世紀頃の遺構と想定される。



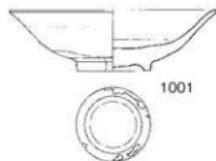
第104図 11～14号溝状遺構実測図



999



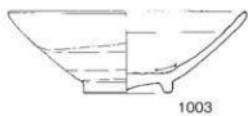
1000



1001



1002



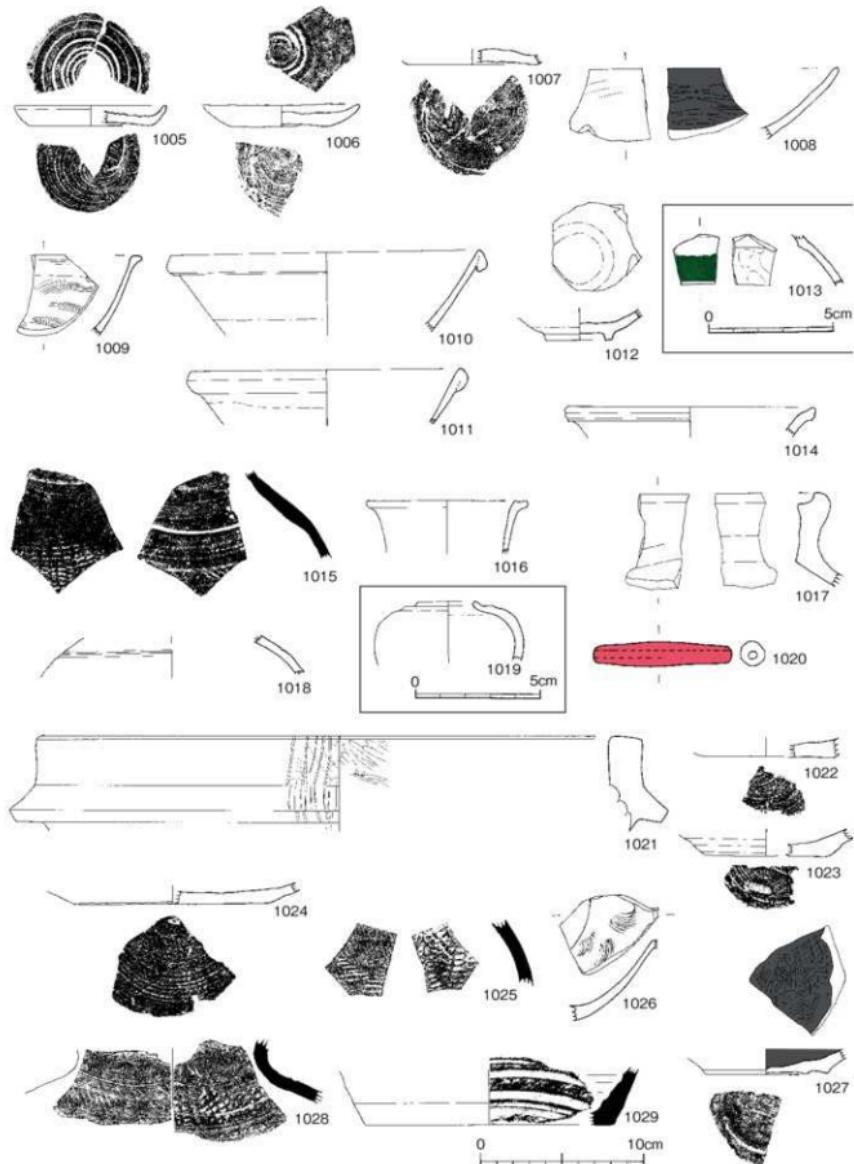
1003



0

10cm

第105図 11号溝状遺構内出土遺物実測図



第106図 11～14号溝状遺構内出土遺物実測図

(4) 15号溝状遺構（第107図）

Z - 2・3区のII層上面から検出した。全長約12m、幅約2.6m、最深部40cmで、東西にびてている。

該期の遺物は大量に出土しており、39点を掲載した。
15号溝状遺構内出土遺物（第108・109図1030～1068）

1030～1035は土師器である。1030～1032は皿である。3点とも底部の切り離しは丁寧である。1033は杯である。底部がやや厚く、体部との境にくびれを有する。1034は黒色土器A類の皿である。内面が黒色に焼され、丁寧に研磨されている。1035は黒色土器B類の皿である。全面が黒色に焼され、内面と外側面が研磨されている。

1036～1038は白磁の碗である。1036は口縁部が玉縁を呈するもので、1037はその底部である。削り出された高台部には、鉢の痕跡が残る。1038は高台が先細る形状を呈する。見込みには櫛目文が描かれる。

1039・1040は青磁である。1039は器壁が厚手で、口縁端部が丸くつくられる碗である。1040は皿である。

1041は手捏ねの匙である。把手部が残存している。

1042～1044は輸入陶器である。1042は磁州窯系の資料と思われるものである。素地に白色の化粧土をかけ、搔き落として文様を施す。器種は不明である。1043・1044は中国南部産と思われる資料である。1043は褐釉がかかる捏鉢である。1044は壺等の底部と思われる。

1045は備前焼の壺の胴部と思われる。

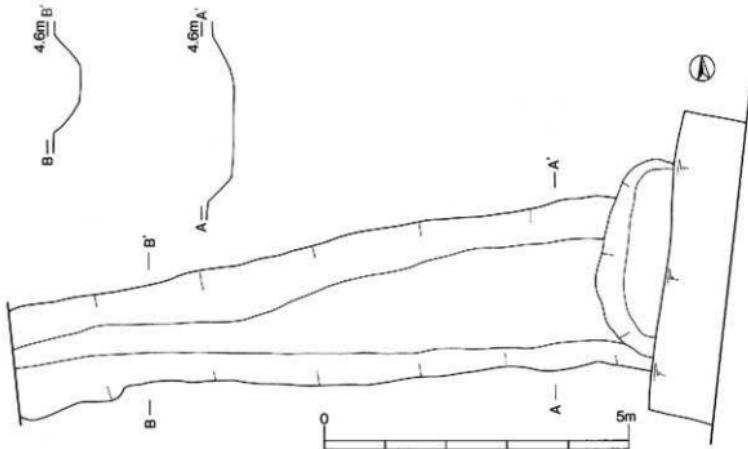
1046・1047はカムイヤキの壺である。

1048～1052は国内産磁器で、1049は白磁、他は染付である。1048は碗で、外面にコンニャク印判の文様がスタンプされる。1049は厚手の白磁碗で、口縁端部は強く外反する。1050は半筒形の碗である。外面には雪持筆文が描かれる。

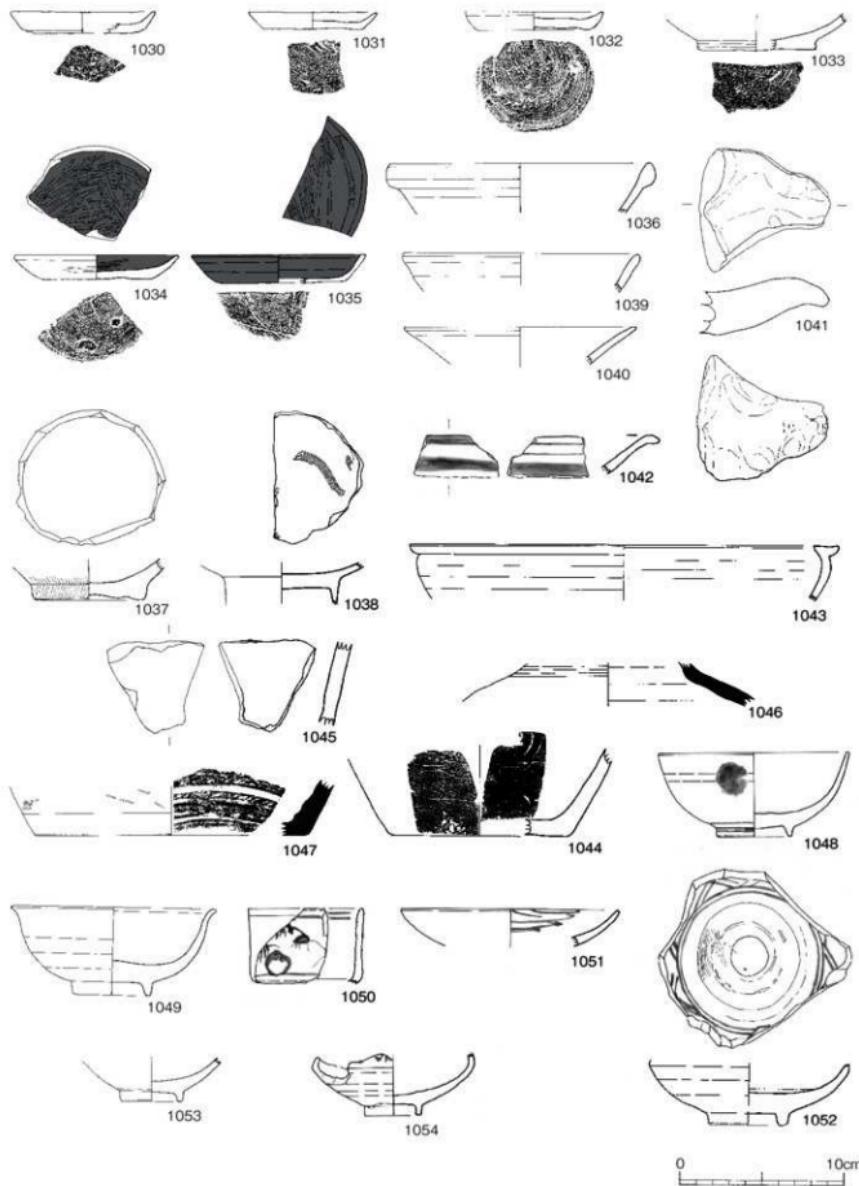
1051・1052は皿である。1052は胎土が濃灰色を呈し、呉須の発色も悪く、鉄色である。

1053～1068は国内産陶器である。1053～1055は肥前陶器である。1053・1054は京焼き風陶器の碗で、1054は外面に鉄絵が描かれる。1055は腰折形の碗である。内外面とも白泥で打ち刷毛目が施される。1056・1057は薩摩焼で、龍門司の碗である。1057は鉄釉が豊富と高台内面を降きかけられる。1058は肥前陶器の盤である。文様は、内面に白化粧土をかけ、搔き落として幅広の線を描いた後、褐釉をかける。1059・1060は徳利である。1059は薩摩焼龍門司と思われるもので、胎土は黄橙色で、外面に白化粧土がかかる。頭部に2か所、大豆粒大の裝飾がつけられる。1060は薩摩焼苗代川系のものである。外面には薄い灰釉がかかる。内面はタタキ成形の痕跡を丁寧にナデ消していると思われる。初期の薩摩焼もしくは朝鮮陶器の可能性が考えられる。1061は焼き締めの蓋で、薩摩焼苗代川系のものである。上面中央には、アーチ状のつまみが付く。1062は片口である。片口部は欠損している。内外面は横ナデが施される。薩摩焼苗代川系のものである。1063は肥前陶器の擂鉢である。口縁上部にのみ鉄釉がかかる。1064～1068は薩摩焼で苗代川系の資料である。1064は口縁部が平坦につくられ、外面に2条の浅い沈線が巡る。1065・1066は壺である。1065は口縁部で、口縁部には貝目が残る。1066は、胴部である。1067は壺で、ほぼ平坦な口縁部には貝目が観察される。内面は横ナデの調整痕が筋状に残る。1068は底部である。

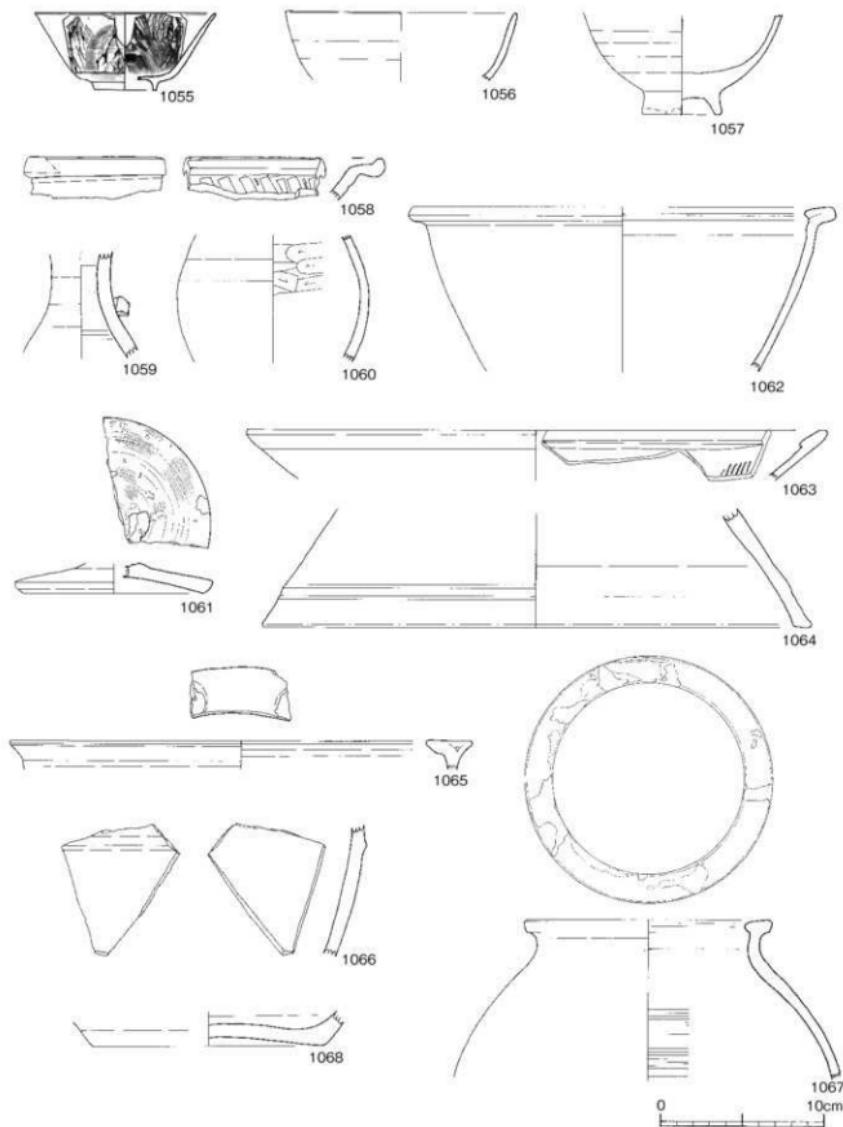
その他の遺物としては、土師器約160点、須恵器8点、白磁14点、青磁8点、瓦質土器1点、薩摩焼18点、布目瓦4点が出土している。遺構の年代としては出土遺物の年代幅が広く明確ではない。



第107図 15号溝状遺構実測図



第108図 15号溝状遺構内出土遺物実測図（1）



第109図 15号溝状遺構内出土遺物実測図（2）

(5) 16・17号溝状遺構 (第110図)

V～Y～8区のII層上面で検出した。

16号は全長約26m、幅約7～11m、最深部1.75mとなり大型の溝状遺構である。遺構内に1～3号炉状遺構が検出されたが、関連性については不明である。

遺構に伴う遺物は約260点出土し、79点掲載した。

17号は全長約4.5m、幅約2.6mで、16号の西側で検出した。

遺構に伴う遺物は數十点出土し、形式が明確なものを3点掲載した。

16・17号溝状遺構内出土遺物

16号溝状遺構内出土遺物 (第111～116図1069～1147)

1069～1071は土師器である。1069・1070は黒色土器A類の皿である。内面は研磨され、外面は糸切り後、体部と底部の境まで丁寧なナデが施される。1071は黒色土器B類の环である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。内外面とも丁寧なミガキが施される。1072～1082は白磁である。

1072～1074は口縁部が玉縁状を呈する碗である。

1075は口縁端部が屈曲し、口唇部を平坦につくる。

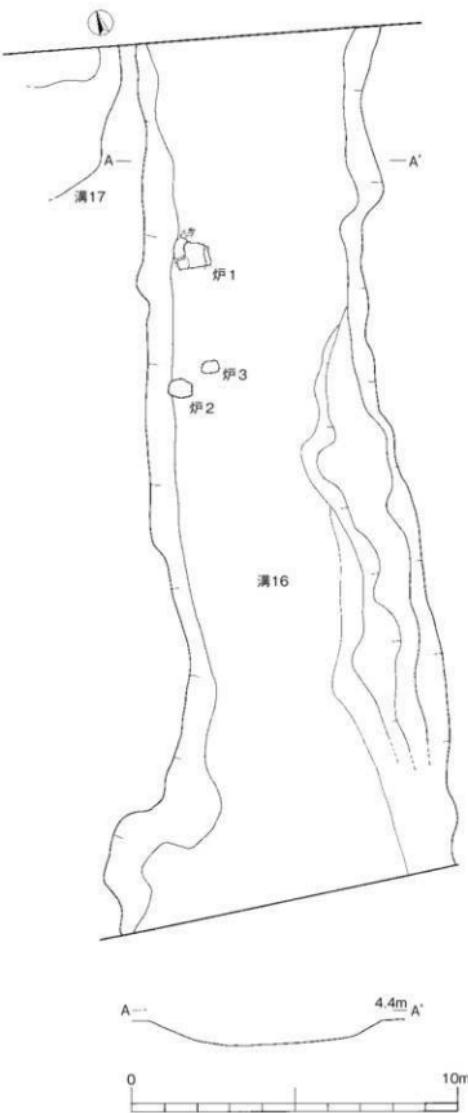
1076・1077は碗の底部である。1076は高台が輪状で低く、内側は斜行し、外面腰部から高台内底まで露胎する。

1077は、内面見込みの軸が輪状に剥ぎ取られる。体部は直線的にのび、外面腰部に鉢の削りの痕跡が残る。

1078～1081は皿である。1078は口唇部の軸が剥ぎ取られた口禿けの口縁部である。1079は体部が丸みを帯びる。1080は口縁部が外反し、高台はやや内傾し先端は細く立つ。1081は高台が抉り高台を呈する环である。

1082は、水注等の把手部と思われる。

1083～1095は龍泉窯系青磁である。1083～1085は碗の底部である。1083・1084は高台の削り出しが浅く、底部が肉厚である。1085は内面に片影蓮花文と思われる文様が描かれる。1086～1091は口縁部である。1086は内面に片影りにより文様が施される。1087は、内面に片影りで草文と思われる文様と短い櫛目文が描かれる。1088は、内面に二叉片刃による文様が描かれた碗と思われる。1089・1090は外面上に片影蓮弁文を描き、弁の中心には筋はみられない。1091は、外面に筋蓮弁文を有する。1092・1093は碗の底部である。どちらも角高台で、1092はやや高く、1093は低い。1094は外面に先の細いヘラ状工具で描いた線彫蓮弁文がみられる碗である。刺頭部は、省略されている。1095は香炉である。腰部には退化した脚が3か所付く。内面は無軸である。



第110図 16・17号溝状遺構実測図

1096は同安窯系青磁の碗で、体部の一部である。内面には片彫りの文様とジグザグ連点文が描かれる。

1097～1100は青花の碗である。1097～1099は通称「レンツー碗」と称される碗である。1097は外面に芭蕉葉文が描かれる。1098・1099は同一個体と思われる。1100は底部である。見込みが平坦で、輪状に釉が剥ぎ取られる。

1101は肥前陶器で、唐津焼の鉢である。内面に鉄絵と思われる文様が描かれる。

1102～1107は輸入陶器である。1102は外面に細やかな装飾を印刷し、その上に緑釉をかけるものである。产地は中国南部と思われる。1103は瓶・壺等の口縁部と思われる。胎土は粗く、内外面に褐釉がかかる。1104は鉢と思われる。褐釉がかかるが、剥落している。1105・1107は水注もしくは壺の底部と思われる。外面胴部下位は露胎するが、上位は褐釉がかかるものと思われる。1106は胴部である。外面には褐釉がかかる。内面は無釉で、へラ状工具の痕跡が残る。

1108は薩摩焼苗代川系の徳利である。器壁が非常に薄く、内面には同心円状のあて具痕が残る。タタキ成形でつくられており、串木野窯産の可能性が考えられる。

1109～1115は、中世須恵器である。1109は東播磨系の捏鉢である。口縁部は玉縁状を呈し、外面口縁部下位に沈線が1条巡る。1110～1115は椎万丈産と思われる資料である。1110・1111は捏鉢である。内面に斜位のハケ目が入る。1110は、外面にも縱方向の粗い工具痕が残る。1112～1115は壺と思われる。外面には格子目タタキ、内面には斜位のハケ目やナデが施される。

1116～1122は瓦質土器である。1116は内面口縁部下位に菊花が刻印され、片口部を有することから、鉢である可能性が考えられる。1117～1122は擂鉢である。1117は外面に縱方向の粗いハケ目状の工具痕が残る。内面は、底面と側面に分けて擂り目を施す。1119は外面にハケ目が観察される。内面は1單位8条のやや短めの擂り目が粗く入る。1121・1122は底部である。1122の外面には粗い横目状の工具痕が残る。

1123～1125は火鉢である。1123・1124は全体が炭素で燃されており、外面には雷文が刻印される。1125は底部である。

1126・1127は茶釜の胴部である。胴部中央には鉢状の突起が巡り、その下部にはススが付着する。

1128～1132は土師質の土製品で管状土錐である。1129・1130には一部赤色顔料が残存する部分がみられ、全体に塗布されていたと思われる。

1133～1135は国内産陶器で常滑焼の壺である。1133は口縁部で、口縁線帯は2.5cmを測る。1134は胴部である。外面に格子目タタキの痕跡が一部残る。1135は底部である。

1136～1139は輪の羽口である。先端には鉄滓が接着し

ている。

1140～1143は瓦である。平瓦で、桶巻き作りで製作されているため、凹面には布目の圧痕と模骨を留めた紐の圧痕が残る。また凸面は、繩をまいたタタキ工具で叩いたあと、表面をナデ消しているが、一部に繩目の痕跡が残存する。1143の側面には、桶巻き作りで、瓦を4等分に切り分けた際の、切り出しの痕跡が観察される。

1144は用途不明の資料である。内面に研削されたような部分があり、円面鏡の可能性も考えられる。外面は溝状の沈線が3条入る。1145～1147は滑石製の石鍋である。体部中位に鉢状の羽部が巡る。1147は滑石製石鍋の転用品と思われ、穿孔が観察される。

その他の出土遺物として、土師器約75点、須恵器13点、カムイヤキ2点、白磁18点、青磁21点、青花6点、輸入陶器16点、瓦質土器24点、国内産陶磁器11点が出土している。遺構の年代としては、12～13世紀頃を想定したいが、出土遺物の年代幅が大きく、断定はできない。

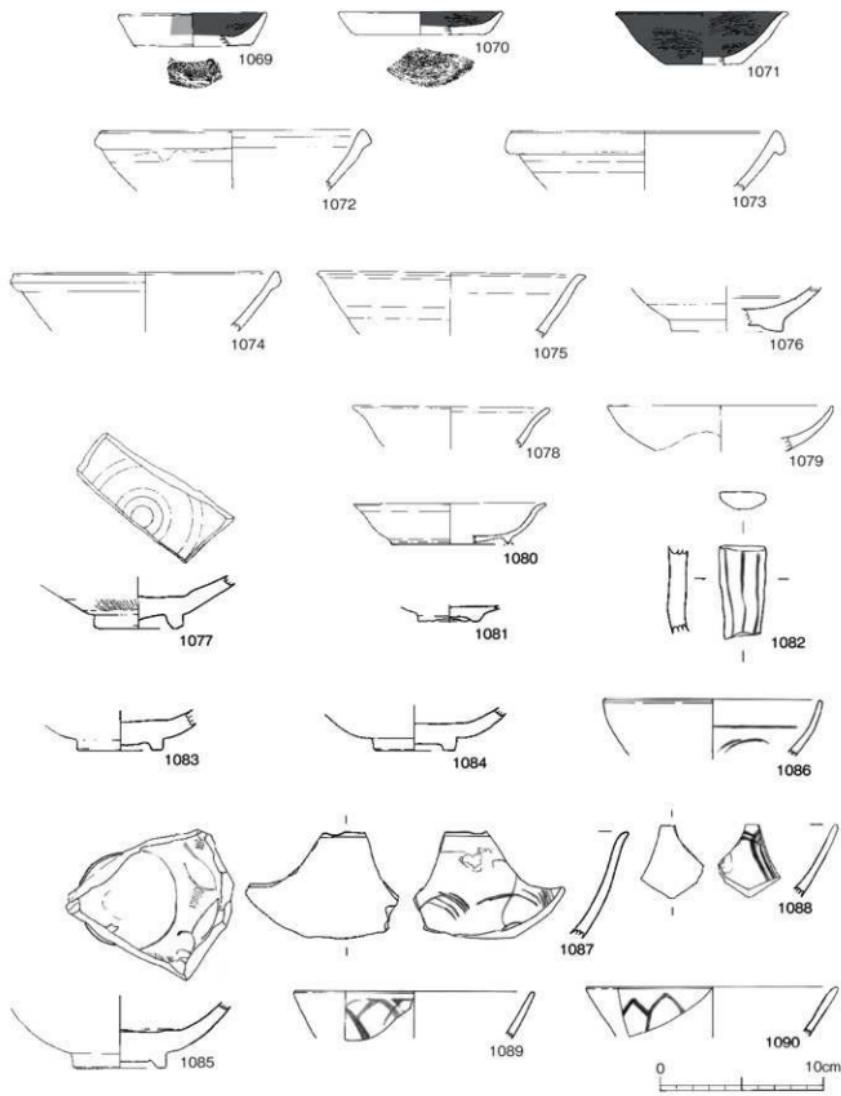
17号溝状遺構内出土遺物（第116図1148～1150）

1148は中世須恵器と思われるが、器種は不明である。底面の切り離しは糸切りである。

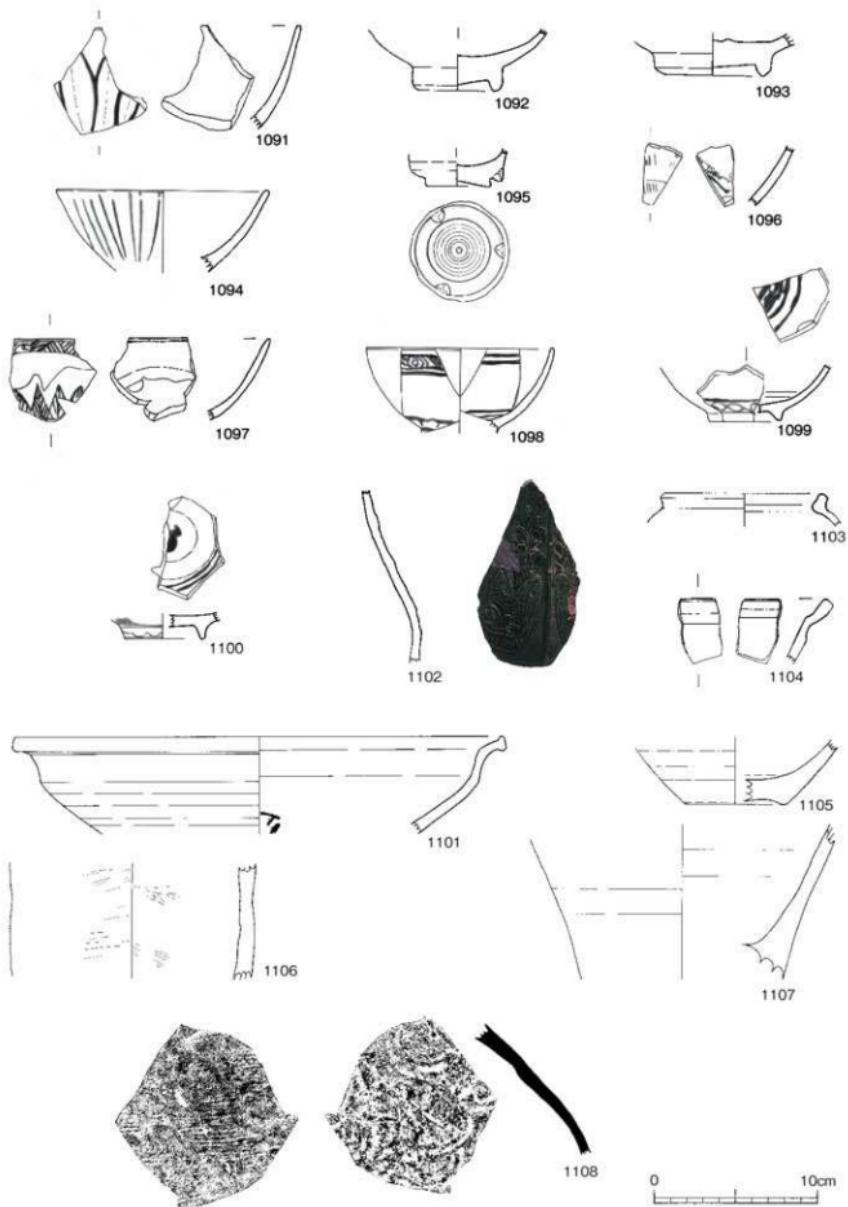
1149は龍泉窯系青磁の口縁部である。外面に片彫りで運弁文が描かれる。

1150は平瓦である。桶巻き作りで、凹面に布目痕、凸面はナデ消してはいるもの一部に、タタキ工具の繩目痕が観察される。

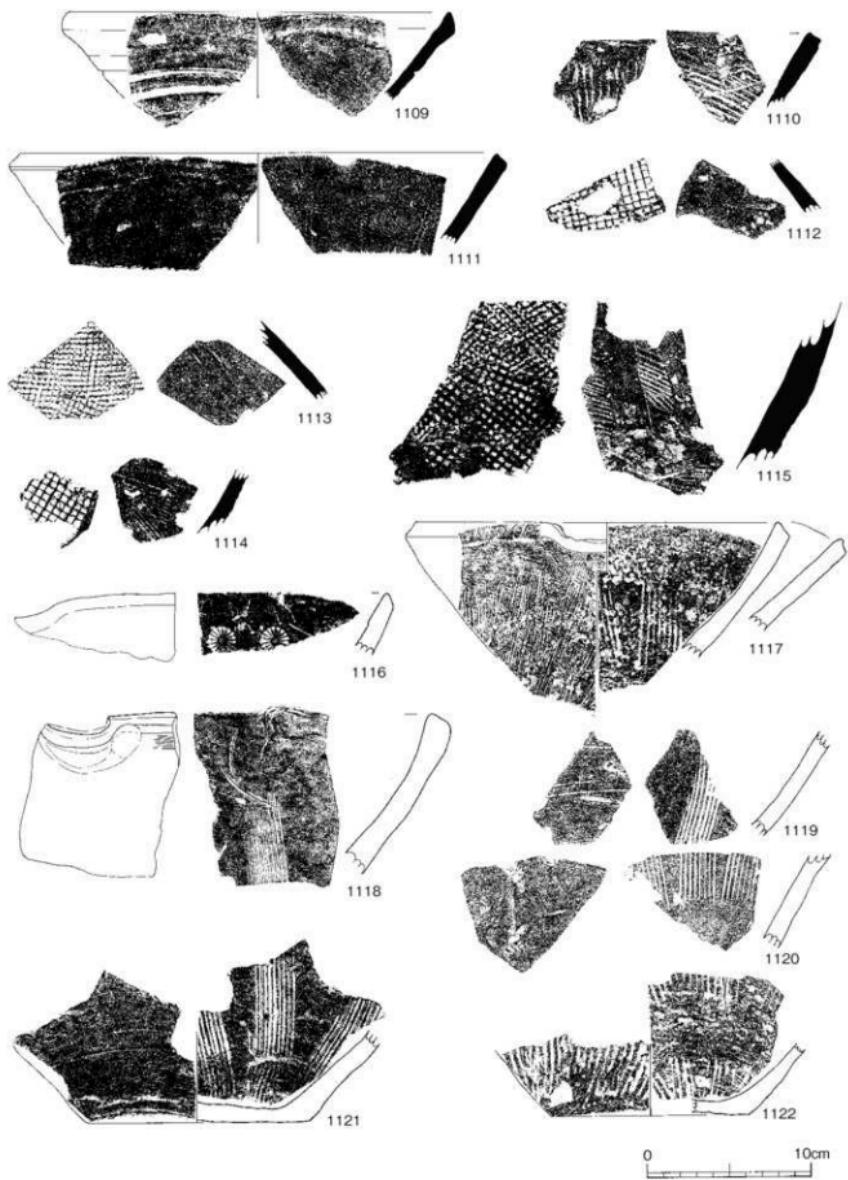
遺構の年代は中世と考えられるが、詳細は不明である。



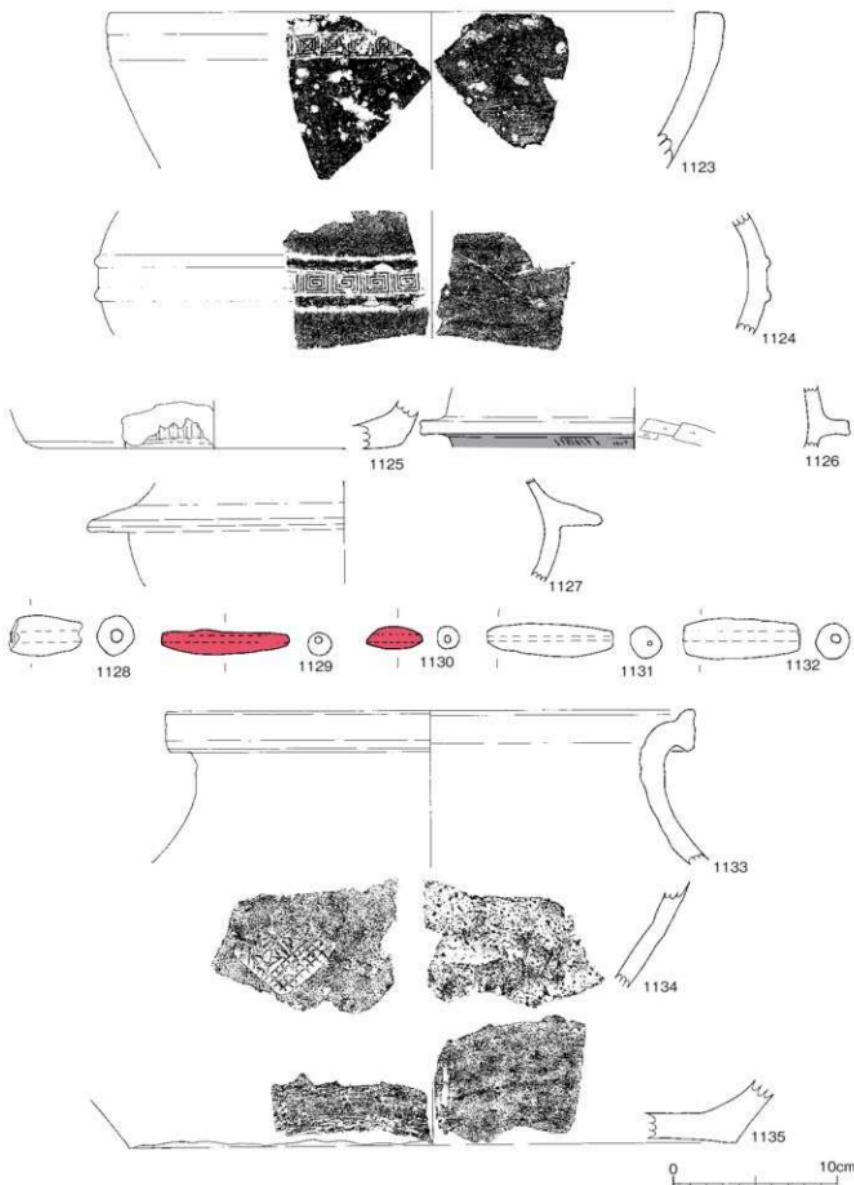
第111図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（1）



第112図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（2）

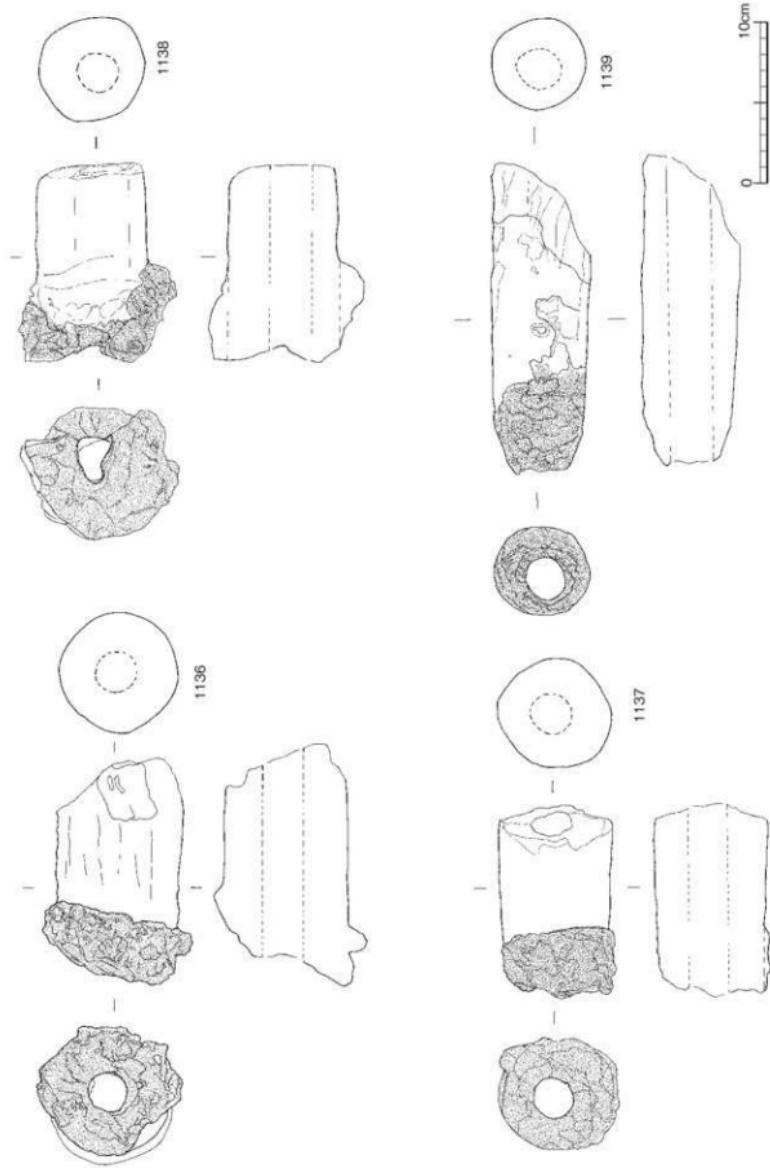


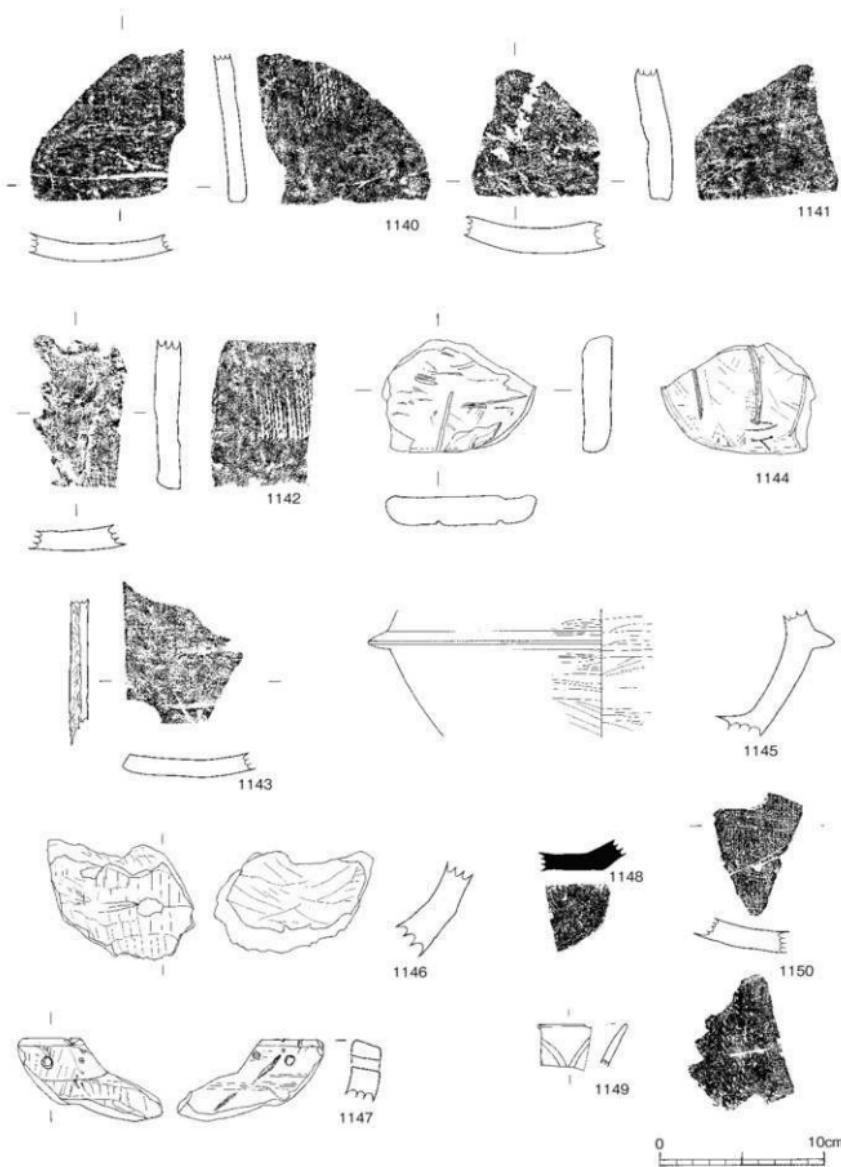
第113図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（3）



第114図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（4）

第115図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（5）





第116図 16・17号溝状遺構内出土遺物実測図（6）

(B) 18号溝状遺構（第117図）

V・W-7・8区のII層上面で検出した。南北方向へのびる。長径約11m、幅約1.3m、最深部約55cmである。

遺構に伴う遺物は22点出土し、その内6点を掲載した。

18号溝状遺構内出土遺物（第117図1151～1156）

1151は龍泉窯系青磁碗の底部である。外面に蓮弁文が施される。

1152・1153は中世須恵器で、櫛万丈産のものと思われる。1152は鉢で、内面に斜位のハケ目が観察される。1153は壺である。内外面は橙色で、胎土は浅黄色を呈する。タキ成形のあと具痕が内外面に観察される。

1154は国内産陶器で、常滑焼の壺の胸部分と思われる。

1155・1156は国内産陶器で、常滑焼または肥前産の壺の胸部分と思われる。内面にタキ成形のあと具痕がわずかに残る。

その他の出土遺物としては、土師器10点、須恵器4点、青磁2点（同安窯系）が出土している。遺構の年代としては、12～13世紀頃と思われる。

3 井戸状遺構（第118図）

X-8区のII層上面で検出した。長径約1.5m、短径約1.2mで検出面からの深さは約1.1mであり、大型の砂岩礫、凝灰岩礫により壁面を構築している。礫の間には、強い粘質土が充てんされており、粘土等で目地を詰めながら礫を積み上げてきたと考えられる。

また、礫には五輪塔の再利用品が多く含まれており、特に壁面下位には大型の整形された礫が目立つことから、五輪塔の部材を選択的に利用していると思われる。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

4 炉状遺構

(1) 1号炉状遺構（第119図）

W-7区の16号溝状遺構の中から検出した。原形はCの字の炉壁をもつものと思われるが、前後が削平されているため完全な形ではない。残存部の長径は約1.1m、短径約1m、検出面からの深さは約0.6mを測る。

焚き口に使用されたと見られる部分に墓石を再利用している。炉の内側は、小石が混じった粘土塊で構築され、被熱により赤色化している。その周りはやや硬い粘質土で固められ、同様に被熱している。床面には約10cmの焼土が積もっている。

遺構に伴う遺物は出土しなかったが、遺構内及び周囲には鉄滓が多数出土している。

(2) 2・3号炉状遺構（第119図）

W-7区で、1号炉状遺構と同様に16号溝状遺構の中から検出した。

いずれも上部が削平によるため、炉壁や焚き口は見られず床面のみの検出となった。1号の近隣に位置しており、床面の状況も類似していることから炉状遺構と認定

することとした。床面は焼土と炭化物により構成され、2～3cmの鉄滓を多く含んでいる。

2号は長径約60cm、短径約40cm、焼土の厚さ約7cmの楕円形を呈する。

3号は長径約75cm、短径約55cm、焼土の厚さ約5cmの円形を呈する。

5 土壙墓

形態や大きさが類似している土坑も検出したが、人骨が遺存しているものを土壙墓として6基掲載した。

なお、各土壙墓内に遺存する人骨の詳細については、第8章で後述するとともに、出土した古銭も第144・145図に包含層から出土したものと併せて掲載することにする。

(1) 1号土壙墓（第120図）

W-2区のIV層上面で検出した。長径約1.5m、短径約0.8m、検出面からの深さ約15cmの楕円形を呈する。

土壙墓内の北半分に人骨、古銭等が埋納されている。人骨は、中世で多く見られる膝を強く曲げた状況で屈葬されているが、副葬された古銭が寛永通寶であることから近世のものと考えられる。頭部、四肢骨とともに残存状態はよい。

古銭は14枚出土したが、詳細が不明なものを除き、寛永通寶5点を掲載した（第144図1372～1376）。

(2) 2号土壙墓（第120図）

W-X-3区のIV層上面で検出した。長径約1.52m、短径約0.9m、検出面からの深さ約8cmの楕円形を呈する。人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存し、保存状態は悪い。

古銭は5枚出土し、いずれも寛永通寶である（第144図1377～1381）。

(3) 3号土壙墓（第121図）

X-3区のIV層上面で検出した。径が約1.6mの円形を呈する。検出面からの深さは約13cmである。

人骨はほぼ全身の骨が遺存する。立て膝で屈屈な状態のまま埋葬されている。保存状態は悪い。

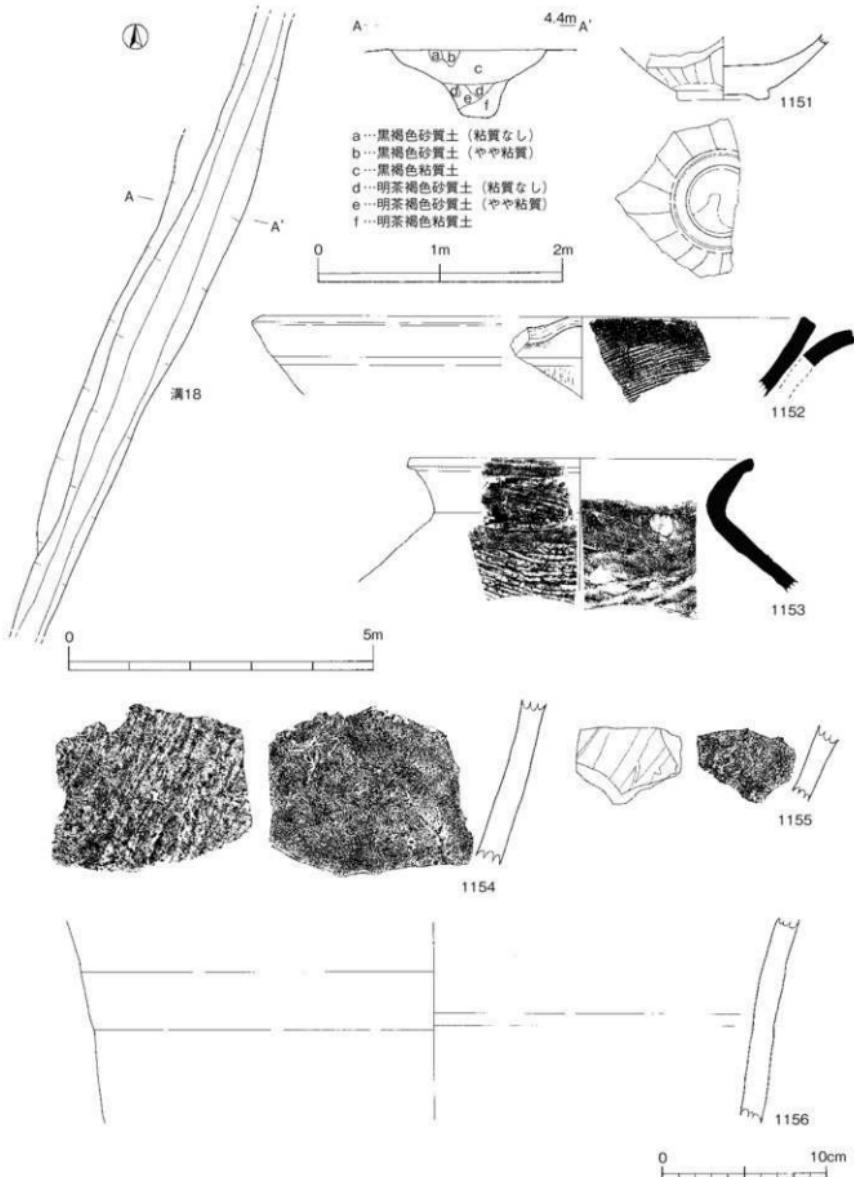
古銭等の副葬品については、出土しなかった。

(4) 4号土壙墓（第121図）

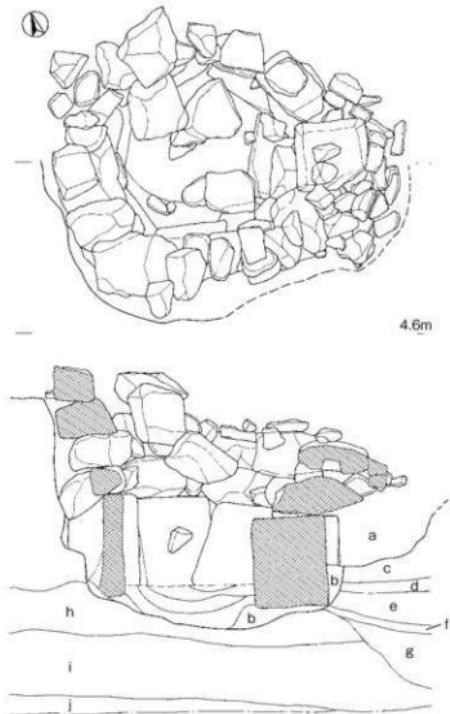
Y-Z区のII層上面で検出した。長径約1.6m、短径約0.9mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約20cmである。

人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。

古銭は寛永通寶が7枚出土し、副葬品と見られる詳細不明な鉄などが数点出土した（第144図1382～1388）。



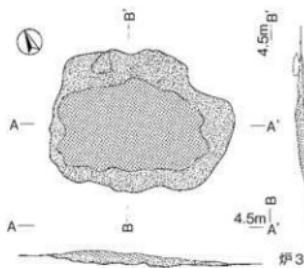
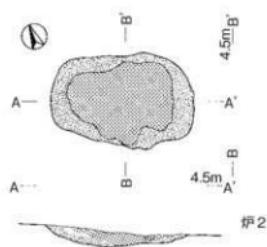
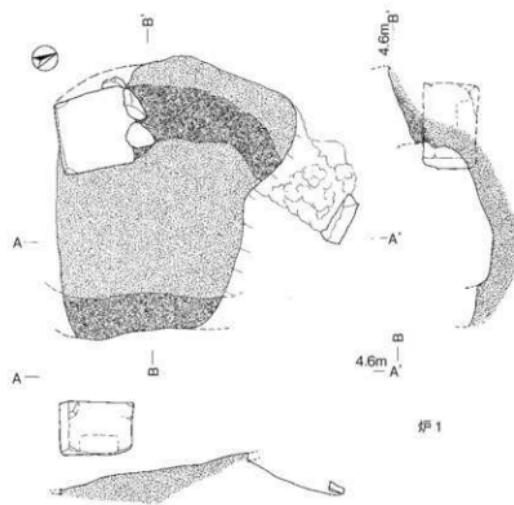
第117図 18号溝状遺構及び出土遺物実測図



- a … 暗褐色砂質土（径3cm程度のブロック混在）
- b … 暗黄褐色砂質土（水分を含み、やや粘質）
- c … 暗黄褐色砂質土（水分を含まない）
- d … 暗褐色砂質土（水分を含み、やや粘質）
- e … 明灰褐色砂質土
- f … 灰色粘質土
- g … 暗褐色砂質土
- h … 明灰褐色砂質土（やや粘質）
- i … 明灰褐色粘質土（水成作用による堆積層）
- j … 茶褐色砂礫層（砂・小石を多く含む）

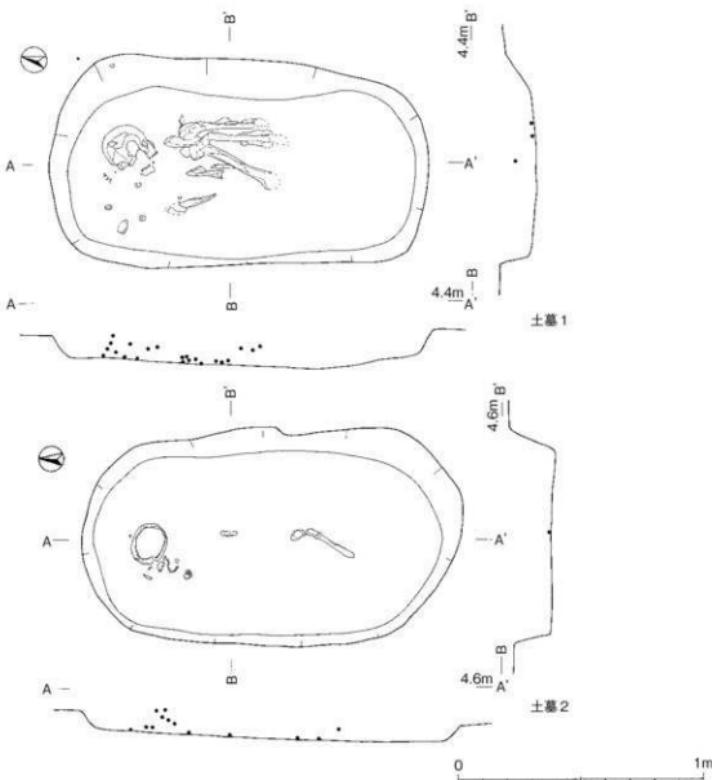


第118図 井戸状遺構実測図



0 1m

第119図 1～3号炉状構造実測図



第120図 1・2号土壤墓実測図

(5) 5号土壤墓 (第121図)

Z-2・3区のII層上面で検出した。長径約1.1m、短径約0.75mの楕円形を呈する。検出面からの深さは約5cmである。

人骨は頭部と上肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。

遺物は、寛永通寶と思われる5枚積み重なった状態の古銭や土師器片等も多数出土した。

5号土壤墓内出土遺物 (第121図1157・1158)

1157は口縁部が玉縁状を呈する白磁碗の口縁部である。1158は青花と思われるもので、内外面に團線が巡るほか、文様は描かれていない。見込みは円状に釉剥ぎされる。

その他の出土遺物として、土師器約40点、瓦及び輸入陶器1点が出土している。遺構の年代としては、白磁と

青花の年代差が大きいため、不明である。

(6) 6号土壤墓 (第121図)

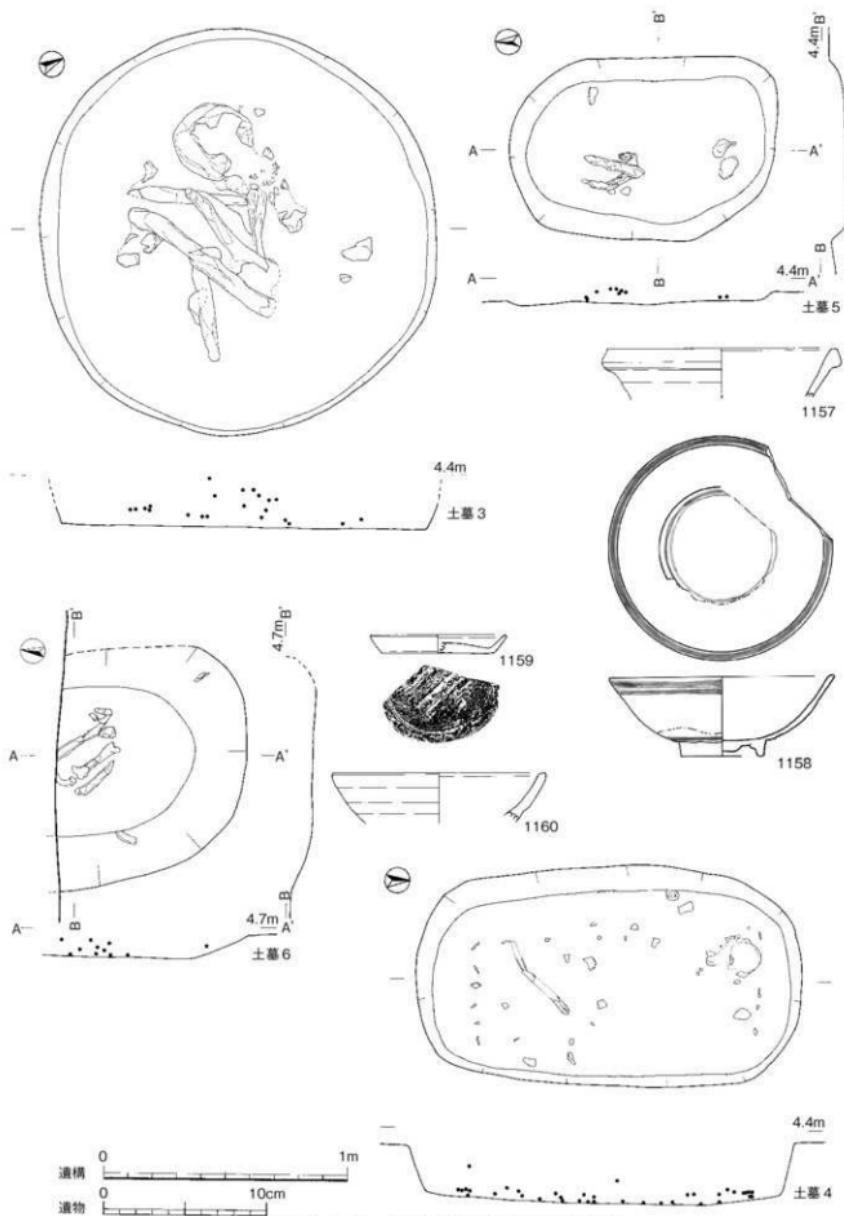
Z-a-3区のII層上面で南側半分を検出した。長径約1.5m、短径約1mの楕円形を呈すると思われる。検出面からの深さは約12cmである。

人骨は下半身と思われる骨が一部遺存する。保存状態は悪い。

遺構に伴う遺物は少なく、古銭は出土しなかった。

6号土壤墓内出土遺物 (第121図1159・1160)

1159・1160は土師器である。1159は皿である。底面を切り離し後、細いすのこ状の板の上で乾燥させたものと思われる、すのこの痕跡が残る。1160は壺である。体部は丸みを帯びる。その他に土師器の小片4点が出土している。遺構の年代は中世と思われるが、詳細は不明である。



第121図 3～6号土壤墓及び出土遺物実測図

6 大型土坑

(1) 5号大型土坑（第122図）

Z - 2区のIV層上面で北側半分を検出した。残存部の長径は約2mで、深さは20cmと浅い。

遺構に伴う遺物は12点出土した。

5号大型土坑内出土遺物（第122図）

1161~1164は土師器である。1161は皿である。1162は赤色土器A類の碗である。1163・1164は壺の底部で、赤色土器B類である。

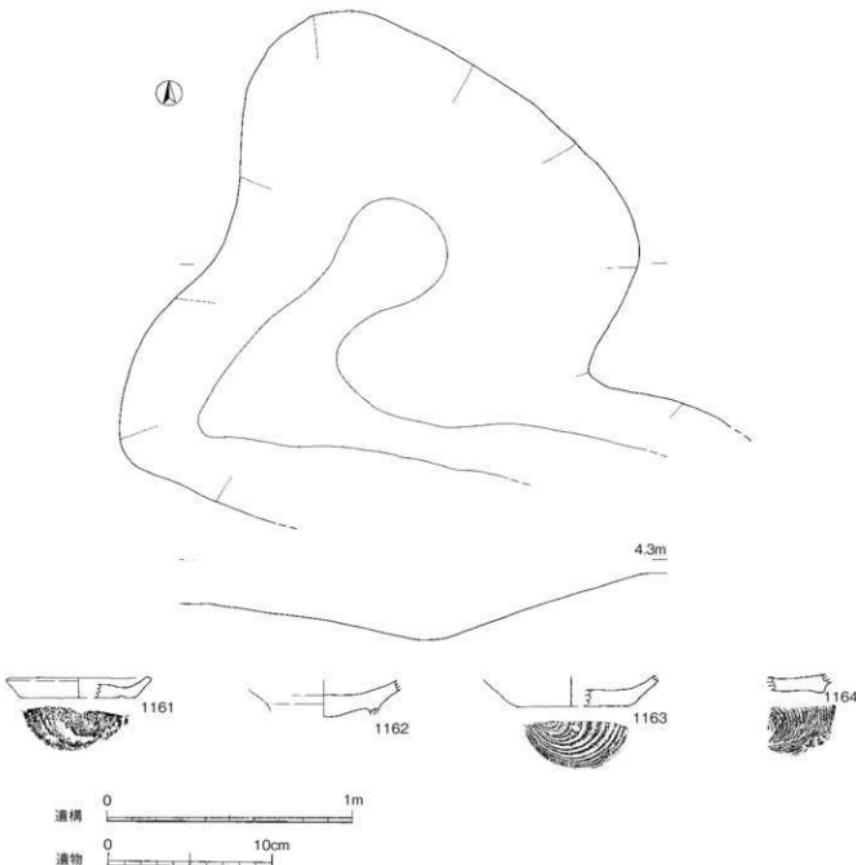
その他に土師器が8点出土している。遺構の年代としては、中世と思われるが詳細は不明である。

(2) 6号大型土坑（第123図）

W・X - 8・9区のII層上面で検出した。長径は約16.4m、短径約10.4mである。該期の遺構に伴う遺物は多量に出土した。

6号大型土坑内出土遺物（第124~128図）

1165~1169は土師器である。1165~1167は壺である。1165は内面にスヌが付着する。1168は壺または培塿の可能性も考えられるものである。内外面の一部にスヌが付着している。1169は外外面に墨書きが書かれるが、小片のため判読不明である。



第122図 5号大型土坑及び出土遺物実測図

1170～1177は白磁である。1170は口縁部が玉縁を呈する椀である。1171は口縁部が外反する椀である。1172は内面にヘラと櫛目による文様が描かれる椀の胴部である。1173は高台内面に墨書きが描かれるが判読不能である。1174は白磁に分類したが、他の種別の可能性も考えられる資料である。1175～1177は皿である。1175は口唇部が口禿げをなす。1176は平底の底部である。1177は坏で、高台は抉り高台を呈する。

1178～1187は龍泉窯系の青磁である。1178～1184は碗である。1178は内面に片彫刻花文が描かれる。1179は見込みに細い草花文様が印刻される。1180・1181は外面に鍋蓮弁文を有するもので、弁の中心は後をなす。1182は外面に片彫りで幅の広い蓮弁文を描くが、弁の中心に後はみられない。1183は外面にヘラ先による細線の線蓮弁文が描かれるが、頭が蓮弁としての単位を意識していない。1184は口縁部が外反するもので、内外面とも無文である。1185は浅形椀または坏と思われるもので、内外面とも無紋である。1186は瓶である。内面は無釉で、外面部中央に「福」の字が描かれる。1187は同安窯青磁の皿である。見込みに片彫りの文様と櫛状工具によるジグザグ連点文が描かれる。

1188は肥前陶器の碗で、内野山窯産のものである。暗緑色の銅緑釉が豊付を除きかかる。1189～1199は青花である。1189～1194は碗である。1189は口縁部が外反する。1191・1192は胎土が粗く、呉須の発色も悪い。漳州窯系の製品と思われる。1192は見込みが円状に軸剥ぎされ、内面中央に鉄軸で点が描かれている。

1195～1199は皿である。口縁部は直口もしくはやや内湾気味につくられる。1196は葵筋底を呈する底部である。

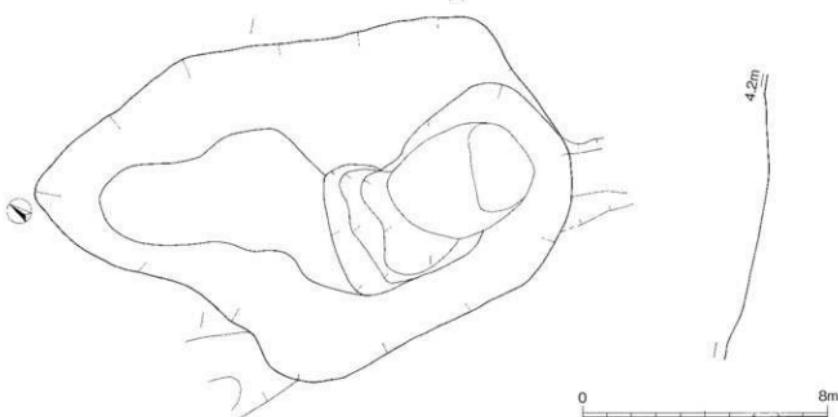
1200～1202は輸入陶器の壺である。3点とも胎土は粗く、残存部は無釉である。1202は逆三角形状の高台を有する。1203は中世須恵器の壺である。外面は格子目タタキ、内面はハケ目が観察される。桙万丈産と思われる。

1204・1205は東播磨系須恵器の鉢である。玉縁状の口縁部外面は炭素で黒色に焼される。1206・1207は瓦質土器の擂鉢である。1208・1209は瓦質土器の火鉢である。

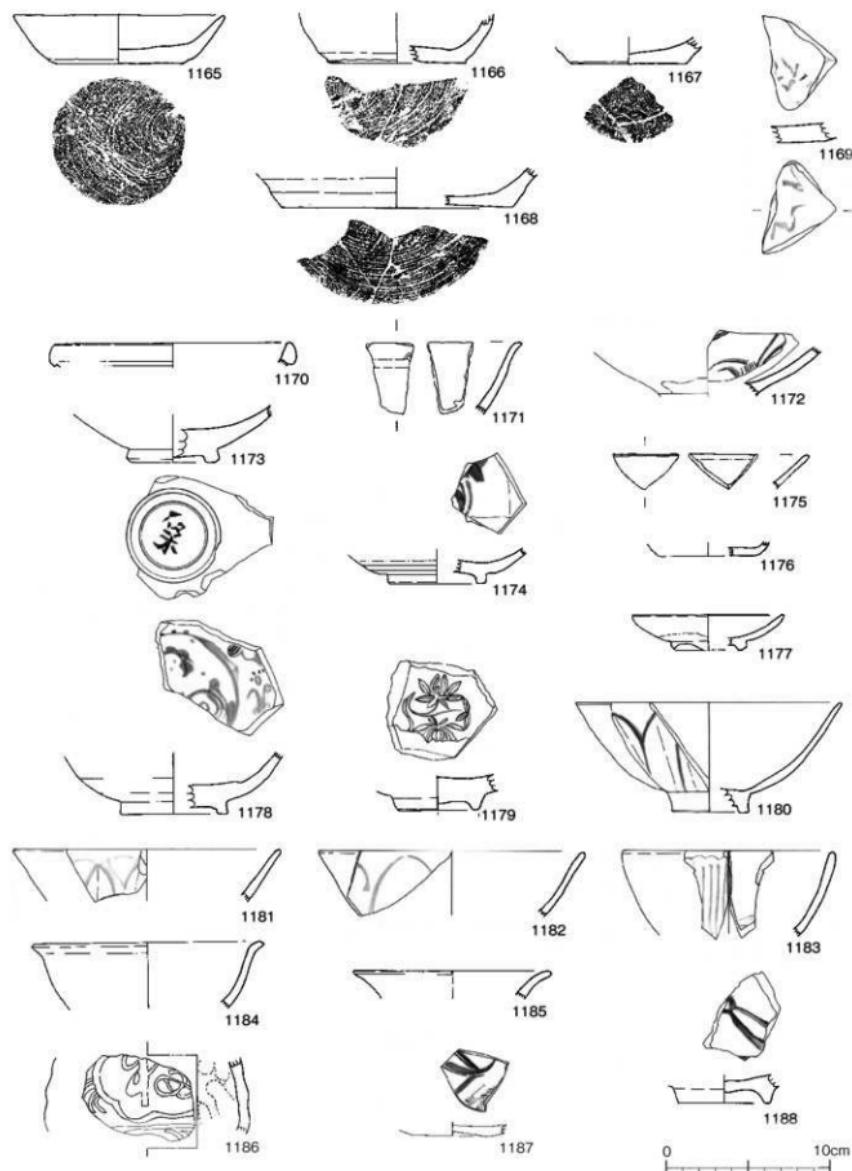
1210は土師質の土製品である。棒状の形状と思われるが、詳細は不明である。1211は備前焼の擂鉢である。擂り目は残存部より下方に入ると思われる。1212は蓋である。瓦質のものである。表面は丁寧なナナガが施される。

1213は常滑焼の甕である。口縁部は「N」字状を呈する。1214・1215は肥前陶器である。1214は鉄絵唐津の碗である。1215は唐津焼の皿である。鉄絵と緑釉による二彩手である。1216は唐津焼の碗で、見込みと外底面に砂目が観察される。1217は水注の注口部である。产地等は不明である。1218は薩摩焼の擂鉢で苗代川系のものである。1219～1223は薩摩焼の苗代川系の資料で、1219は徳利の頭部である。1220は小形の瓶と思われる。胎土は緻密で、外面に薄い灰釉がかかる。1221・1222は底部で、器壁は非常に薄く焼き結まっている。内外面には薄い灰釉がかかる。1222は内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が残る。1223は片口の口縁部である。1224～1226は輪の羽口である。先端部には鉄滓が着する。1227は滑石製石鍋である。飼状の羽部が胴部中位に巡る。

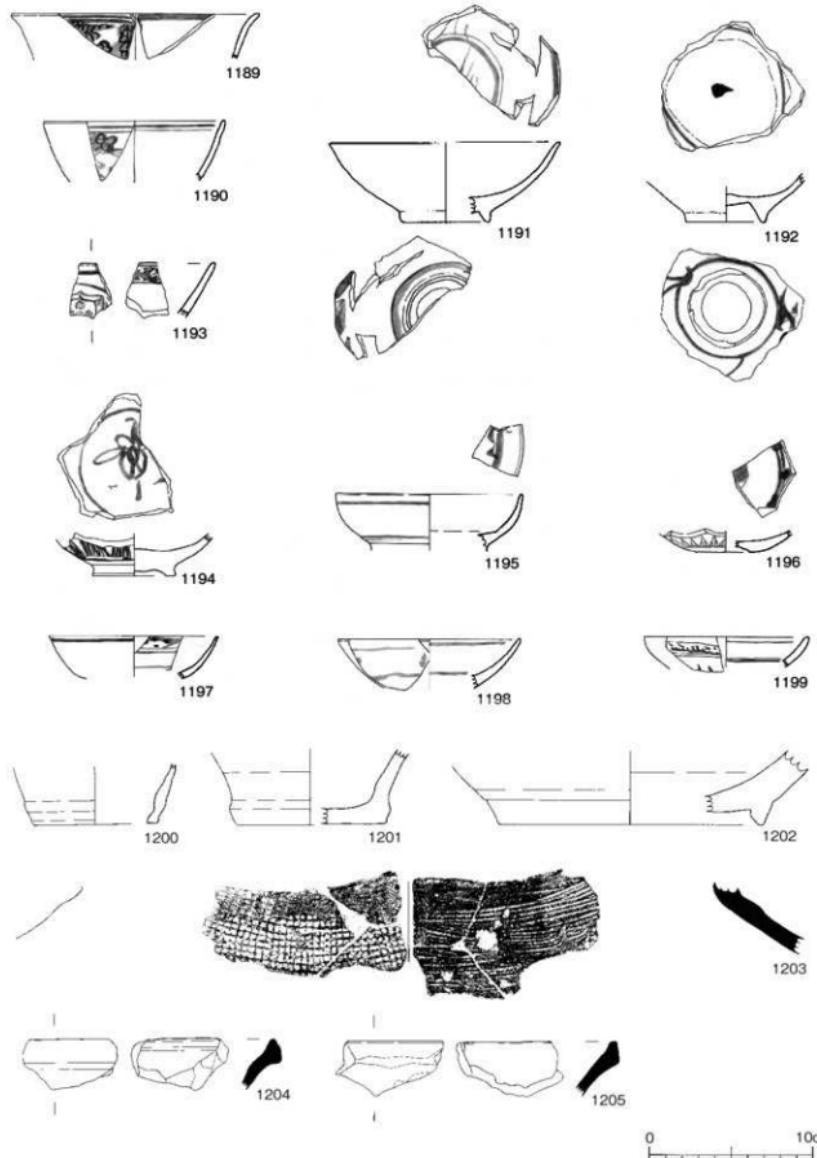
その他の出土遺物として、土師器約60点、白磁7点、青磁12点、瓦質土器21点、布目瓦2点、輪の羽口5点が出土している。遺構の年代としては、中世後期頃と思われる。



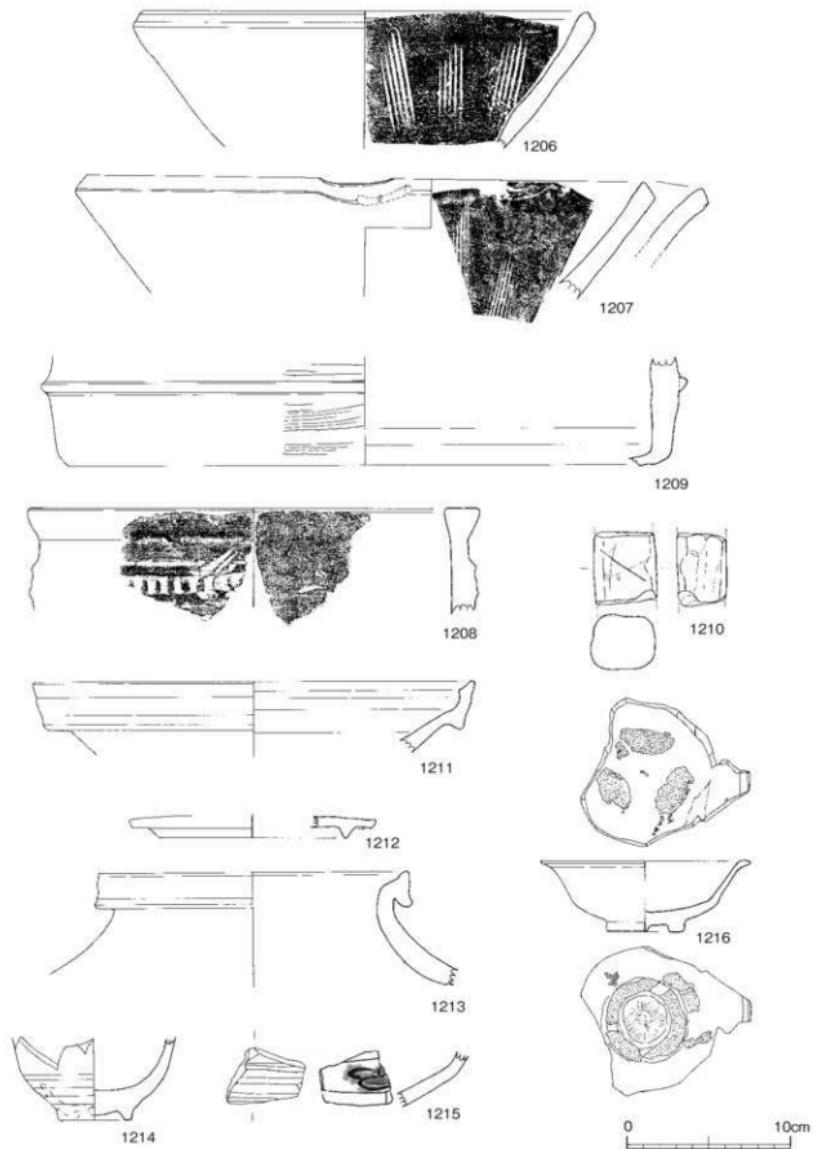
第123図 6号大型土坑実測図



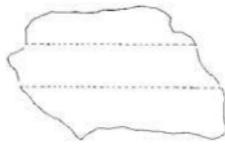
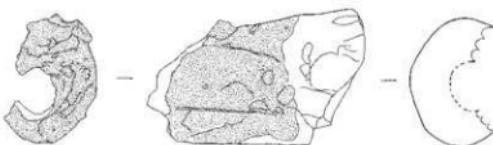
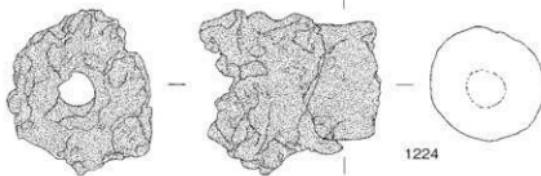
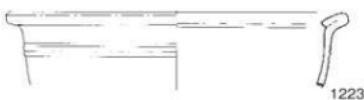
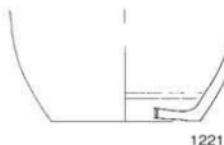
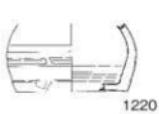
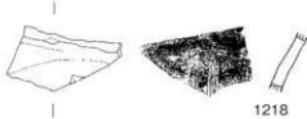
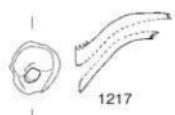
第124図 6号大型土坑出土遺物実測図(1)



第125図 6号大型土坑出土遺物実測図（2）

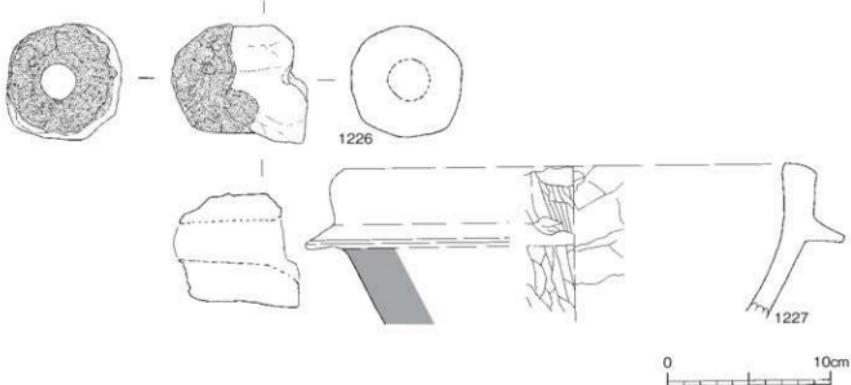


第126図 6号大型土坑出土遺物実測図（3）



0 10cm

第127図 6号大型土坑出土遺物実測図(4)



第128図 6号大型土坑出土遺物実測図（5）

7 円形粘土塊状遺構（第129図）

W-1区のII層上面において、茶褐色の粘土が円形状に固まつた状態で検出した。掘り込みは確認できず、径が約60cmで、粘土の厚さ約5cmの円形を呈する。

同様の遺構が、隣接する芝原遺跡でも検出されたが、周辺の遺構検出状況や遺物等から判断するのは困難であり、その用途については不明である。

中心部に古錢が1枚出土した。

8 土坑

該期の土坑は、12基検出された。

(1) 24~27号土坑（第129・130図）

X-2・3区のIII・IV層上面から検出した。

24号土坑は、長径22m、短径約90cm。掘り込みの深さが約15cmの楕円形を呈する。遺構に伴う遺物は出土しなかつた。

25号は径約80cm、深さが約23cmで円形を呈する。遺物は8点出土し、2点を掲載した。

26号は径約1mで、最深部約40cmの隅丸方形を呈する。該期の出土遺物は1点である。

27号は長径約14m、短径約1mで、最深部は25cmと深い。遺構に伴う遺物は11点出土した。

24~27号土坑内出土遺物

25号土坑内出土遺物（第129図1228・1229）

1228は土師器の环の底部である。

1229は白磁の椀の口縁部である。口縁端部は外側に屈曲し、上部はほぼ平坦につくる。

その他土師器6点が出土している。遺構の年代は、中世の範疇で考えたいが、詳細は不明である。

26号土坑内出土遺物（第129図1230）

1230は青白磁の合子蓋である。

その他、該期以前のものとして土師器21点、須恵器1点が出土しており、12世紀頃の遺構と思われる。

27号土坑内出土遺物（第130図1231~1233）

1231は土師器の皿である。やや深みがある物で、内外面には丁寧なナデ調整が施される。

1232は磁器の碗である。口唇部は鉄釉で口銷が施される。1233は土師質土器の焙烙で、外底面にはスヌが付着する。

その他土師器が8点出土している。遺構の年代は、中世の範疇で考えたいが、詳細は不明である。

(2) 28・29号土坑（第130図）

X・Y-2区のIV層上面から検出した。

28号は長径が約60cm、短径約45cmの楕円形を呈し、掘り込みの深さは約20cmである。

29号は長径が約16m、短径約80cmで28号と重なって検出された。切り合いから、29号が古いと判断できる。

遺構に伴う遺物は9点である。

28・29号土坑内出土遺物

28号土坑内出土遺物（第130図1234）

出土遺物は5点で、1234は土師器で赤色土器B類の皿である。口縁先端は先細る。

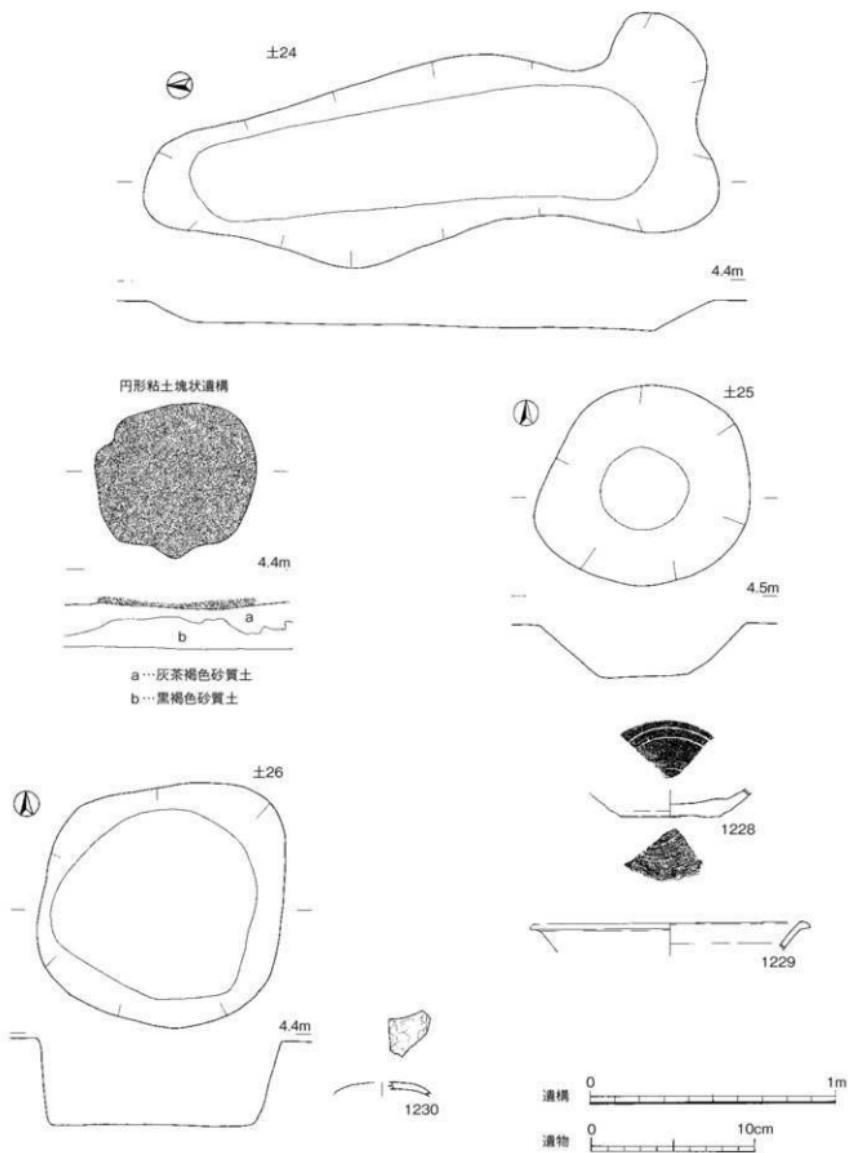
その他、土師器が4点出土している。遺構の年代は中世と思われるが、詳細は不明である。

29号土坑内出土遺物（第130図1235~1237）

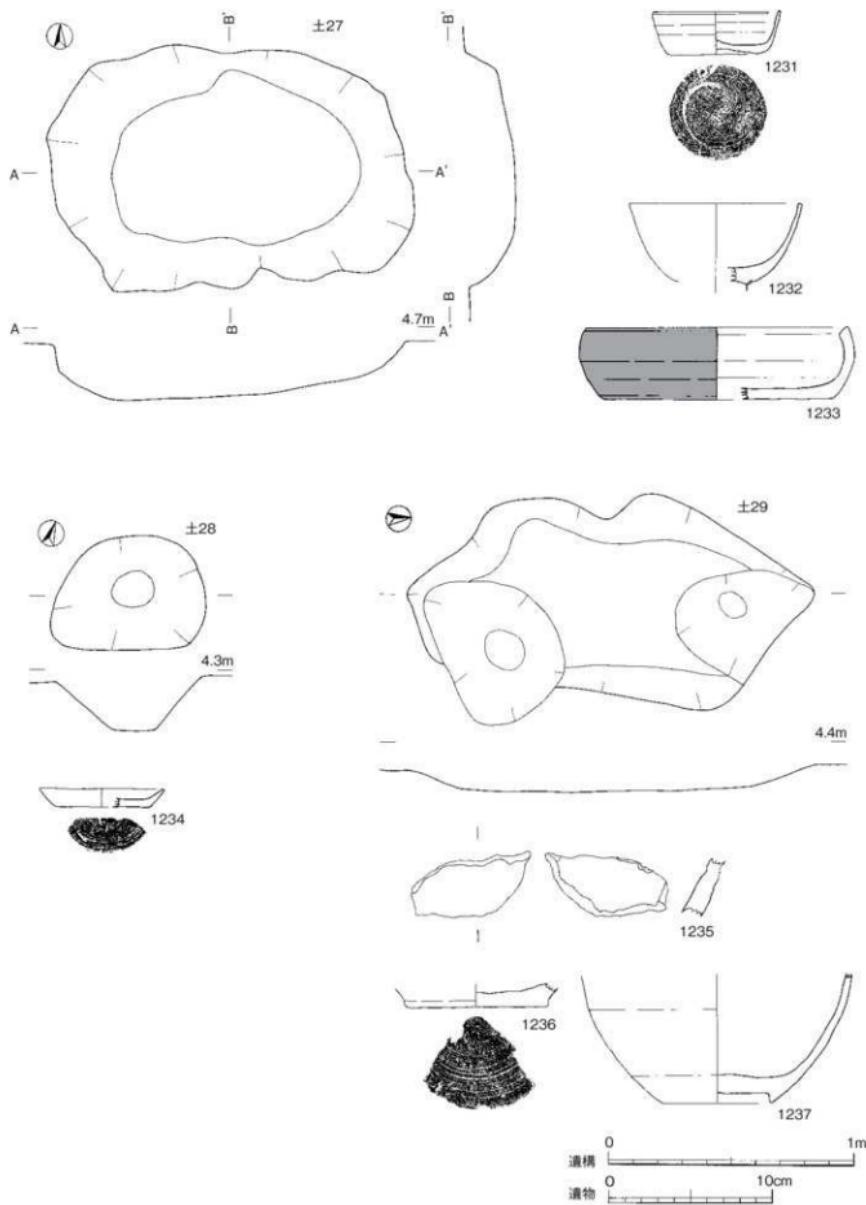
1235・1237は中国南部産と思われる輸入陶器である。

1236は土師器の壺である。内面には指ナデの痕跡が観察される。1237は底部が碁笥底を呈し、外底面には褐釉がかかる。

その他に土師器が6点出土している。遺構の年代としては、中世の範疇で捉えたいが、詳細は不明である。



第129図 円形粘土塊状遺構・24~26号土坑及び出土遺物実測図



第130図 27~29号土坑及び出土遺物実測図

(3) 30~33号土坑 (第131・132図)

Z - 2・3区のIV層上面から検出した。

30号は径約1m、深さが約13cmで円形を呈する。

31号は長径約23m、短径約0.6mで掘り込みの深さが約15cmの楕円形を呈する。

遺物は12点出土し、7点を掲載した。

32号は径約70cmで掘り込みの深さが約4cmの円形を呈する。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

33号は長径約1m、短径約60cmで深さが約55cmの楕円形を呈する。

30~33号土坑内出土遺物

30号土坑内出土遺物 (第131図1238)

1238は土師器の皿である。口径約8cmで、器高は約1cmと浅い。その他に土師器が20点出土している。

遺構の年代としては、中世の範疇で捉えたいが、詳細は不明である。

31号土坑内出土遺物 (第131・132図1239~1245)

1239~1243は土師器である。1239・1240は皿である。体部の立ち上がりはほぼ直線である。1241~1243は壺の底部である。体部はやや曲線的に立ち上がる。

1244・1245は白磁の碗である。1244は内面に短い櫛目文が施される。1245は、口縁部が肉厚の玉縁を呈する。

その他、土師器が5点出土している。遺構の年代としては、12世紀頃と思われる。

33号土坑内出土遺物 (第132図1246)

1246は、土師器壺の底部である。

その他には該期以前の遺物として、土師器が7点出土している。

(4) 34・35号土坑 (第132図)

a - 2・3区のIV層上面から検出された。

34号は長径約60cm、短径約24cmで掘り込みの深さが約15cmの楕円形を呈する。

35号は長径約1m、短径約90cmで掘り込みの深さが約80cmの楕円形を呈する。

34・35号土坑内出土遺物

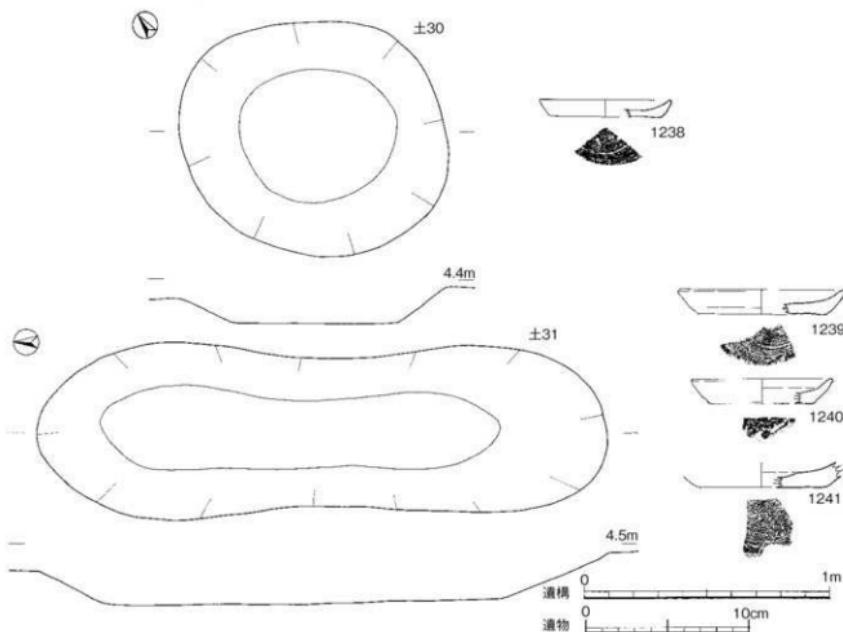
34号土坑内出土遺物 (第132図1247)

1247は壺で、体部が丸みを帯びる形状を呈する。

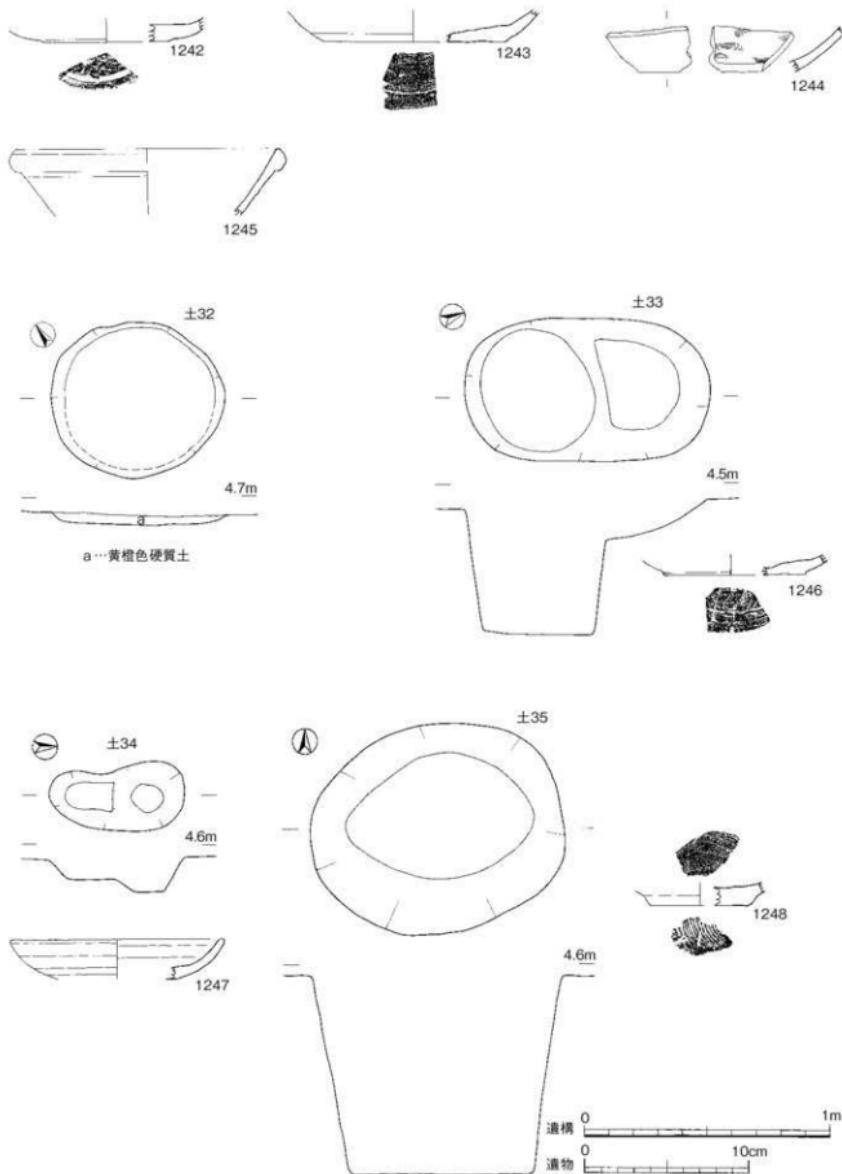
その他、該期以前の土師器が8点出土している。遺構の年代は、中世の範疇で考えたいが、詳細は不明である。

35号土坑内出土遺物 (第132図1248)

1248は土師器の壺である。底部はやや厚めで、内面には回転ナデが観察される。該期以前の遺物として土師器が24点出土している。遺構の年代としては、中世の範疇で捉えたいが、詳細は不明である。



第131図 30・31号土坑及び出土遺物実測図



第132図 32～35号土坑及び出土遺物実測図

4 ピット

該期のピットは19基検出した。

42号ピットについては、近世初期（17世紀前半頃）と思われるが、他については、中世前半頃と思われる。

(1) 24号ピット（第133図）

24号ピットは、W-3区IV層上面で検出した。長径44cm、短径36cm、深さ21cmである。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(2) 25・26号ピット（第133図）

25・26号ピットは、X-3・4区IV層上面で検出した。

25号は、径約23cmで深さ約13cmの円形を呈する。

26号は径約33cmで、深さ約24cmの円形を呈する。

出土遺物は、土師器の壺の底部が1点出土している。

25・26号ピット内出土遺物

25号ピット内出土遺物（第133図1249～1251）

1249は土師器の壺で、底部である。1250はカムイヤキである。内外面はナデ調整が施される。1251は恭筒底を呈する水注もしくは壺の底部と思われる。

26号ピット内出土遺物（第133図1252）

1252は底部が厚く、ややつくりも雑である。内面には指ナデが観察される。

(3) 27～30号ピット（第133図）

27～30号ピットは、Y-2・3区IV層上面で検出した。

27号は径約36cmで、深さ約20cmの円形を呈する。

28号は径約45cmで深さ約33cmの円形を呈する。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

29号は長径約48cm、短径約32cmで、深さ約35cmの楕円形を呈する。

30号は径約25cmで深さ約12cmの円形を呈する。

27～30号ピット内出土遺物

27号ピット内出土遺物（第133図1253）

出土遺物は、カムイヤキの壺の胴部が1点出土している。1253は、内外面ともタタキ成形を当て痕をナデ消している。

29号ピット内出土遺物（第133図1254）

出土遺物は、白磁碗が1点出土している。1254は口縁部で、玉縁状を呈する。

30号ピット内出土遺物（第133図1255）

カムイヤキの壺が1点出土している。1255は、タタキ成形の後ナデ調整を施しているが、当て具の痕跡が残る。

(4) 31～38号ピット（第133・134図）

31～38号ピットは、Y・Z-2・3区IV層上面で検出した。31号は長径約30cm、短径約15cmで、深さ約23cmの楕円形を呈する。

32号は径約30cmで深さ約45cmの円形を呈する。出土遺物は、土師器の皿が1点出土している。

33号は径約60cmで、深さ約15cmの円形を呈する。出土遺物は2点で、2点とも土師器である。

34号は径約40cmで深さ約58cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

35号は径約60cmで深さ約35cmの円形を呈する。

36号は長径約40cm、短径約32cmで、深さ約12cmの楕円形を呈する。出土遺物は3点である。

37号は径約20cmで深さ約15cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

38号は径約26cmで深さ約21cmの円形を呈する。出土遺物は2点である。

31～38号ピット内出土遺物

31号ピット内出土遺物（第133図1256）

出土遺物は1点で、1256は、土師器の壺である。

32号ピット内出土遺物（第133図1257）

1257は、口径約9cmを測る。外面はナデ調整が施されるが、底部の切り離しは雑である。

その他、土師器の小片が約14点出土している。

33号ピット内出土遺物（第133図1258・1259）

1258は皿で、灯明皿として使用したと考えられ、一部にスグが付着する。1259は壺である。底部はやや厚みがあり、体部との境に段がみられる。

34号ピット内出土遺物（第134図1260・1261）

1260は土師器の壺で、底部は厚くつくられる。内面には指ナデが観察される。1261は白磁の皿である。

35号ピット内出土遺物（第134図1262～1264）

1262は土師器で、壺の底部である。内面には渦状にナデの痕跡が残る。1263は皿で、体部は直線的に立ち上がり、先端は窄まる。1264は内面が無釉であることから、壺や水注など、内面が袋状になる器形のものである。

36号ピット内出土遺物（第134図1265）

1265は、カムイヤキの壺の胴部である。

37号ピット内出土遺物（第134図1266・1267）

どちらも土師器の皿で、口径約8cmを測る。1266は体部がやや丸みを帯びる。1267は体部が直線的に立ち上がり、端部はやや外反気味である。

38号ピット内出土遺物（第134図1268・1269）

どちらも土師器の壺の底部である。

(5) 39～41号ピット（第134・135図）

39～41号ピットは、a-3区IV層上面で検出した。39号は径約45cmで、深さ約35cmの円形を呈する。

40号は長径約70cm、短径約30cmで、深さ約14cmの楕円形を呈する。

41号は径約35cmで、深さ約30cmの円形を呈する。

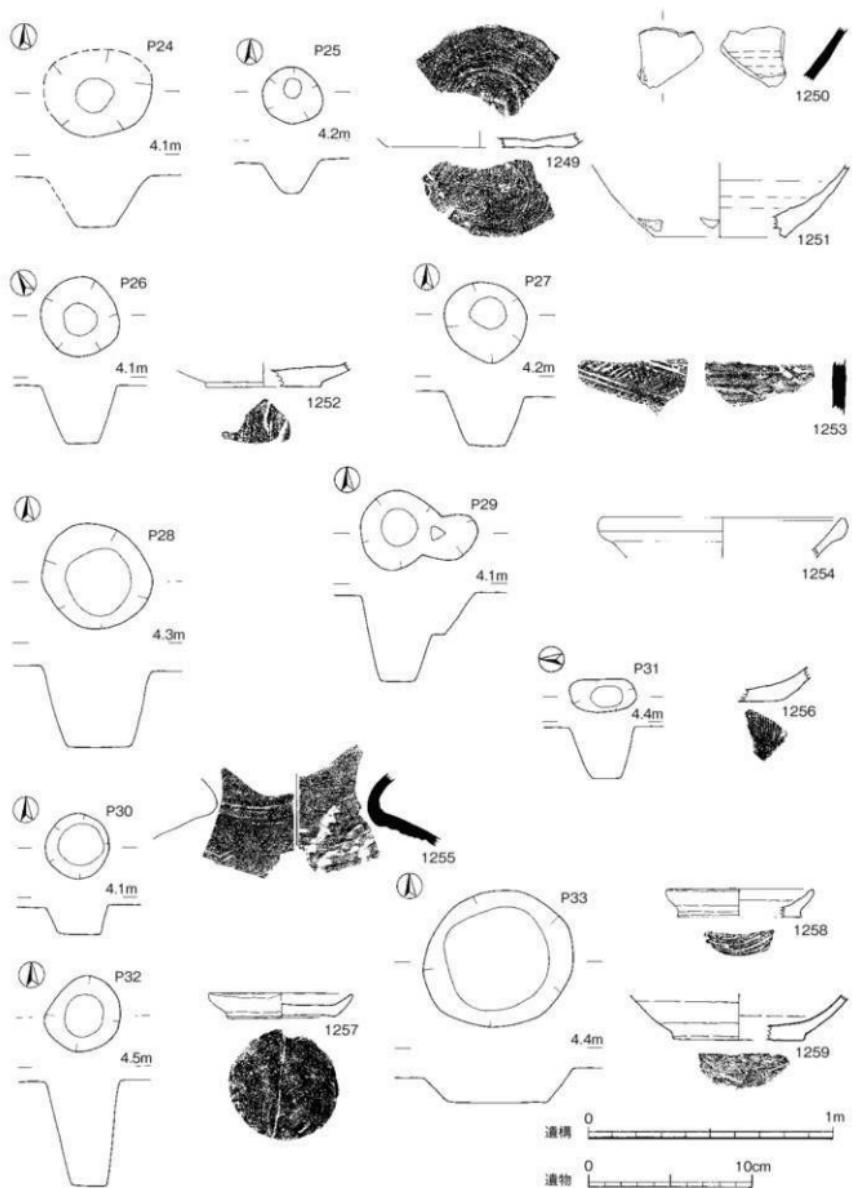
39～41号ピット内出土遺物

39号ピット内出土遺物（第134図1270・1271）

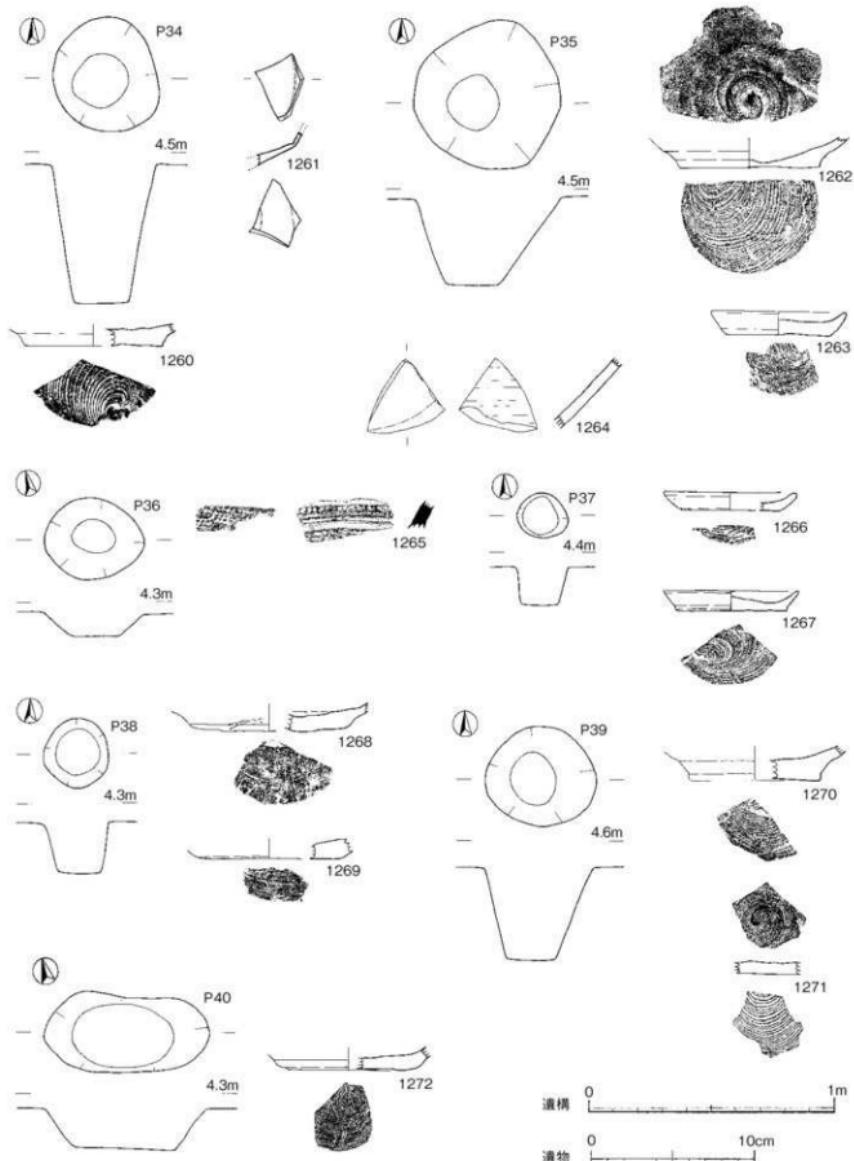
出土遺物は土師器の壺が2点出土している。

40号ピット内出土遺物（第134図1272）

出土遺物は土師器の壺が1点出土している。



第133図 24~33号ピット及び出土遺物実測図



第134図 34~40号ピット及び出土遺物実測図

41号ピット内出土遺物（第135図1273）

出土遺物は、管状土錘が1点出土している。外面に赤色顔料が塗布されている。半分は欠損している。

（6）42号ピット（第135図）

42号ピットは、W-8区IV層上面で検出した。長径約75cm、短径約50cmで、深さ約65cmの楕円形を呈する。

42号ピット内出土遺物（第135図1274・1275）

出土遺物は2点である。1274は景德鎮窯系の青花皿である。高台内底面に「福」の字が描かれる。1275は肥前陶器の皿で唐津焼である。口唇部に鉄釉で口紅を施す。

第3節 遺物

中世～近世の出土遺物については、前述の遺構内出土遺物と重複する資料については割愛した。ただし、特に資料的価値が高いと思われるものについては掲載した。

1 土師器（第136図1276～1296）

1276～1295は土師器である。底部の切り離しが糸切りのものを中世の土師器として取り扱った。器種としては、皿・壺、黒色土器A類の壺、黒色土器B類の皿、赤色土器A類の皿と壺がみられる。1276～1287は皿である。外側に丁寧な回転ナデが施されるもので、底部と体部の境を面取りしたものを見られない。1276～1285は器高が低く、体部はやや丸みを帯びて立ち上がるるものである。1276～1278は、復元口径約10～11cm前後、1279～1284は9cm前後、1285は8.4cmを測る。1286は器高が高く、体部が丸みを帯びるものである。外側口縁部の一部にススが付着する。1287～1289は黒色土器A類の壺である。外側は焼されていないが、丁寧な横方向のミガキが施される。短い高台がバチ状に貼り付けられた底部である。1287・1288は高台底面に丁寧なナデ調整が施されているため、底部の切り離しは不明であるが、1289は底部の糸

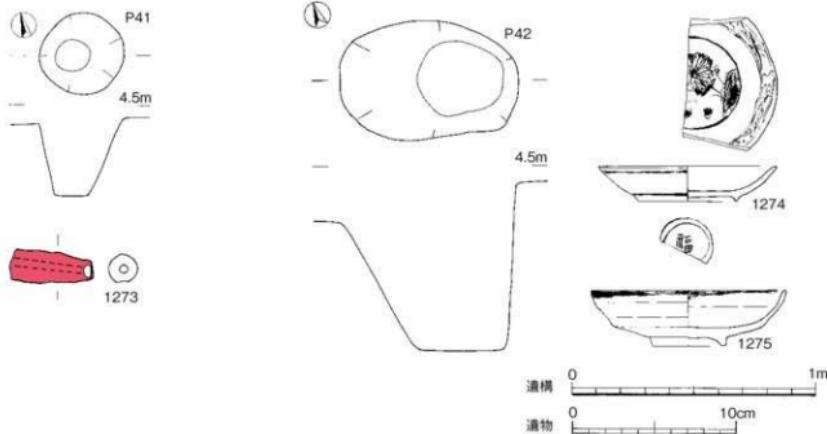
切りが観察できる資料である。

1290・1291は黒色土器B類の皿である。1290は器高が低く、体部は丸みを帯びる。ミガキは全面に施される。1291は摩滅があり詳細は不明であるが、内側全体と外側にミガキが観察される資料である。ミガキの施されない外底面には糸切りが残る。内側ともにススが付着する面が多くみられ、ミガキも見られることから、黒色土器として分類した。1292は赤色土器A類の壺である。体部下位から底部との境に弱いヘラケズリを施す。1293は赤色土器B類の壺である。体部と底部の境にくびれを有する。1294は黒色土器と赤色土器が一体化した壺で、内側は炭素で焼され、外側は赤色顔料が塗布される。内外面ともミガキは施されていない。1295はメンコと思われる資料である。底部と体部の境を丁寧に打ち欠いている。

1296は中世須恵器の皿と思われる。外底面には糸切りが観察されるが、実際の底面よりやや小さい。

2 輸入陶磁器（第137図1297～1316）

1297～1316は輸入陶磁器である。1297～1300・1307は白磁で、1297は碗である。高台の割りが粗雑で、見込みには輪状の釉剥ぎが施される。外側腰部まで釉がかかる。1298・1299は皿である。1298は口縁部が外反するもので、見込みは輪状に釉剥ぎされ、砂粒が付着する。1299は体部が丸みを帯びるもので、見込みは円状に釉剥ぎされる。高台のケズリは浅い。1300・1307は壺の口縁部である。1301～1305は青磁である。1302～1305は龍泉窯系のものであるが、1301については青磁でない可能性も考えられる。口縁端部が輪花をなすもので、輪花の境は白土による細線で区切られる。1302は、内側に二叉片刃による文様が描かれるもので、口縁端部は輪花となる。1303は、外側に幅の細い蓮弁文が描かれるが、細線と刻頭が蓮弁文を意識せずに描かれる。



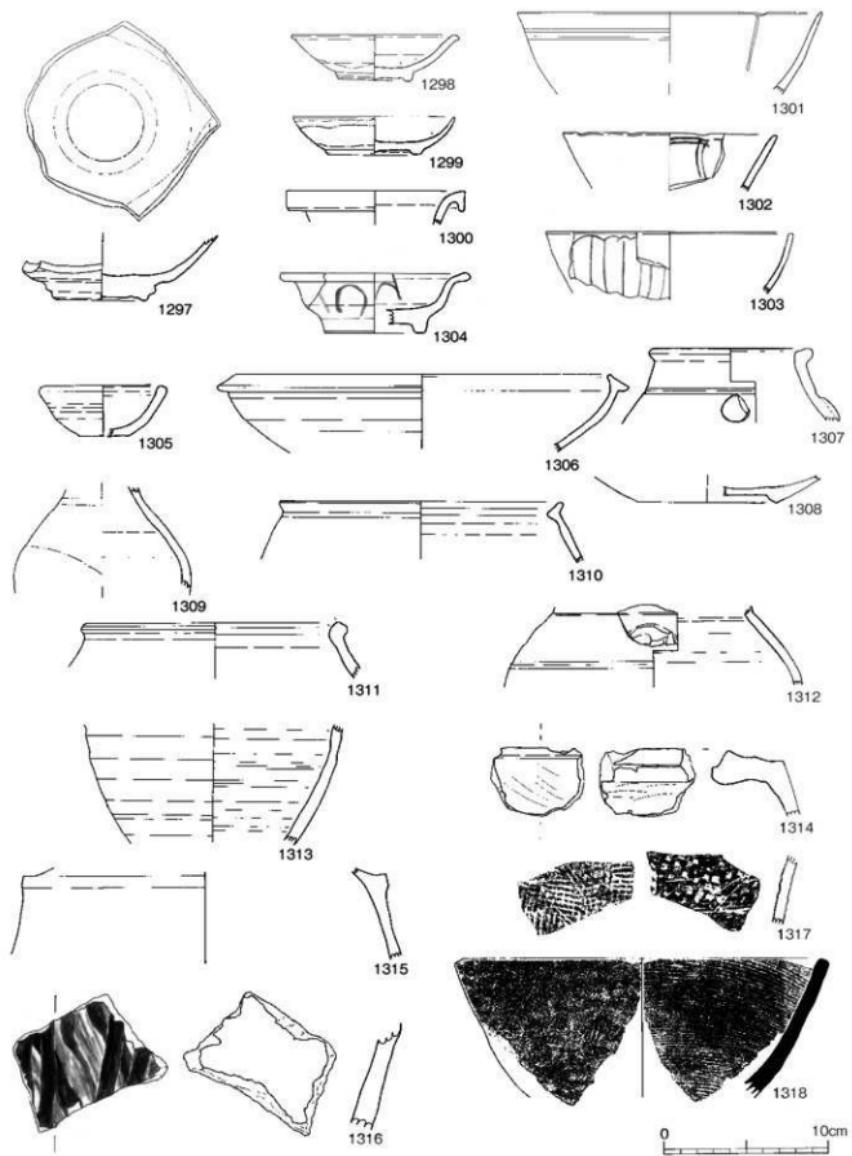
第135図 41・42号ピット及び出土遺物実測図

1304は壺である。腹部はくの字状に屈曲し、口縁部は強く外側へ折れる。外面には蓮弁文が描かれる。釉は墨付にもかけられ、高台内底面のみ円状に釉剥ぎされる。1305～1316（1307除く）は中国南部産の陶器である。1305は小形の鉢と思われる資料である。外面は無釉で、内面のみ施釉される。1306・1308は同一個体と考えられる鉢である。胎土は精良で、薄い掲釉がかかる。底部は碁笥底状をなし、絶釉である。1307・1309は瓶である。徳利状の形状を呈するものと思われる。内面は無釉で、外面は白土を一部に厚く施した後、透明釉をかける。

1310・1311は水注もしくは壺の口縁部である。1312は壺の胴部で、肩部には縦耳が付き、2条の沈線が巡る。1313は瓶もしくは壺の胴部である。残存部は内外面とも無釉で、外面は幅1cm強のヘラケズリが数段にわたり施される。1314は口縁部が内側に強く屈曲する壺である。1315は壺の胴部である。1316は壺の胴部である。
3 国内産陶器・中世須恵器（第137図1316～1318）
 1316は国内産陶器の壺の胴部である。1317はカムイヤキである。壺の胴部と思われる。1318は鉢である。桙万丈產と思われる。



第136図 中・近世出土遺物実測図（1）



第137図 中・近世出土遺物実測図（2）

4 瓦 (第138・139図1319～1323)

1319～1322は中世の布目瓦である。1319・1320は軒平瓦で、凹圧波説文が施される。平瓦部分は桶巻きで作られており、上面はナデ消しているが、一部に布目の痕跡が残る。1321・1322は丸瓦である。粘土板を模板に巻き付け、凸面から繩を巻き付けた工具で叩いて成形しているため、内面には細かい布目痕、外面には繩目痕が残るが、1320の玉縁部の凸面と胴部と玉縁部の境には、丁寧なナデ調整が施されており、1322の凸面の繩目は一部ナデ消されている。また、1321・1322の側面には、桶巻き作りで切り離した際の痕跡が観察される。1323は鬼瓦で

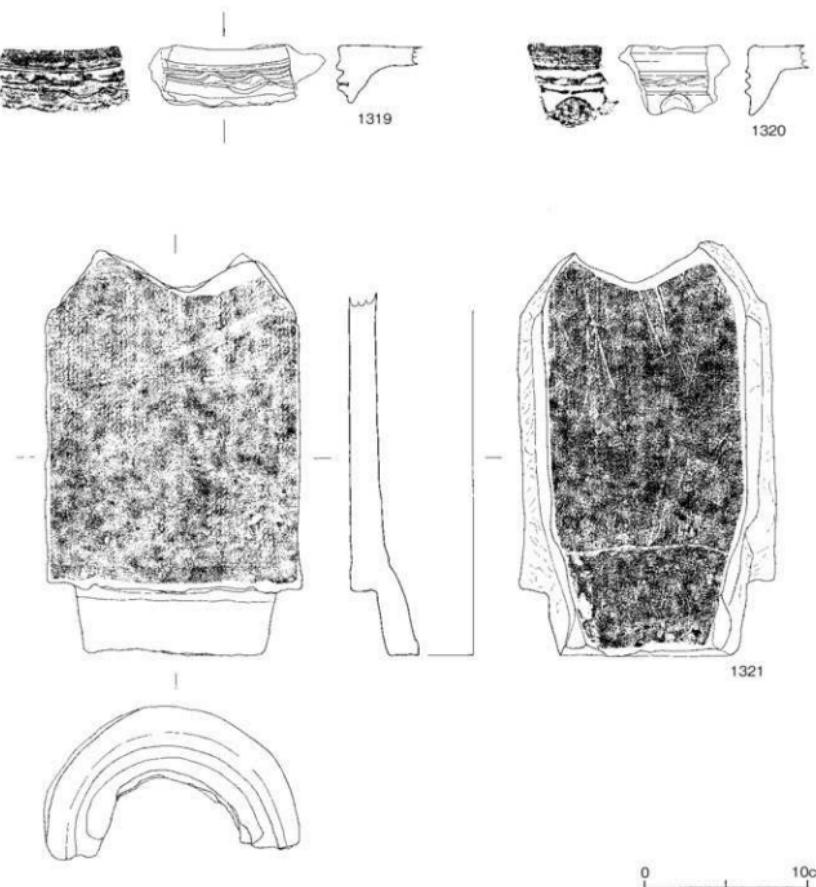
ある。内面は空洞にして大きく盛り上げた鬼瓦の一部と考えられる。

5 滑石製品 (第139図1324～1326)

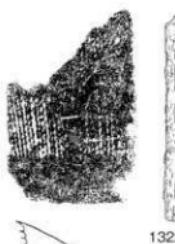
1324・1325は用途不明の資料である。1324は石鍋の鉢部を再加工したものと思われる。内面には中央に浅い凹みがつくられる。1325は内面に一部細い溝状の削りが観察される。1326は石鍋の胴部である。内外面には製作時のノミ痕が残る。

6 青花 (第139図1327)

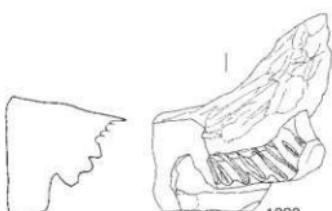
1327は景德鎮窯系の青花である。上手の皿である。



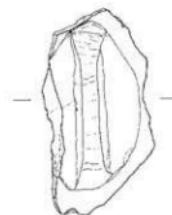
第138図 中・近世出土遺物実測図（3）



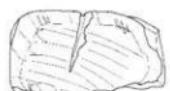
1322



1323



1324



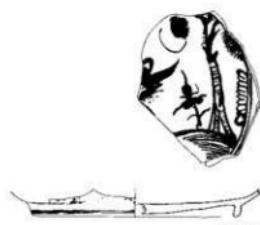
1



1325



1326



1327

0 10cm

第139図 中・近世出土遺物実測図（4）

7 国内産陶器(近世) (第140図1328~1332)

1328・1329は肥前器の染付碗である。1328は丸形、1329は半筒形である。1330~1332は薩摩焼苗代川系のものである。1330は碗である。非常に薄手のもので、釉はかかっているかわからないほど薄く鉄釉がかかる。薩摩焼初期の窯である。串木野窯産の可能性が考えられる資料である。1331は土瓶である。肩部にヘラ状工具による横筋が施される。1332は壺の肩部である。

8 その他 (第140図1333・1334)

1333は土師質土器の熔炉、1334は土製品で、環状土錠である。どちらも中世に相当するものであるが、近世に相当するものであるかは不明である。1333は外面の一部にススが付着する。

9 表層出土の遺物 (第141~143図1335~1371)

1335~1371の遺物は、擾乱層や表層などから出土した遺物であるが、特に資料的価値が高いと思われるため、掲載しておきたい。1335は土師器で、黒色土器B類の皿である。外底面の糸切り部は研磨されていないが、その他は丁寧な横位のミガキが施される。1336は瓦器である。県内で瓦器が出土する例は非常に少なく、本遺跡で3例目である。和泉型の皿である。1337~1340は白磁である。1337・1338は白磁の皿である。1337は口縁部が輪花となるもので、外面にも花弁を意識したと思われる彫り込みを入れる。高台は基筒底状をなし、砂粒が付着する。1338は見込みの釉を輪状に釉剥離が施される。外面腰部には窓詰め時に培養したと思われ砂粒が見られる。1339は水注の把手である。

1341・1342は青白磁の合子である。1341は蓋で、上面に陽刻の文様が施される。口唇部と内面は無釉である。1342は身である。蓋受け部と外面腰部から底面にかけては無釉である。

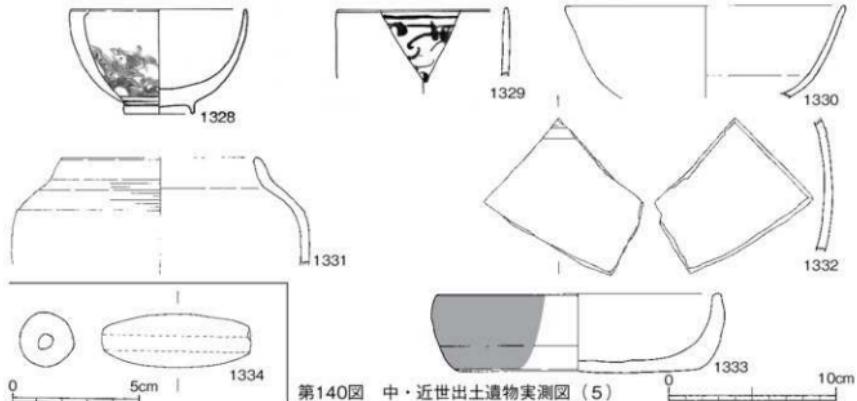
1343~1347は青磁である。1343は内面を二叉片刃による線で5等分し、その中に飛雲文を描くものである。

1344は外面に細線で綴織が描かれた碗である。蓮弁文が簡略化されたものと思われる、刻頭も省略されている。見込みには「福」の字が観察される。1345は瓶もしくは水注の胴部、1346・1347は底部である。

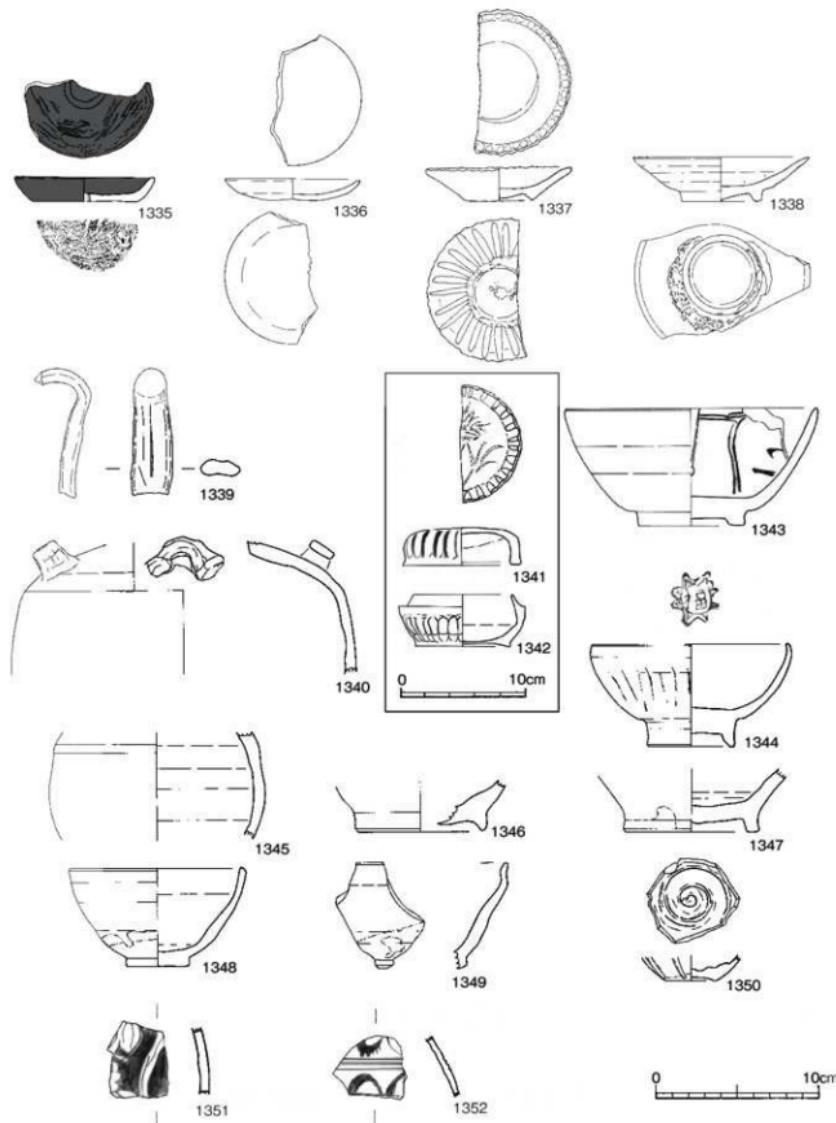
1345・1346は同一個体と思われる。

1348~1354は輸入陶器である。1348・1349は中国産の天目碗である。褐色の薄い化粧土をかけた後、黒釉を内面と外面腰部付近までかける。1350は器種不明の中中国産の資料である。高台はなく平底であるが、中央はやや盛り上がる。見込みは兜巾状に削られる。1351は瓶もしくは水注等の胴部と思われるものである。内面は無釉で、外面には掲軸引き落として花文が描かれる。1352は瓶の頭部と思われる。内面は無釉で、外面には3本の沈線が巡る。また、縁軸がかけられ、その上から掲軸で蓮弁状の文様が描かれる。1353は瓶の肩部と思われるもので、縁軸陶器である。内面は無釉で、外面には蓮弁状の文様が陽刻される。1354は壺の口縁部である。端部は二又に分かれ、Y字状を呈する。

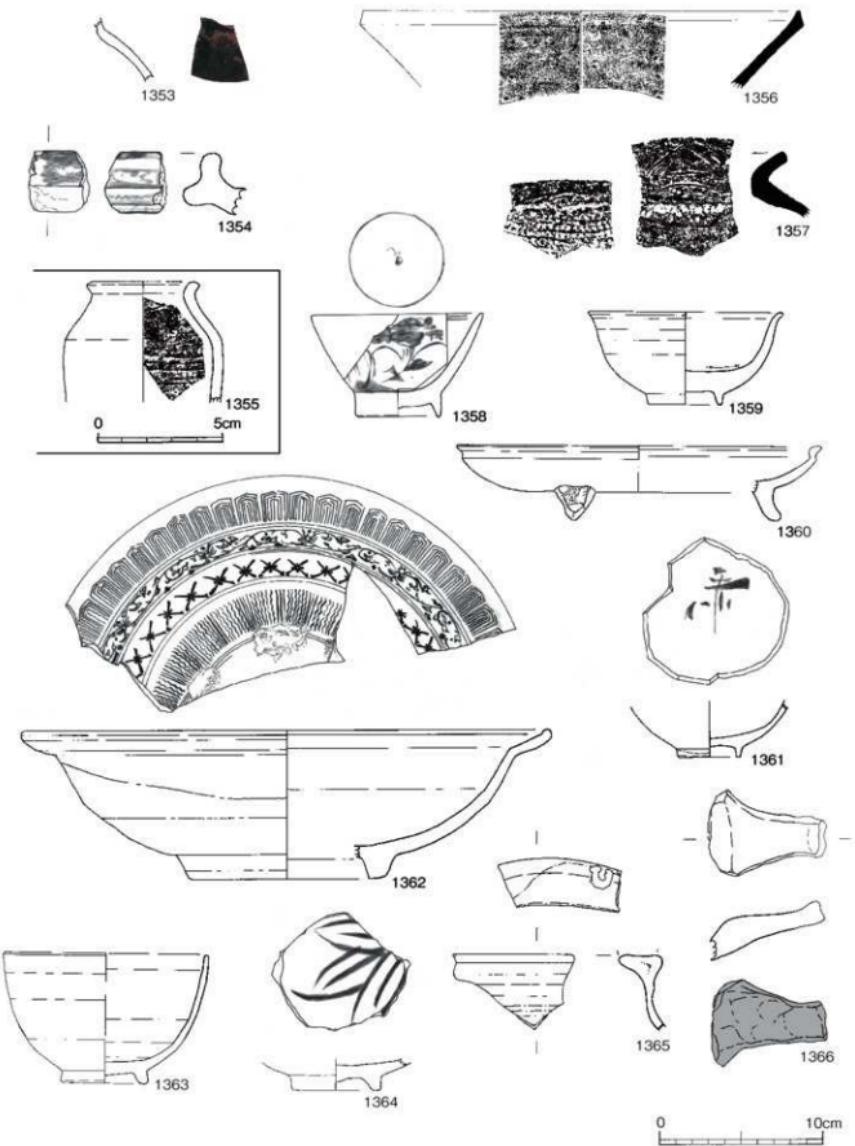
1355は小壺になるものと思われる。国内、国外含め产地不明である。1356・1357は中世須恵器である。1356は鉢である。神出魚住産と思われる。1357は壺の口縁部である。樺万丈産と思われる。1358~1365は近世の国内産陶器である。1358~1360は肥前器である。1358は染付の碗で、広東形のものである。1359は端反形の白磁碗である。見込みに蛇の目釉剥離が施される。1360は青磁釉がかけられた盤である。獅子頭の脚が3足つくものと思われる。1361・1362は肥前系陶器である。1361は京焼風陶器の碗である。見込みに「壽」の文字が鉄釉で描かれる。1362はやや深みのある碗である。肥前もしくは在地産と思われるが詳細は不明である。1363は肥前陶器の唐津焼で、三島手の折れ縁皿である。見込みには砂目が残る。1364は肥前陶器で内野山窯産の碗である。見込みに波文のような文様が彫り込まれ、暗緑色に発色した



第140図 中・近世出土遺物実測図(5)



第141図 中・近世出土遺物実測図（6）



第142図 中・近世出土遺物実測図（7）

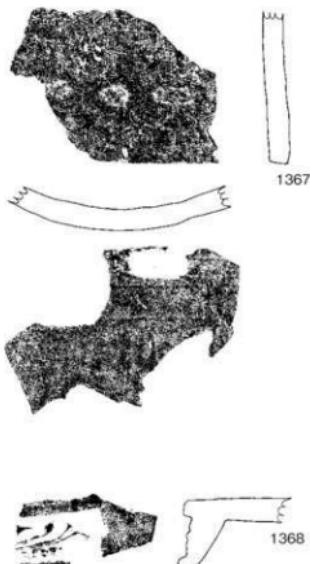
銅線釉が墨付を除きかけられる。1365は薩摩焼苗代川系の甕である。堂平窯産と考えられ、口唇部には貝目が見られる。1366は培焰の把手である。中世のものか近世のものははつきりしない。裏面は全面にススが付着する。

1367・1368は瓦である。1367は中世の平瓦である。桶巻き作りで製作されており、内面には細かい布目痕が、外面には繩目痕が残る。1368は近世の軒平瓦である。1369は瓦質の製品であるが、用途は不明である。片面に溝状の筋が彫り込まれる。1370は滑石製石鍋の底部である。外面には細かいノミ痕が観察される。

1371は湖州鏡である。近世に相当する16号溝状造構内から出土したが、原位置を留めているものではないと思われるため、表層として取り扱った。近隣に中世の土塙墓があり、その副葬品であった可能性が考えられる。上面に銘文が刻まれるが、肉眼では判読できないため、当センターでX線写真により判読を試みたところ、上面に「□州千石念/□家□□子」と記されていることが判明した。

10 古鏡（近世）（第144・145図1372～1405）

土塙墓から出土したものと表層から出土したものとを括して掲載した。



1372～1376は1号土坑から出土した寛永通寶で、1377～1381は2号土坑から出土した寛永通寶である。1377は3枚重なった状態で出土した。

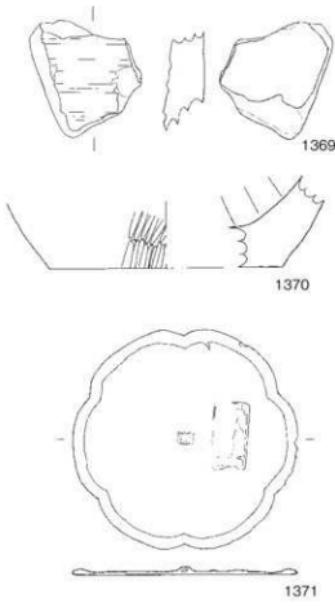
1382～1388は、4号土坑から出土した寛永通寶である。

1389～1405は、表層から出土したものである。1397は開元通寶である。1398は表面の摩耗が激しく、裏面には「治」の文字が見られる。1399は朝鮮通寶である。1405は、天保通寶である。

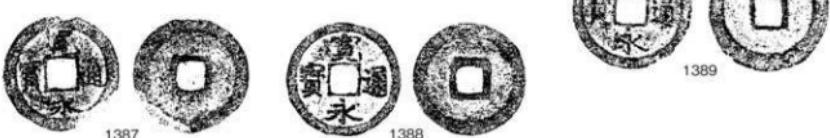
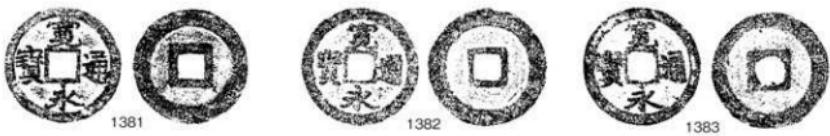
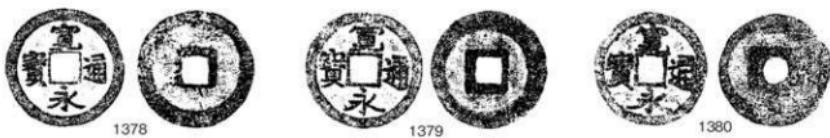
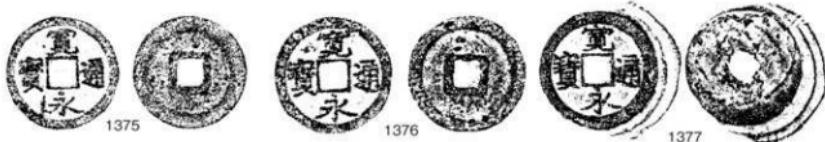
その他の遺物（図版34 1406～1431）

1406～1431は、包含層一括及び表層から出土した輸入陶器である。実測図は掲載できなかったが、資料的価値が高いと判断したため写真を掲載した。

1406～1412、1414～1420、1423～1426は緑釉陶器である。器種・形状等の詳細は不明であるが、内面は無釉であることから、瓶や壺等の袋物と思われる。1413は龍泉窯系青磁の瓶もしくは水注と思われる。頭部に把手か注口がつぶくが、欠損している。1421は天目碗である。13世紀代と思われる。1422は外面にかけられた鉄釉を搔き落として文様を描くもので、内面は無釉である。1427は外外面に光沢の強い黒釉がかかる。1428～1431は青白磁の合子である。

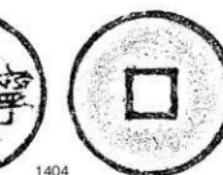
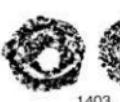


第143図 中・近世出土遺物実測図（8）



0 5cm

第144図 近世出土古銭（1）



0 5cm

第145図 近世出土古銭（2）

美21 中·近代出土植物标本集 (1)

探査 番号	地図 番号	出水区	層位	種別	岩相	剖面	色調	法面 (cm)			外観	内面	調整	備考
								口径	高径	石英				
901	Y-2 海立	Ⅲ	土砂層	固	口縫～互葉	固	にぶい黄褐色 (外)にぶい褐色	9.4	6.8	1.3	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
902	Y-2 海立	Ⅲ	土砂層	固	口縫～互葉	固	にぶい褐色 (外)にぶい褐色	8.4	7.0	0.9	○	ナデ	ナデ	赤の石粉含む 脊部 破切口
903	Y-2 海立	Ⅲ	土砂層	松	互葉	互葉	にぶい黄褐色	—	6.6	—	—	ナデ	ナデ	赤の石粉含む 脊部 破切口
904	Y-2 海立	Ⅲ	土砂層 黒色土・土砂層	固	互葉	互葉	黒	—	6.0	—	—	ミカキ	ミカキ	平行タキ
907	Y-2 海立	Ⅲ	[ガリヤヤキ] 黒色土	變	口縫部	口縫部	暗赤褐色	—	—	—	—	格子目タキ	格子目タキ	平行タキ
908	Y-2 海立	Ⅲ	[ガリヤヤキ]	變	縫隙	縫隙	暗赤褐色	—	—	—	—	ナデ	ナデ	平行タキ
910	V-1 海5	Ⅱ	[土砂層] 赤色土・A類	松	互葉	互葉	にぶい黄褐色 (外)赤色	—	12.6	—	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
919	V-1 海5	Ⅱ	傳万太系須透層	捲持	口縫部	口縫部	灰褐色	—	—	—	—	ナデ	ナデ	ハケ目
920	V-3 海7	Ⅲ	傳万太系須透層	捲持	口縫部	口縫部	にぶい黄褐色	—	—	—	—	ナデ	ナデ	ハケ目
931	V-3 海7	Ⅲ	東透層系須透層	捲持	口縫部	口縫部	黄褐色	29.2	—	—	—	ナデ	ナデ	ナデ
941	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	固	口縫～互葉	固	淡褐色	10.0	8.2	1.5	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
942	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	固	口縫～互葉	固	にぶい褐色 (外)褐色	8.0	6.0	1.3	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
943	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	松	はば完形	はば完形	にぶい褐色 (外)褐色	14.4	9.0	3.4	○	ナデ	ナデ	ナデ
944	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	松	口縫～互葉	口縫	にぶい褐色 (外)褐色	13.0	9.0	3.2	○	ナデ	ナデ	ナデ
945	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	松	互葉	互葉	にぶい黄褐色	—	9.6	—	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
946	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	松	互葉	互葉	淡褐色	—	8.8	—	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
947	V-2 海8	Ⅲ	土砂層	松	互葉	互葉	にぶい褐色 (外)褐色	—	9.0	—	○	ナデ	ナデ	赤色の石粉含む 脊部 破切口
948	V-2 海8	Ⅲ	黑色土・A類	固	互葉	互葉	にぶい褐色 (外)褐色	—	7.4	—	○	ミカキナデ	ミカキナデ	黒色の土
949	V-2 海8	Ⅲ	黑色土・A類	松	互葉	互葉	灰褐色	—	7.4	—	○	ナデ	ナデ	ミカキナデ
950	V-2 海8	Ⅲ	黑色土・A類	松	互葉	互葉	淡褐色	—	6.8	—	○	ナデ	ナデ	ミカキナデ
951	V-2 海8	Ⅲ	傳万太系須透層	捲持	口縫部	口縫部	にぶい褐色 (外)にぶい褐色	38.0	—	—	○	ナデ	ナデ	ハケ目 濃色
第101回	960	V-2 海8	Ⅲ	傳万太系須透層	メソコ	—	にぶい褐色	24.4	—	—	—	ナデ	ナデ	ハケ目 濃色

表22 中・近世出土遺物観察表(2)

件名	相較 番号	出土区	層位	種別	性質	組立	色調	法量(cm)			鉄石	角閃石	その他	外觀	内面	説明	備考
								口径	底面	側面							
第10202	961	V-2 溝6	II	実地盤系赤瓦	柱棒	口縁部	灰白色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	962	V-2 溝6	II	実地盤系赤瓦	柱棒	口縁部	反青色	23.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	963	V-2 溝6	II	(カムイヤキ) 須恵器	甕	肩部	黒褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ
	964	V-2 溝6	II	(カムイヤキ) 須恵器	甕	肩部	に少い黄色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ
第10203	964	Y-2 溝9	IV	土器	壺	底部	灰褐色	に少い黒褐色	—	10.4	—	—	—	—	—	—	ナデ
	965	Y-2 溝11	IV	黑色土器A類	杯	底部	(外) 黒色 (内) 黄褐色	—	7.0	—	○	—	—	—	—	—	カネ
	1025	Y-2 溝11	IV	土器	壺	口縁~底部	淡青褐色	9.0	7.2	1.2	○	—	—	—	—	ナデ	
	1006	Y-2 溝11	IV	土器	壺	口縁~底部	(外) 淡灰褐色 (内) 淡青褐色	9.4	5.6	1.3	○	—	—	—	—	ナデ	
第10204	1027	Y-2 溝11	IV	土器	杯	底部	淡青褐色	—	8.0	—	—	—	—	—	—	—	ナデ
	1008	Y-2 溝11	IV	土器	杯	口縁~底部	(外) 淡青褐色 (内) 黄褐色	—	—	—	○	—	—	—	—	ナデ	
	1015	Y-2 溝11	IV	(カムイヤキ) 須恵器	壺?	頂部~瓶頸	に少い黒褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ
	1022	Y-2 溝13	IV	土器	壺	底部	灰褐色	に少い黒褐色	—	8.4	—	○	—	—	—	—	ナデ
第10205	1023	Y-2 溝13	IV	土器	壺	底部	(外) 反青褐色 (内) 紫褐色	—	7.2	—	○	—	—	—	—	ナデ	
	1024	Y-2 溝14	IV	土器	杯	底部	(外) 紫褐色	—	11.8	—	○	—	—	—	—	ナデ	
	1025	Y-2 溝14	IV	(カムイヤキ) 須恵器	甕	底部	暗青褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	
	1027	Y-2 溝12-14	—	黑色土器A類	杯	底部	(外) 反青褐色 (内) 黄褐色	—	8.0	—	○	—	—	—	—	カネ	
第10206	1028	Y-2 溝12-14	IV	(カムイヤキ) 須恵器	甕	底部	灰褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	ナデ	
	1029	Y-2 溝12-14	IV	(カムイヤキ) 須恵器	甕	新形~瓶頸	淡灰褐色	—	14.9	—	—	—	—	—	—	ナデ	
	1030	Z-2 溝15	III	土器	壺	口縁~瓶頸	淡青褐色	8.8	6.0	1.3	○	—	—	—	—	ナデ	
	1031	Z-2 溝15	III	土器	壺	口縁~瓶頸	に少い褐色	7.8	6.0	1.0	○	—	—	—	—	ナデ	

表23 中・近世出土遺物観察表(3)

件名	相続 番号	出土区	層位	種別	特徴	部位	色調	法量(cm)			測量		備考	
								口径	底径	高さ	石灰	灰岩		
第1082	1032	Z-2 溝15	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	に少し黄色	8.4	6.4	1.1	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1033	Z-2 溝15	Ⅲ	土器類	片	底部	褐色	—	7.0	—	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1034	Z-2 溝15	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	(外)に少し黄色 (内) 黒色	10.0	6.0	1.5	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1035	Z-2 溝15	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	黒褐色	10.6	8.0	1.7	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1046	Z-2 溝15	Ⅲ	土器類	盤	周縁	灰色	—	—	—	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1047	Z-2 溝15	Ⅲ	(力)器	要	底部	褐色	—	16.4	—	○	○	ナデ	平行タキ
第1112	1069	X-7 溝16	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	(外) 黄褐色 (内) 黑褐色	8.8	7.0	2.0	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1070	X-7 溝16	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	(外) 黄褐色 (内) 黑褐色	9.8	7.6	1.4	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1071	X-7 溝16	Ⅲ	土器類	片?	底部	黒褐色	10.1	4.2	3.1	○	○	ナデ	赤色の石粉含む 砂部 細切り
	1109	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	滑鉢	口縁一部部	灰色	—	—	—	○	○	ナデ	平行タキ
	1110	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器?	滑鉢	口縁一部部	褐色	—	—	—	○	○	ナデ	平行タキ
	1111	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	滑鉢	口縁一部部	に少し黄色	29.0	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
第1132	1112	Y-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	要	周縁	深褐色	—	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1113	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	要	周縁	深褐色	—	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1114	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	要	周縁	灰色	—	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1115	X-7 溝16	Ⅲ	骨器類系須恵器	要	周縁	灰褐色	—	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1146	V-7 溝17	Ⅲ	滑器類?	片	底部	灰褐色	—	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1152	W-7 溝18	Ⅲ	滑器類系須恵器	片	口縁部	灰色	32.8	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
第1172	1153	W-7 溝18	Ⅲ	滑器類系須恵器か?	要	裏	浅青褐色	20.6	—	—	—	—	ナデ	平行タキ
	1159	Za-3 土塗壁6	Ⅲ	土器類	皿	口縁一部部	に少し褐色	8.4	7.0	1.1	○	○	ナデ	赤色の石粉含む
第1212	1160	Za-3 土塗壁6	Ⅲ	土器類	片	底部	浅青褐色	13.0	—	—	○	○	ナデ	赤色の石粉含む

表24 中・近世出土遺物観察表(4)

件名	相較 番号	出土区	層位	種別	特徴	部位	色調	法量(cm)			鉢	石灰	角閃石	その他	外観	内面	説明	備考
								口径	底径	高さ								
第122回	1161	Z-2-1	N	土器類	皿	口縁~底部	灰白色	8.6	7.0	1.2	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1162	Z-2-1	N	土器類	皿	底部	(外)淡青紫色 (内)褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1163	Z-2-1	N	赤色土器A類	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1164	Z-2-1	N	赤色土器B類	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第124回	1165	X-1-16	E	土器類	好	口縁~底部	(外)淡青紫色 (内)褐色	12.8	8.0	3.0	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1166	X-1-16	E	土器類	好	脚部~底部	(外)褐色 (内)褐色	—	8.4	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1167	X-1-16	E	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1168	X-1-16	E	土器類	好	外輪表面	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第125回	1169	X-8	E	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1200	X-8	E	土器類	好	周面	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1201	X-8	E	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1202	X-8	E	土器類	好	周面	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第126回	1203	Z-1-16	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1205	Z-1-16	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1206	Z-1-16	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1208	Z-1-16	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第127回	1209	X-3	III	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1211	Z-1-22	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1224	Z-1-2	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1236	Z-1-22	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第128回	1238	Z-2	N	土器類	好	口縁~底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1239	Z-3	N	土器類	好	口縁~底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1240	Z-3	N	土器類	好	口縁~底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
	1241	Z-3	N	土器類	好	底部	(外)褐色 (内)褐色	—	7.4	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ
第129回	1242	Z-3	N	土器類	好	底部	褐色	—	—	—	○	○	○	○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ

表25 中・近世出土遺物観察表(5)

件目 番号	相続 番号	出土区	層位	種別	特徴	部位	色調	法量(cm)			内面	調査	
								口径	底径	高さ			
第12308	1243	Z-3 ±1±31	N	土器器	好	底部	(外)に少い黒褐色 (内)褐色	—	11.0	—	○	ナデ	
	1246	Z-2 ±1±33	N	土器器	好	底部	(外)に少い黒褐色 (内)褐色	—	9.2	—	○	ナデ	
	1247	Z-3 ±1±34	N	土器器	好	口縁~底部	漆黒	13.0	7.0	2.4	○	ナデ	
	1248	0-2 ±1±35	H	土器器	好	底部	(外)に少い黒褐色 (内)褐色	—	6.0	—	○	ナデ	
	1249	X-4 ビツ±125	N	土器器	好	底部	(外)に少い黒褐色 (内)褐色	—	11.0	—	○	ナデ	
	1250	X-4 ビツ±125	N	須恵器	壺	肩部	灰褐色	—	—	—	—	ナデ	
第13302	1251	X-3 ビツ±26	N	土器器	好	底部	漆黒	(外)浅青褐色 (内)褐色	—	7.0	—	○	ナデ
	1253	Y-3 ビツ±27	N	須恵器	壺	肩部	灰褐色	—	—	—	—	ナデ	
	1255	Y-2 ビツ±30	N	須恵器	壺	肩部	灰褐色	—	—	—	—	ナデ	
	1256	Z-2 ビツ±31	N	土器器	好	底部	褐色	—	—	—	○	ナデ	
	1257	Z-2 ビツ±32	N	土器器	血	宋形	褐色	8.6	6.5	1.4	○	ナデ	
	1258	Y-2 ビツ±33	N	土器器	圓	口縁~底部	(外)灰褐色 (内)灰白色	9.1	7.5	1.7	○	ナデ	
第14301	1259	Y-2 ビツ±33	N	土器器	好	底部	褐色	—	8.0	—	○	ナデ	
	1260	Z-3 ビツ±34	N	土器器	好	底部	(外)に少い黒褐色 (内)褐色	—	8.4	—	○	ナデ	
	1262	Z-3 ビツ±35	N	土器器	好	底部	褐色	—	8.4	—	○	ナデ	
	1263	Z-3 ビツ±35	N	土器器	圓	口縁~底部	褐色	7.9	6.2	1.4	○	ナデ	
	1265	Z-3 ビツ±36	N	須恵器	壺	肩部	黑褐色	—	—	—	—	ナデ	
	1266	Z-3 ビツ±37	N	土器器	圓	口縁~底部	に少い黒褐色	8.2	6.0	1.1	○	ナデ	
第14302	1267	Z-3 ビツ±37	N	土器器	圓	口縁~底部	に少い黒褐色	8.2	6.8	1.2	○	ナデ	
	1268	Z-2 ビツ±38	N	土器器	好	底部	褐褐色	—	9.0	—	○	ナデ	
	1269	Z-2 ビツ±38	N	土器器	好	底部	浅青色	—	8.5	—	○	ナデ	
	1270	0-3 ビツ±39	N	土器器	好	底部	に少い黒褐色	—	7.8	—	○	ナデ	

表26 中·近世出土遺物觀察表 (6)

表27 中・近世出土遺物觀察表(7)

件名	地點 番号	出土区	層位	種別	基盤	施土の色調	施土	焼粧	重量(cm)		時間	分類	備考	
									口径	底径				
第100回	957	V-2-3 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼粧部全周焼粧	—	—	C 焼か?	太宰府V-2焼か?		
	958	V-3-4 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼粧部全周焼粧	16.2	—	D 級	太宰府V-4b 級	内面焼付文	
	959	V-3 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼粧部全周焼粧	17.0	—	D 級	太宰府V-4a 級		
	960	V-2 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	高台内底焼粧	—	—	D 級	太宰府V-4a 級	内面二重焼付文	
	961	V-3 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	高台内底焼付	—	6.0	—	C またはD 級	太宰府V級	
	962	V-3 測8	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	腰部~高台内底焼付	—	6.4	—	C またはD 級	太宰府V級	
	963	V-2 測8	II	白磁	皿	灰白色	透明釉	外面部 内面見込み焼付	12.6	—	C 級	太宰府V-1a 級		
	964	V-3 測8	II	白磁	桙	に少く黒褐色	透明釉	腰部~高台内底焼付	—	8.4	—	C~F 級	太宰府V級か?	
	965	V-2 測8	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼粧部全周焼粧	17.6	—	D 級	太宰府I-4b 級	二、三片方に分離 用途文	
	966	V-2 測8	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼粧部全周焼粧	12.2	—	G 級焼付	上田 I-V' 級	16世紀 外側に燒付書文	
第11回	967	V-1 測8	II	青磁	桙	相模色	青磁釉	焼粧部全周焼粧	16.6	—	C 焼か?	太宰府V級か?		
	968	V-1 測8	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	腰部~高台内底焼付	—	5.0	—	D 級	太宰府I-1c 級	外側に花文 文には花文シジグザクの 風景文
	969	V-2 測8	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	腰部~高台内底焼付	17.0	5.0	D 級	太宰府I-1b 級	外側に焼付文	
	970	V-1 測8	II	青磁	皿	灰白色	青磁釉	腰部~焼付は焼付	10.4	4.4	C 級	太宰府I-1a 級	用途文	
	971	V-3 測8	II	青磁	皿	灰白色	青磁釉	腰付は焼付ぎ	11.0	4.5	22	D 級	太宰府I-2b 級	ヘラによる文とシジグザクの風景文
	972	V-2 測8	II	青磁	不明	灰	透明釉	裏部焼付ぎ	6.0	—	—	—		
	995	X-2 測10	IV	白磁	桙	灰白色	透明釉	外面部全周まで焼付	13.6	—	C またはD 級	太宰府V級か?		
	997	X-2 測10	IV	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面と外面部まで焼付	—	—	C 焼か?	太宰府V級か?		
	999	Y-2 測12	—	青磁	桙	灰白色	青磁釉	腰部~高台内底焼付	16.3	5.0	T1	D 級	同窯 I-1 b 級	
	1000	Y-2 測12	—	青磁	桙	灰白色	青磁釉	腰部~高台内底焼付	16.2	5.0	T2	D 級	同窯 I-1 b 級	
第103回	1001	Y-2 測12	—	青磁	皿	灰白色	青磁釉	腰部~高台内底焼付	12.6	4.4	37	D 級	明治前期品	

表28 中・近世出土遺物観察表(8)

件名	地點 番号	出土区	層位	種別	基盤	施土の色調	施土	焼付	重量(cm)		時間	分類	備考
									口径	底径			
第105回	1002	Y-2 測12	-	青白磁	板	灰白色	青白磁	焼付中位～窓台内底面無焼付	14.6	5.6	5.1	D型	見込みに焼成の焼付を有り
	1003	Y-2 測12	-	青白磁	板	灰白色	青白磁	焼付中位～窓台内底面無焼付	14.5	5.4	5.0	D型	見込みに焼成の焼付を有り
第106回	1004	Y-2 測12	-	青白磁	板	灰白色	青白磁	焼付中位～窓台内底面無焼付	14.5	5.1	5.0	D型	見込みに焼成の焼付を有り
	1009	Y-2 測11	N	白磁	板	灰白色	青白磁	焼付部全焼付	--	--	--	D型か?	太宰府V-4b型
第106回	1010	X-2 測11	N	白磁	板	灰白色	透明釉	内面から窓台部まで焼付	18.0	--	--	C型	太宰府V型
	1011	X-2 測11	N	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	16.8	--	--	C型	太宰府V型
第107回	1012	Y-2 測11	N	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面から窓台部まで焼付	--	4.0	--	C型か?	太宰府V型か?
	1026	Z-2 測12-14	N	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	--	--	--	D型	太宰府V-4b型
第108回	1036	Z-2 測15	E	白磁	板	淡青色	透明釉	焼付部全焼付	15.6	--	--	C型	太宰府V型
	1037	Z-2 測15	E	白磁	板	淡青色	透明釉	窓台から窓台内底面無焼付	--	6.4	--	C型	太宰府V型
第109回	1038	Z-2 測15	E	白磁	板	灰白色	透明釉	窓台内底面無焼付	--	--	--	D型	太宰府V-4b型
	1039	Z-2 測15	E	青磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	14.4	--	--	D型	太宰府V-4b型
第110回	1040	Z-2 測15	E	青磁	皿	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	14.0	--	--	D型	太宰府V-1a型
	1072	X-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	15.7	--	--	C型	太宰府V型
第111回	1073	Y-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	16.0	--	--	C型	太宰府V型
	1074	Y-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	16.0	--	--	C型	太宰府V型
第111回	1075	X-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	焼付部全焼付	15.6	--	--	D型	太宰府V-4b型
	1076	Y-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	窓臺～窓台内底面無焼付	--	6.5	--	日期	太宰府X-V型
第112回	1077	X-7 測16	E	白磁	板	灰白色	透明釉	窓臺～窓台内底面無焼付	--	4.6	--	D型	太宰府V型
	1078	X-7 測16	E	白磁	皿	灰白色	透明釉	口内げ	12.0	--	--	F型	太宰府文様
第113回	1079	Y-7 測16	E	白磁	皿	灰白色	透明釉	窓臺以下無焼付	13.6	--	--	G型山形	森田口型

表29 中・近世出土遺物觀察表(9)

件名 番号	地點 番号	出土区	層位	種別	基盤	施土の色調	施土	焼付	流量(cm)		時間	分類	備考
									口径	底径			
1080	X-7 測6	II	白磁	皿	灰白色	透明釉	焼付は焼斜石	11.5	7.0	2.5	G 直込焼	森田E 様	
1081	X-7 測6	II	白磁	片	灰白色	透明釉	外面無焼	--	3.6	--	G 直込焼	森田D 様	
1082	X-7 測6	II	白磁	水杓の把手	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	--	C 銅の?	--	1世紀後半 従小窯台	
1083	X-7 測6	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼付+高台内底全周無焼	--	5.0	--	D 磁	太宰府I-1a 様	
1084	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼付+高台内底全周無焼	--	4.7	--	D 磁	太宰府I-1a 様	
1085	X-7 測6	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼付+高台内底全周無焼	--	5.3	--	D 磁	太宰府I-2a 様	
1086	X-7 測6	II	青磁	桙	灰色	青磁釉	焼存部全周無焼	13.4	--	--	D 磁	太宰府I-2b 様	
1087	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	透明釉	焼存部全周無焼	--	--	D 磁	太宰府I-1b 様		
1088	Y-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	--	D 磁	太宰府I-1d 様		
1089	X-7 測6	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼存部全周無焼	14.6	--	--	E 磁	太宰府I-a 様	
1090	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	15.4	--	--	E 磁	太宰府I-3 様	
1091	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	--	E 磁	太宰府I-b 様		
1092	X-7 測6	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼付+高台内底全周無焼	--	4.6	--	G 直込焼	太宰府A 様	
1093	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	6.0	--	G 直込焼	太宰府A 様	
1094	X-7 測6	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼存部全周無焼	12.8	--	--	G 直込焼	上田白-N 様	
1095	X-7 測6	II	青磁	香炉	灰白色	青磁釉	内底 外底全周無焼	--	3.8	--	--	--	
1096	X-7 測6	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	--	D 磁	太宰府I-1b 様か?		
第116回	1149 測7	II	青磁	桙	灰青色	青磁釉	焼存部全周無焼	--	--	E 磁	太宰府I 様		
第117回	1151 測8	II	青磁	桙	灰白色	青磁釉	焼付+高台内底全周無焼	--	5.6	--	E 磁	太宰府I 様	
第121回	1157 土壤5	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼存部全周無焼	13.8	--	C 磁	太宰府A 様		
第124回	1170 大豊工房6	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼存部全周無焼	14.0	--	C 磁	太宰府A 様		

表30 中・近世出土遺物觀察表 (10)

件名 番号	地點 番号	出土区	層位	種別	基盤	施土の色調	施土	焼付	重量 (cm)		時間	分類	備考
									口径	底径			
1171	X-8 大型上46	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼付部全周焼付	—	—	—	C期	太宰府V-2鉢	
1172	X-8 大型上46	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼付部以下無焼付	—	—	—	D期	太宰府V-4b鉢	
1173	X-8 大型上46	II	白磁	桙	淡青色	透明釉	焼付~頂台内底全周焼付	—	5.1	—	C期?	太宰府V焼付?	
1174	X-8 大型上46	II	白磁	桙	淡青色	透明釉	焼付部以下無焼付	—	5.8	—	不明	不明	
1175	X-8 大型上46	II	白磁	皿	灰白色	透明釉	口唇部焼付	—	—	—	F期	太宰府文盤	
1176	X-8 大型上46	II	白磁	皿	灰白色	透明釉	焼付部全周焼付	—	6.0	—	F期	太宰府文盤	
1177	X-8 大型上46	II	白磁	片	灰色	透明釉	焼付~頂台内底全周焼付	9.2	2.2	G期(?)	森田D鉢	抹り高台	
1178	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付~頂台内底全周焼付	—	6.4	—	D期	太宰府I-3a鉢	
第1245回	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付~頂台内底全周焼付	—	4.8	—	D期	太宰府I-1鉢	
1180	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付~頂台内底全周焼付	16.1	4.4	4.6	E期	太宰府I-b鉢	
1181	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰色	青釉胎	焼付部全周焼付	16.2	—	—	E期	太宰府I-b鉢	
1182	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付部全周焼付	16.2	—	—	G期(?)	上田B-I鉢	
1183	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付部全周焼付	12.6	—	—	G期(?)	上田B-I鉢	
1184	X-8 大型上46	II	青磁	桙	灰白色	青釉胎	焼付部全周焼付	14.0	—	—	F期	太宰府II-2鉢	
1185	X-8 大型上46	II	青磁	片	灰白色?	青釉胎	焼付部全周焼付	12.0	—	—	F期	太宰府II鉢?	
1186	X-8 大型上46	II	青磁	皿	灰白色	青釉胎	外腹と内腹一部焼付	—	—	—	G期(?)	太宰府II焼付?	
1187	X-8 大型上46	II	青磁	皿	灰白色	青釉胎	焼付は桙剥ぎ	—	4.2	—	D期	太宰府II鉢	
1229	X-8 ±46.25	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼付部全周焼付	17.0	—	—	日鉢	太宰府X-1鉢?	
第129回	X-3 ±46.26	II	青白磁	合子皿	灰白色	内面焼付	—	—	—	—	D期?	—	
1230	Z-3 ±46.31	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼付部全周焼付	—	—	—	D期	太宰府V-4b鉢	
1231	Z-3 ±46.31	II	白磁	桙	灰白色	透明釉	焼付部全周焼付	16.8	—	—	C期	太宰府V鉢	

表31 中・近世出土遺物観察表 (11)

件目	地軸 番号	出土区 番号	層位	種別	基盤	施土の色調	施土	施粧	法量 (cm)	時間	分類	備考	
								口径 底径 高さ 幅					
第133回	1254	Y-2 ビット20	N	白磁	板	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	14.6	—	C期	太宰府窑 窯入焼	
第134回	1261	Z-3 ビット34	N	白磁	皿	灰白色	透明釉	内面と外面部全面で施粧 内面と外面部全面で施粧	—	—	D期	太宰府窑-2b 絞り?	
青花 (織錦内)													
第129回	932	Y-3 窓7	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付は織錦	—	4.4	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1097	X-7 窓6	II	青花	碗	灰黄色	透明釉	残存部全面施粧	—	—	—	—	小野C群-1 織錦	
1098	X-7 窓6	II	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	11.4	—	—	—	15世紀後半~ 16世紀後半	
1099	X-7 窓6	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付は織錦	—	5.4	—	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1100	X-7 窓6	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付~窓内全面施粧	—	4.6	—	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
第121回	1156	Z-2 土壤5	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付~窓内全面施粧	13.6	5.0	4.8	—	小野D群 織錦
1189	X-8 大型-246	II	青花	碗	白色	透明釉	残存部全面施粧	15.0	—	—	—	16世紀後半 小野E群 織錦	
1190	X-8 大型-146	II	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	11.0	—	—	—	16世紀後半 小野C群 織錦	
1191	X-8 大型-146	II	青花	碗	灰黄色	透明釉	裏付~窓内全面施粧	14.0	5.0	4.9	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1192	X-8 大型-146	II	青花	碗	に少し黄白色	透明釉	裏付~窓内全面施粧	—	5.0	—	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1193	X-8 大型-146	II	青花	碗	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	—	—	—	—	16世紀後半 不明	
第125回	1194	X-8 大型-146	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付~窓内全面施粧	—	5.0	—	—	15世紀後半~ 16世紀後半
1195	X-8 大型-146	II	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	11.4	—	—	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1196	X-8 大型-146	II	青花	皿	灰白色	透明釉	裏付は織錦	—	3.0	—	—	16世紀後半~ 17世紀初期	
1197	X-8 大型-146	II	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	10.2	—	—	—	小野E群 織錦	
1198	X-8 大型-146	II	青花	皿	灰白色	透明釉	裏付以下施粧	11.0	—	—	—	16世紀後半~ 小野C群 織錦	
1199	X-8 大型-146	II	青花	皿	灰白色	透明釉	残存部全面施粧	10.0	—	—	—	16世紀後半~ 小野C群 織錦	
青花 (織錦内)													
青花 (外縁)													
第126回	1200	Y-3 窓7	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付全面施粧	13.0	5.0	4.8	—	外縁斜削~巴蜀畫文 織錦
1201	Y-3 窓7	II	青花	碗	灰白色	透明釉	裏付全面施粧	13.0	5.0	4.8	—	外縁斜削~巴蜀畫文 織錦	

表32 中・近世出土遺物觀察表 (12)

件名	地點 番号	出土区 番号	層位	種別	基盤	施土の色調	施土の 色、面	地脚	法量 (cm) 口径 底径 高さ	分類	産地	備考
第125回	1274	W-8 ピットQ	X	青花	皿	灰白	透明白	蓋付は施剥ぎ	10.8 6.0 21	16世紀後半— 17世紀初頭	小野毛群	紫地絵
第102回	901	U-2 窓5	瓦質土器	埴輪	灰白	に少し黄色	—	—	—	—	—	—
第102回	924	U-1 窓6	瓦質土器	埴輪	灰白	(外)淡青色 (内)淡青色	—	—	—	—	—	—
第102回	940	V-3 窓7	土質陶土器	焼鉢	灰白	に少し黄色	20.9	17.0 3.1	外側にスス付有	—	—	—
第102回	985	V-2 窓8	瓦質土器	埴輪	灰白	に少し黄色	31.0	16.2 13.4	—	—	—	—
第102回	991	V-2 窓8	土質陶土器	焼鉢	淡青色	—	—	—	—	—	—	外側にスス付有
第102回	1041	Z-2 窓15	土製品	不明	—	に少し黄色	—	—	—	—	—	—
第102回	1116	X-7 窓16	瓦質土器	皿	白色	—	—	—	—	—	—	内面に墨花カランフ文
第102回	1117	X-7 窓16	瓦質土器	埴輪	白色	—	—	—	23.4	—	—	外側 ハケ目
第102回	1118	X-7 窓16	瓦質土器	埴輪	灰白	—	—	—	—	—	—	内面 離れ目
第102回	1119	X-7 窓16	瓦質土器	埴輪	灰色	—	—	—	—	—	—	内面 離れ目
第102回	1120	X-7 窓16	瓦質土器	埴輪	淡黄色	—	—	—	—	—	—	内油 離れ目
第102回	1121	X-Y-7 窓16	瓦質土器	埴輪	黄反色	—	—	—	13.6	—	—	内面 離れ目
第102回	1122	X-7 窓16	瓦質土器	埴輪	に少し黄色	—	—	—	12.0	—	—	外側 離れ目
第102回	1123	X-7 窓16	瓦質土器	火鉢	に少し黄色	37.8	—	—	—	—	—	内面 離れ目
第102回	1124	X-7 窓16	瓦質土器	火鉢	淡青色 (火鉢)	—	—	—	—	—	—	—
第114回	1125	X-7 窓16	瓦質土器	火鉢	暗灰黄色	—	—	—	20.5	—	—	—
第114回	1126	Y-7 窓16	瓦質土器	茶碗	暗灰黄色	—	—	—	—	—	—	外側にスス付有
第114回	1127	Y-7 窓16	瓦質土器	茶碗	暗灰黄色	—	—	—	—	—	—	外側にスス付有

(直喫器)

表33 中・近世出土遺物觀察表 (13)

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	表面	地土の色調	法量 (cm)	備考
第11650	1144	X-7 溝7	Ⅱ	瓦質土器	縁?	黒灰色	口径 底径	高さ
1206	大型1516	Ⅱ	瓦質土器	縁付	浅黄色	26.0	—	—
1207	大型1516	Ⅱ	瓦質土器	縁付	灰黄色	35.0	—	内面 盛り目
1208	大型1516	Ⅱ	瓦質土器	欠付?	浅黄色	27.2	—	内面 盛り目
1209	大型1516	Ⅱ	瓦質土器	少縁	浅黄色	—	36.0	—
1210	大型1516	Ⅱ	瓦質土器	少縁	浅黄色	—	—	小石子含む
1212	大型1516	Ⅱ	土器	輪状土器 蓋穴を残すか?	灰黄色	—	—	—
第12000	1233	X-3 上1277	Ⅲ	瓦質土器	縁	明黄色	11.4	—
				他焼	に少い黒斑	13.9	4.3	外底にスズ付裏

陶磁器 (縹緲構内)

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	表面	地土の色調	地盤の 色調	法量 (cm)	口径 底径 高さ	備考
第10600	905	Y-2 壁立	Ⅲ	陶器	水洗?	灰黄色?	地盤	柱脚部全周無垢	—	—
906	Y-2 壁立	Ⅲ	陶器	縁	暗灰色	地盤	外底無垢	—	—	中國南部
918	U-2 溝5	Ⅱ	陶器	豊か?	灰黄色	透明釉	口縁部無垢	—	—	中國南部
921	U-2 溝5	Ⅱ	陶器	縁付	—	—	—	—	—	中國南部
923	U-1 溝7	Ⅱ	陶器	縁	灰白色	地盤	外底無垢	—	—	中國南部
925	U-1 溝6	Ⅱ	盆付	縁	灰白色	透明釉	蓋付は釉剥げ	4.0	—	出世記中期 肥前
926	U-1 溝6	Ⅱ	陶器	縁	灰黄色	地盤	高台外周無垢	—	4.2	—
929	V-1-2 溝7	Ⅱ	陶器	把手	暗灰色	地盤	残存部分無垢	—	—	中國南部
933	V-2 溝7	Ⅱ	陶器	皿	灰白色	灰釉	圓盤~高台外周無垢	—	4.2	—
934	V-2 溝7	Ⅱ	陶器	縁付	暗灰色	地盤	口縁部無垢	—	—	18世紀後半 薩摩後代川系
935	V-2 溝7	Ⅱ	陶器	縁付	暗灰色	地盤	口縁部無垢	—	—	18世紀後半 薩摩後代川系
										口縫部に貝貝等

表34 中・近世出土遺物観察表(14)

件名 番号	地點 番号	出土区	層位	種別	表面	施土の色調	被覆の 色の 調	施土	底板	底面		時期	産地	備考
										口径	底径			
26-050	936	V-3 廻7	II	陶器	鉢	に少し赤褐色	灰褐色	口周部削り	34.8	18.3	10.9	18世紀代	銀摩拵代川系	口周部(貝貝貝貝)
	937	V-3 廻7	II	陶器	鉢	赤褐色	鉢	口周部削り	—	—	—	日世紀後半	銀摩拵代川系	口周部(貝貝貝貝)
26-050	938	V-3 廻7	II	陶器	鉢	鐵灰	鉢	上面削り	9.1	12.4	3.4	18世紀後半～ 19世紀	底板焼	底板(14底板)
	939	V-3 廻7	II	陶器	水注	に少し黄色	灰褐色	底付部分全面削り	—	—	—	19世紀代	銀摩拵代川系	底付部分全面削り
路0102	973	V-2-3 廻8	II	陶器	鉢	鉢	鉢	—	—	18.0	—	—	中國南部	—
	974	V-2 廻8	II	陶器	鉢	灰白色	鉢	内面口以下無削	—	—	—	—	中國南部	—
路0102	975	V-1 廻8	II	陶器	鉢	灰白色	鉢	内面削り	—	—	—	10世紀～11世紀	福州窯系	白地褐花文
	976	V-1 廻8	II	陶器	鉢	灰白色	鉢	内面削り	—	—	—	10世紀～11世紀	福州窯系	白地褐花文
路0102	977	V-1 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	底付部分全面削り	11.4	—	—	—	中國南部	—
	978	V-3 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	外面部以下無削	—	—	—	—	中國南部	—
路0102	979	V-2 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	外面部削り	—	14.2	—	—	中國南部	—
	980	V-3 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	外面部削り	—	17.0	—	—	中國南部	—
路0102	980	V-2 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	—	—	—	—	—	僅前か？	—
	980	V-2 廻8	II	陶器	甕	灰白色	鉢	蓋付(一蓋台)内面削り	—	5.0	—	18世紀後半	銀摩拵門司系	見込みに於ける目録記載
路0102	989	V-2 廻8	II	陶器	鉢	茶褐色	鉢	口周部削り	21.2	—	—	18世紀代	銀摩拵代川系	—
	990	V-2 廻8	II	陶器	鉢	茶褐色	鉢	—	—	—	—	—	中國南部	—
路0102	998	X-2 廻10	N	陶器	鉢	黄灰色	鉢	—	—	30.6	—	—	—	—
	1013	Y-2 廻11	—	桝形陶器	不明	鉢	茶褐色	周縁以下削り	—	—	—	—	不明	—
路0102	1014	Y-2 廻11	N	陶器	甕	灰褐色	鉢	—	—	15.2	—	—	中國南部	—
	1016	Y-2 廻11	N	陶器	甕	灰褐色	鉢	—	—	9.8	—	—	中國南部	—
路0102	1017	Y-2 廻11	N	陶器	甕	灰褐色	鉢	—	—	—	—	—	中國南部	—
	1018	Y-2 廻11	N	陶器	甕	に少し青褐色	鉢	底付部分全面削り？	—	—	—	—	—	中國南部？

表35 中・近世出土遺物觀察表 (15)

件名	地圖 番号	出土区	層位	種別	基盤	粘土の色調	粘土の 色の 類	透明性	内部無隙	底面 (cm)		特徴	産地	備考
										口径	底径	底面		
第10502	1019	Y-2 溝11	Y	陶器	小型	灰青色	透明	内部無隙	3.6	—	—	—	不明	自然断面
	1042	Z-2 溝15	II	陶器	罐	田中鉢?	灰青色	透明	柱状部分全無隙	—	—	—	—	福井県
	1043	Z-2 溝15	II	陶器	罐	深鉢	に少く青紫色	透明	柱状部分全無隙	26.0	—	—	—	中國南部
	1044	Z-2 溝15	II	陶器	壺?	灰青色?	透明	—	—	—	—	11.0	—	内面凹小円タキ
	1045	Z-2 溝15	II	陶器	壺	圓	灰青色	透明	—	—	—	—	—	深斜
	1046	Z-2 溝15	II	陶器	壺	楕	灰白色	透明	壺口は極めて	11.6	4.4	5.1	11世紀後半	自然断面
	1048	Z-2 溝15	II	陶器	壺	楕	灰白色	透明	壺口は極めて	12.4	4.6	5.3	11世紀後半	自然断面
第10503	1049	Z-2 溝15	II	磁器 (白磁)	碗	灰白色	透明	内部無隙	柱状部分全無隙	7.0	—	—	—	11世紀後半
	1050	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰白色	透明	—	—	—	—	—	—	自然断面
	1051	Z-2 溝15	II	余付	皿	灰	灰白色	透明	腰部以下無隙	13.2	—	—	—	19世紀
	1052	Z-2 溝15	II	余付	皿	灰	灰色	透明	壺口は極めて	—	4.8	—	—	19世紀前半
	1053	Z-2 溝15	II	陶器	壺	浅青色	透明	—	—	—	—	—	—	17世紀後半～ 18世紀初頭
	1054	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰白色	透明	—	—	—	—	—	—	自然断面
	1055	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰	灰白色	透明	腰部～高台部分無隙	—	3.6	—	—	自然断面
	1056	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰	灰白色	透明	柱状部分全無隙	11.0	3.8	4.7	11世紀後半	自然断面
	1057	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰	灰白色	透明	壺口は高台部分無隙	—	—	—	—	11世紀後半
	1058	Z-2 溝15	II	陶器	壺	灰	灰青色	透明	外面部以下無隙	—	—	—	—	11世紀後半
第10502	1059	Z-2 溝15	II	陶器	壺	深鉢	に少く青紫色	透明	内部口部以下無隙	—	—	—	—	11世紀後半
	1060	Z-2 溝15	II	陶器	壺	深鉢	灰青色	透明	内部無隙	—	—	—	—	11世紀後半
	1061	Z-2 溝15	II	陶器	壺	楕	灰青色	透明	—	—	12.0	—	—	17世紀後半
	1062	Z-2 溝15	II	陶器	鉢	明赤褐色	透明	口部無隙	26.0	—	—	—	18世紀後半	自然断面
	1063	Z-2 溝15	II	陶器	壺	深鉢	灰青色	透明	内外面部以下無隙	36.2	—	—	—	11世紀後半

表36 中・近世出土遺物觀察表(16)

件名	地圖 番号	出土区	層位	種別	表面	施土の色調	粘土の色調	粘土の類	地輪	底盤	底面	底地	備考
	1084	Z-2 溝15	II	陶器	質	褐色	褐色	口部施釉	33.4	—	—	—	17世紀後半～ 18世紀代
	1085	Z-2 溝15	II	陶器	質	褐色	褐色	口部施釉	28.0	—	—	—	17世紀後半～ 18世紀代
第1086	1086	Z-2 溝15	II	陶器	質	褐色	褐色	操作部全施釉	—	—	—	—	17世紀後半～ 18世紀代
	1087	Z-2 溝15	II	陶器	質	褐色	褐色	口部施釉	15.0	—	—	—	18世紀代
	1088	Z-2 溝15	II	陶器	朴分量	明赤褐色	褐色	操作部全施釉	—	—	18世紀代	—	操作部全施釉
	1101	V-7 溝16	II	陶器	朴	反色	白色+土 透明釉	操作部全施釉	30.0	—	—	—	褐色に 内面に施釉
	1102	X-7 溝16	II	鉢地	質	反白色	褐色	内面施釉	—	—	—	—	中國南部
	1103	X-7 溝16	II	陶器	質	反褐色	褐色	操作部全施釉	9.8	—	—	—	中國南部
	1104	X-7 溝16	II	陶器	朴	反褐色	褐色	口部施釉	—	—	—	—	中國南部
第1120	1105	X-7 溝16	II	陶器	質	反褐色	褐色	圓盤~高台全施釉	—	6.2	—	—	中國南部
	1106	X-7 溝16	II	陶器	質	浅褐色	褐色	—	—	—	—	—	中國南部
	1107	X-7 溝16	II	陶器	質	反白色	褐色	—	—	—	—	—	中國南部
	1108	X-7 溝16	II	陶器	朴料	反褐色	褐色?	操作部全施釉	—	—	—	—	17世紀初期
	1133	X-7 溝16	II	陶器	質	反白色	褐色	操作部全施釉	—	32.4	—	—	常青燒
第1142	1134	X-7 溝16	II	陶器	質	反褐色	褐色	操作部全施釉	—	—	—	—	常青燒
	1135	Y-7 溝16	II	陶器	質	反色	褐色	—	—	—	37.0	—	常青燒
	1154	W-8 溝18	II	陶器	質	反白色	褐色	操作部全施釉	—	—	—	—	常青燒
第1170	1155	W-8 溝18	II	陶器	質	反褐色	褐色	操作部全施釉	—	—	—	—	傳前か?
	1156	W-8 溝18	II	陶器	質	反白色	褐色	操作部全施釉	—	—	—	—	常青焼?
第1180	1158	X-8 大塗工16	II	陶器	質	反白色	褐色	操作部全施釉	—	5.6	—	見込み文様	肥前伊万里
第1250	1201	X-8 大塗工16	II	陶器	質	反褐色	褐色	—	—	—	7.6	—	中國南部

表37 中・近世出土遺物觀察表 (17)

件名	地點 番号	出土区	層位	種別	基盤	施土の色調	施土の色調	測量 (cm)		時期	場所	備考	
								口径	底径				
第1250	1201	X-8- 大型土坑6	II	陶器	壺	灰	灰(?)	—	—	8.8	—	中國南部	
第1250	1202	大型土坑6 X-8-	II	陶器	壺	灰	灰(?)	—	—	16.0	—	中國南部	
第1250	1211	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	青灰色	—	—	—	27.0	—	14世紀後半～ 15世紀前半	
第1250	1213	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	灰(?)	—	—	—	18.8	—	常熟	
第1250	1214	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	明褐色	灰	—	—	15.0	—	照柏系(後半)	
第1250	1215	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	灰(?)	灰	透明釉	柱存部全周施釉	—	—	照柏系(後半)	
第1250	1216	大型土坑6 W-9-	II	陶器	壺	灰白色	灰	透明釉	柱存部全周施釉	—	—	15世紀後半	
第1250	1217	大型土坑6 X-8-	II	陶器	水注	灰(?)	灰(?)	柱存部全周施釉	—	—	—	不明	
第1250	1218	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	黑褐色	黑褐色	柱存部全周施釉	—	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1219	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	青灰色	灰	柱存部全周施釉	—	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1220	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	青灰色	灰	柱存部全周施釉	—	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1221	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	青灰色	灰	柱存部全周施釉	—	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1222	大型土坑6 X-9-	II	陶器	壺	青灰色	灰	柱存部全周施釉	—	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1223	大型土坑6 X-9-	II	陶器	片口	青灰色	灰	口周部施白釉	20.4	—	—	照柏系(後代)(II系)	
第1250	1224	X-3 ±1227	III	肥利系稻瓶	壺	灰白色	灰	柱存部全周施釉	10.6	—	5.2	(640)～(650)年	
第1250	1225	Y-2 ±1229	IV	陶器	壺	灰(?)	灰(?)	—	—	—	—	中國南部	
第1250	1227	Y-2 ±1229	IV	陶器	水注(?)	白色	白色	柱存部以下施釉	—	—	6.4	—	中國南部
第1250	1251	X-3 ビック25	IV	陶器	壺	水注(?)	灰(?)	外周部以下施釉	—	—	8.0	—	中國南部
第1250	1254	Z-3 ビック35	IV	陶器	壺	灰(?)	灰(?)	柱存部以下施釉	—	—	—	—	中國南部
第1250	1275	W-8 ビック42	X	陶器	壺	灰(?)	灰(?)	柱存部～窓付内面施釉	11.8	4.4	3.4	(590)～(610)年	照柏系(後半) 定期 口縁部施釉～上口紅

表38 中・近世出土遺物觀察表 (18)

種類 番号	地図 番号	出土区	層位	種別	活埋	色調	法面 長さ	法面 厚さ	備考
新11020	990	V-2 溝6	II	土製品	土球	明赤褐色	4.4	0.9	赤色経目透写
新11020	1020	X-2 溝11	IV	土製品	土球	暗色	8.3	0.7	赤色経目透写
		X-7 溝16	II	土製品	土球	に少し黄色	4.4	2.3	
		X-7 溝16	II	土製品	土球	淡黄褐色	7.4	1.2	赤色経目透写
新11420	1130	X-7 溝16	II	土製品	土球	に少し黄褐色	3.3	1.3	赤色経目透写
		X-7 溝16	II	土製品	土球	灰褐色	7.6	1.6	
		Y-7 溝16	II	土製品	土球	明黄褐色	7.1	2.3	
新11020	1273	B-3 比7-44	IV	土製品	土球	暗色	5.0	1.8	赤色経目透写

石鍋 (遺構内)

種類 番号	地図 番号	出土区	層位	種別	活埋	植土の色調	法面 口径	法面 底径	法面 高さ	備考
第11020	987	V-2 溝8	II	石製品	石鍋	—	—	—	34.4	—
		Y-2 溝11	IV	石製品	石鍋	—	—	—	36.6	—
		X-7 溝16	II	石製品	石鍋	—	—	—	—	—
第11620	1146	X-7 溝16	II	石製品	石鍋	—	—	—	—	—
		X-7 溝16	II	石製品	石鍋	—	—	—	—	—
新11020	1227	X-6 大型土坑6	II	石製品	石鍋	—	—	—	—	外側にスル付箋

鍋 (遺構内)

種類 番号	地図 番号	出土区	層位	種別	活埋	植土の色調	法面 口径	法面 底径	法面 高さ	備考
新11020	992	V-11 溝8	II	土製品	鍋の鉢口	淡黄褐色	—	—	—	鉄矛立筒
		X-8 溝16	II	土製品	—	明赤褐色	—	—	—	鉄矛立筒
新11520	1137	Y-7 溝16	II	土製品	—	に少し暗色	—	—	—	鉄矛立筒
		Y-7 溝16	II	土製品	—	暗色	—	—	—	鉄矛立筒

表39 中・近世出土遺物観察表 (19)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	結構	施設	施土の色調	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴	備 考
第11520	1139	X-7 溝16	Ⅱ	土製品	—	—	浅黄褐色	—	—	—	—	既存坑道
1124	1224	X-8 大型156	Ⅲ	土製品	—	—	明黄褐色	—	—	—	—	既存坑道
第1770	1225	X-9 大型156	Ⅲ	土製品	—	—	暗灰黄色	—	—	—	—	既存坑道
第12620	1226	X-10 大型156	Ⅲ	土製品	—	—	に少し黄褐色	—	—	—	—	既存坑道

瓦(通構内)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	結構	施設	施土の色調	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴	備 考
1180	1180	X-7 溝16	Ⅲ	瓦	平瓦	(外) 灰色 (内) 白色	—	—	1.0	縫目タキ	布目面	
1141	1141	X-7 溝16	Ⅲ	瓦	平瓦	(外) 棕褐色 (内) 棕褐色	—	—	1.5	縫目タキ+後 ナテ	布目面	
1142	1142	X-7 溝16	Ⅲ	瓦	平瓦	(外) 黄灰色 (内) 反黄色	—	—	1.2	縫目タキ	布目面	
1143	1143	X-7 溝16	Ⅲ	瓦	平瓦	(外) 黄灰色 (内) 反黄色	—	—	1.0	縫目タキ+後 ナテ	布目面	
1150	1150	V-7 溝17	Ⅲ	瓦	平瓦	(外) 明黄褐色 (内) 反黄色	—	—	1.3	縫目タキ+後 ナテ	布目面	

土師漆器(包含漆器)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	結構	施設	施土の色調	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	特徴	備 考
1276	W-2	V a	土塗器	皿	口縁~底部	(外) 灰色 (内) に少し黄褐色	11.0	9.6	1.4	○	ナデ	既存 既切引
1277	Y-2	N	土塗器	皿	口縁~底部	浅黄褐色	9.6	8.0	1.4	○	ナデ	既存 既切引
1278	Y-2	N	土塗器	皿	口縁~底部	に少し黄褐色	9.8	7.6	1.1	○	ナデ	既存 既切引
1279	Y-4	N	土塗器	皿	口縁~底部	に少し黄褐色	9.2	7.4	1.0	○	ナデ	既存 既切引
1280	W-2	N	土塗器	皿	口縁~底部	(外) に少し黄褐色 (内) 浅黄色	9.0	7.0	1.1	○	ナデ	既存 既切引
1281	N-2	V a	土塗器	皿	口縁~底部	(外) 黄褐色	9.0	7.2	1.0	○	ナデ	既存 既切引
1282	Z-12	X 1	土塗器	皿	口縁~底部	(外) に少し黄褐色 (内) に少し黄褐色	9.2	7.8	1.5	○	ナデ	既存 既切引
1283	Y-2	N	土塗器	皿	口縁~底部	に少し黄褐色	9.0	8.0	1.1	○	ナデ	既存 既切引
1284	Z-2-3	N b	土塗器	皿	口縁~底部	浅黄褐色	9.0	7.0	1.5	○	ナデ	既存 既切引
1285	Z-12	X 1	土塗器	皿	口縁~底部	に少し黄褐色	9.4	6.0	1.3	○	ナデ	既存 既切引 内外壁に一部入付焼

表40 中・近世出土遺物観察表(20)

件目	出範 番号	出土区	層次	種別	器種	部位	色調	重量(g)	口径	底径	石英	長石	鈍刃石	外側	内側	備考
	1286	X-9	X I	土器類	皿	実形	(外)に少い黒褐色 (内)浅黄褐色	8.6	5.0	—	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り 内外間に一辺2.5付箇
	1287	V-2	N	土器類 黑色者A類	碗	底部	(外) 黑褐色 (内) 黑褐色	—	7.4	—	○	—	—	ナデ	ナデ	— 2.5付箇
	1288	V-2	N b	黑色者A類	碗	底部	(外) 浅黄褐色 (内) 黑褐色	—	8.0	—	○	—	—	ナデ	ナデ	— 2.5付箇
	1289	X-2	V I	土器類 黑色者A類	碗	底部	(外) 浅黄褐色 (内) 黑褐色	—	7.0	—	○	—	—	ナデ	ナデ	底面内外無切口
	1290	Z-3	V b	黑色者B類	皿	口縁一部破缺	(外) 暗褐色 (内) 黑褐色	—	5.9	—	○	—	—	ミガキ	ミガキ	— 2.5付箇
第1-302	1291	Z-2-3	V a/b	黑色者B類	皿	はび実形	(外) 黑褐色 (内) 黑褐色	7.9	6.0	1.8	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り 黒色の石付箇
	1292	Z-13	V I	黑色者A類	升	口縁一部破缺	(外) 暗褐色 (内) に少い黒褐色	15.1	10.5	3.2	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り
	1293	Z-2-3	V a/b	赤色者B類	升	底部	(外) 深褐色 (内) 暗褐色	—	8.0	—	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り 黑色の石付箇
	1294	Z-2-3	b	内盤 外系	升	底部	(外) 暗褐色 (内) 黑褐色	—	6.0	—	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り □口は無限
	1295	V-2	X	土器類	メンコ	—	に少い黒褐色	7.5	—	周辺	○	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り
	1296	X-3	N b	須世器	皿	実形	灰褐色	8.2	4.2	2.0	—	—	—	ナデ	ナデ	底面 無切り
	1317	X-2	V a/b	(須世器) (カムイタケ)	甕	断面	灰色	—	—	—	—	—	—	帽子目タキ	帽子目タキ	帽子目タキ
	1318	W-7	X	須世器	筒状	口縁一部破缺	灰褐色	22.6	—	—	—	—	—	ハケ目	ハケ目	—
	1320	Y-2	III	白磁	碗	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	1321	Y-2	X	白磁	皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
第1-307	1297	X-6	II	白磁	碗	透明地	外壁無内底無	—	5.4	—	C・D期	—	—	不明	—	—
	1298	Y-2	N	白磁	皿	灰白色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	太宰府衣類か?
	1299	Y-8	V II	白磁	皿	灰白色	透明地	腹部~高台付底無地	9.6	4.4	2.8	F期か?	—	—	見込みに柳枝の輪削ぎ	
	1300	Y-3	II	白磁	甕	灰白色	透明地	腹部~高台付底無地	9.6	5.0	2.4	—	—	—	見込みに青状の輪削ぎ	
	1301	Y-2	III	青磁	桶状瓶	灰白色	透明地	底付全底無	10.8	—	—	—	—	—	—	—
	1302	W-7	X	青磁	碗	灰色	青磁地	底付全底無	13.0	—	—	D期	太宰府I~4a' 銘か?	二又片刃口によつて内部内底を5分割する (分のめぐら) 銘な []		
	1303	V-9	X	青磁	甕	灰色	青磁地	底付全底無	15.0	—	—	G期以降	上田口-1号	上田口-1号 へラスカによる輪削ぎ		
第1-307	1304	X-9	X I	青磁	升	灰白色	青磁地	高台付底無地	10.8	6.0	3.6	C期	太宰府衣類	清伴文		
	1305	Y-2	V	白磁	鉢	灰灰色	透明地	底付全底無	7.9	3.0	3.1	C期か?	白磁Ⅲ型か?	白磁Ⅲ型か?		

白磁青磁(包含層出土)

件目	出範 番号	出土区	層次	種別	器種	部位	色調	重量(cm)	口径	底径	石英	長石	鈍刃石	外側	内側	備考
	1297	X-6	II	白磁	碗	透明地	外壁無内底無	—	5.4	—	C・D期	—	—	不明	—	—
	1298	Y-2	N	白磁	皿	灰白色	—	—	—	—	—	—	—	—	—	太宰府衣類か?
	1299	Y-8	V II	白磁	皿	灰白色	透明地	腹部~高台付底無地	9.6	4.4	2.8	F期か?	—	—	見込みに柳枝の輪削ぎ	
	1300	Y-3	II	白磁	甕	灰白色	透明地	腹部~高台付底無地	9.6	5.0	2.4	—	—	—	見込みに青状の輪削ぎ	
	1301	Y-2	III	青磁	桶状瓶	灰白色	透明地	底付全底無	10.8	—	—	—	—	—	—	—
	1302	W-7	X	青磁	碗	灰色	青磁地	底付全底無	13.0	—	—	D期	太宰府I~4a' 銘か?	二又片刃口によつて内部内底を5分割する (分のめぐら) 銘な []		
	1303	V-9	X	青磁	甕	灰色	青磁地	底付全底無	15.0	—	—	G期以降	上田口-1号	上田口-1号 へラスカによる輪削ぎ		
第1-307	1304	X-9	X I	青磁	升	灰白色	青磁地	高台付底無地	10.8	6.0	3.6	C期	太宰府衣類	清伴文	白磁Ⅲ型か?	
	1305	Y-2	V	白磁	鉢	灰灰色	透明地	底付全底無	7.9	3.0	3.1	C期か?	白磁Ⅲ型か?	白磁Ⅲ型か?	白磁Ⅲ型か?	

表41 中・近世出土遺物観察表（21）
荷花（包含層出土）

種目 番号	相軸 番号	出土区	層位	様別	格種	施土の色調	施土の色調	施土	法量(cm)	口径	底径	高さ	分類	備考
新130602 W-1	1307	U-1	II	荷花	正	灰白色	透明地	施付は施物剥離	-	12.4	-	15世紀末～ 16世紀中頃	小野F群	

瓦質土器（包含層出土）

種目 番号	相軸 番号	出土区	層位	様別	格種	施土の色調	施土の色調	施土	法量(cm)	口径	底径	高さ	分類	備考
新140402 W-7	1333	W-7	X	土器質土器	泡透	淡黄色	透明地	施付は施物剥離	16.5	14.2	4.7	外腹にスカリ	青	

陶磁器（包含層出土）

種目 番号	相軸 番号	出土区	層位	様別	格種	施土の色調	施土の色調	施土	法量(cm)	口径	底径	高さ	備考	
													外腹施物	外腹施物
新1306 Y-3	1306	Y-3	III	陶器	鉢?	灰色	透明地	外腹施物	23.2	-	-	不明	-	-
1307 Y-3	1307	Y-3	II	陶器	鉢	に少し黒色	透明地	保存部全周施物	10.0	-	-	D型	中腹南部	1306と同じ個体
1308 Y-2	1308	Y-2	III a	陶器	鉢	に少し黒色	透明地	保存部全周施物	-	8.2	-	D型	中腹南部	新物灰
1309 Y-3	1309	Y-3	II	陶器	碗	に少し黒色	透明地	内面施物	-	-	-	不明	中腹南部	新物灰
1310 V-8	1310	V-8	X	陶器	盞	透明地	透明地	保存部全周施物	17.2	-	-	E型か?	中腹南部	
1311 Z-2	1311	Z-2	V a	陶器	盞	に少し赤褐色	透明地	口部施物群?	15.0	-	-	E型か?	中腹南部	
1312 Y-2	1312	Y-2	N b	陶器	盞	透明地	透明地	保存部全周施物	-	-	-	不明	中腹南部	
1313 W-7	1313	W-7	X	陶器	盞	暗赤褐色	透明地	内面施物	-	-	-	E型か?	中腹南部	
1314 Y-2	1314	Y-2	III	陶器	盞	透明地	透明地	保存部全周施物?	-	-	-	E型か?	中腹南部	
1315 W-6	1315	W-6	X	陶器	盞	透明地	透明地	内面施物	-	-	-	E型か?	中腹南部	
1316 Y-8	1316	Y-8	X	陶器	盞	に少し黄褐色	透明地	保存部全周施物?	-	-	-	E型	中腹南部	
1320 W-7	1320	W-7	X	体付	碗	灰白色	透明地	口部4施物群?	10.4	4.0	6.2	16世紀中期	肥前系	
1320 W-7	1320	W-7	X	体付	碗	灰白色	透明地	保存部全周施物	10.2	-	-	16世紀中期	肥前系	
—	1330	—	—	陶器	碗	灰褐色	透明地	保存部全周施物	16.6	-	-	17世紀初期	須賀燒窯代川系	未判別
1331 Z-3	1331	Z-3	V a b	陶器	土瓶	透明地	透明地	口部施物群?	11.6	-	-	19世紀後半	須賀燒窯代川系	
1332 W-7	1332	W-7	X	陶器	盞	透明地	透明地	保存部全周施物	-	-	-	18世紀後半	須賀燒窯代川系	

表42 中・近世出土遺物観察表（22）
石鍋（包含層出土）

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	基種	施土の色調	口径	底径	高さ	備考
新1760	1324	X-1	N/a	石製品	滑石製品		—	—	—	石鹼の私製品か？
新1760	1325	Y-3	Ⅱ 番たばこ	石製品	滑石製品		—	—	—	石鹼の私製品
	1326	3T	Ⅲ	石製品	石鹼		—	—	—	

土縫（包含層出土）

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	基種	色調	底径	高さ	備考
新1802	1324	X-2	N	土糞玉	土糞玉	にごり赤褐色	0.9	3.2	赤色の糊料混入

瓦（包含層出土）

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	基種	色調	底径	高さ	外観	内面	測量	備考
新1309	1319	乾闥	Ⅳ~V	瓦	斜平瓦	灰青色	—	—	側面タキ模	有目網	厚さは側面のみ薄	神正文 11世紀代
新1300	1320	X-3	Ⅱ 番たばこ	瓦	斜平瓦	灰白色	—	—	側面タキ模	ナテ	厚さは側面のみ薄	神正文 11世紀代
新1301	1321	Y-2	N/b	瓦	丸瓦	(外)にごり黄色 (内)反白色	24.2	15.3	30	側面タキ模	有目網	
新1760	1322	Y-3	Ⅱ 番たばこ	瓦	丸瓦	黄灰色	—	—	側面タキ模	ナテ	厚さは側面のみ薄	神正文 11世紀代
新1323	1323	Y-3	Ⅱ 番たばこ	瓦	丸瓦	黑色	—	—	4.0	底押さえ	縫隙分か?	

土筋深窓器（表層）

件目 番号	規範 番号	出土区	層位	種別	基種	色調	口径	底径	施土	内面	測量	備考
新1414	1325		土器器	三	口縁~腹部	黑色	8.5	6.2	1.5	○	外表面ミガキ	ミガキ
新1420	1326		神出窓日焼	骨棒	口縁部	灰色	26.2	—	—	ナテ	ナテ	底部 未切引
	1327		窓万字 窓器器か?	壺	口縁部	灰色	—	—	—	施子目タキ	ナテ	

表43 中・近世出土遺物観察表（23）
白磁青磁（表層）

件目 番号	規格 番号	出土区	層位	種別	泥棒	施土の色調	施土の色調	法面 (cm)			特徴	分類	備考	
								口径	底径	高さ				
1337			白磁	盤	灰	灰白色	透明釉	保存部全周施釉	8.8	4.0	2.0	—	不明	
1338			白磁	盤	灰	灰白色	透明釉	高台盤・高台内底面施釉	10.5	4.5	2.7	C型	太宰府窑期-1 外腹面に保存付釉 見込みに焼成の施設が 中窯場か？	
1339			白磁	把手	灰	灰白色	透明釉	保存部全周施釉	—	—	—	C型?	—	
1340			白磁	蓋	灰	灰白色	透明釉	保存部全周施釉	—	—	—	C型	白磁蓋口 -258号?	
1341			青白磁	合子(蓋)	灰白色	透明釉	上蓋のみ施釉	10.0	—	1.5	—	—	—	
第41回 1342			青白磁	合子(身)	灰白色	透明釉	裏受け面と腹部・外底面施釉	8.0	8.0	4.2	—	—	—	
			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	裏受け面・内底面施釉	15.2	6.4	7.1	D型	太宰府-1-4a型 森田日焼	施釉面 12世紀中頃-後半 見込みに花文スター有り
1343			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	保存部全周施釉	12.0	5.2	6.1	G型山崎	—	—
1344			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	保存部全周施釉	—	—	—	G型山崎	—	—
1345			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	保存部全周施釉	—	—	—	G型山崎	—	—
1346			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	裏付け施釉部	—	7.5	—	G型山崎	—	—
1347			青白磁	桺	灰	青磁釉	青磁釉	高台盤・高台内底面施釉	—	6.2	—	G型山崎	—	—

銀 (表層)

件目 番号	規格 番号	出土区	層位	種別	泥棒	施土の色調	施土の色調	法面 (cm)			特徴	分類	備考
								口径	底径	高さ			
第41回 1371			密燒	密燒	密燒	天目緑	天目緑	13.5	0.2	—	—	—	—

瓦質無釉陶器 (表層)

件目 番号	規格 番号	出土区	層位	種別	泥棒	施土の色調	施土の色調	法面 (cm)			特徴	分類	備考	
								口径	底径	高さ				
第41回 1336			Y-2	土製品	地盤	褐色	褐色	8.2	2.2	1.3	13世紀-和室型 裏蓋全周-2スズ付釉	—	—	
第42回 1366			Y-2	土製品	地盤	(外) 黒色 (内) こいの青色	褐色と黒釉	層面以下無釉	10.4	3.8	5.9	14-15世紀 中日	—	—

陶器 (表層)

件目 番号	規格 番号	出土区	層位	種別	泥棒	施土の色調	施土の色調	法面 (cm)			特徴	分類	備考
								口径	底径	高さ			
第41回 1348			開拓	開拓	天目緑	天目緑	褐色	10.4	3.8	5.9	14-15世紀 中日	—	—

表44 中・近世出土遺物觀察表(24)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	表面	胎土の色調	胎土	施釉	法量(cm)			備考
									口径	底径	高さ	
1340	X-2		陶器	天目焼	淡青色	褐色と黒褐色	褐色以下無釉	—	—	—	—	古州か?
1350	X-2		陶器	不明	反白色	透明釉	外表面以下無釉	—	3.0	—	—	11世紀 中國
1351	X-3		陶器	粗	反青色	褐色	内面無釉	—	—	—	—	白磁軸生文 出土窯
1352	Z-3		粗胎陶器	粗	淡青色	材料に特殊	内面無釉	—	—	—	—	不明
1353	X-3		粗胎陶器	粗	淡青色	褐色	内面無釉	—	—	—	—	16世紀～17世紀 中國
1354	X-2		陶器	要	暗灰色	—	—	—	—	—	—	中世青瓷
1355			陶器	小壺	反白色	反釉か?	内面無釉	4.6	—	—	—	不明
1356	ab-2-3		糞付	極	反白色	透明釉	蓋は施釉か?	10.4	5.2	6.2	1世紀後半	肥前系 底東型
1359			白磁	極	反白色	透明釉	蓋は施釉か?	11.8	4.4	5.6	15世紀後半	肥前 見込みが目的な底東
1360			陶器	極	反白色	青磁釉	保存状況不明	22.2	—	—	1630-1640年	肥前 獅子の腹足
			陶器	極	淡青色	透明釉	底以下無釉	—	3.8	—	—	17世紀後半 青磁 黑斑 見込みに底板で「萬」
1362	ab-2-3		陶器	極	に赤い 黄褐色	褐色	蓋は施釉か?	31.3	12.0	9.0	17世紀後半	肥前や在地 三島の急須 見込みに谷口
1363			陶器	大皿	褐色	透明釉	蓋付一高台の圓盤形	12.4	5.2	7.5	17世紀後半	肥前 肥前野山
1364			陶器	皿	反白色	透明釉	蓋付施釉か?	—	5.4	—	—	17世紀後半 頭雲紋 頭代山田
1365			陶器	要	褐色	口周部施釉か?	—	—	—	—	—	口周部...貝目入り

五(表層)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	表面	色調	法量(cm)	法量(cm)			備考
								高さ	底径	厚さ	
1367	Z-3		瓦	平瓦	反青色	13.5	9.7	1.2	純目タコキ漆ナデ	有目漆	澤文は鶴山正雅 胎土に「漆羽母」に含む
1368			瓦か?	籽平瓦	反青色	—	—	4.0	ナデ	ナデ	—
1369			瓦か?	瓦か?	反色	—	—	—	—	—	—

石鍋(表層)

件目 番号	用繩 番号	出土区	層位	種別	表面	色調	法量(cm)	法量(cm)			備考
								底径	高さ	厚さ	
新1420	1370		石製品	石鍋	—	—	—	14.1	—	—	—

第7章 科学分析

第1節 概要

渡畠遺跡は南さつま市金峰町に所在し、西流する万之瀬川が北に大きく流路を蛇行させる付近の右岸自然堤防上に位置する。

本遺跡は、河川改修事業に伴う発掘調査により、縄文時代中・後期から古代・中世までの遺構・遺物が発見された複合遺跡である。

調査報告にあたって、次の科学分析を行った。

まず、渡畠遺跡における出土種子の年代と当時の環境・食料選択のあり方について検討するために、放射性炭素年代測定（AMS測定）を行った。

次に、植物利用状況を明らかにするために、出土した種実遺体の同定を実施し、炭化物の自然科学分析調査を行った。

さらに本遺跡では、製鉄関連遺構や遺物も確認されており、鉄滓、羽口等が多数出土した。そこで本遺跡での17~18世紀代の生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行った。

放射性炭素年代測定（AMS測定）および、出土炭化物の自然化学分析調査については、平成21年度に(株)加速器分析研究所へ依頼した。

出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査については、平成22年度に九州テクノリサーチ・TACセンターへ依頼した。

第2節 放射性炭素年代測定

1 測定対象試料

渡畠遺跡は、北緯31°25'44"、東経130°19'22"に所在し、万之瀬川に隣接する河川敷（自然堤防上）に立地する。測定対象試料は、炭化種子（I（28号土坑）：IAAA-91710）1点である。

2 測定の意義

種子の年代と当時の環境・食料選択のあり方について検討するための一資料とする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA: Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaと記載す

る。

その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MV タンデム 加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。
- (2) ¹⁴C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として測る年代である。この値は、δ¹⁴C によって補正された値である。¹⁴C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差（±1σ）は、試料の¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) δ¹⁴C は、試料炭素の¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²C を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差（1σ = 68.2%）あるいは2標準偏差（2σ = 95.4%）で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しな

い¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

炭化種子 1 (28号土坑) の¹⁴C 年代は、 970 ± 30 yrBP である。暦年較正年代 (1σ) は、11世紀から12世紀前半頃の範囲で示される。

炭素含有率は70%程度の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

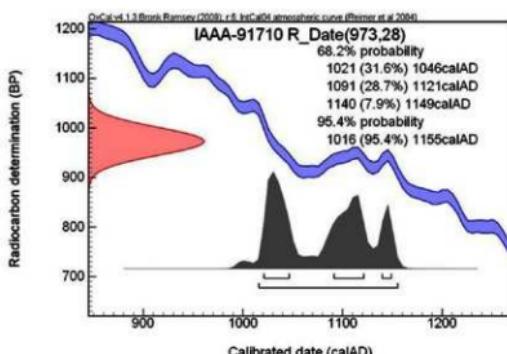
参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. *Radiocarbon* 19, 355–363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2), 425–430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43(2A), 355–363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43(2A), 381–389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029–1058

表45 放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91710	1 (28号土坑)	渡畠遺跡 土坑	炭化種子	AAA	-24.20 ± 0.42	970 ± 30	88.59 ± 0.32

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年年代範囲	2σ 暦年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91710	960 ± 30	88.73 ± 0.31	973 ± 28	1021AD–1046AD (31.6%) 1091AD–1121AD (28.7%) 1140AD–1149AD (7.9%)	1016AD–1155AD (95.4%)



第146図 暦年較正年代グラフ

第3節 炭化種実同定

1 試料

試料は、Y-2区の28号土坑より出土した種実遺体67個（計10.6g）である。

2 分析方法

試料を双眼立体顕微鏡（CarlZeiss 製 Stemi2000-c）下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山（2000）ほか等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定する。分析後は、種実を容器に入れて保管する。

3 結果

結果を表46に示す。木本2分類群（広葉樹のイチイガシ、コナラ属）の炭化した子葉64個（8.7g）が同定された他、最大径1cmの炭化材3個（0.1g）。木材組織が確認されない部位、種類共に不明の炭化物が微量（0.1g未満）確認された。以下に、種実の形態的特徴等を記す。

イチイガシ (*Quercus gilva* Blume) ブナ科コナラ属
アカガシ亜属

炭化した子葉の完形個体9個（3.0g）、2枚からなる子葉に沿って割れた破片（半分）20個（3.3g）、半分未満の破片29個（2.2g）が検出された。子葉は黒色を呈し、長さ1.1~1.5cm、径0.8~1.2cm程度の楕円~広卵形。2枚からなる子葉は極端に不揃いで、合わせ目は球体表面を蛇行して一周する。幼根は頂端から離れた位置にある。表面には、1本の深い溝が基部から頂部に向かい2/3程度まで発達している。子葉は硬く緻密で、表面は縱方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上には僅かに窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

岡本（1979）は、日本産ブナ科植物の子葉について、イチイガシには子葉の離れにくさ、著しい異形性、頂端が尖らず幼根の位置がずれている、中軸の圧痕が確認できるなどの特異性があることから、イチイガシのみが種まで同定できる場合があることを述べている。今回確認された58個は、これらの特徴を典型的に示していることから、イチイガシに同定される判断した。なお、半分未満の破片6個（0.2g）にはイチイガシの特徴が明瞭に確認されないため、コナラ属 (*Quercus*) にとどめているが、おそらくイチイガシに由来すると思われる。

4 考察

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壤をもつ内陸平坦地と後傾斜に楕円林として発達する種で、現在は紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少なく、アカ抜きせずに生食可能で収量も多いため、遺跡からの出土例も多いとされる（渡辺、1975；岡本、1979など）。

渡畑遺跡のY-2区28号土坑より出土したイチイガシを含むコナラ属の炭化子葉は、当時の本道跡周辺域の照葉樹林から採取され、遺構内に持ち込まれた植物質食糧の残渣であることや、何らかの理由により火熱を受け炭化残存したことが推定される。

万之瀬川下流域の遺跡群では、渡畑遺跡のやや上流に位置し、右岸の自然堤防上に立地する上水流遺跡の縄文時代晩期~古墳時代と近・現代の地層の花粉分析結果より、シイ類やアカガシ亜属を主体とした照葉樹林の成立が推定されている（鹿児島県立埋蔵文化財センター、2007、2008、2009）。また、縄文時代前期とされているV区VI層からは、食用可能なシイ属の炭化子葉がまとまって出土しており（鹿児島県立埋蔵文化財センター、2009）、イチイガシと共にシイ属の子葉も利用されていたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991. 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄, 1994. 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄 図鑑刊行委員会. 328p.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター, 2007. 上水流遺跡1 - 中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I -. 鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書113. 鹿児島県立埋蔵文化財センター. 354p.
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター, 2008. 上水流遺跡2 - 中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II -. 鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書121. 鹿児島県立埋蔵文化財センター. 292p.
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター, 2009. 上水流遺跡3 - 中小河川改修工事（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財

- 発掘調査報告書Ⅲ-1、鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書136、鹿児島県立埋蔵文化財センター、273p。
- 中山至大・井口希秀・南谷忠志、2000、日本植物種子図鑑、東北大学出版会、642p。
- 岡本素治、1979、遺跡から出土するイチイガシ、大阪市立自然史博物館業績、第230号、31-39。
- 島地謙・伊東隆夫、1982、図説木材組織、地球社、176p。
- 渡辺誠、1975、縄文時代の植物食、雄山閣出版、187p。
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)、海青社、122p。[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

(※) 本分析は、当社協力会社・バリノ・サーヴェイ株式会社にて実施した。

表46 渡畠遺跡の種実同定結果

分類群	部位	状態		Y-2区 28号土坑	備考
イチイガシ	子葉	完形	炭化	9個	3.0g
		破片(半分)	炭化	20個	3.3g
		破片(半分未満)	炭化	29個	2.2g
コナラ属	子葉	破片	炭化	6個	0.2g
不明炭化物		破片	炭化	-	<0.1g
炭化材		破片	炭化	3個	0.1g 最大径1cm
分析残渣(炭化物含む土粒など)				-	1.8g

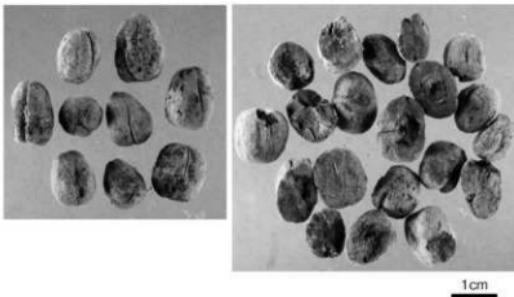


写真4 渡畠遺跡の種実遺体

第4節 出土製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物の金属学的調査

1 供試材

表47に示す。製鉄・鍛冶・鋳造関連遺物計10点の調査を行った。

2 調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらの記載をもとに分析試料採取位置を決定している。

(2) 顕微鏡組織

津中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で順を追って研磨している。また金属鉄の腐食には3%ナイトル（硝酸アルコール液）、酢酸・硝酸・アセトン混合液を用いた。

(3) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や、鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(4) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法: 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3 調査結果

(1) WAH-1: 爐壁 (緑青付着)

ア 肉眼観察

熱影響を受けて、内面表層が若干ガラス質化した、24g弱の小型炉壁片である。側面には不定形の緑青が複数溶着している。これらの粒は特殊金属探知機のH(○)で反応があり、少なくとも一部は金属が残存する。胎土部分は灰褐色で、小礫や粗粒を混和している。

イ 顕微鏡組織

写真5①～③に示す。①の淡橙色部は溶着金属、暗色部はガラス質化および被熱胎土部分である。②③は溶着金属部の拡大で、酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地部分は多角形結晶 ($\text{Cu} - \text{Sn} - \text{a相}$) である。また粒界には網目状の淡青色部（共析組織 $a + \delta$ 相）が確認される。これは錫 (Sn) の割合の高い相と推定される。さらに青灰色粒状の白鉛 (Cu_3S) および鉛化物 (PbO) も点在する。これら各相の組成についてはEPMA調査の項で詳述する。

ウ EPMA調査

写真5④に溶着金属部の反射電子像 (COMP) を示す。分析点8は素地の多角形結晶の中央部で定量分析値は94.4% Cu - 4.8% Sn。分析点9は多角形結晶の外周部で定量分析値は86.3% Cu - 11.6% Sn - 1.5% Asである。ともに青銅 ($\text{Cu} - \text{Sn} - \text{a相}$) で、後者は微量砒素 (As) を含む。さらに分析点10の淡青色（共析組織）部の定量分析値は66.8% Cu - 30.7% Sn - 2.2% Sbであった。青銅 ($a + \delta$ 相) で、アンチモン (Sb) が含まれる。

またPhoto.1⑤も溶着金属部の反射電子像 (COMP) である。分析点11の粒状暗色部の定量分析値は86.3% Cu - 9.8% Oで酸化銅である。粒界部分は自然腐食（鏽化）が進んでおり、この個所も廃棄後二次的に生じた可能性が高い。分析点12の微小明白部の定量分析値は99.0% Ag - 4.9% Cuと銀 (Ag) 主体の相であった。

さらにもう1視野、溶着金属部の調査を実施した。

写真6①に溶着金属部の反射電子像 (COMP) を示す。分析点13の素地部分の定量分析値は91.1% Cu - 7.8% Snであった。やはり青銅 ($\text{Cu} - \text{Sn}$ 合金) である。また分析点15の不定形青灰色部の定量分析値は77.3% Cu - 19.4% Sであった。白鉛 (Cu_3S) と同定される。さらに分析点17の微小明白部の定量分析値は70.2% Pb - 5.0% Cu - 9.5% S - 15.2% Oであった。鉛化物 (PbO) で銅 (Cu)、硫黄 (S) は周囲の影響を受けた可能性が高い。

当炉壁の溶着金属は鉛青銅 ($\text{Cu} - \text{Sn} - \text{Pb}$ 合金) である。また化学分析は実施していないが、上述したような錫 (Sn) 偏析がみられるため、錫 (Sn) 含有率はかなり高いと推定される。

(2) WAH-2: 爐壁 (緑青付着)

ア 肉眼観察

強い熱影響を受けて内面が黒色ガラス質化した、14g弱の小型炉壁片である。内面には1か所、表面が緑青に覆われた楕円状の金属粒が溶着している。特殊金属探知機のH(○)で反応があり、内部に金属が残存する可能性が高い。胎土部分は橙色で、粗粒を多量に混和している。

イ 顕微鏡組織

写真6②～④に示す。②の淡橙色部は溶着金属で、鉄造組織を呈する。③④は金属部の拡大で、酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した組織を示す。素地の淡橙色部は初晶（ α 相）、織状晶は共晶（ α 相）で、その内部に微細な淡青色部（ δ 相）が点在する。点状黒色部は鉛（Pb）の酸化物またはその脱落した痕跡、さらに粒界部に点在する粒状青灰色部は白鐵（Cu₃S）と推定される。

以上の調査結果から、当炉壁も前述した炉壁（WAH-1）と同様に、鉛青銅（Cu-Sn-Pb合金）の溶解に用いられたものと判断される。炉壁厚みは両者近似しており、疎投入の差があるものの同系であろうか。

(3) WAH-3：橢形鍛冶溝

ア 肉眼観察

平面不整五角形状で、336gとやや大型の橢形鍛冶溝の破片と推測される。上下面是本来の表面で側面は5面全面破面である。溝の色調は黒灰色で、上面の外周部には小型の木炭痕が複数残る。下面には全体に薄く灰褐色の鍛冶炉床土が固着する。破面には中小の気孔が散在するが、緻密で重量感のある溝である。

イ 顕微鏡組織

写真7①～③に示す。溝中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite: FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite: 2FeO·SiO₂）が晶出する。高温沸し鍛錬鍛冶溝の晶癖である。また②③の中央は微小金属鉄粒である。3%ナイトで腐食したところ、②は亜共析組織（C < 0.77%）、③はほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite: α 鉄）単相の組織が確認された。

ウ 化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）49.37%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.16%、酸化第1鉄（FeO）52.59%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）11.91%の割合であった。造锍成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は32.29%で、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は5.10%である。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.24%、バナジウム（V）が0.16%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は0.29%、銅（Cu）は<0.01%と低い。さらに五酸化磷（P₂O₅）は0.44%と高めであった。

当鉄溝は砂鉄起源の原石成分（TiO₂、V）の低減傾向が著しく、熱間で鉄器を鍛打加工した際に生じた高温沸し鍛錬鍛冶溝に分類される。また五酸化磷（P₂O₅）の高値傾向がみられるため、南九州地域に分布する五酸化磷（P₂O₅）含有率の高い砂鉄が始発原料であった可能性が高い。

(4) WAH-4：炉壁片

ア 肉眼観察

強い熱影響を受けて内面が黒色ガラス質渾化した、107g弱のやや小型の炉壁片である。側面は全面破面で、一部では黒色ガラス質層が2面確認されるため、内面を補修して繰り返し使用されたものと判断される。また内面表層には着磁を持つ付着物が部分的に確認される。胎土部分は灰褐色～橙色で、小穢やごく短いスサが多量に混和されている。

イ 顕微鏡組織

写真7④～⑥に示す。④中央下寄りの暗色部は被熱した炉壁胎土である。内部に点在する白色粒は、胎土中に含まれる砂鉄粒子である。またその上下はガラス質渾で、肉眼観察の項で述べた補修痕跡が確認される。⑤⑥は内面表層側のガラス質渾の拡大である。⑥の中央は非常に微細な金属粒で、橙色の色調から銅（Cu）または銅合金と推測される。また⑤の表層のごく微細な灰褐色の付着物はマグネットサイト（Magnetite: Fe₃O₄）と推定される。銅地金中の不純物の鉄（Fe）分が、加熱溶解に伴って酸化したものとの可能性が考えられる。ただしがら胎土中の砂鉄の影響も考慮する必要があろう。

以上の調査結果から、当炉壁は炉壁（WAH-1・2）と同様に青銅物の铸造に用いられた炉壁片と推測される。

(5) WAH-5：鍛冶溝

ア 肉眼観察

18.5gとごく小型で不定形の鉄溝である。溝の色調は黒灰色で、表面は流動状を呈する。また気孔はごく僅かで緻密であるが、やや軽い質感の溝である。外觀からは製錬溝（流動溝）または鍛冶溝双方の可能性が考えられる。

イ 顕微鏡組織

写真8①～③に示す。微細な茶褐色多角形結晶はウルボスピネル（Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂）とヘイシナイト（Hercynite: FeO·Al₂O₃）を主な構成とする固溶体と推測される。さらにごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイト。発達した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精鍛鍛冶溝で、最も一般的な鉱物組成といえる。

ウ 化学組成分析

表48に示す。全鉄分（Total Fe）43.59%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.15%、酸化第1鉄（FeO）52.74%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）3.50%の割合であった。ガラス質成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）40.61%と高値であるが、塩基性成分（CaO+MgO）は2.93%と低めであった。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は1.70%、バナジウム（V）が0.05%と若干

高めであった。さらに酸化マンガン (MnO) は 0.15% 、銅 (Cu) は $<0.01\%$ と低値である。五酸化燐 (P_2O_5) は 0.47% と高めであった。

当鉄滓には砂鉄起源の脈石成分 (TiO_2 , V) の影響が確認された。この特徴から鍛冶原料の不純物除去に伴う精鍛治作業末期の反応副生物と推定される。また五酸化燐 (P_2O_5) が高値傾向を示すことから、始発原料はやはり地域に分布する砂鉄であった可能性が高い。

(6) WAH-6：黒鉛化木炭

ア 肉眼観察

表面の大半が茶褐色の土砂で覆われた。18g弱と小型の木炭破片である。木炭に鉄が置換した遺物を黒鉛化木炭と称する。一部は木炭組織(板目面)が露出する。着磁性はやや強いが、特殊金属探知機での反応はなく、金屬部は残存しないと考えられる。

イ 顕微鏡組織

写真8④～⑥に示す。④の黒色部は木炭破片で木口面が観察される。⑤はその拡大である。導管が放射方向に並んでおり、広葉樹の放射孔材と判断される。

また表面側の青灰色部は錆化鉄で、⑥はその拡大である。黒色片状の黒鉛 (C: Graphite) が残存しており、ねずみ鉄である。

以上の断面観察結果から、木炭部分は広葉樹放射孔材で、表面にねずみ鉄が溶着することが明らかとなつた。

(7) WAH-7：流動津

ア 肉眼観察

いわゆる「鳥の足」状の流動津の破片で、重量は408gを測る。上面には上方から堆積した流動状の痕跡が顕著に残る。また下面側には着磁性の高い被熱砂鉄が広範囲に付着する。製鉄炉前に砂鉄が薄く降り積もった上に、排出された津が堆積した可能性が高い。緻密で重量感のある津である。

イ 顕微鏡組織

写真9①～③に示す。①は流動津の重層部分の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出しており、砂鉄製鍊津の晶癖である。なお②③では微細な白色粒状結晶ウスタイトも若干晶出している。また②③中央の微細な明白部は金属鉄で、3%ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

ウ 化学組成分析

表48に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.67%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.31%、酸化第1鉄 (FeO) 50.37%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 10.31%の割合であった。造津成分 ($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$) 20.47%で、このう

ち塩基性成分 ($CaO + MgO$) は5.55%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン (TiO_2) は16.39%、バナジウム (V) も0.23%と高値傾向が顕著である。酸化マンガン (MnO) も0.79%と高めで、銅 (Cu) は $<0.01\%$ と低値であった。また五酸化燐 (P_2O_5) は0.76%と高値傾向を示す。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分 (TiO_2 , V) の高値傾向が顕著であり、製鍊津に分類される。また五酸化燐 (P_2O_5) も高めであり、やはり南九州地域に分布する砂鉄が製鉄原料であった。

(8) WAH-8：楔形鍛冶津

ア 肉眼観察

362g弱と大型で完形の楔形鍛冶津である。上面端部に1か所黒色ガラス質部分があり、羽口先端溶融物と推測される。また上面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物が固着しているが、着磁性は弱く特殊金属探知機での反応もない。下面は細かい木炭痕による凹凸が著しく、やや軽い質感の津である。

イ 顕微鏡組織

写真9④～⑥に示す。津中には淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また津中の青灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有量等を推定する手がかりは得られなかった。

当鉄滓はファヤライト ($Fayalite: 2FeO \cdot SiO_2$) 組成で、ウルボスピネル ($Ulvöspinel: 2FeO \cdot TiO_2$) など砂鉄(含チタン鉄鉱)に起因する鉄チタン酸化物が全く確認されないことから、熱間で鉄器を鍛打加工した際に生じた鍛鍊鍛冶津に分類される。またファヤライトの単晶品出鉱物相は、加熱時の目減り防止に粘土汁などを散布した鍛冶原料鉄の半製品(棒・板状)を、低温で素延べした時に排出された可能性が高い。

(9) WAH-9：楔形鍛冶津

ア 肉眼観察

厚手ではほぼ完形の470gを測る二段楔形鍛冶津である。表面は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物に覆われる。特殊金属探知機での反応はないが、上端側面により一部着磁性の高い個所があり、内部に錆化鉄を含む可能性がある。また津部は上下段とも、細かい木炭痕による凹凸が著しい。

イ 顕微鏡組織

写真10①～③に示す。①上面端部の錆化鉄部を中心に観察したが、内部にまとまった鉄部はみられなかつた。ただし津中に散在する微細な錆化鉄部には、一部亜共析組織の痕跡が残存する。②はその拡大である。また③は津部の拡大で、発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらにウスタイト

粒内のごく微細な茶褐色結晶はウルボスピニルとヘイサイトを主な端成分とする固溶体と推定される。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶津の品癖といえる。

ウ 化学組成分析

表48に示す。全鉄分 (Total Fe) 58.28%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.18%、酸化第1鉄 (FeO) 55.97%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 20.87%の割合であった。造済成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は15.59%と低めで、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は2.05%であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は4.22%、バナジウム (V) は0.10%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.18%、銅 (Cu) <0.01%と低値であった。さらに五酸化燐 (P₂O₅) は0.51%と高めである。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂, V) の影響が確認された。鍛冶原料の不純物除去に伴う精錬鍛冶作業での反応副生物である。また五酸化燐 (P₂O₅) が高値傾向を示すことから、始発原料はやはり地域に分布する砂鉄であった可能性が高い。

(10) WAH-10: 炉壁

ア 肉眼観察

16mmとごく薄手で、36gの小型炉壁片である。内面は熱影響を受けて薄くガラス質化している。またその表層は、風化の影響か全体に白みが付いており、気孔が密に分布する。さらに茶褐色の鉄に覆われた、微細な溶着金属粒が多数確認される。これらは比較的着磁性が強く、特殊金属探知機のH(○)の反応から、内部に金属が残存する可能性がある。胎土部分は砂質で、炉壁 (WAH-1・2・4) とはかなり質感が異なる。

イ 顕微鏡組織

写真10④～⑥に示す。明灰色粒は金属鉄またはその錆化物、周囲の暗色部は炉壁胎土が溶融して生じたガラス質澤である。⑤⑥は金属鉄 (錆化鉄) の拡大で、3%ナノタルで腐食した組織を示す。全面に片状黒鉄が分布する、ねずみ鉄であった。また⑥中央の黒色点状の共晶組織はステタイト (Steadite: Fe - Fe₃C - Fe₃P) で、燐 (P) の偏析がみられる。

当炉壁の溶着金属は炉壁 (WAH-1・2・4) とは異なり、ねずみ鉄であった。

4まとめ

渡畠遺跡は17～18世紀代の製鉄・鍛冶及び鋳造関連の生産遺跡であった。以下に明らかとなった内容を記述する。

(1) 製鉄・鍛冶関連遺物

ア 分析1

分析調査を実施した鉄滓のうち1点 (WAH-7) は、高チタン (TiO₂) 砂鉄を原料とした精錬滓に分類され

る。また燐 (P₂O₅) の高値傾向も確認されており、南九州地域に分布する火山噴出物の斑晶鉱物起源の砂鉄の特徴を反映している。

また精錬滓としては鉄分 (Total Fe) が高めである。Fig.1に示すように、これは鹿児島県下の出土精錬滓に広く共通する特徴であり、高燐砂鉄を製鉄原料としていることと関連があると推察される (注1)。

イ 分析2

分析調査を実施した鉄滓のうち2点は精錬鍛冶津 (WAH-5・9)、残る2点は鍛鍊鍛冶津 (WAH-3・8) に分類される。さらに鍛鍊鍛冶津は鉱物相の違いから、高温沸し鍛接津 (WAH-3)、低温素延べ津 (WAH-8) の二工程の流れが想定できた。遺跡内で鍛冶原料 (製錬鉄塊系遺物) の不純物除去から、熱間での鍛打作業までの連続操業を示す遺物といえる。これら鍛冶津も五酸化燐 (P₂O₅) の高値傾向がみられるため、やはり地域の砂鉄を始発原料とする鉄材を加工したと考えられる。

(2) 鋳造関連遺物

ア 分析1

炉壁 (WAH-1・2・4) は青銅鑄物の溶解に用いられた炉壁の破片と推定される。

炉壁 (WAH-1) の溶着金属は錫 (Sn) 含有率の高い鉛青銅であった。また国産と推定される銅 (青銅) 製品でしばしば高値傾向を示す砒素 (As)、鉄 (Fe) の影響はきわめて少ない。高品位の鉛青銅といえる。ただし炉壁 (WAH-4) には、銅地金中の不純物の鉄の存在を示唆する酸化物がみられる。

イ 分析2

炉壁 (WAH-10)、黒鉛化木炭 (WAH-6) 表層の両方にねずみ鉄組織が観察された。このことから、当遺跡で青銅鑄物とともに鉄鑄物も製作されていた可能性もあるが、①当遺跡では上述したような青銅関連遺物が集中する個所から、これらの炉壁や黒鉛化木炭も出土している。②鉄鑄物の鑄造を直接証明するような遺物も出土していない。③薩摩半島側には酸化銅鉱の鉱床が存在する等から、粗銅の精錬時に金属銅と鉄が混在した関連遺物が生じた可能性も考えられる (注2・3)。

(注1) Fig.1の鹿児島県下の出土製鉄関連遺物の分析データは、以下の文献より引用した。

①中山光夫・上田耕「小坂ノ上遺跡出土の古代の藏骨器と埋納鉄滓について」『ミュージアム知覧紀要第1号』1995

②大澤正己・鈴木瑞穂「宝満製鉄遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『宝満製鉄遺跡』鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会 2004

③大澤正己「上加世田遺跡出土製鉄一貫体制造物と鉄

- 銅遺物の金属学的調査』『上加世田遺跡1』加世田市教育委員会 1985
- ④大澤正己・鈴木瑞穂「一つ木遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『一つ木地区(A・B)遺跡』鹿児島県宮之城町教育委員会 2001
- ⑤大澤正己・鈴木瑞穂「古原遺跡出土鉄滓・青銅製品の金属学的調査』『古原遺跡』さつま川内市教育委員会 2005年度分析調査実施
- ⑥大澤正己・鈴木瑞穂「厚地松山遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査』『厚地松山製鉄遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会 2007
- ⑦大澤正己・鈴木瑞穂「中原鉄生産関連(前烟西)遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査』『中原鉄生産関連遺跡(前烟西)遺跡』鹿児島県知覧町教育委員会2007
- ⑧大澤正己・鈴木瑞穂「上水流遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査』『上水流遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010
- ⑨鈴木瑞穂「南九州地域の中世～近世の製鉄技術について』『鉄の歴史 -その技術と文化-フォーラム第12回公開研究発表会論文集』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会「鉄の歴史 -その技術と文化-」 フォーラム 2009
- (注2)銅鋳造に際しての鉄の存在は、以下の報告等で述べている。
- ①大澤正己「古代銅製錬復元実験から確認できた銅・鉄共存の様相～長登遺跡出土8世紀前半含金属スラグとの比較検討～』『古代銅製錬復元実験報告書』 美東町教育委員会 2008
- ②大道和人・大澤正己「滋賀県甲賀市鍛冶屋敷遺跡の調査～“鉄”をめぐる解釈について～』『鋳造遺跡研究資料2005』鋳造遺跡研究会 2005
- ③大澤正己・鈴木瑞穂「鍛冶屋敷遺跡出土遺物の金属学的調査』『鍛冶屋敷遺跡』滋賀県教育委員会 2006
- (注3)上床真・大澤正己「第7章9節 上水流遺跡はかの金属生産遺物について』『上水流遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第150鹿児島県埋蔵文化財センター 2010
2008.8.25・26両日に上床氏と大澤で渡畑遺跡から出土した銅鋳造関連遺物を分類したところ。銅鋳造は1～8、U～Z区に特定できた。今回分析調査の丸壁や黒鉛化木炭はこの範囲に収まる。当区画内では鉄鋳造に関する遺物は認められなかった。因に銅鋳造遺物は以下に示す7種である。
- 1 線青吹き丸壁片。
 - 2 白色ガラス付着丸壁。
 - 3 大口径羽口。
 - 4 粘土(丸壁、羽口先端)溶融ガラス質滓。
 - 5 湯こぼれ屑銅。
 - 6 黒鉛化木炭(木炭に鉄が置換)。
 - 7 土器片転用ドロス抜き出し具(ドロス:銅溶融面上を漂う軽質スラグ)。

九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

表47 供試材の履歴と調査項目

符号	通称名	出土位置	遺物名	遺定年代	計測値	圓筒形			参考						
						大きさ (mm)	重量 (g)	マチ幅	マチ口	周長	断面形状	X線回折	EPMA	仕斧分析	耐火度
Wah-1		U-1:25番-1号	印形 (縫合付)		42×31×18	2.6	H (○)	○							
Wah-2		U-2:25番-1号	印形 (縫合付)		36×20×21	1.8	H (○)	○							
Wah-3		V-2-柱	輪縫合筒		60×63×42	335.7	△-L	○							○
Wah-4		V-2:輪縫合	印形 (縫合)		70×60×24	10.6	△-L	○							
Wah-5		X-8-柱	輪縫合筒	17~18c	45×22×19	1.6	△-L	○							
Wah-6		Y3-1:輪縫合	輪縫合筒		56×36×15	1.7	△-L	○							
Wah-7		Y7大輪縫合	輪縫合筒		10×74×42	407.5	△-L	○							
Wah-8		-	輪縫合筒		108×113×50	361.5	△-L	○							
Wah-9		Y-2-19番-1号	輪縫合筒 (二重)		90×78×68	469.8	△-L	○							
Wah-10		Y-2-19番-1号	輪縫合筒 (内白色)		90×78×68	36.6	H (○)	○							

卷48 供給物の化學組成

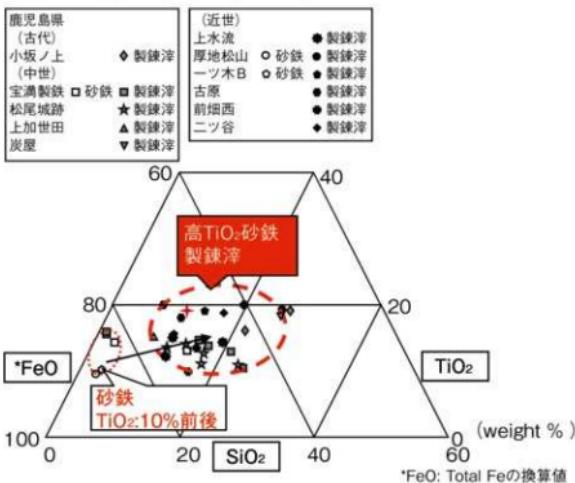
符号	通称名	出土位置	測定年	全鉄量	鐵素体率	鐵素体化度	二相化度	相組成アル	相組成カル	相組成マグ	相組成ヒー	相組成ト	相組成ナ	相組成シ	相組成ウム	相組成コ	相組成ム	TiO ₂	Total Fe	注			
				(Mass %)	(Mass %)	(Mass %)	(Mass %)	(wt%)															
WAH-3	V-I種	船形前室南	49.37	0.2	52.59	11.91	16.83	4.90	2.0	2.65	0.61	0.29	0.24	0.02	0.11	0.44	0.03	<0.01	32.29	0.64			
WAH-5	X-B種	船形南	43.59	0.15	52.74	3.50	26.14	6.50	2.04	0.69	1.92	0.72	0.15	1.70	0.33	0.02	0.47	0.03	<0.01	40.61	0.52		
WAH-7	Y-T種(東)	船形前室北	46.67	0.31	50.37	10.31	10.34	3.44	3.07	2.48	0.86	0.26	0.79	16.29	0.33	0.06	0.76	0.01	0.23	<0.01	0.08	20.47	0.39
WAH-9	Y-T種(西)	船形前室北	56.26	0.18	55.97	20.87	10.59	2.62	1.10	0.95	0.20	0.13	0.18	4.22	0.02	0.04	0.51	0.05	0.10	<0.01	0.01	15.59	0.68

第40回 出小瀬物の門本姓の主ヒメ

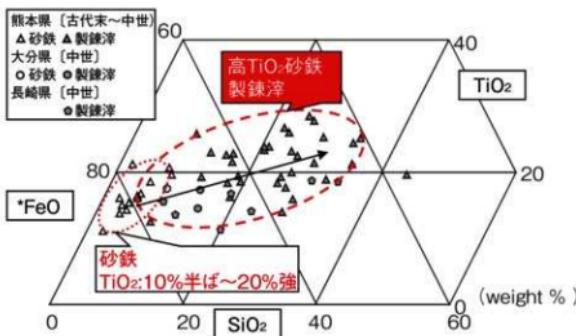
件名	通説名	出土位置	遺物名	西宮時代	化学組成(%)						
					Total Fe	Fe- Ox 成分	導電性 TOC	V MnO 成分	導電 Cu		
WAH-1	U1・2墓室一括	小室 (漆器付)	漆器 (漆器付)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	—	—	—	—	—	—	船入り 背面漆器鉢底に「いられた」と墨書き片
WAH-2	U2墓室一括	印塗 (漆器付)	漆器 (漆器付)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	—	—	—	—	—	—	船入り 背面漆器鉢底に「いられた」と墨書き片
WAH-3	V-2一括	漆桶 (漆桶)	漆桶 (漆桶)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	40.37	11.91	5.10	0.24	0.16	0.29	32.29 <0.1
WAH-4	V-2墓室一括	印塗 (漆桶)	漆桶 (漆桶)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	—	—	—	—	—	—	高面積表面に用いられたが鉛溶融の可能性が高い
WAH-5	X-8一括	漆油壺	漆油壺	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	43.59	3.90	1.70	0.75	0.15	40.61	<0.1
WAH-6	漆桶	黑漆油壺本體	漆化粧漆油壺本體	漆油壺 (漆油壺)、漆化粧漆油壺本體	—	—	—	—	—	—	漆油壺本體との共存関係から、漆油壺本體に伴 する漆油壺本體の漆油壺本體である。
WAH-7	Y7大墓[199]	漆油壺 (漆油壺)	漆油壺 (漆油壺)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	46.67	10.31	5.55	16.39	0.23	20.47	<0.1
WAH-8	—	漆桶 (漆桶)	漆桶 (漆桶)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	—	—	—	—	—	—	漆桶 (漆桶) へ漆油壺 (漆油壺) 分布する火山壺出 現する漆油壺 (漆油壺) へ漆油壺 (漆油壺) 分布する火山壺出
WAH-9	—	漆桶 (漆桶) (二段)	漆桶 (漆桶) (二段)	化粧漆 漆桶 (漆桶)	—	—	—	—	—	—	漆桶 (漆桶) へ漆油壺 (漆油壺) 分布する火山壺出
WAH-10	Y-2・18一括	印塗 (漆器付)	漆器 (漆器付)	滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~ 滑面金屬 鎌背鋼 (白銅色)、ガラス質等~	—	—	—	—	—	—	漆桶 (漆桶) へ漆油壺 (漆油壺) 分布する火山壺出

H: Hercynite ($\text{FeO-Al}_2\text{O}_5$), M: Magnetite (2FeO-TiO_2), W: Whüttite (FeO), F: Fayalite (2FeO-SiO_2), U: Uvövikite (2FeO-TiO_2).

† 鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓 (WAH-7)



第147図 鹿児島県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓の化学組成



第148図 中九州地域の製鉄遺跡（竪形炉）出土砂鉄・製錬滓の化学組成

WAH-1 炉壁

①淡橙色部:溶着金属、酢酸・硝酸・アセトニートでetch
暗色部:ガラス質津～被熱
炉壁胎土
②③溶着金属部拡大、
鉛青銅(Cu-Sn-Pb合金)
粒界部分:白鍍(Cu₃S)点在

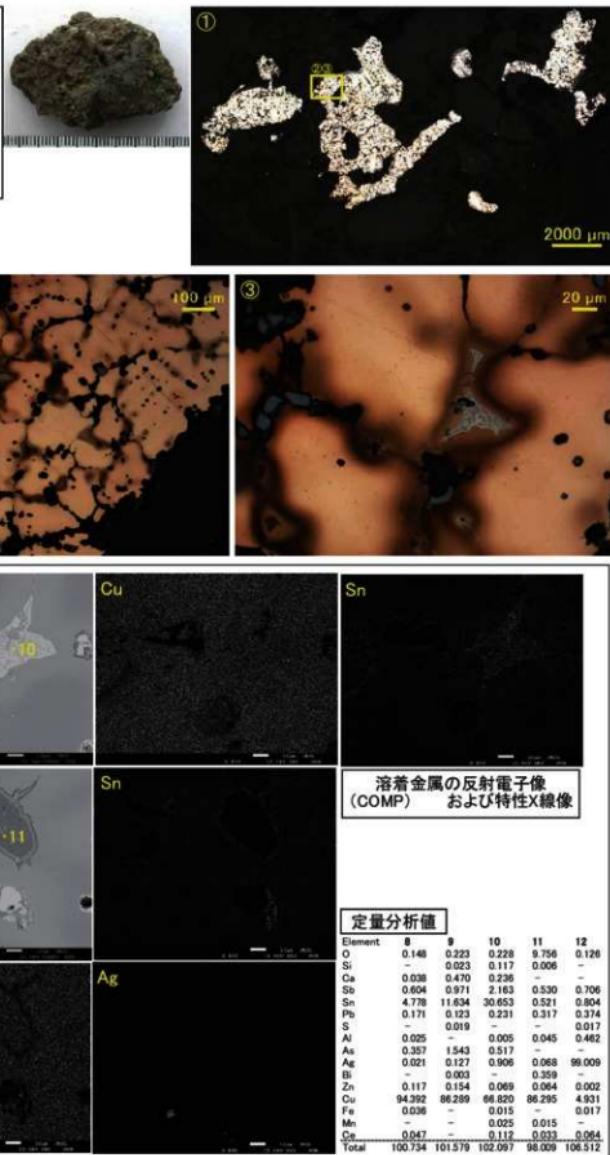
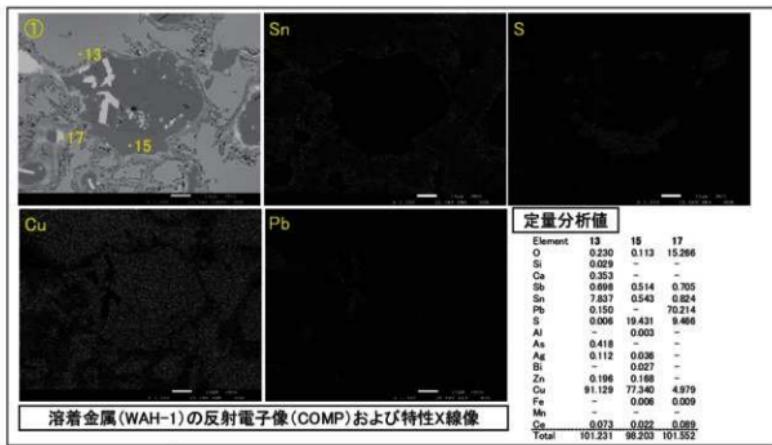


写真5 炉壁の顕微鏡組織・EPMA調査結果（1）



WAH-2 炉壁

- ② 橙色部:溶着金属、鋸造組織、酢酸-硝酸-アセト酸etch、暗色部:ガラス質滓
- ③④ 溶着金属拡大、鉛青銅(Cu-Sn-Pb合金)が、粒界部分:白鍍(Cu₂S)点在

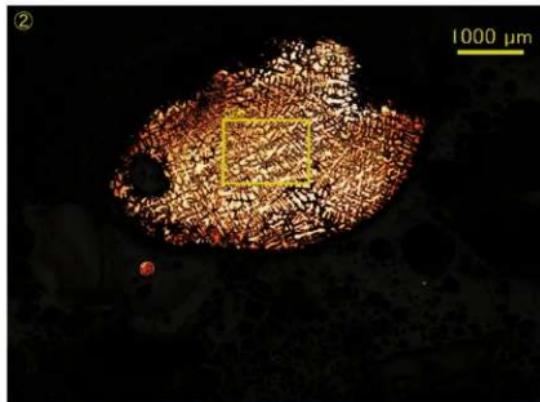


写真6 炉壁の顕微鏡組織・EPMA調査結果(2)

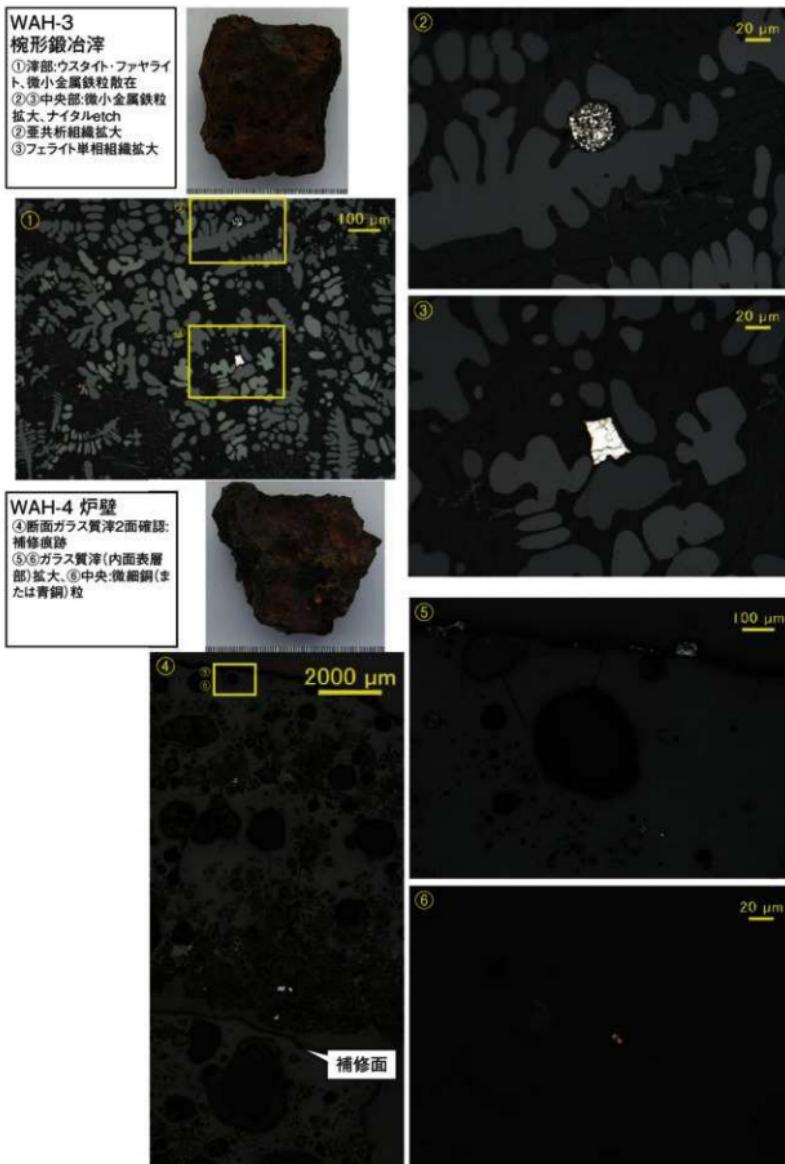


写真7 梶形鋳冶滓・炉壁の顕微鏡組織

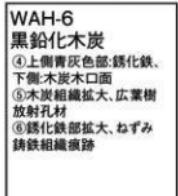
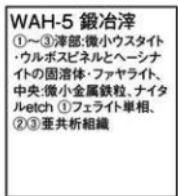


写真 8 鍛冶滓・黒鉛化木炭の顕微鏡組織

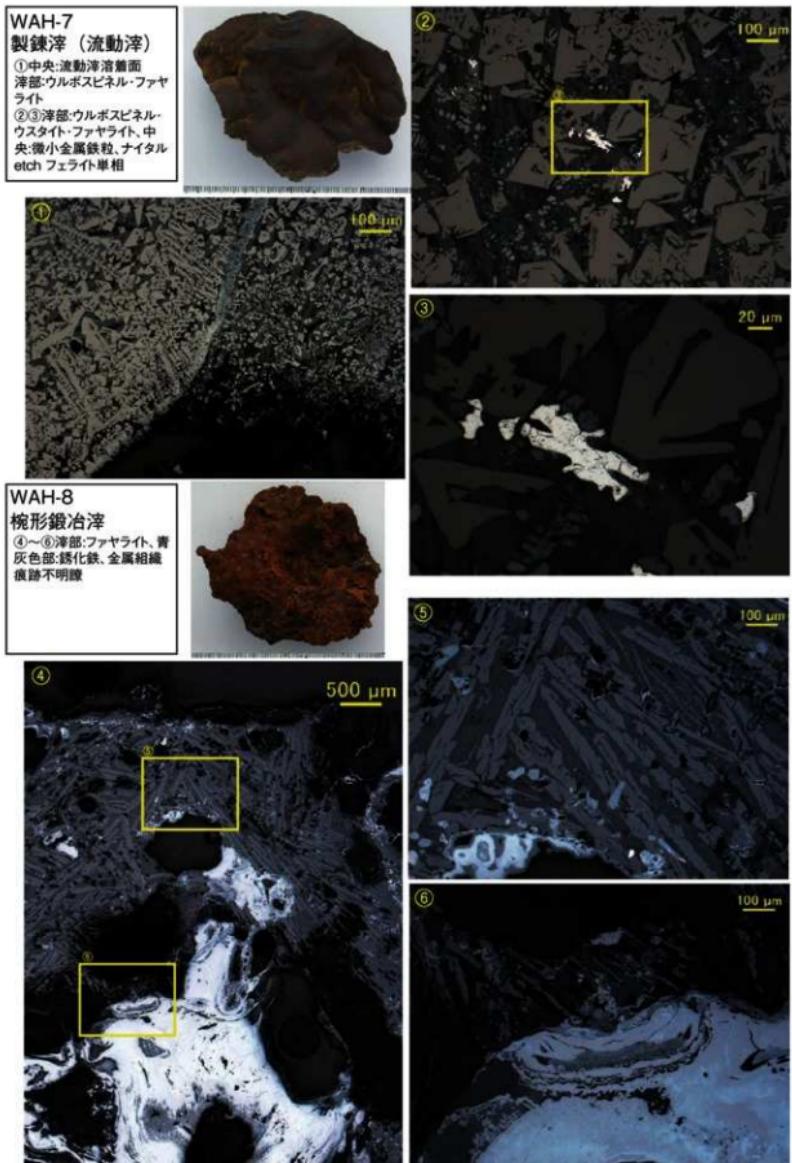
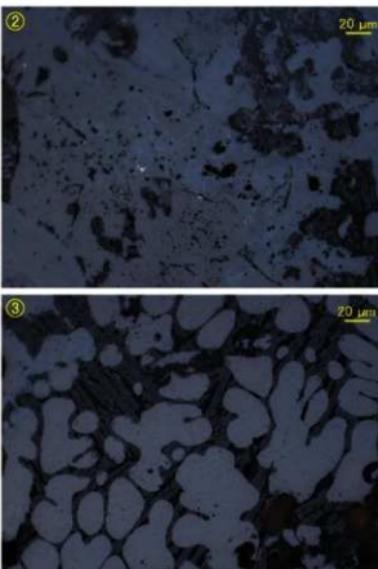
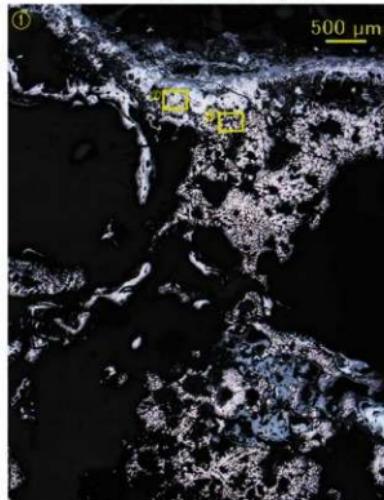


写真9 製鍊滓（流動滓）・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

WAH-9 楝形鋳冶滓
 ①～③滓部:ウスタイト(粒内
 微小ウルボスピネルとヘーシ
 ナイトの固溶体)・ファヤライ
 ト・錆化鉄部:一部亜共析組
 織痕跡残存、②錆化鉄部拡
 大、③滓部拡大



WAH-10 炉壁
 ④明色部:金属鉄(錆化鉄)
 粒、ナイタルetch ねずみ鉋
 鉄、暗色部:ガラス質滓
 ⑤⑥金属鉄(錆化鉄粒拡
 大)、ステタイト
 $(Fe-Fe_3C-Fe_3P)$ 晶出

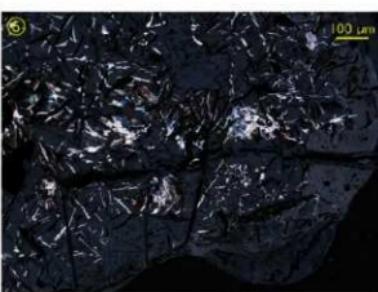


写真10 楝形鋳冶滓・炉壁の顯微鏡組織

第8章 総括

渡畠遺跡B地点の調査の結果、II～IV層では中世～近世、Vb・VI層では古代、VII～X層では弥生・古墳時代、X～XII層では縄文時代中期から晩期の遺構を検出した。また、該期に伴う遺物も大量に出土した。このことから、本遺跡は縄文時代中期から近世まで続く複合遺跡であることが明らかになった。

本章では、各時代の概要についてまとめていくことにする。なお、縄文時代の概要については、「渡畠遺跡I」の報告書に示されているので割愛する。

第1節 弥生・古墳時代の概要

本遺跡では、弥生時代と古墳時代の区分について、明確な層位がなく、出土遺物による判断に頼らざるを得ない。したがって、遺構については遺構内出土遺物や埋土状況から判断して、古墳時代の遺構と判断することにした。

1 遺構

遺構は、古墳時代の堅穴式住居跡が7軒、大型土坑3基、土坑7基、ピット12基を検出した。土坑およびピットについては、まだ多数の検出が見られたが、検出面の層位、周辺の遺物や埋土状況などから該期の遺構と判断したものだけを取り上げることにした。

堅穴式住居跡は、V～Y-5～8区に集中して検出された。古代以降では、この区域から住居跡は検出していないことから、河川の氾濫などにより該期の地形が変動した可能性が高い。

2 遺物

(1) 弥生時代

弥生時代の土器は、口縁部の形状によって分類した。最も古の土器は、前期にあたる夜白II式土器・板付I式土器に併行する刻目突帯文形式土器（I類）である。

中期の土器は、入来II式（II類）、黒髪式（IV類）の2系統に分かれる。弥生時代の土器に関しては、いずれも完形品の出土ではなく、小片のみで出土量も少ない。

後期の土器は、薩摩半島に多く見られる形式変化と同様に、本遺跡でも松木巣式土器（VI類）から中津野式土器（VII類）へ推移していると考えられる。

また該期の遺物として、石器や軽石製品が出土した。軽石製品は、製作段階のものや欠損品を含めると300点以上出土した。605・606のように形状を整えて穿孔を施すものは、祭祀的な役割を担っていたと考えられる。その他のものについては、供器具の可能性もあるが用途は不明である。

(2) 古墳時代

古墳時代の成川式土器については、完形品を含めて最も多く出土している。遺物の量から考えると、本遺跡に

おける集落の最盛期を迎えた時期である可能性が高い。

これらについては、形式から罐類を東原式土器、瓦類の笠貫式土器とした。成川式土器の形状は地域性の強いものであることから、隣接する持林松遺跡や芝原遺跡、あるいは上水流遺跡から出土したものと類似している。

なお、VII類の中津野式土器は、弥生時代終末に位置づけているが、一部は古墳時代に入る可能性もある。

詳しい時期は分からないが、「つつぬけタイプ」（杉井1999）と呼ばれる瓶形土器（391）が1点出土した。A地点からも同様のものが1点出土している。深鉢形を呈するものであり、恐らく他にも出土していると考えられるが、接合の結果、残念ながら蒸氣孔が確認されているのは1点のみである。

他には蓋類が出土した。スヌの付着部から判断して蓋類としたが、568のように鉢形土器の形状を呈するものについては、転用品であると考えられる。

参考文献

- 金峰町教育委員会1998『持林松遺跡（第1次調査）』
金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
鹿児島県立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書（120）2007『持林松遺跡』
発掘調査報告書（136）2009『上水流遺跡3』
発掘調査報告書（151）2010『渡畠遺跡1』

第2節 古代の概要

本遺跡の北側に隣接する持林松遺跡では、古代における柱立柱建物跡の検出が多く、人口の増加とともに集落の繁盛期を迎えたとしている。しかし、本遺跡は古代における遺構は少なく、古墳時代から著しく人口が増加したとは考えにくい。ただ、持林松遺跡と同時期と考えられるヘラ書き土器・墨書き土器の出土、また、その書かれた文字の類似性から、同遺跡と深い関連があったことは窺える。

1 遺構

該期の遺構は、堅穴式住居跡が3軒、溝状遺構が2基、大型土坑が1基、土坑が16基、ピットが11基検出した。

古墳時代の遺構同様に、土坑およびピットについては、該期の遺構と判断したものを取り上げた。

1号溝状遺構からは、多量の遺物が出土した。該期のものと判断できる遺物は、土師器壺・壇の小片が197点であったが、いずれも摩耗が激しかったため、掲載しなかった。また、中・近世のものと思われる青白磁の小片も多量に出土したが、これらは包含層遺物として取り上げた。本遺跡には、このように遺構と遺構内出土遺物の異なる例が多数見られる。これらは、河川の氾濫により

流出したものと考えられる。

2 遺物

遺物は、土師器、須恵器ともに多量に出土した。中でも、該期の特記すべき出土遺物として、ヘラ書き土器や墨書き土器などがある。

(1) 土師器

土師器は、供膳具である平底皿・高台付皿・壺・塊・蓋類と、煮焚具では土師壺が出土した。壺・塊の小片が多く、全体形状の把握できるものは少ない。平底皿は、9世紀頃と考えられる器高が低く底面が広いものが出土した。また、9世紀末～10世紀前半と考えられる内面を黒く丁寧にミガキ仕上げを施した黒色土器も出土した。高台付皿については、摩耗が激しいために、剥がれいるものも多いが、おそらくは朱塗りを施していたと考えられる。壺については、A地点と同様に9世紀頃と思われる高台の短いものが出土している。蓋類は、つまみ部である2点(735・736)のみを掲載したが、全般的な出土量を考えると、まだ増えると思われる。残念ながら、今回は接合による復元から形状を把握できたものはなかった。土製品は、土鍤・土玉・紡錘車が出土した。

供膳具や煮炊具、漁具としての土鍤、衣を作るための紡錘車は、生活のために欠かせない一式の遺物である。これらにより、立地的環境を利用した本遺跡の当時の生活様式が窺える。

(2) 刻書土器・ヘラ書き土器・墨書き土器

刻書土器・ヘラ書き土器・墨書き土器に書かれてある文字・記号については、永山修一氏の御教示を得た。

出土数は、刻書土器が1点、ヘラ書き土器が32点、墨書き土器が8点である(表50)。

記載部位については、体部外表面が5点、体部内面が3点、底部外表面が14点、底部内面が19点であり、底部が約8割を占める。中でも、底部内面への記載は全てヘラ書きであるという点は興味深い。薩摩国内の古代墨書き土器は、全体としてヘラ書き土器よりも墨書き土器の方が多く、ヘラ書き土器が卓越するのは、現地点で隣接する持林松遺跡だけである。この例から、さらに東側へ隣接する芝原遺跡においても、同様の傾向を看守できる。

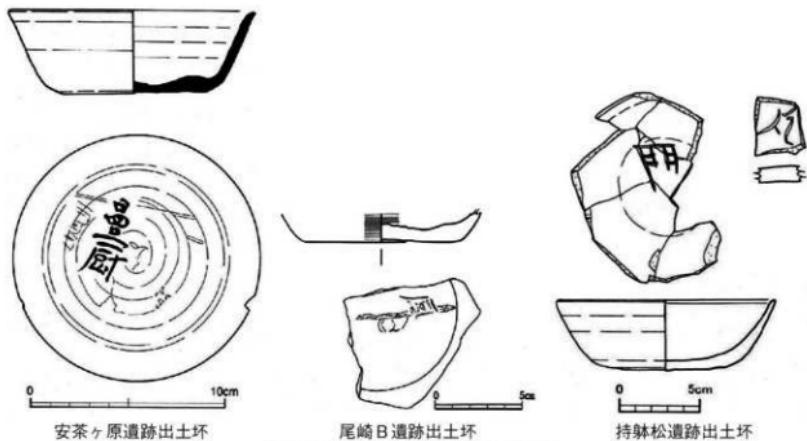
記載内容として、まず「厨」が2点あることに注目したい(774・775)。墨書きによる「厨」について出土例を挙げると、尾崎B遺跡が1点、橋城跡が1点、市ノ原1地点が4点、芝原遺跡1点(多口瓶)、橋牟礼川遺跡が1点、一ノ宮遺跡が1点の出土となっている。さらに、薩摩国府跡において「国厨」が1点、安茶ヶ原遺跡で「日置厨」が1点出土している。これらに、本遺跡において出土した2点を加えても、まだ13点の出土例しかなく、貴重な資料だと見える。おそらく、本遺跡の2点は芝原遺跡の1点とともに、阿多郡家の厨に関わるものと考えられる。あるいは、芝原遺跡の多口瓶を仏教関係の遺物

と捉え、近辺に寺院等の存在を想定できるとすれば、寺院に附属する厨の可能性も否定できない。

「門」(741・742・747～753)、「凡」(759)については、持林松遺跡にて多数確認されている。また、754・755について、芝原遺跡で同様の文字が確認されており、訛読は難しいが、同遺跡で「宅」が出土していることから、その転写過程で変形した可能性もある。唯一の刻書き土器である737については、持林松遺跡で出土した「富」の転写と考えられる。

表50 刻書き土器・ヘラ書き土器・墨書き土器一覧

規範番号	種類	器種	記載部位		文字・記号
			体部位	内外面	
737	刻書き	土師器壺	体部	外面	富? (持林松遺跡)
738	ヘラ書き	土師器平底皿	体部	外面	—
739	ヘラ書き	土師器壺	体部	内面	—
740	ヘラ書き	土師器平底皿	底部	内面	—
741	ヘラ書き	土師器壺	底部	内面	門 (持林松遺跡)
742	ヘラ書き	土師器壺	底部	内面	門 (持林松遺跡)
743	ヘラ書き	土師器壺	底部	内面	雀?
744	ヘラ書き	土師器	底部	内面	—
745	ヘラ書き	土師器	底部	内面	林
746	ヘラ書き	土師器	底部	内面	—
747	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
748	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
749	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
750	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
751	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
752	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
753	ヘラ書き	土師器	底部	内面	門 (持林松遺跡)
754	ヘラ書き	土師器	底部	外面	宅? (芝原遺跡)
755	ヘラ書き	土師器	底部	外面	宅? (芝原遺跡)
756	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
757	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
758	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
759	ヘラ書き	土師器壺	底部	外面	凡 (持林松遺跡)
760	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
761	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
762	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
763	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
764	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
765	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
766	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
767	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
768	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
769	ヘラ書き	土師器	底部	外面	—
770	墨書き	土師器小型平底皿	体部	外面	入?
771	墨書き	土師器壺	体部	外面	有
772	墨書き	土師器壺	体部	外面	土?
773	墨書き	土師器壺	体部	内面	—
774	墨書き	土師器平底皿	底部	外面	厨
775	墨書き	土師器壺	体部	外面	厨
776	墨書き	土師器小型平底皿	底部	外面	有
777	墨書き	土師器壺	底部	外面	— (3文字熟語)



第149図 墨書き土器実測図

隣接する両遺跡との関わりは深く、今後は、3遺跡の遺物を総体的に考察していく必要がある。さらに遺跡の性格を決定するに際して、遺物の年代観は非常に重要である。幸いにも完形品が何点か出土しているので、年代と記載文字の関係等も明らかにすれば、新たな研究段階に進むと考える。(特に「厨」が機能していた年代については、薩摩国の古代史を考える上で重要な問題を含んでいる。)

これらの遺物によって、本遺跡の古代における様相は、人口的な繁栄はないものの、一般集落とは異なった強い結びつきを持つ強力な集落形成を示すと言える。さらにそれが、輸入陶磁器の出土傾向や出土量から他地域との交流が最も盛んであった本遺跡の主体をなす中・近世へ繋がっていく要因になると考えられる。

(3) 須恵器

須恵器は、蓋・皿・壺・塊・甕・壺が出土した。これらは、本遺跡の近くに所在する「中岳山麓窯跡群」の窯で焼かれた可能性が高く、時期は9世紀中頃と思われる。

参考文献

- 永山修一「薩摩国出土古代墨書き土器集成」
- 2010「古代西海道における出土文字資料の展開と地域性に関する研究」
- 柴田博子「鹿児島県の墨書き土器」
- 2006「先史・古代の鹿児島 通史編」鹿児島県教委
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 発掘調査報告書(155) 2010「椿城跡」
- 発掘調査報告書(49) 2003「市ノ原1地点」

- 発掘調査報告書(118) 2007「安茶ヶ原遺跡」
- 発掘調査報告書(120) 2007「持株松遺跡」
- 発掘調査報告書(136) 2009「上水流遺跡3」
- 発掘調査報告書(151) 2010「渡畠遺跡1」

第3節 中・近世の概要

本遺跡では、中世の始まりを平安末(11世紀後半)から、近世の始まりを天正16年(1588)からと捉えた。本稿では、この時代に相当する遺構・遺物について、報告書に先行して述べられてきた調査成果報告等も参照しながら、今回の調査結果から導き出せる遺跡の性格等について述べておきたい。

なお、本遺跡の輸入陶磁器の分類・編年等については、以下の文献をもとにした。一部については、大橋康二氏、山本信夫氏の御教示を得た。

本節については、関明恵文化財主事の指導によりまとめるることとした。

森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」

1992「貿易陶器研究No 2」日本貿易陶磁学会
上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」

同上

小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」
同上

太宰府市教育委員会200

「太宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一」

1 遺構

該期の遺構としては、掘立柱建物跡1軒、溝状遺構16基、井戸状遺構1基、炉状遺構3基、土抗築6基、落ち込み状遺構1基、土坑13基、ピット19基が検出された。

(第92~135図) 遺構の集中する年代としては、太宰府編年のC期~E期(11世紀後半~13世紀前半)

特記すべき遺構としては、万之瀬橋の西隣にあたるX・Y-2区から、3間×3間の総柱の掘建柱建物跡が1棟検出された。柱穴内に螺を有する頑丈なつくりであること、柱が同間隔に配列されていること、配列方向が真北、真西を向いていること等、特筆すべき点の多い遺構である。建物跡に伴う遺物は少なく、柱穴内出土遺物もないと詳細な検討はできないが、X・Y-2・3区より布目瓦が出土しており、建物との関連が考えられる。(第151図参照)

その他、この掘建柱建物跡の南側、Y-2区で検出された11号溝状遺構からは、伏せられた状態で青磁の集積(同安窯系青磁碗2枚、青白磁碗3枚、青磁皿1枚)が検出され、同時期の一括資料として貴重な資料である。

その性格としては、繩縫等で6枚重ねで結んであったものが、繩縫は腐敗し、このような状態で出土したのではないかとの見解もあるが、今後の検討が必要であろう。

また、近世に相当する6号大型土坑内から、湖州鏡(湖州六花鏡)が出土したが、その原位置を留めていないと思われるため、本報告では表層出土遺物として取り扱った。湖州鏡は、中国の浙江省で鋳造された宋代の鏡である。日本へは平安時代中頃より輸入されたとされている。近年、県内の天神段遺跡(志布志市有明町)の土壙墓内から、本遺跡のものよりもひとまわり小さい湖州鏡が出土している(現在、整理作業中)。本遺跡の湖州鏡も、土壙墓内の副葬品であったものが破壊され、流入した可能性が考えられる。年代としては、11世紀後半~12世紀前半頃と想定したい。湖州鏡の上面は、中央に小さな鉢が付く。また、方形の枠内に銘文が刻まれるが、肉眼では判読できないため、当センターでX線写真により判読を試みたところ、「□州千石念/□家□□子」と記されていることが判明した。

本遺跡は持林松遺跡(第一次調査、南さつま市金峰町)に隣接する位置にあり、遺跡の性格としては、持林松遺跡と同様の性格が予想されるが、検出された中世前期の遺構においては、「日宋貿易の拠点」の性格を示す遺構は検出されなかった。

なお、井戸状遺構および炉状遺構については第4節で、土壙墓および土壙墓内出土人骨については第5節で詳細を述べることとする。

2 遺物

該期の出土遺物としては、土器類、須恵器、白磁、青磁、青花、輸入陶器、国内産陶器、国内産磁器、瓦質土器、土質質土器、土製品、滑石製品、古錢等が出土した。

中でも輸入陶器の出土量は多く、中世全期を通して途絶えることなく遺物が出土しているが、出土量のピー

クは遺構と同じく中世前期(11世紀前半~13世紀)に相当する白磁、青磁等がその中心を占める。このような出土傾向は、中世前期の交易都市である博多や太宰府から出土する陶磁器の組成に類似する。また、本遺跡と同じ万之瀬川流域に所在する持林松遺跡(第二次調査)や上水流遺跡、小園遺跡とも類似するものである。

次に、中世は太宰府編年にならう、5期*(C期~G期以降)に区分し、それぞれの時期において出土遺物の傾向を述べ、さらに、本遺跡の性格を考えるうえで重要なと思われる資料についてふれておきたい。

C期(11世紀後半~12世紀前半)

本遺跡の中心となる時期である。白磁は、玉縁口縁を呈する椀V類と端反口縁の椀V-1類が多く出土し、ほぼ同数を占める。その他椀II・III・XIII類、皿II・IV~VI類が数点ではあるが見られる。青磁は出土していない。輸入陶器は、磁州窯系の白地刷花文の瓶と思われる資料が4点(同一個体を含む)出土している。

D期(12世紀中頃~後半)

C期に引き続き、本遺跡の中心をなす時期である。白磁は、椀V~4類を中心に、椀Ⅴ類、皿Ⅸ-1類が少量であるが出土している。青磁は、この時期から内面無文や割花文が描かれる龍泉窯系青磁の椀I-1~4類と皿I類、内面にヘラ状工具による略化した花文と柳状工具の先端によるジグザグ文が描かれた同安窯系青磁の椀I類と皿I類が出土する。龍泉窯系青磁と同安窯系青磁の割合は、同安窯系が龍泉窯系をやや下回る。前述した11号溝状遺構内出土の伏せられた状態で出土した6枚の椀・皿は、同安窯系青磁の椀I-1類2枚と皿I-a類1枚、青白磁の椀3枚で、いずれもD期に相当する資料である。その他、青白磁の合子も見られる。輸入陶器は、鉢I-1-b、IV類が出土している。さらに、特筆すべき資料として、畿内産の瓦器小皿(和泉型)が1点出土している。本県では瓦器の出土は非常に珍しく、持林松遺跡(第2次)では2点(和泉型・補葉型)が出土している。その他に、中国瓦と思われる瓦の出土が挙げられる。波状押紋の軒平瓦は2点であるが、「波煙遺跡I」でも1点掲載されている。(p.129 第92図 825 古代の瓦として取り扱われている。) その他に布目瓦の平瓦や丸瓦の可能性が考えられる瓦が360点出土している。軒丸瓦は見られなかった。中国瓦については、博多、箱崎以外での出土例は波煙遺跡のほか、芝原遺跡のみである。近年、博多出土の軒丸瓦に類似した中国瓦が寧波で発見されたが、本遺跡の資料も寧波との関連性が考えられる。(註1) 軒丸瓦・布目瓦の出土は、寧波~博多の交易ルートの中に、寄港地としての本遺跡の姿を想定させるものである。

E期(13世紀前後~前半)

白磁は出土せず、青磁もC・D期ほどの出土量ではなく

いが、輸入陶器を中心に、一定量の輸入陶磁器が出土している時期で、C・D期に引き続き、本遺跡のピークと捉えたい。白磁は、この時期に相当するものは出土していない。青磁は、外面口縁運弁文や錦運弁文の龍泉窯系青磁碗II-a・b類が出土している。輸入陶器は、数量的には多くないが、E期のものが中心を占める。口縁部が内側へ強く屈曲する壺I類、Y字口縁のIII類、T字口縁のV類が出土している。壺は有耳壺無耳壺とともに出土している。国内産の資料では、中世須恵器である東播系須恵器の捏ね鉢、鹿児島県徳之島産のカムイヤキの壺・壺が、D期からE期にかけて出土する。そのほか、肥前産と思われる滑石製石鍋やその転用品が、D期から引き続いてこの時期にも見られる。

F期（13世紀中頃～14世紀初頭）

出土遺物は、急に減少する。この時期を代表する白磁は口禿げの碗・皿II類であるが、本遺跡では皿がわずかに出土したのみである。そのほか、肩部が張る白磁四耳壺III-3類が1点出土している。青磁は龍泉窯系青磁の碗II-c類が3点出土しただけである。国内産の資料では、口縁部がN字状を呈する常滑焼の壺6型式が出土している。その他、櫛万丈系の捏ね鉢や壺、瓦質土器の擂鉢等もこの時期に比定される。また、特筆すべき資料として、瓦質土器の卸皿が挙げられる。内面に印花文がスタンプされたものが1点確認されており、持株松遺跡（第2次調査）でも出土していた瀬戸の卸皿等を模倣したものと思われる。

G期（14世紀初頭～14世紀後半）以降

中世後期の時期として、G期以降の14世紀から16世紀をまとめて述べておく。この時期の出土遺物は少ない。白磁は、景德鎮窯系の森田分類D・E群がわずかに出土している程度で、青磁も龍泉窯系青磁碗IV類がわずかに見られる程度である。また、16世紀代以降は、青花も流入し、景德鎮窯系の小野分類碗・皿のB・C・E群と、それらを模倣した漳州窯系青花が出土しているが、その出土量は少ない。この時期の出土遺物で特筆すべき資料は、景德鎮窯系の碗（鉢？第125図1193）である。外面に呉醋による紋章が描かれるもので、この碗に類似した碗が、トルコのトブカブ宮殿に伝世している。（註2）この資料が掲載されている図録の解説には、「端反になった口縁部に「PEMTEMPO DE PEDRO FARIADS 54」と読めるポルトガル語が記され、ポルトガルのマラッカ総督であったペトロ・ダ・ファリアの1541年の注文により制作されたものと考えられる作品。なぜトブカブ宮殿に伝世したのか来歴の詳細はわからない。（以下略）」（写真11・註3）とあり、本遺跡出土の資料もヨーロッパからの注文品であった可能性が高い。このような資料が、なぜ本遺跡から出土するのか詳細は不明であるが、16世紀中葉以降、フランシスコ・ザビエルの日本上

陸に代表されるような、ジンヌ船に乗った宣教師の来日や、ポルトガル船自体の寄港が、この万之瀬川下流でみられた可能性を窺わせる興味深い資料である。

以上、中世における出土遺物の概略を述べたが、近世以降（1588年～）の出土遺物は、非常に少ない。近世に相当する包含層からは、近世墓が6基検出されており、これは人骨が残存しているものの土壌墓として取り扱ったが、そのほかにも、土壌墓と考えられる土壌も多數検出されている。本遺跡は近世において、墓域であった可能性が考えられ、そのため近世に相当する遺物は少ないものと思われる。中世前期において、寧波～博多交易ルートの寄港地として想定される万之瀬川流域において、本遺跡が近世になり墓域化する変化は、交易がするに伴い、河川と河川敷に対する人々の認識が変化した表れであろう。

本遺跡を含む、万之瀬川津流の詳細な性格については、近隣遺跡の成果を考慮しつつ、様々な分野からの研究成果を交えたうえで、検討を重ねるべきであろう。

註記

註1 博多との類似性が考えられる押圧波状文の軒平瓦3点（渡波遺跡Iで報告された資料I点No825と本遺跡出土の資料2点1319・1320）と布目瓦9点について、小畠弘己氏（熊本大学文学部准教授）のご厚意により、次のような分析をしていただいた。

分析機器：福岡市理藏文化財センター所蔵

EAGLE μProbe 蛍光X線分析装置

測定条件：X線照射範囲直径300μm、真空状態、電圧40kV、照射時間180秒

測定元素：Na, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Zrの11個

測定箇所：鉱物粒子のない部分、埋藏地の土が付着していない部分を選択し平坦面3か所にて行った。

結果としては、中国瓦の範疇に入るものと考えられるが、寧波系の瓦であるとの断定には至らない。また、博多出土の瓦とはほぼ同類であるとの御教示をいただいた。なお、詳細なデータ及び結果等については、小畠氏の今後の報告を待ちたい。

註2 さらに極似した資料が、Queluz Paris 1995「Du Tage a la mer de Chine」p.79に掲載されている。（大橋康二氏の御教示による。）

16世紀前半の中国景德鎮窯の青花で、文様はコバルトで描かれる。外面口縁部に、「AVA AMRIA(NARIA) GRCA(GRACA) TIENA(PLENA)」と読めるポルトガル語が2回描かれ、外面の四方には、ポルトガル王家の紋章が地球儀を交互に配置される。しかし、中国人陶工が見様見真似で文様を描い

たため、王家の紋章は、上下が逆に描かれている。この作品は、京都に所在したキリスト教の教会に伝世していたものと言われている。宣教師やキリスト教との関わりが窺える作品である。本遺跡の資料も、紋章が上下逆になっている。

註3 写真11は、佐賀県立九州陶磁文化館1995「トプカーブ宮殿の名品—スルタンの愛した陶磁器—」P.33 No.24を転写。解説は、同p.149。No.24の日本語解説より抜粋。(大橋康二氏の御教示による。)

参考文献

中世土器研究会編1995「解説 中世の土器・陶磁器」真
間社

金峰町教育委員会1998「持林松遺跡（第1次調査）」
金峰町埋蔵文化財登録調査報告書（10）

柳原敏明1995「中世の万之瀬川下流域と持林松遺跡」『持林遺跡』(第11回要旨)。

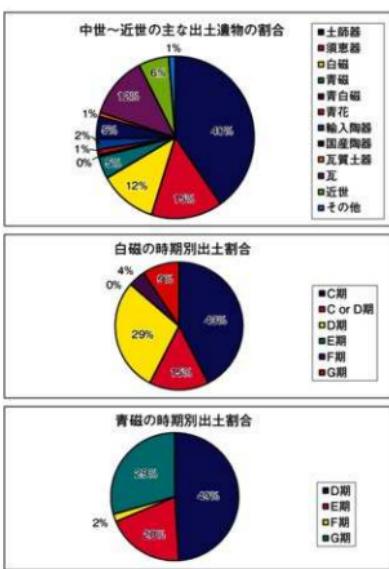
森林道跡（第1次調查）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 発掘調査報告書(120) 2007「持林松遺跡」

発掘調査報告書(136)2009「上水流遺跡3」
発掘調査報告書(151)2010「波賀遺跡1」
中村和美・栗林文夫1995「持株松遺跡(2字踏査以降)」

山本信夫1995「12世紀前後陶磁器から見た持軸松遺跡の
癡跡 - 金峰町出土の焼き物から追迹する南海地域の

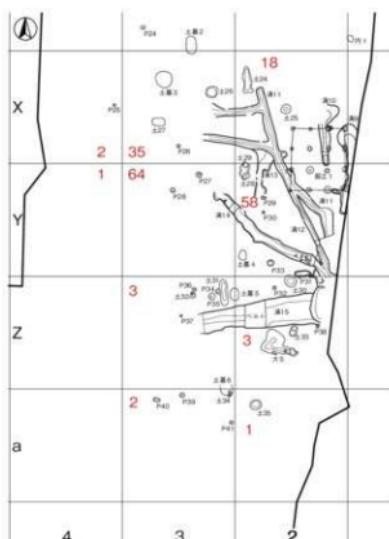
栗林文夫2000「万之瀬川下流域をめぐる最近の研究状況
—著者学を中心として—」『土河』7号土河同人



第150図 出土遺物の割合



写真11 ポルトガル王家の紋章が入った青花（出典：註3）



第151図 布目瓦出土数（総数355点・区不明
161点）
※赤の数字は出土数を表す。

第4節 井戸状遺構の考察

1 はじめに

人間の生活に欠かせないものの一つに「水」がある。ほとんどの生物は、体の7割以上は水分が占めているといわれるほど、水は生活と切っても離せないものと言えよう。

発掘調査においても、遺跡自体は何らかの形で水に関わっていると言っても過言ではない。しかし、遺構・遺物で明確に「水の使用」について言及できるものは意外に少ない。そこで、水の使用について明確に言及するとのできる数少ないものとしてここでは「井戸」を取り上げたい。

波烟遺跡においては石塔を組み合わせた「井戸」が発見されている。この「井戸」がどのような特徴をもつかについて、県内で発見された事例を集めて検討を行うこととする。

2 県内発見の様な井戸

山本博氏や宇野隆夫氏などによって、全国の事例から井戸の形態の分類が行われている（山本1986・宇野1982）。ここでは資料の制約もあるのでこれらを参考としつつも、大きく「素掘り」と「石組み」の2種類に分けて論を進める。

現時点で、本県における最も古い井戸は、小瀬戸遺跡（姶良市）で発見されている古代（平安時代）のものである。素掘りで、木製の井戸枠が一部残存する。古代の例はこの一か所のみで、事例の増加が待たれる。

中世になると、若干ではあるが調査事例が増加する。薩摩での事例が多くを占めるが、大隅でも近年になって事例がみられるようになった。その一例が龍家西遺跡（根木原遺跡F地點）である。これらの多くは、「素掘り」であるが、有機物の残存が困難である場合も多いので、本来は「木組み」であった可能性も考慮すべきであろう。また、城跡での発見例が比較的多い傾向がみられるのも注目すべき点である。

近世には、素掘りのものはごく少数となり、ほぼ全てが石組みとなる。また、この時期のもののはほとんどは鹿児島市内に分布する。

ところで、知覧城では井戸に類似した遺構が発見されている。ただし、形状は「井戸」に類似するが、この遺構は「井戸」ではないという。この遺構は当初「墓」であるという意見が出されたが（上田2003）、分析などの結果から現在は「ゴミ捨て穴」という結論が出されている（上田2006）。また、上水流遺跡においても、井戸状の遺構が発見されているが、報告書作成の時点で「土塼墓」として報告を行った（鹿原埋文センター2008）。

これらの遺構は、完全に「井戸」の可能性が否定されるものではないが、状況から井戸以外の遺構とされるものである。このことから、特に素掘りのものは形状のみ

で「井戸」と結論づけることは危険であることが確認されよう。岩本正二氏によれば、井戸の用件として「坑の底が湧水層まで達していること」が指摘されている（岩本2001）ので、この点にも注意すべきであろう。

宇野氏によれば、全国的には弥生時代から井戸が発生し、古墳時代にはほぼ普及するという。しかしながら、鹿児島県内においては古くとも平安時代からであり、それも現在のところ一例のみである。古代（平安時代）においても井戸はあまり定着せず、事例の増加がみられるのは中世からとなる。それも中世前期には確定なものではなく、中世後期以降になってやっとほぼ確定なものがみられるようになる。

また上記の状況に似た遺構として、「カマド」がある。カマドは、古墳時代には宮崎県都城市（鶴吹遺跡）まで存在しているが、鹿児島県内では古代に至っても数例のみで、かつ非在地系の遺物が多くみられる遺跡における事例である。つまり、カマドの分布はあくまで参考であるが、井戸については何らかの原因があつて一時的に存在したが定着しなかった可能性がある。この原因の一つに、鹿児島県内に広がるシラス台地では容易に湧水が得られるということがあげられる。また、多数の湧水の存在が、井戸の必要性を高いものにしなかつたと考えられる。

また、中世での事例の増加は、これまで生活好適地とされてきた場所以外にも生活の場を広げるような新たな開発によって、湧水を求める生活スタイルからの脱却が必要になった結果であると想定できるのではないか。今後、検討すべき課題といえよう。

3 渡烟遺跡の井戸

先述したように、当遺跡では井戸が発見されている。この井戸の大きな特徴としては以下の2点がある。

①石塔（五輪塔か）の部品を再利用し、組み合わせて井戸を構築している（他の石材でなく、あえて五輪塔を利用している）。

②万之瀬川に接する場所に構築されている（河川の水が眼前に存在するというのにあえて井戸が構築されている）。

①については大龍遺跡で類似する状況がみられる。ただし、渡烟遺跡では石組みの多くが石塔の部材であるのに対し、大龍遺跡では一部に石塔部材を含むのみで多くは自然礫であるという点が異なる。

②については、立地だけでみれば、浜町遺跡や下鶴遺跡、川骨遺跡なども海や河川に接するという点で類似する。これらのはずれもがほぼ実用の井戸と考えられている。ただし、井戸と川の距離は渡烟遺跡の方が圧倒的に近いという点が異なる。

ところで、京都の下鶴神社で発見された江戸時代の井戸が実用ではなく、祭祀（雨乞い）のためのものという

報道が近年なされた。本遺跡での例は、眼前に万之瀬川が存在し、かつ五輪塔部材を使用していることから、下鶴神社の例と同じく祭祀的な（実用でない）使用も考慮するべきではないかと考える。また、渡畠遺跡に隣接する芝原遺跡では、牛の頭骨が出土しているが、全国的な事例ではこれは道教呪術儀礼による「雨乞い」とされるものである。本遺跡での事例ではないが、非常に近接しているので関連していた可能性も考慮したい。

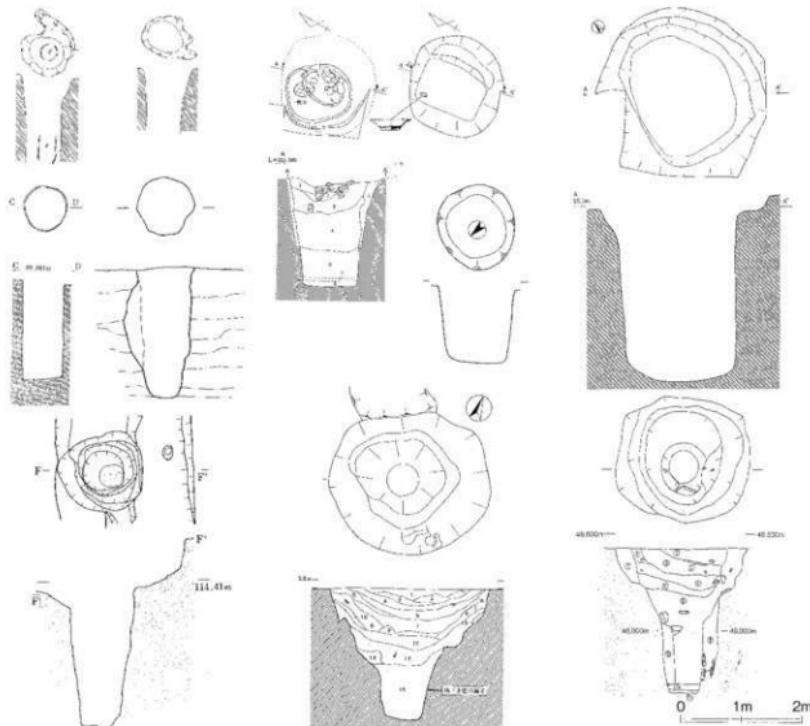
最後に調査上の問題点をあげたい。ここでは列挙するに留めるが、「時期認定の困難さ」「調査の安全面での限界（崩落の危険性など）」「近現代造構についての軽視」

などが指摘される。

課題は残るが、本遺跡の様相をより明らかにするための一助となるべく、今後も全国的な事例との比較を行って検討していただきたい。

参考文献

- 宇野隆夫1982「井戸考」「史林」第65巻第5号
 (後に宇野隆夫1989「考古資料にみる古代と中世の歴史と社会」真陽社に再録)
 宇野隆夫1997「井戸」「弥生文化の研究」第7巻 弥生集落雄山閣



第152図 県内発見の井戸跡① (素掘り)

- 岩本正二2001「中世の井戸」北陸中世考古学研究会編
『中世北陸の井戸』

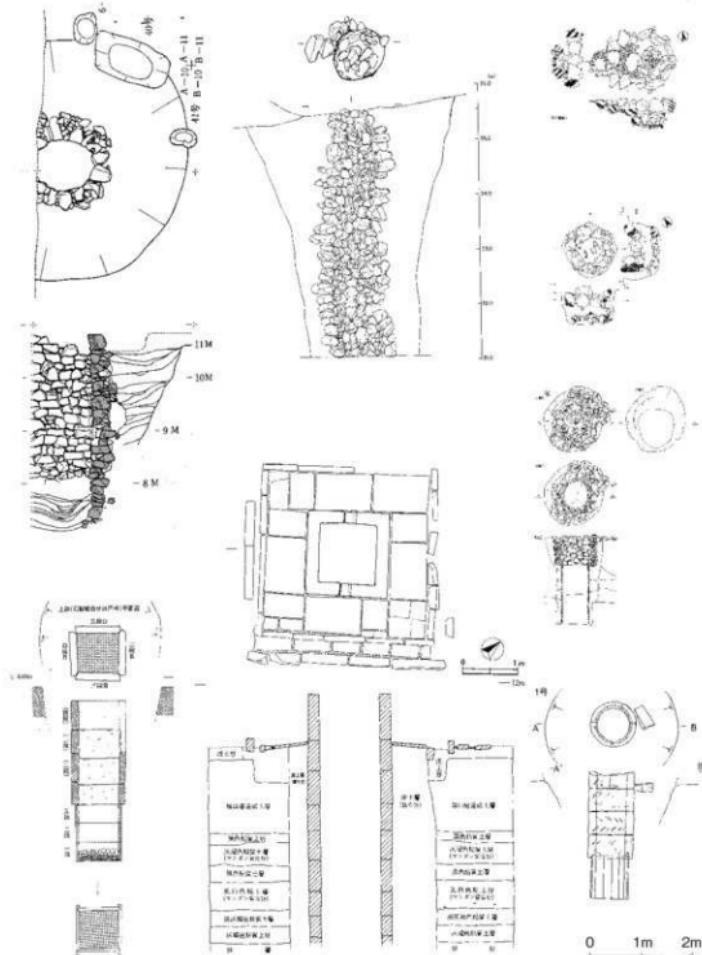
山本博1986「中世井戸の成立と展開」『日本考古学論集』
2

堀内秀樹2001「井戸」『図説江戸考古学研究事典』柏書
房

上田耕2003「南九州の城郭と埋葬」「戦国時代の考古学」
高志書院

上田耕2006「土塁について」「国指定史跡知覧城跡(三)」
知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)
2008「土木遺跡2」



第153図 県内発見の井戸跡②（石組み）

第5節 出土人骨の考察

1 はじめに

渡畠跡からは、中世後半以降の土壙墓が数基発見されている。その中には人骨が残っているものもあった。

以下にその特徴をあげる。

2 各人骨について

(1) 1号土壙墓出土人骨 (男性・壮年)

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態はよくない。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰臥屈臥の状態で埋葬されたという点である。膝は強く曲げている。性別は、前頭骨の眉弓の突出が強く、左側頭骨の乳様突起も大きいことから男性と判定される。年齢は歯の咬耗度がMartinの1~2度であることから、壮年と推測される。

頭蓋は前頭面に平行な方向に土圧を受け、極端に前後に長い形に変形している。しかし、土圧による変形を受ける前の頭蓋の形態を推測してみても、脳頭蓋は前後に長かったと考えられる。観察できた左外耳道に骨腫は認められない。また、前頭縫合も残存していない。

歯式は次のとおりである。

8	×	5	4	3	×	1	×	3	4	5	×	×		
8	7	6	5	4	×	×	1	2	3	4	5	6	7	8

(2) 2号土壙墓出土人骨 (女性・壮年)

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰向けに埋葬されたという点である。性別は、前頭骨の眉弓の突出が弱いことから女性と判定される。年齢はほとんどの歯の咬耗度がMartinの1度であることから、壮年と推測される。脳頭蓋は右半分が遺存するだけであるが、これをもとに形態を推測すると前後に長い頭蓋であったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。

歯式は次のとおりである。

8	7	6	5	4	×	×	×	3	4	5	6	7	8		
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

遺存する歯に、う蝕やエナメル質減形成は認められない。また、歯の大きさ（近遠心径、頬舌径）は大きい。

(3) 3号土壙墓出土人骨 (男性・熟年)

墓壙の外形は円形である。

人骨はほぼ全身の骨が遺存するが、保存状態は悪い。人骨の出土状況は立て膝で膝を強く曲げている。したがって、遺体は座禅に収められたことがわかる。遺存している人骨の中では、頭蓋の残りがいい。性別は眉弓の突出が強いことから、男性と判定できる。年齢は頭蓋三主縫合の癒合状況と歯の咬耗の程度がMartinの2~3度であることから、熟年と推測される。頭蓋は土圧によ

る変形を受けており、特に顔面部で著しい。変形を受ける前の頭蓋の形態を推測すると、脳頭蓋は前後に長く、顔面は低かったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。また、前頭縫合も残存していない。

歯式は次のとおりである。

×	×	×	×	4	3	2	1	1	2	3	4	×	×	7	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	8

遺存する上顎中切歯のシャベル型は深い。下顎左第三大臼歯の咬合面にC2のう蝕が認められる。

(4) 4号土壙墓出土人骨 (女性・壮年)

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭蓋（写真12）と四肢の一部が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは北頭位で仰向けに埋葬されたという点である。性別は、眉弓の突出が弱いことから女性と判定される。年齢は歯の咬耗度がMartinの1~2度であることから、壮年と推測される。脳頭蓋は右半分が遺存するだけであるが、これをもとに形態を推測すると前後に長い頭蓋であったと考えられる。観察できた右外耳道に骨腫は認められない。

歯式は次のとおりである。

×	7	6	×	×	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8		
×	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	×	4	5	6	7	8

遺存する上顎中切歯のシャベル型は左が1.51mm、右が1.38mmと深い。う蝕やエナメル質減形成は認められない。



写真12 4号土壙墓出土人骨（脳頭蓋）

(5) 5号土壙墓出土人骨 (性別不明・熟年)

墓壙の外形は楕円形である。

人骨は頭部と上肢の骨が遺存する。保存状態は悪い。人骨の出土状況から埋葬姿勢で確認できるのは、肘を強く曲げている点と頭位が北という点がある。性判定が可能な部位が遺存していないため、性別は不明である。年齢は歯の咬耗度がMartinの2度であることから、熟年

と推測される。

歯式は次のとおりである。

$\times \times \times \times \times \times \times$	I	$\times \times \times \times \times \times \times$
$\times \times \times \times \times \times$	\times	$2 3 4 5 \times \times$

上顎右中切歯のシャベル型は1.41mmと深い。下顎左犬歯にはエナメル質減形成が認められる。

(6) 6号土壙墓出土人骨 (性別不明・成人の可能性)

墓の南側半分が残るだけであり、人骨はそこに下半身の骨が主に遺存している。人骨の保存状態はよくない。左右不明の上腕骨、大腿骨、脛骨が確認できる。埋葬姿勢は下半身の骨の解剖学的位置関係から、膝を強く曲げた状態の屈葬である。

性別は性判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は四肢骨の太さから成人の可能性が高いが、断言はできない。

3 わりに

渡畠遺跡の6基の中～近世墓から、それぞれ6体の人骨が出土した。これらは、いずれも成人人骨であった。性別の内訳は性別が判明しなかった2体を除くと、男性が2体、女性が2体であった。

形質は、脳頭蓋が前後に長いものが4体あり、上顎中切歯のシャベル型が深いものが3体ある。

南九州の近世人の頭蓋は前後に長い。また、上顎中切歯のシャベル型も深い。渡畠遺跡から出土した中～近世人骨も同様の特徴をもっていることがわかる。

【参考文献】

Martin, R. Knussmann, R (1988) *Anthropologie*. G.

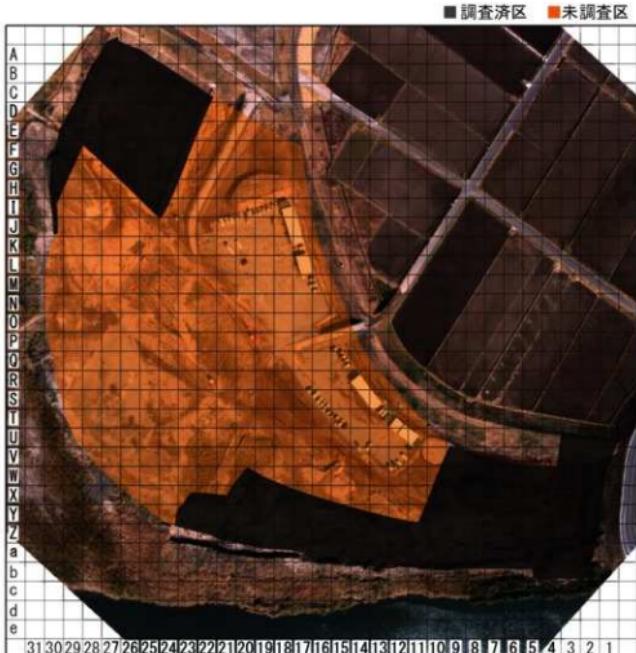
Fischer, Stuttgart

(竹中正巳)

第6節 今後の取扱いについて

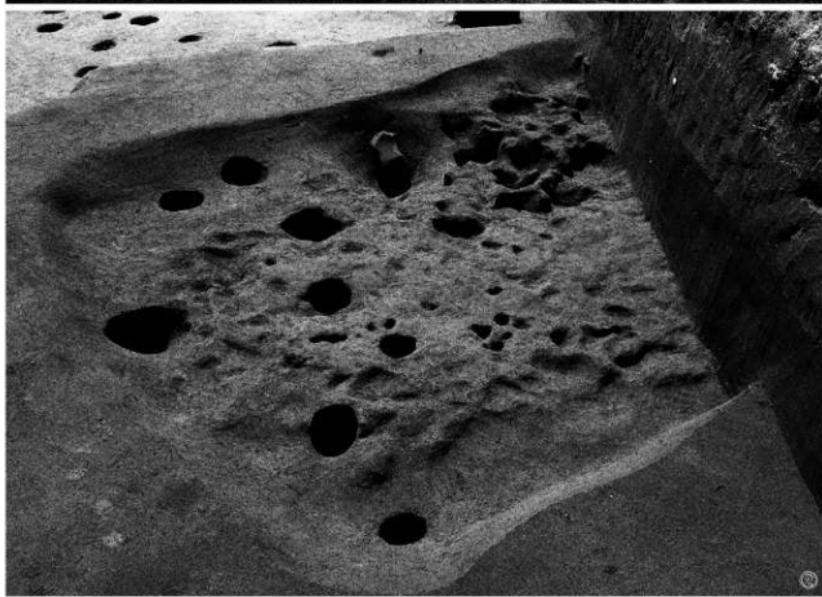
一連の中小河川改修事業については、平成17年度の上水流跡・芝原遺跡の調査を最後に一時的に終了となつた。渡畠遺跡の発掘調査は、中小河川改修事業に伴い平成12・15・16年度の3年にわたって実施した。しかし、当初予定されていた調査区については、すべて終了することはできずに未調査区が残されている（第153図）。

今後、この区域については、具体的な開始年や期間は未定である。



第154図 渡畠遺跡調査予定区

図 版



古墳時代遺構検出状況（1）

①上空から見た渡畑遺跡 ②1号竪穴住居跡



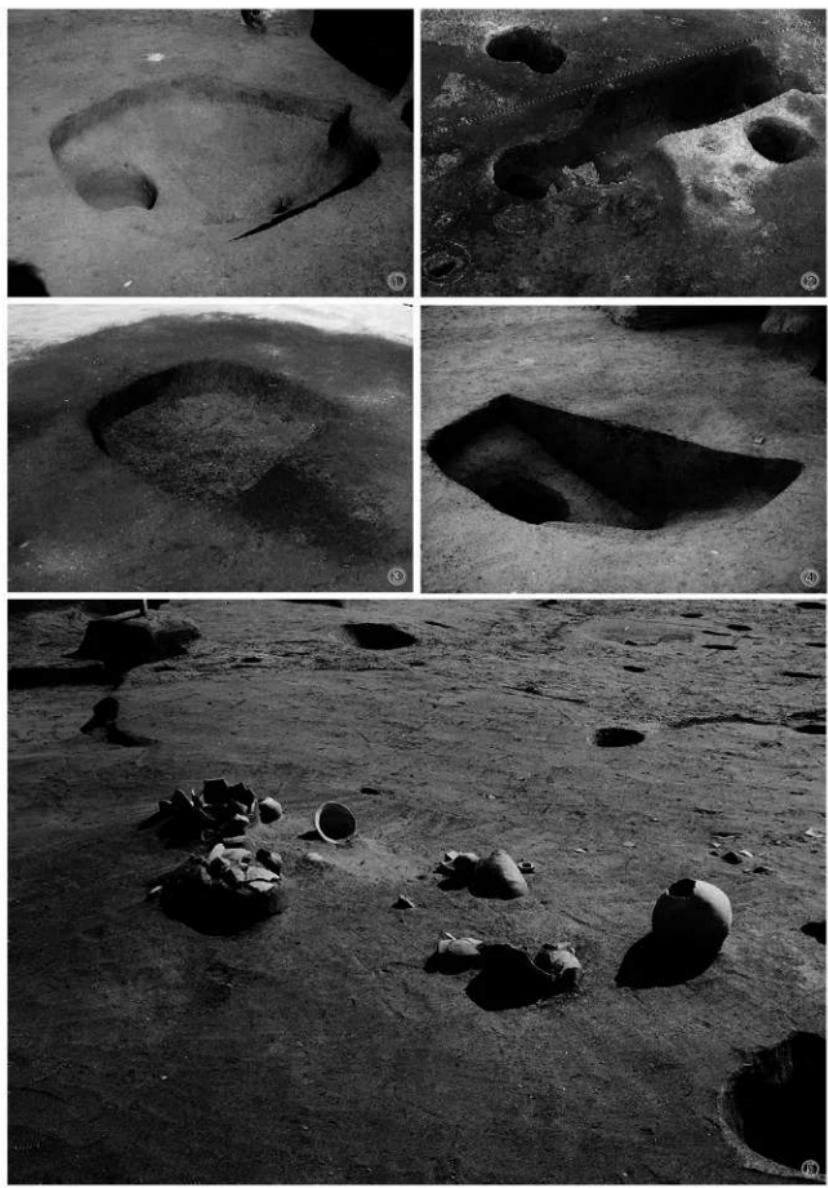
古墳時代遺構検出状況（2）

①2・3号竪穴住居跡検出状況 ②2・3号竪穴住居跡完掘状況



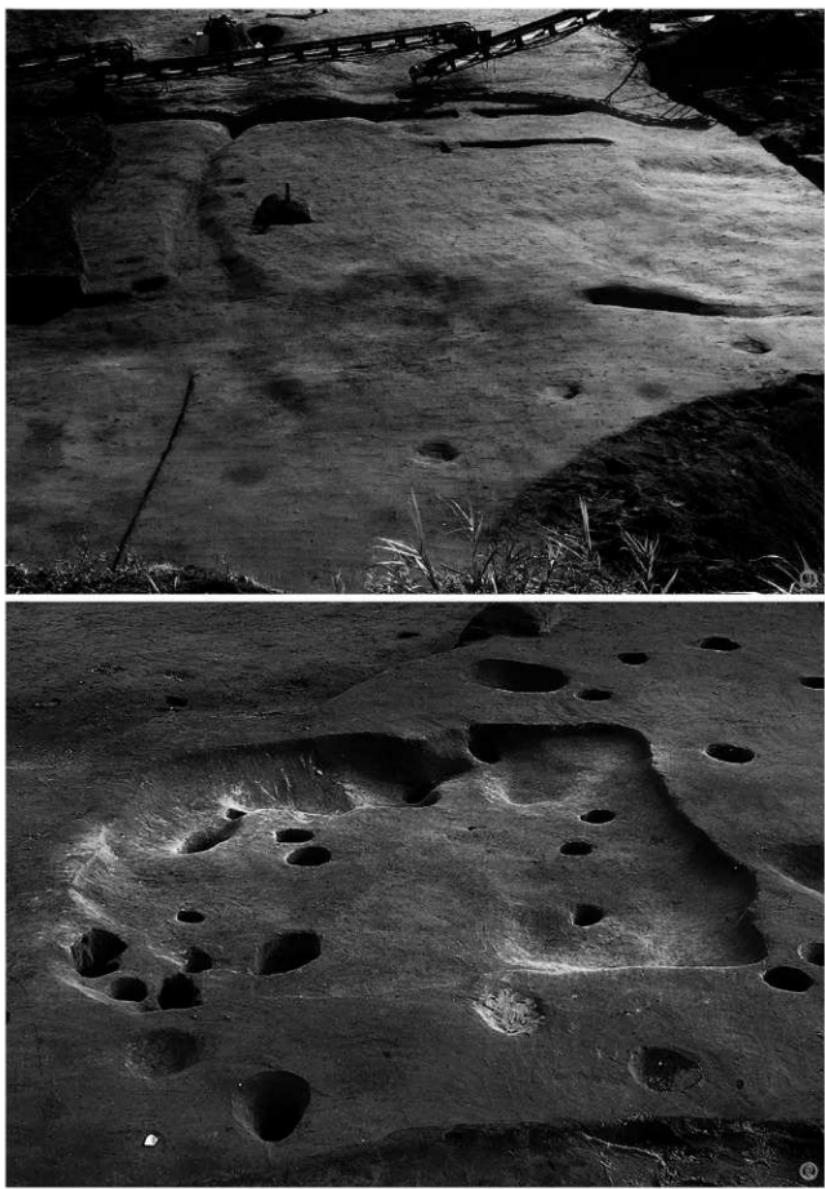
古墳時代遺構検出状況（3）

① 7号竪穴住居跡 ② 7号竪穴住居跡完掘状況



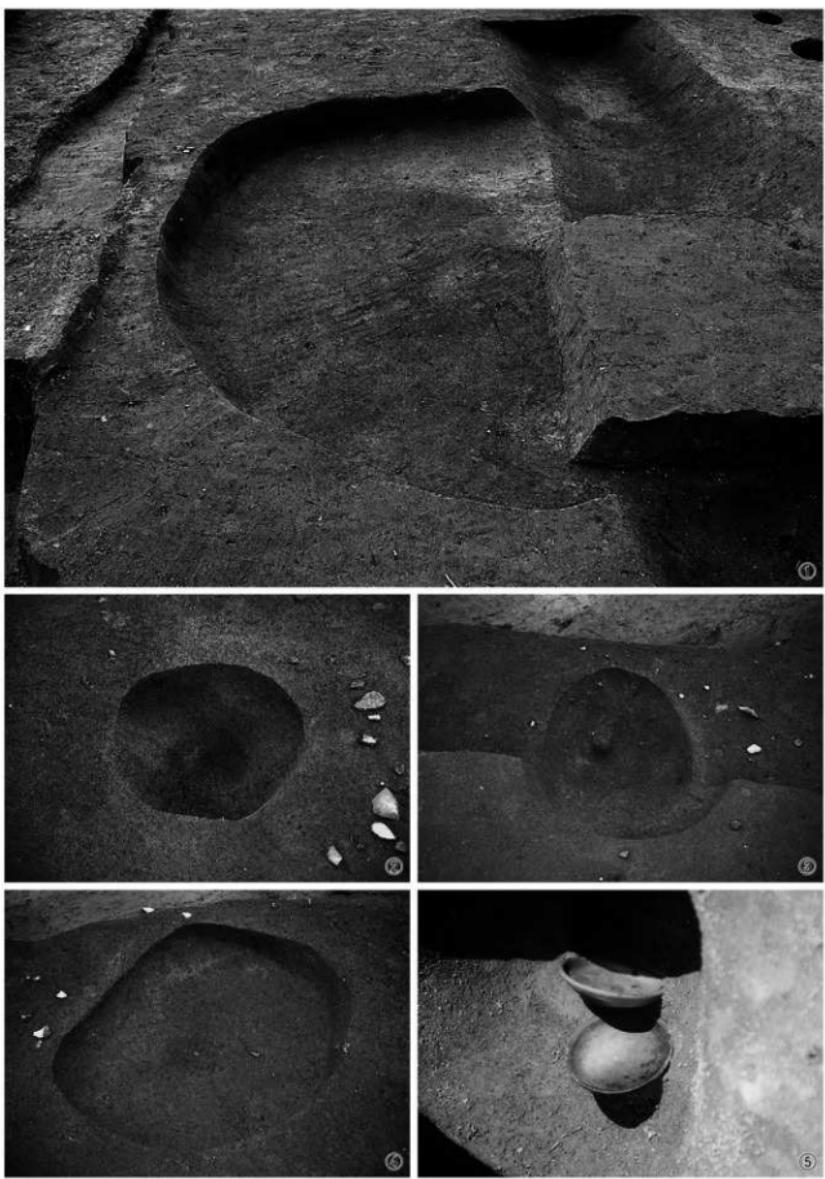
古墳時代遺構検出状況（4）および遺物出土状況

①1号大型土坑 ②5号大型土坑 ③6号土坑 ④7号ピット ⑤遺物出土状況



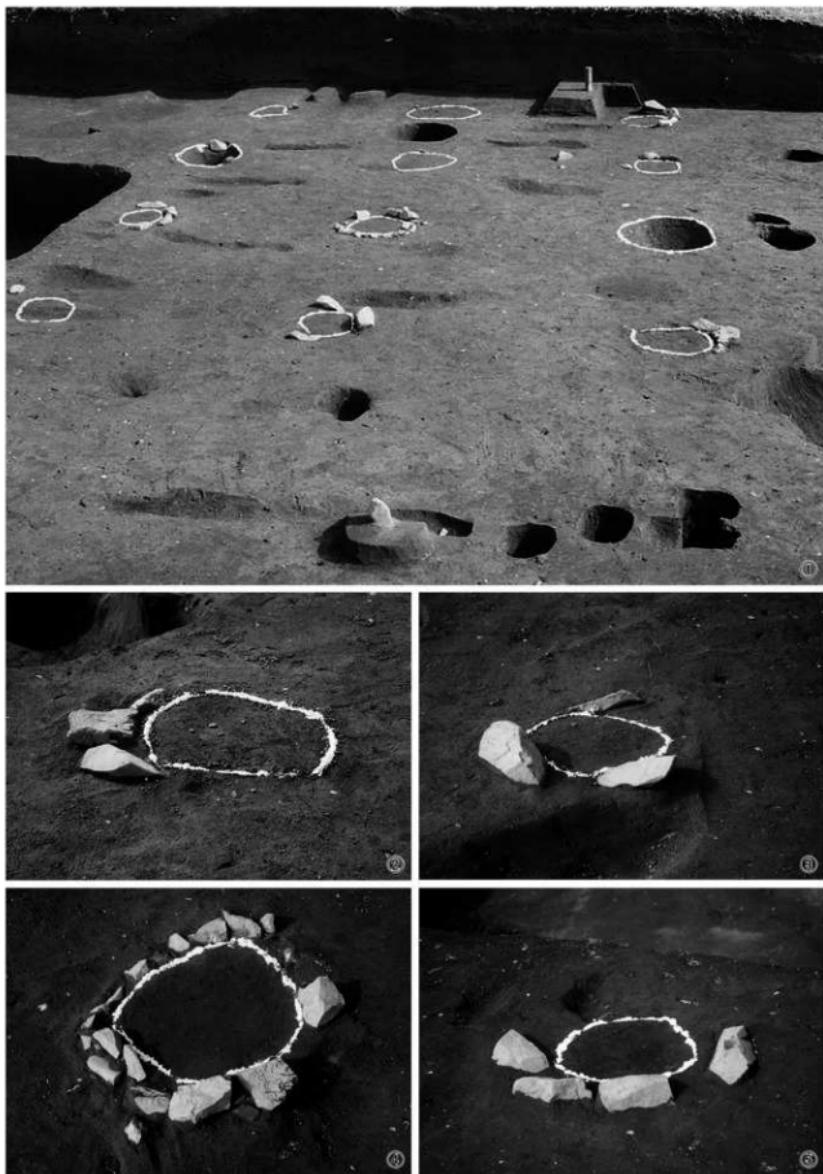
古代遺構検出状況（1）

① 8号竪穴住居跡（検出状況） ② 8号竪穴住居跡（完掘状況）



古代遺構検出状況（2）および遺物出土状況

①9号竪穴住居跡 ②9号土坑 ③12号土坑 ④20号土坑 ⑤遺物出土状況



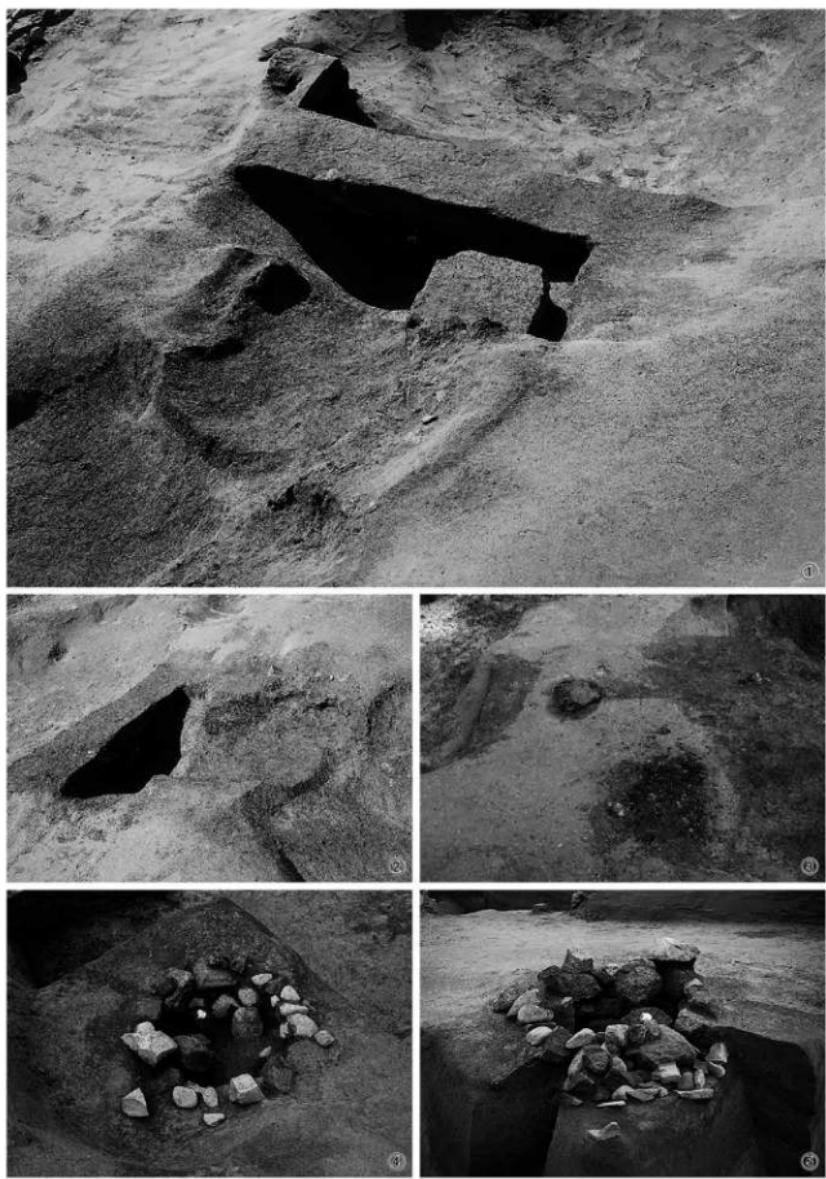
中・近世遺構検出状況（1）

①掘立柱建物跡 ②～⑤掘立柱建物跡内ピット



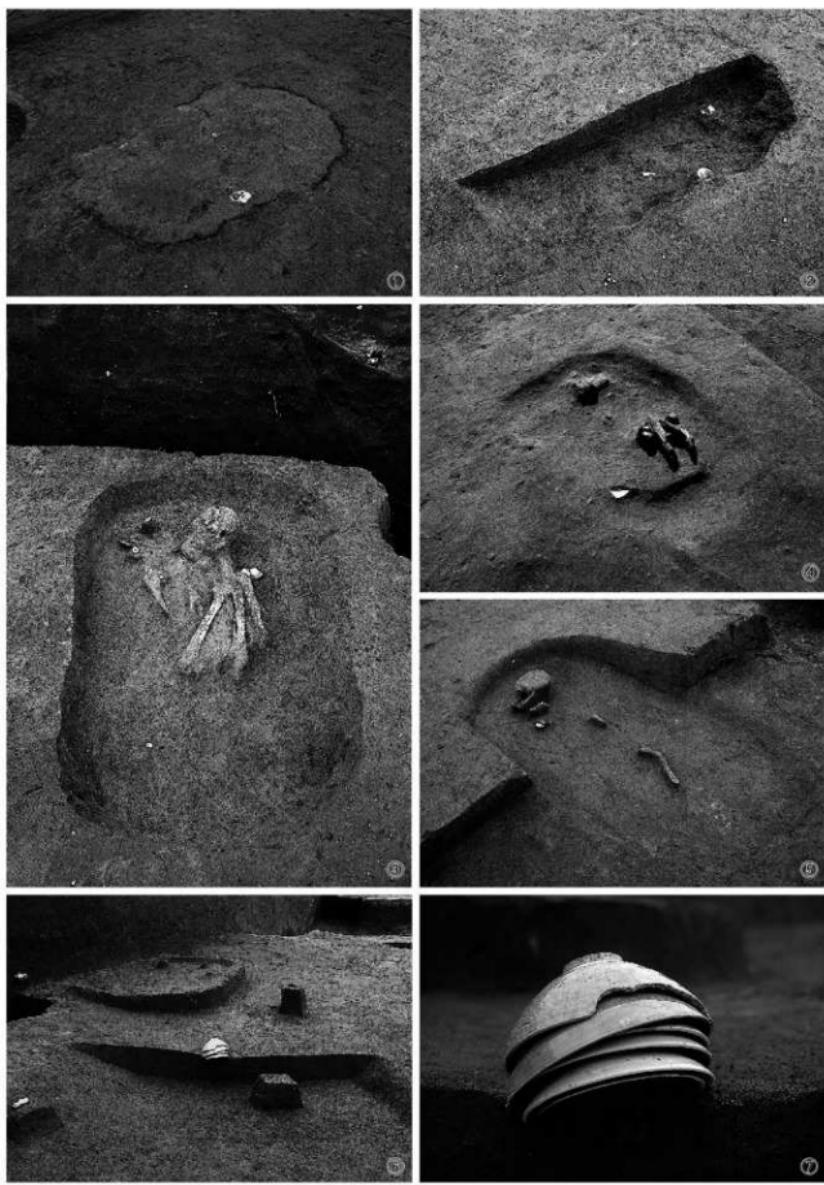
中・近世遺構検出状況（2）

①・②16号溝状遺構 ③17号溝状遺構 ④・⑤円形粘土塊状遺構



中・近世遺構検出状況（3）

①・② 1号炉状遺構 ③ 2・3号炉状遺構 ④・⑤ 井戸状遺構



図版10 中・近世遺構検出状況（4）

①～③1号土壤墓（検出状況） ④5号土壤墓 ⑤2号土壤墓 ⑥・⑦11号溝状遺構内出土青白磁